

立 切 遺 跡

昭和63年12月

茨城県東村・桜川村

立切遺跡発掘調査会

正 誤 表

(誤 補)

	誤	正
P 3 本文 7 行目	見渡せれば	見渡せば
P 25 本文 6 行目	河野辰男先生、	河野辰男先生より、
P 25 本文 8 行目	関川東村委員長を	関川東村教育長を
P 25 本文 16 行目	文化庁官宛に提出され、	文化庁長官宛に提出され、
P 27 5 行目	栗野久代	栗野喜久代
P 114 4 行目	周澄は不明、	周溝は不明、
P 138 第63図説明 2 行目	(S B 65) 平面実測図	(S K 65) 平面実測図
P 142 15 行目	で 3 P 4' (35×50) は	で P 4' (35×50) は
P 249 第 2 号竪穴住居址 見出し	(S 102) (第 106 図)・第 3 号	(S 102)・第 3 号
P 269 7 行目	本住は溝状遺構遺物の	本住は遺物の
P 288 2 行目	S 106	S B 10
P 309 6 行目	15m	15cm
P 358	[6 行目の S 122 を 2 行目と 3 行目の間に移動する]	
P 369 3 行目	S 124 は S D 20 を	S 124 は S B 20 を
P 375 3 行目	不整形方式プラン、	不整形方形プラン
P 468 12 行目	有孔用板	有孔用板
P 468 (四) 7 行目	実施されたが、	実施されたことが、
P 532 24 行目	出須系氏族	出雲系氏族
P 534 (注 2)	常陸国風土記の探究上、	常陸国風土記の探求上、
P 535 (一) 10 行目	ようにた。	ようになった。
P 536 (三) 2 行目	とりいれられているから	とりいれられているから
P 540 (注 4)	常陸国風土記の探究 (中)	常陸国風土記の探求 (中)

(写真訂正)

- P 175 の航空写真は第 2 調査区全景ではなく第 3 調査区の全景写真
- P 197 の航空写真は第 3 調査区全景ではなく第 4 調査区の全景写真
- P 219 の航空写真は第 4 調査区全景ではなく第 5 調査区の全景写真
- P 243 の航空写真は第 5 調査区全景ではなく第 2 調査区の全景写真

立 切 遺 跡

昭和63年12月

茨城県東村・桜川村

立切遺跡発掘調査会



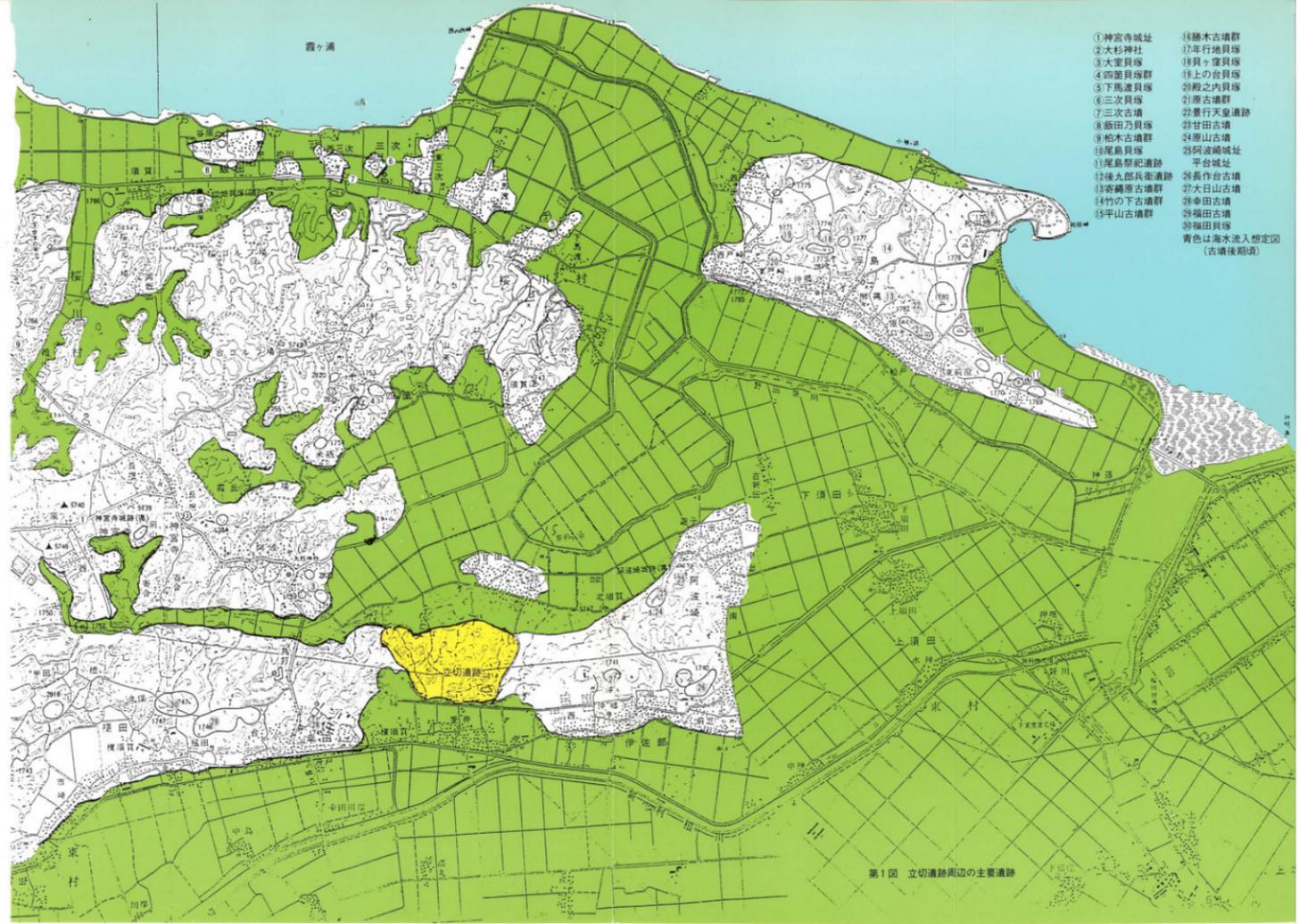
祭祀用具



長頸瓶



滑石製模造鏡



- ① 神宮寺城址
- ② 大杉神社
- ③ 大室貝塚
- ④ 四面貝塚群
- ⑤ 下島貝塚
- ⑥ 三次古墳群
- ⑦ 三次古墳
- ⑧ 飯田乃貝塚
- ⑨ 柏木古墳群
- ⑩ 尾島貝塚
- ⑪ 尾島祭祀遺跡
- ⑫ 後九郎兵衛遺跡
- ⑬ 寄鶴堂古墳群
- ⑭ 竹の下古墳群
- ⑮ 平山古墳群
- ⑯ 藤木古墳群
- ⑰ 年行地貝塚
- ⑱ 貝ヶ窪貝塚
- ⑲ 上の台貝塚
- ⑳ 船之内貝塚
- ㉑ 原古墳群
- ㉒ 雲行天皇遺跡
- ㉓ 甘田古墳
- ㉔ 藤山古墳
- ㉕ 阿波崎城址
- ㉖ 平台城址
- ㉗ 長作台古墳
- ㉘ 大白山古墳
- ㉙ 幸田古墳
- ㉚ 福田古墳
- ㉛ 福田古墳
- 青色は海水流入想定図
(古墳後期頃)

第1図 立切遺跡周辺の主要遺跡

序

この東、桜川両村の地区は原始、古代社会においては、みはるかす^{うみのうらびよう}海 瀼 渺としてその沖積低地は太平洋の波が寄せ、リヤス式状の半島や島からながめられる景観は実にすばらしいところでした。更に、この地は国府に出入する表玄関としての役目を果たした地でありました。

現在その沖積低地は新田が干拓され見渡す限りの美田と化し、その収穫は本県随一になっております。しかしながら最近の近代化促進により農作業には化学肥料が使用され、山林の草木を集める人はなくなり、更には石油等の使用のため山林の樹木を伐採する人もなくなり、山はすっかり荒廃してしまいました。

最近この丘陵台地の活性化計画の一環として農村工業化が企画され、今回筑波東部工業団地が造成されることになりました。立切の地は工業団地として再び脚光を浴びることになったのです。

この立切の地は原始古代の頃には大変に住みよい地であったと見えて、その当時多くの集落が繁栄していたことが、周辺に散在する遺物等によって判明したわけです。そこでその遺構や遺物等を記録保存するため、団地造成の前に約8ヶ月をかけて地元の人々の協力のもと、この地を発掘調査することになりました。

作業に当たった人々は夏の暑い日も凍りついた寒い日も毎日一生懸命発掘作業に当り、ここに多くの遺構や遺物等を拾得することができましたことを、大変感謝し、又ありがたく思っているところであります。

調査の内容についてはこの報告書に挙げたとおりであります。本調査の団長としてご指導にあられた河野辰男先生に感謝を申し上げますと共に、最後ま

で指導助言を惜まれなかった本県文化課係長の渡辺千秋先生にも心からお礼を申し上げます。なお、このほかに国学院大学教授乙益重隆先生、本県歴史館川井昭一先生、その他の先生方、また、教育財団の諸先生方に心からの感謝を申し上げる次第であります。このようにたくさんの方々の御努力と善意により本調査が立派に終了し、今般すばらしい冊子が出来ましたことに心から感謝申し上げますと共に、その御好意にこたえるためにも筑波東部工業団地を立派に完成させたいと思います。今後共ご協力・ご支援をお願い致しましてご挨拶と致します。なお最後になりましたが、この発掘調査を心から御支援下さいました県開発公社用地建設部長金沢孝治氏に対し深く感謝の意を表します。

東村長

立切遺跡発掘調査会会長 成毛平昌

発刊に寄せて

東村と桜川村の共同企画によって、立切台地に「筑波東部工業団地」を造成することになったが、同地内には文化財が埋蔵されているであろうということ
で発掘調査が進められて、いよいよ完了の日を迎えることが出来た。世の中が
安定するにつれて「文化」への志向や認識も高まり、積極的な諸活動と相ま
って文化財の保護・伝承等に強い施策の手がさしのべられるようになったことは
現今問われている「豊かな人間性の回復」にも大きな関わりをもつことであり
望ましい傾向である。うっそうたる木立が伐採された台地に立って見渡せれ
ば、はるかに下総台地・行方台地・そして鹿島開発地域を展望し得てその景勝
はまさに「天下に冠たり」の感を深くすると同時に、検出された数々の建築遺
構や遺物と相関して今更ながら先人の生活の知恵と工夫に目を見はるものが
ある。35町歩に亘る調査は、試掘分布調査に始まって本調査が進められたが、
広範囲な面積と調査日数からみて調査員の先生方や作業に従事された方々の
苦労は察して余りがある。7月から3月の間には、雨の日、炎暑の日、凍りつ
く日もあったが慎重に振る一鍬一鍬、何かをいとおしむように掘る一へら一
へらの姿は、土への、歴史への、そして人間としての「ぬくもり」を求める「ひ
たむき」を感じるものがあった。発掘調査も予定通り無事終了し、報告書「立
切遺跡」を刊することになったことは大きな喜びであるが、それだけに関係さ
れた茨城県開発公社、調査員、作業員等各位のご協力に対し謝意深いものがあ
る。出土した貴重な遺物については慎重に対応策を講ずると共に工業団地造成
には今後一層の努力を傾注する考えである。

昭和63年6月20日

桜川村長

立切遺跡発掘調査会副会長 村野源治

例 言

- ① 本報告書は、昭和62年8月20日より、同63年3月31日までに実施された筑波東部工業団地造成に伴う、稲敷郡東村並びに桜川村の両地に所在する立切遺跡の発掘調査報告書である。
- ② 発掘調査は両村において結成された、立切遺跡発掘調査会が主体となって実施し、本県教育庁文化課の指導助言のもと、河野辰男がその調査を担当し、調査員として大竹房雄、河野通義、春日綱男、玉井輝男ほか、地元作業員の協力を得て行った。
- ③ 本報告書の原稿の執筆は河野辰男、河野通義、玉井輝男が担当し、本書の編集は河野辰男が行った。出土遺物の整理は河野辰男、河野通義が当り、図面作成には玉井輝男が行い、なお根本正俊、永長千恵子、糸賀文子、山口ちよ子、諸岡三重子、根本由起子、滝坂滋が助力した。
- ④ 本遺構の記号を下記の如く用いた。
竪穴住居址 (SI) 掘立柱建物遺構 (SB)
土壇状遺構 (SK) 溝状遺構 (SD)
- ⑤ 発掘調査および整理に当っては、本県教育庁文化課、歴史館、教育財団、国学院大学、学習院大学等の指導助言をうけた。

目 次

序	立切遺跡発掘調査会会長	1
	東村長 成毛平昌	
発刊によせて	立切遺跡発掘調査会副会長	2
	桜川村長 村野源治	
例 言		4
1. 発掘調査に至る経過		23
2. 立切遺跡の位置と地理，歴史的環境		29
① 位置		31
② 環境		31
3. 遺構と遺物		37
(1) 第1調査区		49
竪穴住居址，掘立柱建物遺構と遺物		
(2) 第2調査区		173
掘立柱建物遺構と遺物		
(3) 第3調査区		195
竪穴住居址，掘立柱建物遺構と遺物		
(4) 第4調査区(A)・(B)		217
第4調査区(A)		223
掘立柱建物遺構と遺物，盛土造成遺構		
第4調査区(B)長者窪		235
(5) 第5調査区		241
竪穴住居址，溝状遺構と遺物		
(6) 第6調査区		257
竪穴住居址，掘立柱建物遺構・溝状遺構と遺物		
(7) 第7調査区		297
竪穴住居址，掘立柱建物遺構，溝状遺構と遺物		

(8) 第8調査区	395
うなぎ塚古墳	
(9) 土壌状遺構 (SK) 一覧表	415
(10) 石製品・鉄製品一覧表	423
(11) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覧表	453
4. おわりに	465
5. 図版	473
6. 付録	525

挿 図 目 次

<p>第1図 立切遺跡周辺の主要遺跡……………口絵</p> <p>第2図 遺跡範囲図及び発掘区区域概略図…39</p> <p>第3図 削平遺構確認実測図①A ……41</p> <p>第4図 削平遺構確認実測図①B……………43</p> <p>第5図 削平遺構確認実測図②第4調査区B 長者窪……………45</p> <p>第6図 第1調査区発掘遺構全体図……………53</p> <p>第7図 第1調査区西斜面区発掘遺構全体図 ……………55</p> <p>第8図 第1調査区西斜面調査区B発掘遺構 エレベーション……………57</p> <p>第9図 第1調査区第1号竪穴住居址 (SI01) 平面実測図 ……61</p> <p>第10図 第1調査区第1号竪穴住居址 (SI01) 出土遺物 ……62</p> <p>第11図 第1調査区第2号竪穴住居址 (SI02) 平面実測図 ……63</p> <p>第12図 第1調査区第2号竪穴住居址 (SI02) 出土遺物 ……64</p> <p>第13図 第1調査区第3号竪穴住居址 (SI03) 平面実測図 ……67</p> <p>第14図 第1調査区第3号竪穴住居址 (SI03) 出土遺物 ……68</p> <p>第15図 第1調査区第4号4'号竪穴住居址 (SI04 SI04') 平面実測図 ……70</p> <p>第16図 第1調査区第4号竪穴住居址 (SI04) 出土遺物 ……71</p> <p>第17図 第1調査区第4'号竪穴住居址 (SI04') 出土遺物 ……75</p> <p>第18図 第1調査区第5号竪穴住居址 (SI05) 第10号土壌状遺構(SK10)</p>	<p>平面実測図……………77</p> <p>第19図 第1調査区第5号竪穴住居址 (SI05) 出土遺物 ……78</p> <p>第20図 第1調査区第6号21号竪穴住居址 (SI06 SI21) 平面実測図 ……82</p> <p>第21図 第1調査区第6号竪穴住居址 (SI06) 出土遺物 ……83</p> <p>第22図 第1調査区第7号竪穴住居址 (SI07)・第44号45号土壌状遺構 (SK44 SK45) 平面実測図 ……85</p> <p>第23図 第1調査区第7'号竪穴住居址 (SI07')・第24, 25, 26, 27, 28, 29 号土壌状遺構 (SK^{24, 25, 26}_{27, 28, 29}) 平 面実測図……………86</p> <p>第24図 第1調査区第7号7'号竪穴住居址 (SI07・SI07') 出土遺物 ……87</p> <p>第25図 第1調査区第8号竪穴住居址 (SI08) 平面実測図 ……91</p> <p>第26図 第1調査区第8号竪穴住居址 (SI08) 出土遺物 ……91</p> <p>第27図 第1調査区第9号竪穴住居址 (SI09) 第23号土壌状遺構(SK23) 平面実測図……………94</p> <p>第28図 第1調査区第9号竪穴住居址 (SI09) 出土遺物 ……95</p> <p>第29図 第1調査区第10号10'号竪穴住居址 (SI10 SI10')・第11号12号13号土壌状遺 構(SK11・12・13) 平面実測図 ……………97</p>
--	--

第30图	第1调查区第10号竖穴住居址 (SI10) 第11号12号13号土坑状遺構 (SK11·12·13) 出土遺物 ……98	第45图	第1调查区第18号竖穴住居址 (SI18)·第1号掘立柱建物遺構 (SB01) 平面実測図 ……116
第31图	第1调查区第10'号竖穴住居址 (SI10') 出土遺物 ……99	第46图	第1调查区第18号竖穴住居址 (SI18) 出土遺物 ……117
第32图	第1调查区第11号竖穴住居址 (SI11) 平面実測図 ……100	第47图	第1调查区第19号竖穴住居址 (SI19)·第2号掘立柱建物遺構 (SB02)·第34号土坑状遺構(SK34) 平面実測図 ……118
第33图	第1调查区第11号竖穴住居址 (SI11) 出土遺物 ……101	第48图	第1调查区第19号竖穴住居址 (SI19) 出土遺物 ……119
第34图	第1调查区第12号竖穴住居址 (SI12) 平面実測図 ……105	第49图	第1调查区第36号·40号·54号竖穴 住居址 (SI ³⁶ _{40·54}) 第3号·20号 掘立柱建物遺構 (SB ⁰³ ₂₀)·第20号52 号第53号土坑状遺構 (SK ²⁰ ₅₂ ⁵³) 平面 実測図 ……121
第35图	第1调查区第12号竖穴住居址 (SI12) 出土遺物 ……106	第50图	第1调查区第20号掘立柱建物遺構 (SB20) 出土遺物 ……122
第36图	第1调查区第13号竖穴住居址 (SI13) 第19号土坑状遺構(SK19) 平面実測図 ……107	第51图	第1调查区第36号竖穴住居址 (SI36) 出土遺物 ……123
第37图	第1调查区第13号竖穴住居址 (SI13) 出土遺物 ……108	第52图	第1调查区第40号竖穴住居址 (SI40) 出土遺物 ……124
第38图	第1调查区第14号15号竖穴住居址 (SI ¹⁴ ₁₅)·第17号土坑状遺構(SK17) 平面実測図 ……109	第53图	第1调查区第22号竖穴住居址 (SI22) 平面実測図 ……126
第39图	第1调查区第14号竖穴住居址 (SI14) 出土遺物 ……110	第54图	第1调查区第22号竖穴住居址 (SI22) 出土遺物 ……127
第40图	第1调查区第15号竖穴住居址 (SI15) 出土遺物 ……110	第55图	第1调查区第23号·38号·39号·43 号·44号·48号竖穴住居址 (SI ^{23·38·39} _{43·44·48}) 平面実測図 ……………129
第41图	第1调查区第12号16号竖穴住居址 (SI ¹² ₁₆) 平面実測図 ……112	第56图	第1调查区第23号竖穴住居址 (SI23) 出土遺物 ……130
第42图	第1调查区第16号竖穴住居址 (SI16) 出土遺物 ……113	第57图	第1调查区第38号竖穴住居址 (SI38) 出土遺物 ……130
第43图	第1调查区第17号竖穴住居址 (SI17) 第5号土坑状遺構(SK05) 平面実測図 ……114		
第44图	第1调查区第17号竖穴住居址 (SI17) 出土遺物 ……115		

第58图	第1调查区第39号竖穴住居址 (SI39) 出土遺物 ……………131	(SI33) 出土遺物 ……………149
第59图	第1调查区第44号竖穴住居址 (SI44) 出土遺物 ……………132	第73图 第1调查区第34号竖穴住居址 (SI34) 平面実測図 ……………150
第60图	第1调查区第24号・25号竖穴住居址 (SI ²⁴ ₂₅) 平面実測図 ……………133	第74图 第1调查区第34号竖穴住居址 (SI34) 出土遺物 ……………151
第61图	第1调查区第24号竖穴住居址 (SI24) 出土遺物 ……………134	第75图 第1调查区第35号竖穴住居址 (SI35) 平面実測図・出土遺物 ……………154
第62图	第1调查区第25号竖穴住居址 (SI25) 出土遺物 ……………135	第76图 第1调查区第37号竖穴住居址 (SI37) 第7号掘立柱建物遺構 (SB07) 第31号31号土壇状遺構 (SK ³¹ ₃₁) 平面実測図 ……………156
第63图	第1调查区第26号27号31号32号竖穴 住居址 (SI ^{26・27} _{31・32}) 第4号掘立柱 建物遺構 (SB04) 第65号土壇状遺構 (SK65) 平面実測図……………138	第77图 第1调查区第37号竖穴住居址 (SI37) 出土遺物 ……………157
第64图	第1调查区第27号竖穴住居址 (SI27) 出土遺物 ……………139	第78图 第1调查区第41号竖穴住居址 (SI41) 第59号土壇状遺構 (SK59) 平面実測図 ……………159
第65图	第1调查区第31号竖穴住居址 (SI31) 出土遺物 ……………140	第79图 第1调查区第41号竖穴住居址 (SI41) 出土遺物 ……………159
第66图	第1调查区第32号竖穴住居址 (SI32) 出土遺物 ……………141	第80图 第1调查区第47号竖穴住居址 (SI47) 第5号掘立柱建物遺構 (SB05) 第36号41号42号50号土壇状 遺構 (SK ^{36・41} _{42・50}) 平面実測図 ……………161
第67图	第1调查区第28号・29号竖穴住居址 (SI ²⁸ ₂₉) 第43号土壇状遺構 (SK43) 平面実測図 ……………143	第81图 第1调查区第36号土壇状遺構 (SK36) 出土遺物……………162
第68图	第1调查区第28号竖穴住居址 (SI28) 出土遺物 ……………143	第82图 第1调查区第47号竖穴住居址 (SI47) 出土遺物 ……………162
第69图	第1调查区第29号竖穴住居址 (SI29) 出土遺物 ……………144	第83图 第1调查区第50号51号52号竖穴住居 址 (SI50・51・52) 第39号土壇状遺 構 (SK39) 平面実測図……………166
第70图	第1调查区第30号42号竖穴住居址 (SI ³⁰ ₄₂) 第8号46号48号土壇状遺 構 (SK ⁸ _{46・48}) 平面実測図 ……147	第84图 第1调查区第50号51号竖穴住居址 (SI50・51) 出土遺物 ……………167
第71图	第1调查区第33号竖穴住居址 (SI33) 第10号土壇状遺構 (SK10) 平面実測図 ……………148	
第72图	第1调查区第33号竖穴住居址	

第85図	第1調査区第52号竪穴住居址 (SI52) 出土遺物 ……………168	(SK09) 出土遺物……………194
第86図	第1調査区第53号竪穴住居址 (SI53) 第57号土壌状遺構 (SK57) 平面実測図 ……………170	第100図 第3調査区発掘遺構全体図 ……199
第87図	第1調査区第6号掘立柱建物遺構 (SB06) 平面実測図……………171	第102図 第3調査区第1号7号竪穴住居址 (SI01・07) 平面実測図 ……203
第88図	第2調査区発掘遺構全体図④ ……177	第106図 第3調査区第1号竪穴住居址 (SI01) 出土遺物 ……………205
第89図	第2調査区層位トレンチセクション 図(南面)・第3調査区土塁状遺構セ クション図(北面) ⑧ ……179	第104図 第3調査区第7号竪穴住居址 (SI07) 出土遺物 ……………205
第90図	第2調査区第1号2号3号掘立柱建 物遺構 (SB01・02・03) 第11号・13 号土壌状遺構 (SK11・13) 平面実測 図 ……………183	第106図 第3調査区第2号・3号竪穴住居址 (SI02・03) 平面実測図 ……207
第91図	第2調査区第1号掘立柱建物遺構 (SB01) 出土遺物……………185	第106図 第3調査区第2号竪穴住居址 (SI02) 出土遺物 ……………207
第92図	第2調査区第2号掘立柱建物遺構 (SB02) 出土遺物……………186	第107図 第3調査区第3号竪穴住居址 (SI03) 出土遺物 ……………209
第93図	第2調査区第3号掘立柱建物遺構 (SB03) 出土遺物……………187	第108図 第3調査区第2号3号掘立柱建物遺 構 (SB02・03) 第2号・3号・8号・ 9号土壌状遺構 (SK2・3・8・9) 平 面実測図 ……………213
第94図	第2調査区第4号掘立柱建物遺構 (SB04) 平面実測図……………188	第108図 第3調査区第2号掘立柱建物遺構 (SB02) 出土遺物……………215
第95図	第2調査区第4号掘立柱建物遺構 (SB04) 出土遺物……………189	第110図 第3調査区第3号掘立柱建物遺構 (SB03) 出土遺物……………216
第96図	第2調査区第1号土壌状遺構 (SK01) 出土遺物……………191	第111図 第4調査区(A)発掘遺構全体図 ……………221
第97図	第2調査区第2号土壌状遺構 (SK02) 出土遺物 ……………192	第112図 第4調査区(A)第1号・2号・3号・ 4号・5号・6号掘立柱建物遺構 (SB ^{01・02・03} _{04・05・06}) 平面実測図 ……………225
第98図	第2調査区第3号土壌状遺構 (SK03) 出土遺物……………193	第113図 第4調査区(A)第1号掘立柱建物遺 構 (SB01) エレベーション図…227
第99図	第2調査区第4号土壌状遺構 (SK04) 出土遺物……………194	第114図 第4調査区(A)第2号掘立柱建物遺 構 (SB02) エレベーション図…227
第100図	第2調査区第9号土壌状遺構	第115図 第4調査区(A)第3号掘立柱建物遺 構 (SB03) エレベーション図…228

第116図	第4調査区(A)第4号掘立柱建物遺構(SB04)エレベーション図…228	第133図	第6調査区第2号竪穴住居址(SI02)平面実測図 ……267
第117図	第4調査区(A)第6号掘立柱建物遺構(SB06)エレベーション図…229	第134図	第6調査区第2号竪穴住居址(SI02)出土遺物 ……267
第118図	第4調査区(A)大セクショントレンチ東側図 ……231	第135図	第6調査区第3号竪穴住居址(SI03)平面実測図 ……269
第119図	第4調査区(A)南造成面出土遺物 ……233	第136図	第6調査区第3号竪穴住居址(SI03)出土遺物 ……270
第120図	第4調査区(B)発掘遺構全体図(長者窪) ……237	第137図	第6調査区第4号竪穴住居址(SI04)平面実測図 ……272
第121図	第4調査区(B)(長者窪)セクション図 ……239	第138図	第6調査区第4号竪穴住居址(SI04)出土遺物 ……273
第122図	第5調査区発掘遺構全体図 ……245	第139図	第6調査区第5号竪穴住居址(SI05)平面実測図 ……274
第123図	第5調査区第1号竪穴住居址(SI01)平面実測図 ……247	第140図	第6調査区第5号竪穴住居址(SI05)出土遺物 ……275
第124図	第5調査区第1号竪穴住居址(SI01)出土遺物 ……248	第141図	第6調査区第6号竪穴住居址(SI06)平面実測図 ……276
第125図	第5調査区第2号・3号竪穴住居址(SI ⁰² ₀₃)第1号溝状遺構(SD01)平面実測図 ……250	第142図	第6調査区第6号竪穴住居址(SI06)出土遺物 ……277
第126図	第5調査区第2号・3号竪穴住居址(SI02・03)出土遺物 ……251	第143図	第6調査区第7号竪穴住居址(SI07)平面実測図 ……278
第127図	第5調査区第4号5号竪穴住居址(SI ⁰⁴ ₀₅)第1号溝状遺構(SD01)平面実測図 ……253	第144図	第6調査区第7号竪穴住居址(SI07)出土遺物 ……279
第128図	第5調査区第5号竪穴住居址(SI05)出土遺物 ……255	第145図	第6調査区第8号竪穴住居址(SI08)平面実測図 ……283
第129図	第5調査区第1号溝状遺構(SD01)出土遺物 ……256	第146図	第6調査区第8号竪穴住居址(SI08)出土遺物 ……284
第130図	第6調査区発掘遺構全体図 ……261	第147図	第6調査区第9号竪穴住居址(SI09)平面実測図・出土遺物 ……287
第131図	第6調査区第1号竪穴住居址(SI01)平面実測図 ……264	第148図	第6調査区第10号・11号掘立柱建物遺構(SB10・11)平面実測図…289
第132図	第6調査区第1号竪穴住居址(SI01)出土遺物 ……265	第149図	第6調査区第10号掘立柱遺構(SB10)出土遺物…289

第150图	第6调查区第11号掘立柱遺構 (SB11) 出土遺物……………290	第166图	第7调查区第7号竪穴住居址(SI07) 出土遺物……………320
第151图	第6调查区第1号溝状遺構 (SD01) 第2号・3号土壤状遺構 (SK02・03) 平面実測図……………293	第167图	第7调查区第8号掘立柱建物遺構 (SB08) 平面実測図……………322
第152图	第6调查区第2号・3号・4号土壤状遺構 (SK02・03・04) 平面実測図……………295	第168图	第7调查区第8号掘立柱建物遺構 (SB08) 出土遺物……………323
第153图	第6调查区第1号溝状遺構 (SD01) 出土遺物……………295	第169图	第7调查区第9号竪穴住居址(SI09) 平面実測図……………326
第154图	第7调查区発掘遺構全体図……………301	第170图	第7调查区第9号竪穴住居址(SI09) 出土遺物……………327
第155图	第7调查区第1号竪穴住居址(SI01) 平面実測図・出土遺物……………304	第171图	第7调查区第10号掘立柱建物遺構 (SB10) 平面実測図・出土遺物……………332
第156图	第7调查区第2号・14号掘立柱建物遺構 (SB02・14) 平面実測図……………306	第172图	第7调查区第11号掘立柱建物遺構 (SB11) 平面実測図……………334
第157图	第7调查区第3号竪穴住居址(SI03) 平面実測図……………307	第173图	第7调查区第12号掘立柱建物遺構 (SB12) 第3号土壤状遺構 (SK03) 平面実測図……………335
第158图	第7调查区第3号竪穴住居址(SI03) 出土遺物……………308	第174图	第7调查区第12号掘立柱建物遺構 (SB12) 出土遺物……………336
第159图	第7调查区第4号竪穴住居址(SI04) 平面実測図……………309	第175图	第7调查区第16号竪穴住居址(SI16) 第1号土壤状遺構 (SD01) 第4号土壤状遺構 (SK04) 平面実測図……………339
第160图	第7调查区第4号竪穴住居址(SI04) 出土遺物……………310	第176图	第7调查区第16号竪穴住居址(SI16) 出土遺物……………341
第161图	第7调查区第5号竪穴住居址(SI05) 平面実測図……………314	第177图	第7调查区第1号溝状遺構 (SD01) 出土遺物……………343
第162图	第7调查区第5号竪穴住居址(SI05) 出土遺物……………315	第178图	第7调查区第17号竪穴住居址(SI17) 平面実測図……………344
第163图	第7调查区第6号竪穴住居址(SI06) 第1号・2号土壤状遺構 (SK01・02) 平面実測図……………317	第179图	第7调查区第17号竪穴住居址(SI17) 出土遺物……………345
第164图	第7调查区第6号竪穴住居址(SI06) 出土遺物……………318	第180图	第7调查区第18号・21号竪穴住居址 (SI ¹⁸ ₂₁) 平面実測図……………347
第165图	第7调查区第7号竪穴住居址(SI07) 平面実測図……………320	第181图	第7调查区第21号竪穴住居址(SI21)

	出土遺物	……………347		出土遺物	……………376
第182図	第7調査区第18号竪穴住居址(SI18)		第196図	第7調査区第30号竪穴住居址(SI30)	
	出土遺物	……………349		平面実測図	……………377
第183図	第7調査区第19号竪穴住居址(SI19)		第199図	第7調査区第30号竪穴住居址(SI30)	出土遺物
	第5号土壇状遺構(SK05)平面実測図・出土遺物	……………353			……………378
第184図	第7調査区第20号掘立柱建物遺構(SB20)平面実測図	……………355	第200図	第7調査区第31号・34号・35号竪穴住居址(SI31・34・35)平面実測図	……………381
第185図	第7調査区第20号掘立柱建物遺構(SB20)出土遺物	……………356	第201図	第7調査区第31号竪穴住居址(SI31)	出土遺物
第186図	第7調査区第22号・28号・29号・32号竪穴住居址(SI $\begin{smallmatrix} 22 & \cdot & 28 \\ 29 & \cdot & 32 \end{smallmatrix}$)第6号土壇状遺構(SK06)平面実測図	……………359	第202図	第7調査区第34号竪穴住居址(SI34)	出土遺物
第187図	第7調査区第22号竪穴住居址(SI22)	出土遺物	第203図	第7調査区第35号竪穴住居址(SI35)	出土遺物
	……………360			……………383	
第188図	第7調査区第28号竪穴住居址(SI28)	出土遺物	第204図	第7調査区第33号竪穴住居址(SI33)	平面実測図
	……………361			……………384	
第189図	第7調査区第29号竪穴住居址(SI29)	出土遺物	第205図	第7調査区第33号竪穴住居址(SI33)	出土遺物
	……………362			……………384	
第190図	第7調査区第32号竪穴住居址(SI32)	出土遺物	第206図	第1調査区土壇状遺構(SK01・02・03・04・05・06)実測図	……………386
	……………364			……………387	
第191図	第7調査区第23号竪穴住居址(SI23)	平面実測図	第207図	第1調査区土壇状遺構(SK07・09・14・15・16・21)実測図	……………388
	……………366			……………388	
第192図	第7調査区第23号竪穴住居址(SI23)	出土遺物	第208図	第1調査区土壇状遺構(SK22・23・24・25・26・27)実測図	……………389
	……………367			……………389	
第193図	第7調査区第24号竪穴住居址(SI24)	平面実測図・出土遺物	第210図	第1調査区土壇状遺構(SK51・54・55・56・58・60)実測図	……………390
	……………370			……………391	
第194図	第7調査区第25号竪穴住居址(SI25)	平面実測図	第211図	第1調査区土壇状遺構(SK61・62・64・68)実測図	……………391
	……………372			……………393	
第195図	第7調査区第25号竪穴住居址(SI25)	出土遺物	第212図	南有段区最上部(尾根部)セクション図	……………393
	……………372			南有段区2段目東側斜面セクション図	……………393
第196図	第7調査区第26号竪穴住居址(SI26)	平面実測図			
	……………375				
第197図	第7調査区第26号竪穴住居址(SI26)				

第213図	第8調査区(うなぎ塚古墳)発掘遺構 全体図	397	第217図	第8調査区(うなぎ塚古墳)断面図	409
第214図	第8調査区(うなぎ塚古墳)トレンチ 平面図	403	第218図	第8調査区(うなぎ塚古墳)墳丘部発 掘遺構実測図	409
第215図	第8調査区(うなぎ塚古墳)トレンチ 第1号セクション図	405	第219図	第8調査区(うなぎ塚古墳)出土遺物 (1)	411
第216図	第8調査区(うなぎ塚古墳)トレン チ・第3・4・5・7・8・9号 セクション図	407	第220図	第8調査区(うなぎ塚古墳)出土遺物 (2)	412

図 版 目 録

	図版 4 (9)各グリッド発掘状況	478
1. 遺跡景観		
図版 1 (1)遺跡遠景 (南側から)	475	
図版 1 (2)遺跡遠景 (北側から)	475	
図版 1 (3)第1第2調査区 (北側から)	475	
図版 2 (4)第1第2調査区全景 (南東から)	476	
図版 2 (5)第4調査区(B) (長者窪) (北斜面)	476	
図版 2 (6)第4調査区(B) (長者窪) (西側から)	476	
図版 3 (7)第6調査区全景 (南側より)	477	
図版 3 (8)第8調査区 (うなぎ塚古墳) 全景 (西側から)	477	
図版 3 (9)第8調査区 (うなぎ塚古墳) 全景 (南側から)	477	
2. トレンチ, グリッド等		
図版 3 (1)第3号トレンチ	477	
図版 3 (2)第5号トレンチ	477	
図版 3 (3)第4調査区 (A) 南面断面土層	477	
図版 4 (4)第1調査区グリッド設定状況	478	
図版 4 (5)第1調査区グリッド設定状況	478	
図版 4 (6)各グリッド発掘状況	478	
図版 4 (7)各グリッド発掘状況	478	
図版 4 (8)各グリッド発掘状況	478	
3. 住居址遺構		
図版 5 (1)第1調査区 SI-02	479	
図版 5 (2)第1調査区 SI-09	479	
図版 5 (3)第1調査区 SI-53	479	
図版 5 (4)第1調査区 SB-60	479	
図版 5 (5)第1調査区 SI-26	} 複合状況	
SB-66		
SI-31		
SI-27		
SI-32		
図版 5 (6)第1調査区 SI-27	} 複合状況	
SI-32		
図版 5 (7)第1調査区 SB-68 (白線部分)	480	
図版 6 (8)第2調査区 SB-02 (白線部分)	480	
図版 6 (9)第3調査区 SB-02	} 複合状況	
SB-03		
図版 6 (10)第3調査区 SB-01	480	
図版 6 (11)第4調査区 (A) SB-02	480	
図版 7 (12)第4調査区 (A) SB-04	481	
図版 7 (13)第4調査区 (A) SB-03	481	
図版 7 (14)第4調査区 (A) SB-01	481	
図版 7 (15)第5調査区 SI-01	481	
図版 7 (16)第5調査区 SI-02, SI-03 複合状況	481	

図版 8 (17) 第 6 調査区 SI-01	482
図版 8 (18) 第 6 調査区 SI-03	482
図版 8 (19) 第 6 調査区 SI-05	複合状況
SI-06	
.....	482
図版 8 (20) 第 6 調査区 SI-06	482
図版 8 (21) 第 6 調査区 SI-08	482
図版 8 (22) 第 6 調査区 SB-10	複合状況
SB-11	
.....	482
図版 9 (23) 第 7 調査区 SI-05	483
図版 9 (24) 第 7 調査区 SI-07	483
図版 9 (25) 第 7 調査区 SI-09	複合状況
SI-20	
.....	483
図版 9 (26) 第 7 調査区 (手前から)	複合状況
SB-15	
SB-12	
SI-11	483
.....	483
図版 9 (27) 第 7 調査区 SB-10	483
図版 10 (28) 第 7 調査区 SI-16	複合状況
SD-01	
.....	484
図版 10 (29) 第 7 調査区 SI-18	484
図版 10 (30) 第 7 調査区 SI-23	484
図版 10 (31) 第 7 調査区 SI-24	複合状況
SI-20	
.....	484
図版 10 (32) 第 7 調査区 SI-23	複合状況
SI-19	
SI-25	
.....	484

図版 10 (33) 第 7 調査区 SI-33	複合状況
SI-34	
SI-35	
.....	484

4. 土壌

第 1 調査区

図版 11 (1) 第 1 調査区 SK-06	485
図版 11 (2) 第 1 調査区 SK-08	485
図版 11 (3) 第 1 調査区 SK-13	485
図版 11 (4) 第 1 調査区 SK-15	485
図版 11 (5) 第 1 調査区 SK-18	485
図版 11 (6) 第 1 調査区 SK-19	485
図版 11 (7) 第 1 調査区 SK-20	485
図版 11 (8) 第 1 調査区 SK-23	485
図版 12 (9) 第 1 調査区 SK-35	486
図版 12 (10) 第 1 調査区 SK-36	486
図版 12 (11) 第 1 調査区 SK-48, SK-49	486
図版 12 (12) 第 1 調査区 SK-62	486
図版 12 (13) 第 1 調査区 SK-13	486

第 2 調査区

図版 12 (14) 第 2 調査区 SK-12	486
--------------------------	-----

第 3 調査区

図版 12 (15) 第 3 調査区 SK-04	486
図版 12 (16) 第 3 調査区 SK-05	486
図版 13 (17) 第 3 調査区 SK-06	487
図版 13 (18) 第 3 調査区 SK-08	487
図版 13 (19) 第 3 調査区 SK-12	487
図版 13 (20) 第 3 調査区 SK-13	487
図版 13 (21) 第 1 調査区特殊柱穴	487

5. 溝状遺構

図版 14 (1) 第 1 調査区溝状遺構	488
図版 14 (2) 第 1 調査区北斜面溝状遺構と周	

	辺の遺構	488
図版 14	(3)第1調査区北斜面遺構及び棚穴群	488
図版 15	(4)第1調査区SD-09~SD-12までの溝状遺構	489
図版 15	(5)第2調査区溝状遺構	489
図版 15	(6)第4調査区(A)溝状遺構	489
図版 15	(7)第5調査区SD-01	489
図版 15	(8)第6調査区SI-03を貫通するSD-01	489
図版 15	(9)第7調査区SI-16と複合するSD-01	489

6. 第8調査区(うなぎ塚古墳)

図版 16	(1)墳頂部セクション	490
図版 16	(2)墳頂部状況	490
図版 16	(3)墳頂部及び周溝	490
図版 16	(4)墳頂部及び周溝	490
図版 17	(5)後方部周溝と壘出土状況	491
図版 17	(6)墳頂部から前方部及び周溝を写す	491

7. 遺物出土状況①

図版 18	(1)第1調査区SI-26	492
図版 18	(2)第1調査区SI-34	492
図版 18	(3)第1調査区SI-29	492
図版 18	(4)第1調査区SI-47	492
図版 18	(5)第1調査区SI-20	492
図版 18	(6)第1調査区SI-09	492
図版 18	(7)第1調査区SI-11	492
図版 18	(8)第1調査区SI-23	492
図版 18	(9)第1調査区SI-09	492

遺物出土状況②

図版 19	(10)第1調査区SI-36	493
図版 19	(11)第1調査区SI-47	493
図版 19	(12)第1調査区SI-45	493
図版 19	(13)第2調査区SB-01	493
図版 19	(14)第2調査区7C(G)	493
図版 19	(15)第2調査区北側	493
図版 19	(16)第2調査区SK-01	493
図版 19	(17)第3調査区SI-05	493

遺物出土状況③

図版 20	(18)第3調査区SI-04	494
図版 20	(19)第5調査区SI-01	494
図版 20	(20)第5調査区SI-01	494
図版 20	(21)第6調査区SI-03	494
図版 20	(22)第6調査区SI-03	494
図版 20	(23)第6調査区SI-07	494
図版 20	(24)第6調査区SI-07	494
図版 20	(25)第6調査区SI-08	494

遺物出土状況④

図版 21	(26)第7調査区SI-34	495
図版 21	(27)第7調査区SI-04	495
図版 21	(28)第7調査区SI-07	495
図版 21	(29)第7調査区SI-32	495
図版 21	(30)第7調査区SI-32	495
図版 21	(31)第7調査区SI-32	495
図版 21	(32)第7調査区5B(G)	495
図版 21	(33)第7調査区SI-29	495

遺物出土状況⑤

図版 22	(34)第8調査区(うなぎ塚古墳)南側トレンチ	496
図版 22	(35)第8調査区(うなぎ塚古墳)墳頂部	496
図版 22	(36)第8調査区(うなぎ塚古墳)後方周溝部	496

図版 22 (37)第 8 調査区(うなぎ塚古墳)後方 周溝部	496	図版 24 (16)第 1 調査区 SI-47 壺他 4 点	499
図版 22 (38)第 8 調査区(うなぎ塚古墳)南側 トレンチ	496	図版 24 (17)第 1 調査区 SI-47 椀形 2 点	499
8. 出土遺物		第 1 調査区出土遺物(3)	
第 1 調査区出土遺物(1)		図版 25 (18)第 1 調査区 SI-47 土師杯 9 点	
図版 23 (1)第 1 調査区 SI-04 須恵器高台杯	497	図版 25 (19)第 1 調査区各遺構出土杯 11 点	500
図版 23 (2)第 1 調査区 SI-09 須恵器蓮華皿	497	図版 25 (20)第 1 調査区 SI-04 土師杯 6 点須 恵 1 点	500
図版 23 (3)第 1 調査区 SI-36 須恵器高台杯	497	図版 25 (21)第 1 調査区各遺構出土土師杯 16 点	500
図版 23 (4)第 1 調査区 SI-31 須恵器蓋	497	図版 25 (22)第 1 調査区各遺構出土須恵杯 7 点	500
第 1 調査区出土遺物(2)		第 1 調査区出土遺物(4)	
図版 24 (5)第 1 調査区 SI-17 土師壺	498	図版 26 (23)第 1 調査区 SI-11 土師杯 4 点	501
図版 24 (6)第 1 調査区 SI-28 土師壺	498	図版 26 (24)SI-16 土師器 2 点	501
図版 24 (7)第 1 調査区 SI-44 土師 壺片	498	図版 26 (25)第 1 調査区 SI-10 土師器 2 点	501
図版 24 (7)第 1 調査区 SI-34 土師壺片	498	図版 26 (26)第 1 調査区 SI-07 土器底部	501
図版 24 (8)第 1 調査区 SI-34 甌	498	図版 26 (27)第 1 調査区 SI-23 白壺壺	501
図版 24 (9)第 1 調査区 SI-29 甌	498	図版 26 (28)第 1 調査区 SI-05 注口土器片	501
図版 24 (10)第 1 調査区 SI-47 土師壺	498	図版 26 (29)第 1 調査区 SI-02 木葉庄痕底部	501
図版 24 (11)第 1 調査区 SI-07 手づくね土器	498	図版 26 (30)第 1 調査区墨書土器	501
図版 24 (12)第 1 調査区 SI-07 土師甕口縁部	499	第 1 調査区出土遺物(5)	
図版 24 (13)第 1 調査区各遺構出土甕口縁部	499	図版 27 (31)第 1 調査区各遺構出土支脚	502
図版 24 (14)第 1 調査区 SI-05 壺 1/2	499	図版 27 (32)第 1 調査区各遺構出土脚部	502
図版 24 (15)第 1 調査区 SI-08 土師椀形	499		

図版 27 (33) 第 1 調査区各遺構出土土錘502	図版 29 (50) 第 2 調査区各遺構出土土錘504
図版 27 (34) 第 1 調査区各遺構出土石製模造 舳502	図版 29 (51) 第 2 調査区各遺構出土磨石504
図版 27 (35) 第 1 調査区各遺構出土有孔円板502	図版 29 (52) 第 2 調査区各遺構出土雲母片岩 石片504
図版 27 (36) 第 1 調査区各遺構出土曲玉502	第 3 調査区出土遺物
図版 27 (37) 第 1 調査区各遺構出土有孔円板502	図版 30 (53) 第 3 調査区 SB-03 土師壺 ...505
第 1 調査区出土遺物(6)	図版 30 (54) 第 3 調査区各遺構出土土錘505
図版 28 (38) 第 1 調査区各遺構出土石斧503	図版 30 (55) 第 3 調査区 SI-05 土師甗 1/2505
図版 28 (39) 第 1 調査区各遺構出土石製品503	図版 30 (56) 第 3 調査区各遺構出土土師杯505
図版 28 (40) 第 1 調査区各遺構出土紡錘車503	図版 30 (57) 第 3 調査区各遺構出土陶器, 磁 器片505
図版 28 (41) 第 1 調査区 SI-26 石環503	第 5 調査区出土遺物
図版 28 (42) 第 1 調査区各遺構出土不明石片503	図版 30 (58) 第 5 調査区 SI-05, SI-01 杯505
図版 28 (43) 第 1 調査区各遺構出土磨石503	図版 30 (59) 第 5 調査区各遺構出土土師杯505
図版 28 (44) 第 1 調査区各遺構出土陶器磁器 片503	図版 30 (60) 第 5 調査区各遺構出土土錘505
第 2 調査区出土遺物	図版 30 (61) 第 5 調査区各遺構出土土師甗口 縁部505
図版 29 (45) 第 2 調査区 SI-01 高台杯 ...504	図版 30 (62) 第 5 調査区各遺構出土磨石 505
図版 29 (46) 第 2 調査区 SB-04 土師器片504	第 6 調査区出土遺物(1)
図版 29 (47) 第 2 調査区 SB-01 土師壺口縁 部504	図版 31 (63) 第 6 調査区 SI-04 杯506
図版 29 (48) 第 2 調査区 SB-04 須惠甗口縁 部504	図版 31 (64) 第 6 調査区 SI-04 杯506
図版 29 (49) 第 2 調査区各遺構出土陶器, 磁 器片504	図版 31 (65) 第 6 調査区 SI-07 杯506
	図版 31 (66) 第 6 調査区 SI-07 杯506
	図版 31 (67) 第 6 調査区 SI-03 土師高台杯506
	図版 31 (68) 第 6 調査区 SI-08 杯506

図版 31 (69) 第 6 調査区 SI-07 椀形	……506	図版 33 (87) 第 7 調査区 SI-07, SI-29 土師壺	……510
図版 31 (70) 第 6 調査区 SI-02 土師壺	……507	図版 33 (88) 第 7 調査区 SI-07 土師壺	……510
図版 31 (71) 第 6 調査区 SI-14 土師壺	……507	図版 33 (89) 第 7 調査区 SI-34 甗	……510
図版 31 (72) 第 6 調査区 SI-01 甗	……507	図版 33 (90) 第 7 調査区 SI-24 埴	……510
図版 31 (73) 第 6 調査区 SI-01 土師器口縁部	……507	図版 33 (91) 第 7 調査区 SI-35 埴	……510
図版 31 (74) 第 6 調査区 SI-04 土師器壺口縁部	……507	図版 33 (92) 第 7 調査区 SI-09 小形壺	……510
図版 31 (75) 第 6 調査区各遺構出土土師器底部	……507	図版 33 (93) 第 7 調査区 SI-23 椀形	……510
第 6 調査区出土遺物(2)		第 7 調査区出土遺物(2)	
図版 32 (76) 第 6 調査区 SI-03 高杯復元	……508	図版 34 (94) 第 7 調査区各遺構出土須恵口縁部	……511
図版 32 (77) 第 6 調査区 SI-08, SI-05 高杯	……508	図版 34 (95) 第 7 調査区各遺構出土土師器壺口縁部	……511
図版 32 (78) 第 6 調査区各遺構出土高杯・脚部	……508	図版 34 (96) 第 7 調査区 SI-34 土師器口縁部	……511
図版 32 (79) 第 6 調査区各遺構出土土鍬	……508	図版 34 (97) 第 7 調査区 SD-01 土師杯	……511
図版 32 (80) 第 6 調査区 SI-08 磨石	……508	図版 34 (98) 第 7 調査区 SI-04 土師高台杯	……511
図版 32 (81) 第 6 調査区各遺構出土有孔円板	……509	図版 34 (99) 第 7 調査区各遺構出土高台杯底部	……511
図版 32 (82) 第 6 調査区各遺構出土磨石	……509	図版 34 (100) 第 7 調査区 SI-28 椀形	……512
図版 32 (83) 第 6 調査区各遺構出土石製製造鋸	……509	図版 34 (Ⅲ) 第 7 調査区各遺構出土陶器, 磁器, 磁器片	……512
図版 32 (84) 第 6 調査区各遺構出土古銭	……509	図版 34 (102) 第 7 調査区左から SI-23, SI-34, SI-31, SI-22 土師器	……512
第 7 調査区出土遺物(1)		図版 34 (103) 第 7 調査区 SI-04 土師杯 4 点	……512
図版 33 (85) 第 7 調査区 SB-12 白瓷壺復元	……510	第 7 調査区出土遺物(3)	
図版 33 (86) 第 7 調査区 SB-08 須恵器	……510	図版 35 (104) 第 7 調査区各遺構出土高杯脚部	……513
図版 33 (87) 第 7 調査区 SB-12 白瓷壺復元	……510	図版 35 (105) 第 7 調査区各遺構出土高杯脚部	……513
		図版 35 (106) 第 7 調査区 SI-06 高杯脚部	……513

図版 35 (100) 第 7 調査区 SI-29 高杯口部片514	図版 37 (123) 第 7 調査区 SI-24 釣針518
図版 35 (108) 第 7 調査区 SI-32 高杯復元514	図版 37 (124) 第 7 調査区 SI-04 鋸518
図版 35 (109) 第 7 調査区左から SI-21, SI-09 高杯復元514	図版 37 (125) 第 7 調査区 SI-04 馬具尾錠518
図版 35 (110) 第 7 調査区 SI-09 高杯脚部514	図版 37 (126) 第 7 調査区各遺構出土鉄製品518
図版 35 (111) 第 7 調査区各遺構出土土錘514	図版 37 (127) 第 7 調査区各遺構出土鉄滓518
第 7 調査区出土遺物(4)	第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 出土遺物
図版 36 (112) 第 7 調査区各遺構出土石製模造 鋸515	図版 38 (128) 第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 土師 器底部519
図版 36 (113) 第 7 調査区各遺構出土有孔円板515	図版 38 (129) 第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 高杯 脚部519
図版 36 (114) 第 7 調査区各遺構出土石製模造 鋸515	図版 38 (130) 第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 土師 器埴519
図版 36 (115) 第 7 調査区各遺構出土有孔円板515	図版 38 (131) 第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 壺519
図版 36 (116) 第 7 調査区各遺構出土土錘516	図版 38 (132) 第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 壺519
図版 36 (117) 第 7 調査区 SI-18 有孔円板516	図版 38 (133) 第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 尖底 土器底部519
図版 36 (118) 第 7 調査区各遺構出土紡錘車516	図版 38 (134) 第 8 調査区 (うなぎ塚古墳) 縄文 土器片519
図版 36 (119) 第 7 調査区各遺構出土曲玉516	第 4 調査区 (A) 出土遺物
第 7 調査区出土遺物(5)	図版 39 (135) 第 4 調査区 (A) 遺構出土陶器, 磁器片520
図版 37 (120) 第 7 調査区各遺構出土砥石517	西斜面区出土遺物
図版 37 (121) 第 7 調査区各遺構出土磨石517	図版 39 (136) 西斜面区遺構出土陶器, 磁器白 瓷片520
図版 37 (122) 第 7 調査区各遺構出土滑石片517	第 4 調査区 (B) 長者窪出土遺物
	図版 39 (137) 第 4 調査区 (B) 長者窪遺構出土 陶器, 磁器片520

南有段区出土遺物	
図版 39 (138)南有段区遺構出土陶器, 磁器白 瓷片	520
第 4 調査区 (B) 長者窪出土遺物	
図版 39 (138)第 4 調査区 (B) 長者窪中段遺構 出土磨石	520
図版 40 (140)第 4 調査区 (B) 長者窪遺構出土 陶器, 磁器片	521
図版 40 (141)第 4 調査区 (B) 長者窪遺構出土 陶器, 磁器片	521
図版 40 (142)第 4 調査区 (B) 長者窪遺構出土 陶器, 磁器片, 鉄器片	521
図版 40 (143)第 4 調査区 (B) 長者窪遺構出土 陶器片	521
図版 40 (144)第 4 調査区 (B) 長者窪遺構出土 陶器片	521
図版 40 (145)第 4 調査区 (B) 長者窪遺構出土 陶器, 磁器片	521
図版 41 (146)各遺構出土常滑片 (表) ...	522
図版 41 (147)各遺構出土常滑片 (裏) ...	522
図版 41 (148)第 1 調査区各遺構出土陶器, 磁 器白瓷片	522
9. その他	
図版 42 (1)遺跡に建立されていた観音堂	523
図版 42 (2)観音堂境内の石仏群	523
図版 42 (3)観音堂境内の馬頭観音	523
図版 42 (4)観音堂附近にあった地藏尊	523
図版 42 (5)長者窪頂上の権現様	523
図版 43 (6)遺跡 (第 6 調査区) 頂上にあつた 香取神社	524
図版 43 (7)遺跡より筑波山眺望	524
図版 43 (8)作業風景	524
図版 43 (9)遺跡より霞ヶ浦遠望	524
図版 43 (10)古渡小学校児童の見学	524
図版 43 (11)作業従事者全員	524

1 発掘調査に至る経過

1. 発掘調査に至る経過

昭和61年9月29日付、開公第318-2号で茨城県開発公社理事長より、筑波東部工業団地造成地内（東村釜井、桜川村甘田）に係る埋蔵文化財の有無及びその取扱についての照会が両村教育委員会に提出された。

これを受けて、東村、桜川村教育委員会は両村の文化財保護審議会会長、企画課長並びに開発公社担当課長の出席を得て、昭和62年6月3日筑波東部工業団地内埋蔵文化財分布調査打合せ会を開催し、日本原始、古代史調査会の河野辰男先生、造成地内の埋蔵文化財の種類と分布についての概略の説明を受け、対応について協議をした。同年6月15日筑波東部工業団地内埋蔵文化財分布調査会を発足させ、関川東村委員長を会長に、調査主任に河野辰男先生を任命して試掘分布調査を実施した。その結果、縄文時代、古墳時代の遺物、集落址、古墳、城館構築等の跡が確認されたので、昭和62年6月27日付、東教発第251号で、茨城県開発公社理事長宛に建設用地内は埋蔵文化財包蔵地であること及びその取扱については、協議を必要とする旨回答した。

この回答をもとに、埋蔵文化財の取扱について県開発公社と東村、桜川村両村教育委員会との協議が行なわれた。その結果、遺跡の名称を立切遺跡として発掘調査による記録保存の措置をとることとなり、立切遺跡調査会を設置して発掘調査を進めることとなった。

昭和62年7月3日付、県開発公社より開公第222-3号で文化財保護法(昭和25年法律第214号。以下法という)。第57条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が文化庁官宛に提出され、昭和62年7月28日付、東教発第370号で立切遺跡調査会長から文化庁長官宛に法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。そして、昭和62年7月28日(火)午前11時から立切遺跡発掘現場において、関係者出席のもと鎮入式が行われた。(坂本忠男)

立切遺跡調査会役員

会 長	成毛平昌	東村長	理 事	石田 馨	東村企画課長
副会長	村野源治	桜川村長	理 事	黒田 清	桜川村企画広報課長
理 事	関川英雄	東村教育委員会教育長	理 事	坂本忠男	東村総合センター所長
理 事	瀧沢 湊	桜川村教育委員会教育長			

理事	上島 国男	桜川村教育委員会 事務局長	前理事	諸岡 幸雄	前桜川村企画広報 課長
理事	飯出 隆	東村文化財保護審 議会会長	監事	石井邦一郎	前桜川村議会議員
理事	人見久左衛門	桜川村文化財保護 審議会会長	理事	斉藤 正	東村議会議員
理事	河野辰男	立切遺跡発掘調査 団長	幹事	栗山 照夫	桜川村教育委員会 文化財係
理事	金沢孝治	県開発公社用地建 設部長	前幹事	水飼 良一	前桜川村教育委員 会文化財係
			前幹事	一畝田耕寿	前東村教育委員会 文化財係

発掘に従事した人

調査主任	河野辰男	作業員	飯島幸夫
調査員	大竹房雄	作業員	斉藤茂嘉
調査員	河野通義	作業員	池田 正
調査員	玉井輝男	作業員	岩瀬七三
調査員	春日綱男	作業員	高安胤雄
作業員	根本正敏	作業員	小泉文男
作業員	滝坂 滋	作業員	久保田四郎
作業員	佐伯秀雄	作業員	江寺 登
作業員	渡辺文一	作業員	根本 平
作業員	板橋 弘	作業員	高芝喜雄
作業員	斉藤啓助	作業員	黒田忠男
作業員	坂本秀夫	作業員	蛇原キン
作業員	小泉 繁	作業員	黒田奈美子
作業員	小貫治郎兵衛	作業員	郡司秀一
作業員	高木晋之助	作業員	守野 操
作業員	野口忠雄	作業員	菅澤秀雄
作業員	湯本 豊	作業員	高須喜一
作業員	濱田雅雄	作業員	坂本マリ子
作業員	高木恒雄	作業員	坂本喜代
作業員	根本忠夫	作業員	清水とり
作業員	郡司三郎	作業員	糸賀文子

作業員 高須光枝
作業員 平野とみ
作業員 諸岡三重子
作業員 小貫きみ
作業員 栗野久代
作業員 永長なを
作業員 高城俊江
作業員 永長千恵子
作業員 蛇原ゆわ
作業員 永長きよ
作業員 根本由起子
作業員 根本さい
作業員 高芝菊江
作業員 根本さた
作業員 池上ミツ子

作業員 根本とよ子
作業員 飯嶋マサ子
作業員 小貫光子
作業員 野口きち
作業員 郡司ふさ
作業員 平野すい
作業員 平野セイ
作業員 根本よ志江
作業員 山田愛子
作業員 井戸賀文江
作業員 小貫眞喜子
作業員 岡野静江
作業員 田丸よし
作業員 山口ちよ子

2 立切遺跡の位置と地理、歴史的環境

本遺跡の位置と地理・歴史的環境

① 位置

本遺跡は茨城県稲敷郡東村と桜川村の両村に跨がる立切地区に存在する。常磐線の土浦駅に下車して JR バス佐原行に乗車、国道 125 号線を霞ヶ浦湖岸に沿って進み、停留所釜井にて下車する。目指す立切遺跡はすぐ背後の阿波丘陵にある。下車してから僅か 10 分の位置に存在する。この遺跡から南西を望めば眼下に新利根川が流れ、そのはるか彼方に利根川が流れ下総の沖積平野が展開する。一方、本遺跡から東方を望めばはるか眼下に霞ヶ浦が美しく眺められ、その左側に筑波の霊峰が仰がれる。

また、東京駅から成田行の JR 鉄道に乗り佐原駅に下車し、JR バスで釜井にて下車する方法もある。

② 環境

(一)

現在の東^{オホ}地域と桜川地域が縄文早期の頃^{オホ}の海進期を迎えると、海水は温暖なる気候に伴って俄かに上昇を始めた。それによって、現在の阿波丘陵を残してはるか西南方の千葉丘陵に至るまで海水が上昇し太平洋につながる一大湾口を形成し、現在の取手方面から延びた丘陵を狭んで一方は古河あたりまで、更に一方は豊里付近の間に海水は上昇していったのである。また、阿波丘陵の東北部も全て海水に覆われ、それは遠く筑波山の麓あたりまで波及したものである。

その稲敷台地から半島状に延びた阿波台地は、いくらか起伏はあるとしてもほぼ海拔 27 m から 28 m の高さを保っていた。縄文海進期当時はその麓から数メートルは海水が上昇していたものと想定される。その阿波台地の中頃に今回発掘調査の立切遺跡は存在するのである。温暖なる気候と地形条件は人類の棲息に適し、早くから人々が棲みついたようである。本遺跡の表彩及び覆土から尖底土器が数片出土し、また、浮島式土器の出土もみられたことからこのことは証明できるが、縄文住居址の検出には至らなかった。ただし、本台地のつけ根に当たる福田の地域は縄文後期の貝塚として早くから注目され、そこから出土した高度の遺物は辰己考古館にも保管されている。

なお、阿波台地から弥生後期の遺物も出土することから、弥生時代後期の生活もなされていたものであろう。

(二)

一方桜川の地区を見ると稲敷台地のおちこむ丘陵台地と浮島とはおびただしい貝塚が残され、その数20数ヶ所を数え、また、縄文遺跡6、弥生遺跡6ヶ所の多きにのぼるのである。中でも浮島式土器は前期土器として有名である。

なお、古墳の数も実に24基が残存するが、特に浮島にある原古墳群中の原一号墳は前方後方墳として五世紀前半に比定されるのである。ところが今回発掘を完了したうなぎ塚古墳も方形周溝墓が発達した前方後方墳の形式をもった五領期の古墳ではないかと言われている。これについてはいずれ第12調査区や付録の部において述べる積りである。

東村史研究第2号(東村の原史古代)部を見ると、この狭い阿波丘陵に85基を数える古墳が残されているが、湮滅古墳を入れるとしたら100基を越したものと思われる。前方後円墳は東大沼古墳群で4基、福田古墳群で7基となっているが、中でも東大沼古墳の中には全長100mに及ぶ大形の前方後円墳が存在する。

(三)

立切遺跡が繁栄を極めた古墳時代前期より後期にかけて、浮島は太平洋上の内湾の一孤島の観を呈し、海水は阿波丘陵を残して三方から侵入、桜川地区側を見ると、甘田、阿波、神宮寺、柏木、須賀津あたりが海岸線に当たっていたのであろうが、しかしそれは一面の海であったのではなく、須賀、山来、岡、柏木、神宮寺あたりは台地が姿を見せ集落も発生し、古墳も多く築造されていたようであり、現に柏木等には現在も古墳が残されている。

常陸國風土記信太郎の条に記載してある「乗浜」は塩や海苔の名産地となっている。その乗浜は現在のどの辺に比定されるものであろうか、それは当時の海岸線の須賀・飯出、須賀津、甘田、阿波崎あたりに比定されるのであろうかと推定するのである。

(四)

この地は太平洋の内湾とし太平洋の波路の果てるどころ、即ち黒潮暖流の打寄せる北限界に当る地、気候温暖にして海山の幸の豊富なところ、黒潮暖流にのって世界の文化の集る終着点、更には関東内部や東北に伝播する政治、経済、文化の中継点としての役割を果たす場所でもあった。その例証のひとつを示してみよう。

それは黒潮にのって南方から或いは中国江南の地から漕ぎつけられは舟があった。くり舟、わが國の古名で天の岩桶舟。南方産の楠あまのいわづねの大木をくりぬいて造った舟のことで、それは大海を乗りきって来る舟として使用された。縄文後期に使用されたくり舟が、小貝川の川底から出土した。それは現在伊奈の教育委員会によって保存されているが、現在まで当時の榎の浦に当る竜ヶ崎付近、藤代町、守谷町等から数限りなく出土し、現在保存されているものも多い。それには杉や松

材が使われているが、その舟の製造技術がその土地に定着したことを示すものである。また、南方産の楠の木がこの地に多く繁茂していることも南方からの種子の伝来を示すものであろうし、この木によって「くり舟」も造られたものであろう。この地は「くり舟」渡来の北限の地に当たっていたものではあるまいか。

(五)

桜川村、東村（一部に当る）一帯を古代においては「安波」という名称で呼ばれており、現在もその地名は残されている。例えば、阿波崎、また、大杉神社の鎮座する集落に残る「上阿波」、「下阿波」という地名、更には、本遺跡の麓の集落を現在「甘田」と言っているがそれは「安婆田」という地名が本来の字であったと言うことが、桜川郷土史資料に記載されている。元来は安婆の田甫という意味で、鎌倉時代の頃から漸く新田が開発されたことが記されているのである。「安婆田」が何時のまにか「甘田」という字に変化したものであるが、地名字の変更は何時の時代何処の地方にも行なわれていたことである。それにしても大変な字の違いである。更には釜井村の大塚、石神のあたりまで甘田の地はひろがっていたことが室町時代の水帳によって理解されるのである。

浮島は常陸国風土の編さんされた奈良時代前期頃には「安婆島」と称していたことが同上の風土記に記されている。本遺跡付近も大化以前には安婆なる範囲に入っていたものではないかという古老もいるが、とにかく、安波（安婆）なる地名は現在の桜川村一帯と東村の一部を総称したもので、それは大変に広範囲に亘っていたことがわかるのである。

なお、安波（安婆）の名称のほかに「あんば」とも呼んでいるが、これは「あ」と「ば」との間に「ん」を入れた地域の語音で、それには深い意味を考える人もいるようだが、あまり意味深長に考える必要はないものと思われる。しかしながら、この「安波」、「安婆」、「あんば」という地名のつけられたそもそもの語意は果して何なのか、そしてそれは何処から来たものか、それを探究することが先ず必要な問題であるように考えられるが、このことは後の付録のところでも私論を述べる積りである。更にまた、この「安波」の地は大化改新後の地名改字では「栗浜の里（郷）」、また高田郷」という字に改名されているが、それもまたそれなりの理由があったようである。

(六)

浮島（当時の安婆島）は縄文時代から繁栄を極めていたことは、現在残されている数多い遺跡によって理解できる。

古代社会の中頃から後期にかけて、更には中世になっても浮島のもつ政治、経済、文化上に及ぼした役割は大きかった。先年発掘調査を完了した浮島の後黒兵衛遺跡、宮の脇遺跡、尾島遺跡から出土したおびただしい祭祀遺物は人々の驚嘆するところであった。ところが今回発掘調査を完了した立切遺跡は、浮島の遺跡とは極めて近い場所にあるが、それと何等かの関連があるもの

か、数多くの祭祀遺物が出土したのである。それは祭祀遺物の製造所であったが同時にそれは極めて厚い信仰の場所でもあった。常陸国風土記信太郎安婆島の条に「九つの社があり、言葉も行いも忌み謹めり」という記事にあるとおり、ここの地域の人々は神を拝し信仰心の厚い人々であったものと考えられる。

常陸国風土記の前記の条に景行天皇来島の記事が見え、それは戸張の宮跡としてその場所に碑が建てられている。この島はその当時洋上の拠点として軍事的基地であった。景行天皇は実在の天皇であったかはわからないが、何れにしてもこの地は大和朝廷東国進出に極めて重大な役割を演じた場所であったと想像される。

更にまた常陸国風土記行方郡の条に安婆島を拠点として多(大)系の建借間命たけかりのみことが潮来地方うらに播磨はりましていた土俗討伐の記事が大変入念に記載されている。建借間命は大系統中臣氏の祖で那賀国を建置した人であるが、この土俗討伐によって潮来進出を成功させ、同時に鹿島進出をもなしとげたのである。

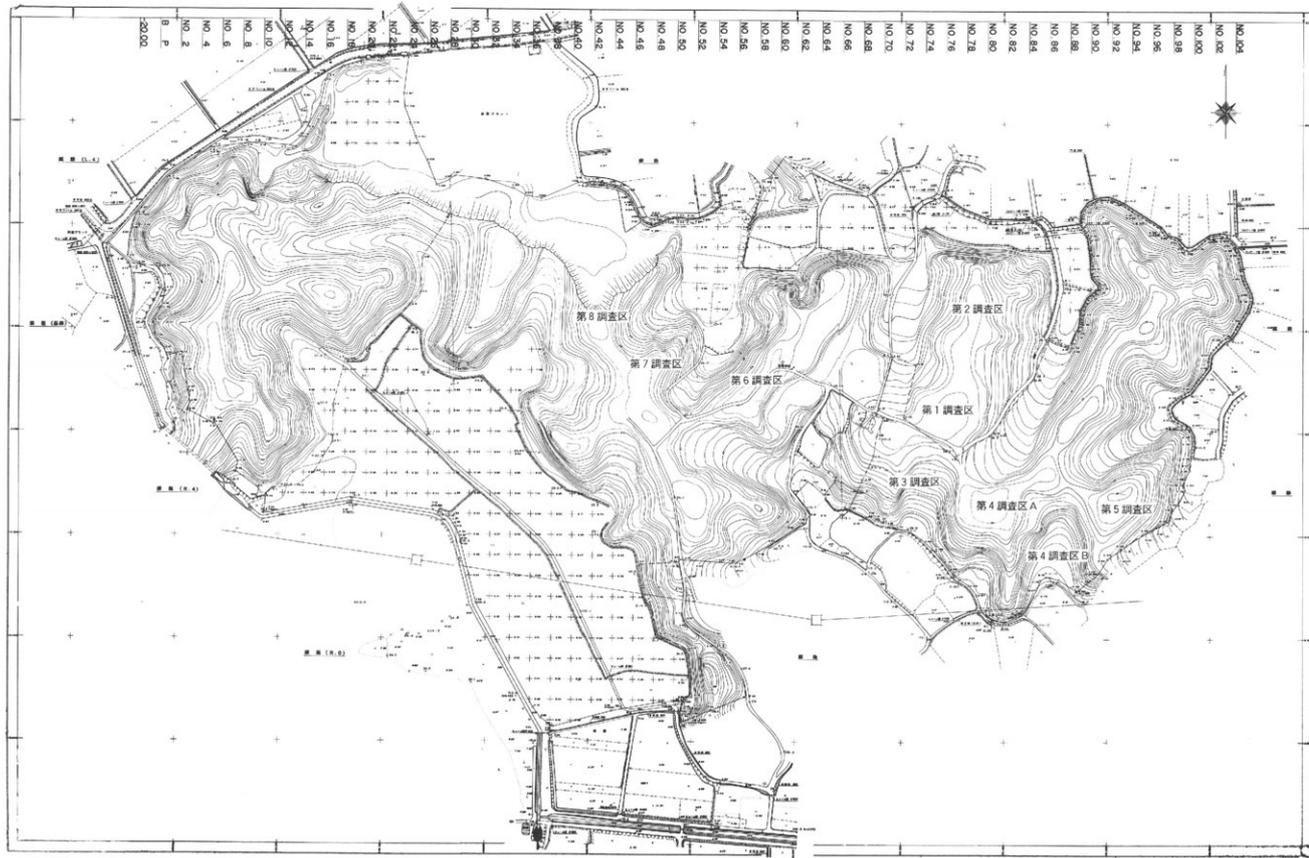
また、常陸国風土記信太郎の条に出てくる乗浜(能里波麻)は海苔の名産地であり同時に塩の産出地でもあった。

(七)

中世をむかえるとこの安婆地方は南北朝時代、南、北両朝の関東進出の拠点に当てられた。北畠親房は先ず安婆の神宮寺城に入城し、この地の人々に迎えられ関東進出の第一歩を踏んだ。当時阿波崎城も南朝方に加担した人々によって造られたものであろう。昨年度阿波崎城にせつぞくする平台城の発掘調査も実施されその様相も判明した。ここで問題なのは今回発掘を一応完了した立切遺跡が南朝の一城である亀井城に比定する学説がある。これについては新編常陸国誌にあるが、宮本元球は亀井城については江戸崎説をとり、中山信名は釜井説をとった。釜井の本来の語意は亀井(カマガカメに変化)で、立切の側に亀の子山も存在する。一方江戸崎の亀井には城館施設を造るような場所はないし、また、その施設らしきものも残されていない。今回発掘調査の立切の丘陵台地には極めて古い城館構造の様式が見られ、それに伴う鎌倉、南北朝期の遺物も数点出土した。しかし、ここでもそのことを決定づける遺構は検出されないようであった。なお、本城館はその後室町時代の戦国期にかけて使用されたようであるが、その遺構や遺物等から検討をして常住の城館としては使用されなかったものと判断したい。



3 遺構と遺物

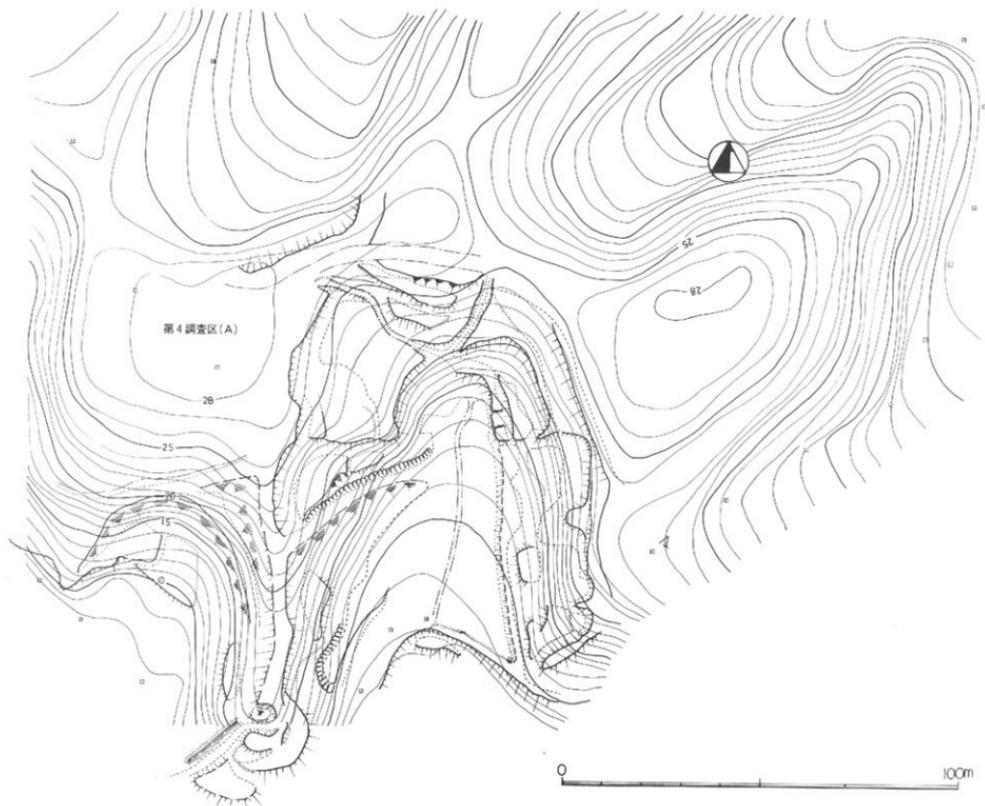


第2図 通勤範囲図及び発掘区域概略図





第4図 刑平遺構探訪実測図①B



第5図 削平遺構確認実測図②第4調査区(B)長者窪

遺構と遺物

立切遺跡が特に古墳時代前期より平安末期に至るまで、更には中世全期に亘って繁栄を極めたのは、阿波丘陵部に台地を形成している部分が多いからであろう。併し本遺跡は一面に亘る台地を形成しているのではなく、その台地はいくつにも分散して形成されていたのである。それは集落の形成によく、また、城館の構築にも適していた。

そのようなことなどから本遺跡を6台地に分割し、更に斜面区等の調査を含めて8地区に分けて調査を進めることにした。発掘調査を実施した総面積はほぼ9500 m²に亘り、以下、各調査地区毎に検出された遺跡及び遺物等について記述を試みたいと思うのである。ちなみに本遺跡から検出された竪穴住居址106、掘立柱住居址28、土壇状遺構65、溝状遺構3、その他、有段状遺構、土塁、柵穴、中世の地点貝塚及び古墳1基があげられる。なお、遺物については大ざっぱに言って土師器、須恵器、陶器、磁器、石製品、鉄製品等の出土を見た。なお、本遺跡の表彩及び覆土から縄文土器片、弥生土器片が出土したが、それは一部を拓本にとってあげておいた。細部については下記のとおりである。

(1) 第1調査区

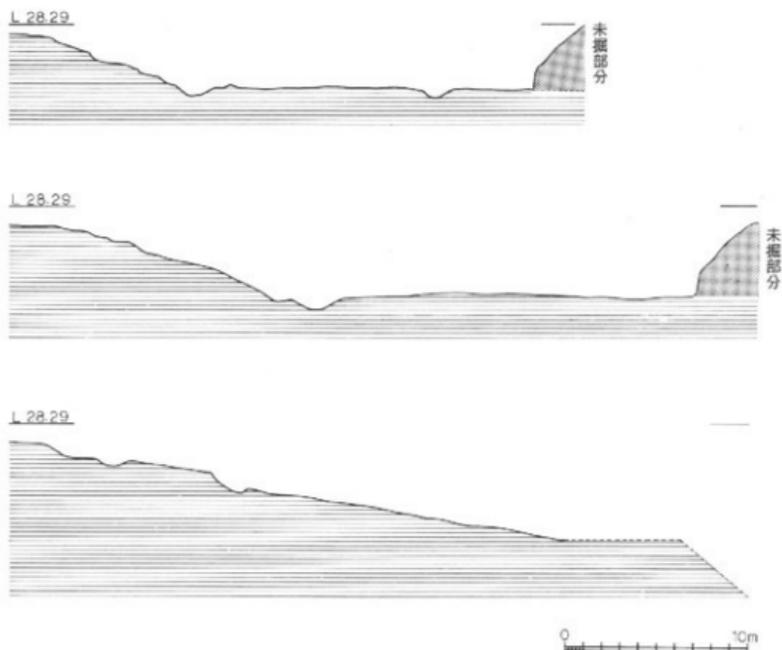


第1調査区全景





第7图 第1调查区西侧面区兔猎道网全体图



第8図 第1調査区西斜面調査区B発掘遺構エレベーション

(1) 第1調査区

面積 3600 m²。本遺跡のほぼ中央部を占め海拔 28 m の平坦な台地で、畑地として使用されていた。表採及び覆土より縄文土器片、磨製石斧片、黒曜石、磨石等が出土したが、その遺構は検出されなかった。永年に亘る遺構の築造等によって、縄文遺構は消失したものであろうか。

検出された遺構は①竪穴住居址 53 軒②掘立柱建物住居址 6 棟（規格に合わないものは 10 棟）。③土壇 65、④柵状群多数等があげられる。竪穴住居址は鬼高期のものが 8 割、その他は和泉期、平安期のものと判断された。それに伴う出土遺物としては、坏、高坏、壺、甕、支脚、土錘、磨石、鉄器類等であった。土壇についてはそれが遺物等も極めて少なく、墓状遺構、貯蔵穴と判断されたものは少なく、その大半が不明であった。

なお、ここで問題になったのは②の掘立柱住居址と、④の柵状群とであった。ここは試掘のときに城館遺構も確認され、本郭に当たる場所ではないかと見られた所で、いよいよ本調査区の発掘調査を実施するに当たり、それが入念な調査を試みたものである。

まず本調査区に 4 m × 4 m のグリットを設定し、各グリットを 20 cm ～ 30 cm 掘り下げた。第 1 層面は固い土質であったので、それが当初（中世）の生活面ではないかと判断したのである。そのグリットの第 1 層面から 30 cm × 50 cm 程度の柱穴と判断されるピットが検出されたが、柱穴として規格的にまとまるものはなかった。そして、年代的にそれが中世遺構であることを証明する遺物の出土はなかった。

そこで更に 20 cm 掘り下げて精査を試みたところ、そこはローム層土でその中から竪穴住居址、土壇、また、竪穴住居址の内外に柱穴と見られるピット群が検出された。その上、竪穴住居址内外には柵状群と見られる小ピット群が無数に検出され、床面や壁付近が完全な姿で見られた住居址は極めて少なかった。とにかく竪穴住居以後の時代に数多くの手工がなされたことが理解されるのである。

掘立柱群も一棟につながるものが 10 数棟見られたが、数回の柱の建替え等があったとみえて、完全な規格に合致するものは僅か 6 棟にすぎなかった。ところでその掘立柱住居についての時代と規模についてであるが、そこから平安後期に当る遺物が出土することから、その上限は平安後期に位置づけてよいものではなからうか。更にまた、極めて少ない数ではあるが、陶器、磁器の出土も見られた。その出土の場所を示すならば、第 2 調査区、第 3 調査区、第 4 調査区、第 7 調査区、第 8 調査区の殆んど大部分の調査区からその出土を見たものである。

陶器は 13・14 世紀のものが主で、磁器については戦国期またはそれ以降のものも多かった。そうなる掘立柱住居の下限は戦国期か、あるいはそれ以降のものもあったと考えるほかはない。

その規模の大きなもので9 m×5 m、小さいもので3 m×3 m程度のもので、柱穴も50 cm×30 cm、～30 cm×20 cmのもので、大形住居は認められなかった。主に作業所、倉庫、等に使用されたもので、もし常住の住居があるとしたら、もっと生活用品に関する遺物が残されていてもよいかと思われるのである。

なお、④の柵穴群については、径5～10 cmのピットが第1層から第2層のローム層をつきぬけて掘られ、それは北西側に2条に列んでおり、その中の1條は溝状になっていたが、柵穴が数回も建替えられたのでその後溝状に変化したものであろうか。この柵穴は第1調査区と第2調査区との間にも検出され、南側にも認められ、調査区の中にも各所で検出されたから、その規格、配列を確認できなかった。この柵穴列、柵穴群は何れも中世的所産と解釈したい。

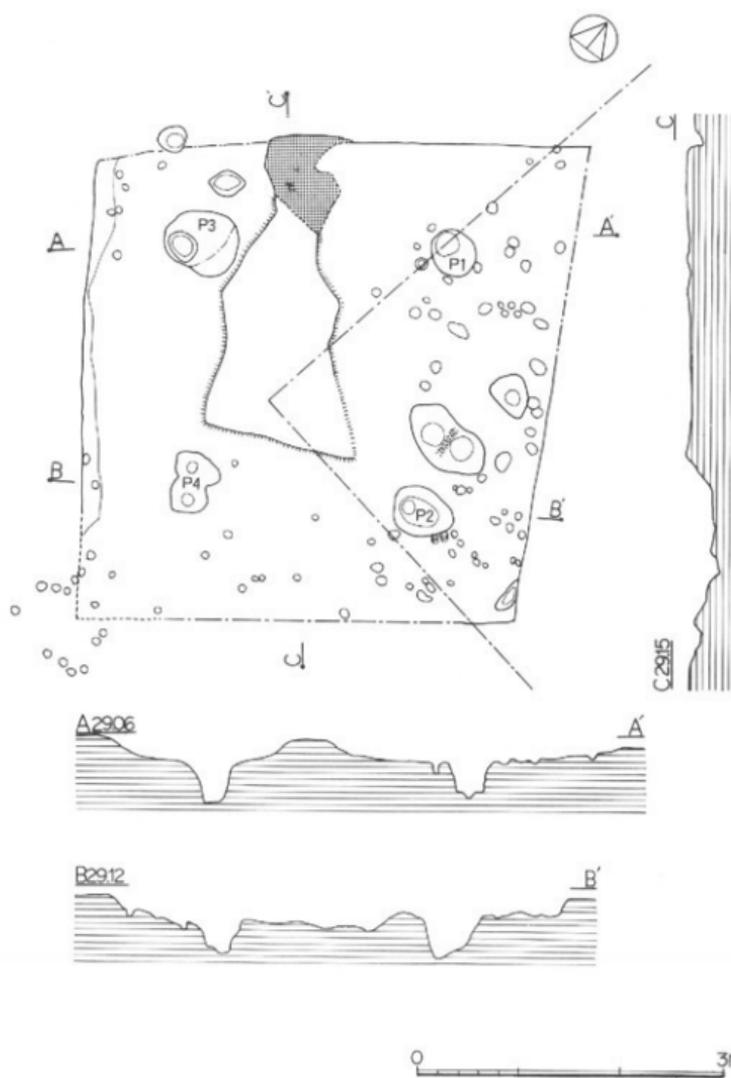
③の土壌については本調査区より65も検出されたが、出土遺物が極めて少いところからその性格を把握することは極めて至難の業であった。骨片が出土した土壌は墓状遺構と認められたが、その中には近代のものも含まれていた。貯蔵穴として使用されたものも含まれていたと思われる。とにかく第1調査区から検出された遺構は、挿図(第6図)と航空写真(1)にあるように極めて複雑な様相を呈していたのである。

第1号竪穴住居址(SI01)(第9図)

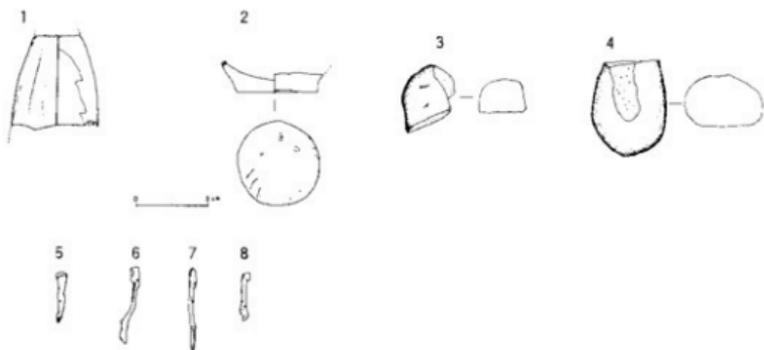
SI13の南隣に位置し、軸線をほぼ20度西方に向け、平面形状は方形プランをなす。縦4.60 m 横4.00 m。壁高は西壁が僅かに残存するのみでその高さ20 cm、東壁も僅かに残存しその高さは15～20 cm、南方はなくなっている。

ピットはP1(径25 cm～深さ30 cm)、P2(35 cm×40 cm)、P3(35 cm×30 cm)、P4(長径50 cm×短径35 cm×深さ35 cm)の4つが主柱であろう。カマドはおしつぶされたまま、1/2ぐらい残存するがそれは65 cm×60 cm×20 cmとなっている。

床面は凹凸が多く床面各所に小ピットが散在するが、それはそれ以後何等かの目的で掘られたものであろう。なお、遺物等については高坏、坏等の出土をみたが下記にあげたい。



第9图 第1调查区第1号窑穴住居(S101)平面实测图



第10図 第1調査区第1号竪穴住居址(SI01)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	②2.4cm ③3.6cm ④0.3cm	輪横痕、脚部のみ	良好 砂粒あり 明褐色	1/4 残脚部
2	坏 (同上)	③0.3cm ④3.6cm	ヘラナデ痕、内部は黒塗り。外部はヨコヘラで整形。	良好 淡褐色 砂粒	底部
3	磨石		第10図参照		
4	磨石		第10図参照		
5	不明鉄片		第10図参照		
6	不明鉄片		第10図参照		
7	不明鉄片		第10図参照		
8	不明鉄片		第10図参照		

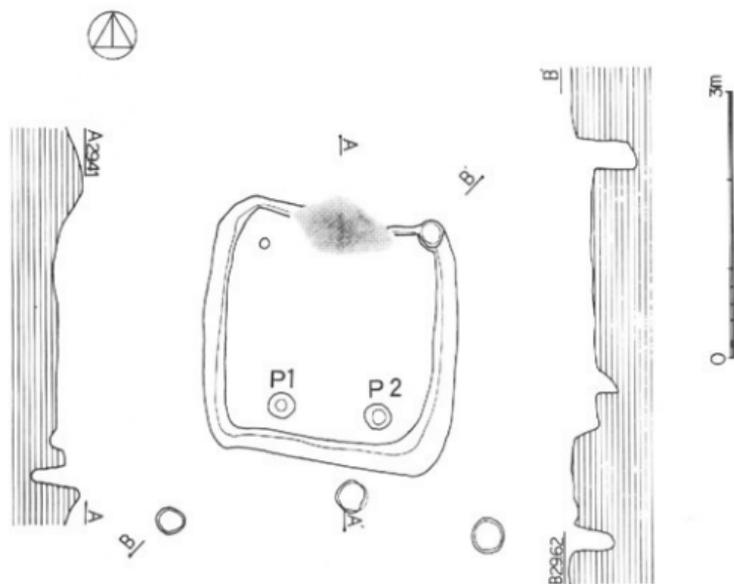
第2号竪穴状住居址 (SI02) (第11図)

SI11の東隣に位置しその上にSB57が重なって造られている。軸線をほぼ30度西の方に向け、平面形状は1辺が2.50mの正方形プランをなす。割合いに小型の住居址であるが整った造りであった。壁高は30cm~35cm, 周溝は巾18cm, 深さ10cm, ビットP1(30cm×15cm), P2(30cm×10cm)は支柱ではないと判断された。むしろビットは住居址外にあったように思われるが、周囲に小ビットが掘られ凹凸が甚だしく検出できなかった。

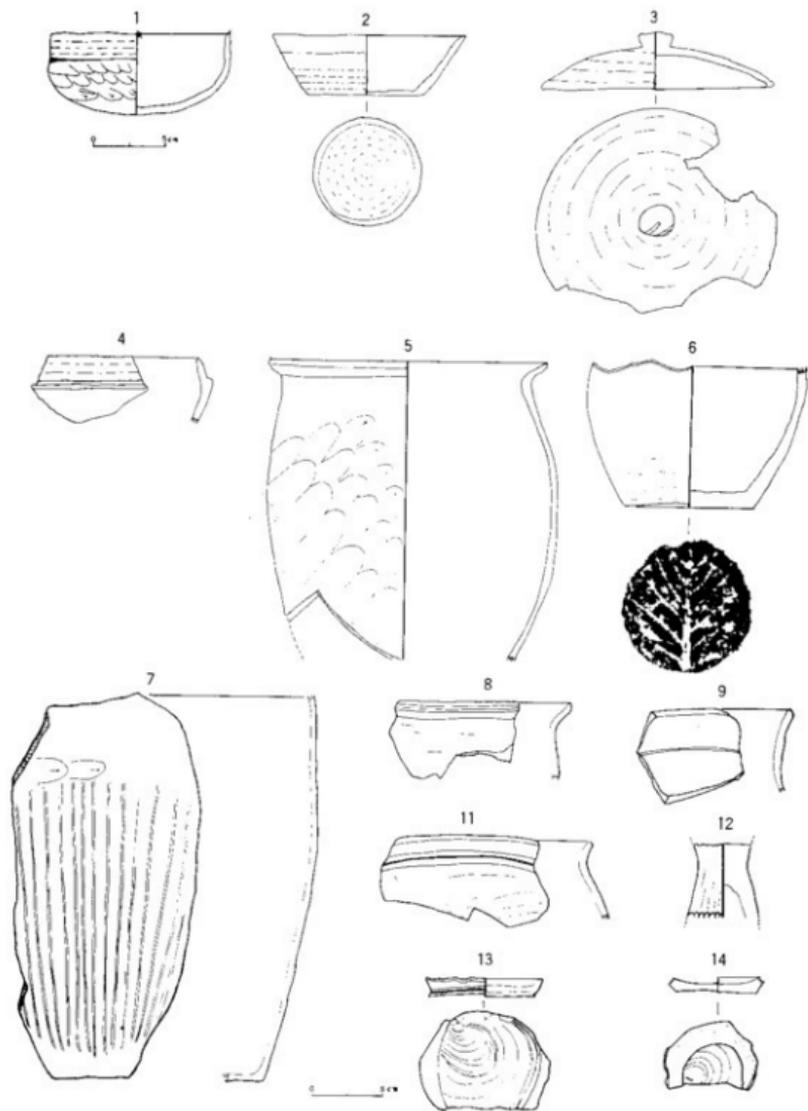
カマドは原形のまま残された横巾80cm奥行40cm, 高さ20cmとなっていた。本住居址には周溝も明確に検出されたが, それは巾18cm, 深さ10cmであった。

床面は極めて平坦で固いが, 本住は火災にかかったようで炭化材やチガヤが残されていた。炭化材は粟材ではなかろうか。

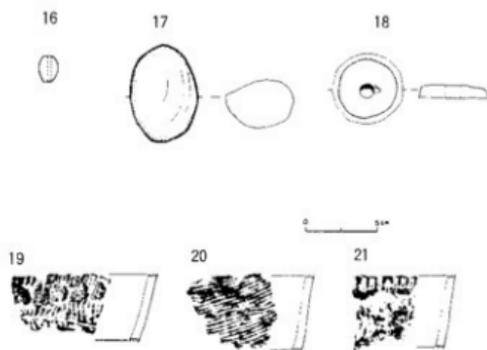
床面から検出された遺物は多く, それは環, 鏝, 高環の類が多かったが, それは下記に示したとおりである。



第11図 第1調査区第2号竪穴状住居址(SI02)平面実測図



第12图 第1调查区第2号竖穴住居址(SK2)出土遗物



第12図 第1調査区第2号竪穴住居址(S102)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①15.0cm ②4.0cm ③0.5cm	口縁部に横位のナダがある。ほぼ直立して立上っている。	良好 砂粒 淡褐色	1/8欠
2	坏 (須恵)	①13.0cm ②4.0cm ③0.5cm	底部に糸切りを削り、ヘラナダ整形ロクロ整形	良好 砂粒 灰白色	少々完形
3	蓋 須恵	①16.0cm ②3.0cm ③0.3cm	ロクロ整形ツマミをつける	良好 砂粒 灰白色	1/8欠
4	坏 (土師)	②4.0cm ③0.3cm	稜を有し口縁部は少々内傾気味	良好 砂粒 淡褐色	1/8残
5	甕 (土師)	①18.0cm ②2.0cm ③0.3cm	口縁部は外反して口唇部外側にくの字形の折りを付けてある。胴部のふくらみが少々少ない。内外ともにヘラ整形	良好 砂粒雲母片混入 淡褐色	1/8残
6	甕 (土師)	①15.0cm ②9.0cm ③0.3cm ④9.0cm	胴の下半部から底部につけ、輪積み痕あり。	不良 砂れき混入 黒褐色	1/8残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

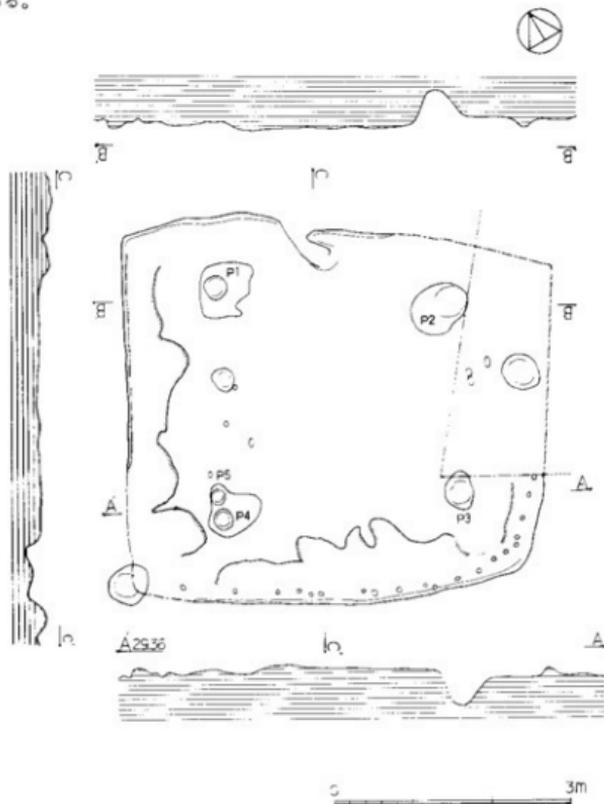
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	壺 (土師)	②25cm ③0.5cm ④5.0cm	内外共にタテヘラで整形、胴部の稍々長い技法	不良 砂礫 明褐色	1/4残
8	壺 (土師)	②5.0cm ③0.3cm	口縁部になって稍々外反し、口唇部になると直立気味である。	良好 明淡褐色	1/4残 口縁部
9	壺 (土師)	②5.0cm ③0.4cm	口縁部下位に爪形の押圧痕あり、内外共にヘラ整形	良好 砂粒 明褐色	1/4残 口縁部
11	壺 (土師)	②4.00cm ③0.5cm	口縁部片で胴部は口縁部で内傾し、それから立上りは大きく外反する。 口唇部は折が認められる。ロクロ整形、国分期とみられる。	良好 砂粒 黒褐色	口縁部片
12	高坏 (土師)	④3.0cm 底部高 4.0cm ③0.5cm	外部はタテヘラで整形されている。	普通 黒褐色	胴部
13	壺 (土師)	④5.0cm ③1.0cm	底部には右巻の糸切り痕が明確に残る内外共にロクロ整形	良好 褐色	底部
14	坏 (土師)	③0.8cm ④40cm	糸切痕を残すが全体はヘラ整形	良好	底部
16	土錘	①1.0cm 孔径0.5cm	磨滅なし	赤褐色	完形
17	磨石		第12図参照		
18	紡錘車		第12図参照		
19	鉢片 (縄文)	7.2×4.3cm	第12図参照		
20	壺片 (須恵)	6.0×5.5cm	第12図参照		
21	鉢片 (縄文)	5.6×4.4cm	第12図参照		

第3号竪穴住居址 (SI03) (第13図)

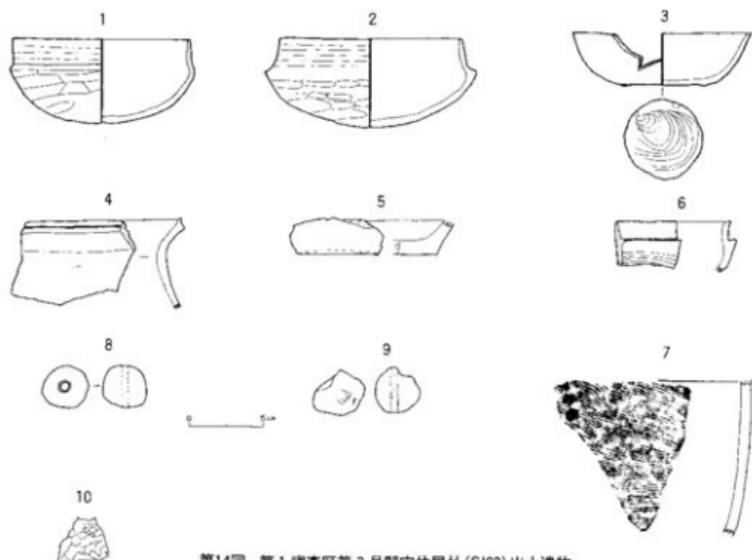
本住は SI15 の東隣に位置するが SI15 構築のためきりこまれていた。軸線をほぼ 50 度西の方向へ向け平面形状は方形をなす。壁高は 30 cm ~ 15 cm。床面は平坦で固いが南の壁高付近は凹凸がはげしく、ただ僅かに南壁に周溝が残されているだけである。

P1 (40 cm × 50 cm), P2 (30 cm × 40 cm), P3 (40 cm × 50 cm), P4 ((40 cm × 40 cm) は主柱と認められるが、P₅ はその補助柱であろう。

カマドは東北方の壁に残された。それは 60 cm × 40 cm, 高さ 15 cm であった。床面からの出土遺物も多く鉄滓等も多くそれは鬼高期の所産ではないかと推定された。出土遺物については下記のとおりである。



第13図 第1調査区第3号竪穴住居址(SI03)平面実測図



第14図 第1調査区第3号竈穴住居址(SI03)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏土師	①11.0cm ②4.0cm ③0.3cm	口縁部は直立し、横位にヘラナデを施す。稜を有するがヘラによる削りが見られる。工具によるナデが見られる	良好 砂粒 赤褐色	稍々完形
2	坏	①12.0cm ②5.0cm ③0.5cm	ほぼ直立した口縁部をもち明確な稜を外面に残す。表面縦位にヘラナデみが見える。	良好 砂粒 淡褐色	稍々完形
3	坏	①12.0cm ②2.5cm ③0.3cm	ほぼ外反した胴部から内傾ぎみの口縁部となり稜はない。底部に承切りの痕を残す。	良好 ⑤黒色 ⑥淡褐色	1/4欠
4	甕	②5.0cm ③0.8cm	大きく外反した頸部で口縁部外側にくの字状の折りが残る。	良好 黒褐色 茶褐色 砂粒	口縁部
5	甕	④5.0cm 現高2.0cm ③1.0cm	内面に縦位にヘラミガキがある	良好 砂粒 赤褐色	底部

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	坏 (須恵)	②2.0cm ③0.3cm	口縁部片、明確な稜を有する	良好 砂粒 青灰色	口縁部
7	甕 (須恵)	③1.0cm	外面にタタキあり。	良好 青灰色	片
8	土鍾	①2.5cm 孔径0.5 cm	磨滅なし	褐色	完
9	土鍾	①3.0cm 孔径0.5 cm	磨滅あり	褐色	1/2残
10	鉄滓		第14図参照		

第4号竪穴住居址 (SI04) (第15図)

本住はSI04'と重なっているが、それはSI04をこわしてSI04'を造ったものようである。軸線はほぼ40度西方に向けて造られ、平面形状は1辺が5.20mの正方形プランである。

壁高は西45cm、北15cm、東30cm、そして南壁は全然残されていない。P1(40cm×45cm)、P2(30cm×33cm)、P3(40cm×40cm)、P4(40cm×53cm)は支柱であろう。

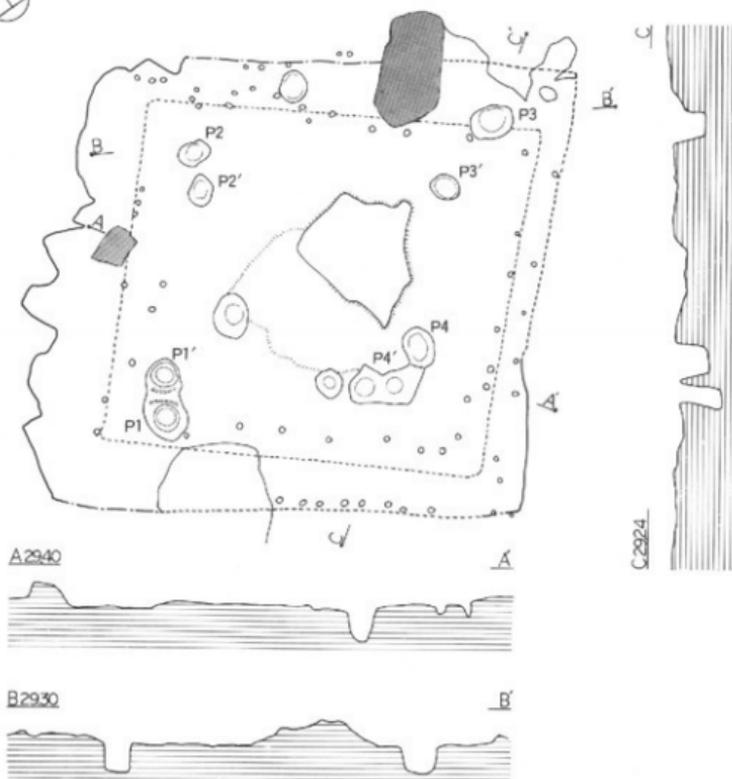
本住の床面は殆んど残されていないが、壁穴はよく残されている。出土遺物についてはSI04'とまざっていて判然と見わけられないが、下記にその遺物をあげておいた。おそらくそれは両住ともに鬼高期の所産であるように思われる。

第4'号竪穴住居址 (SI04') (第15図)

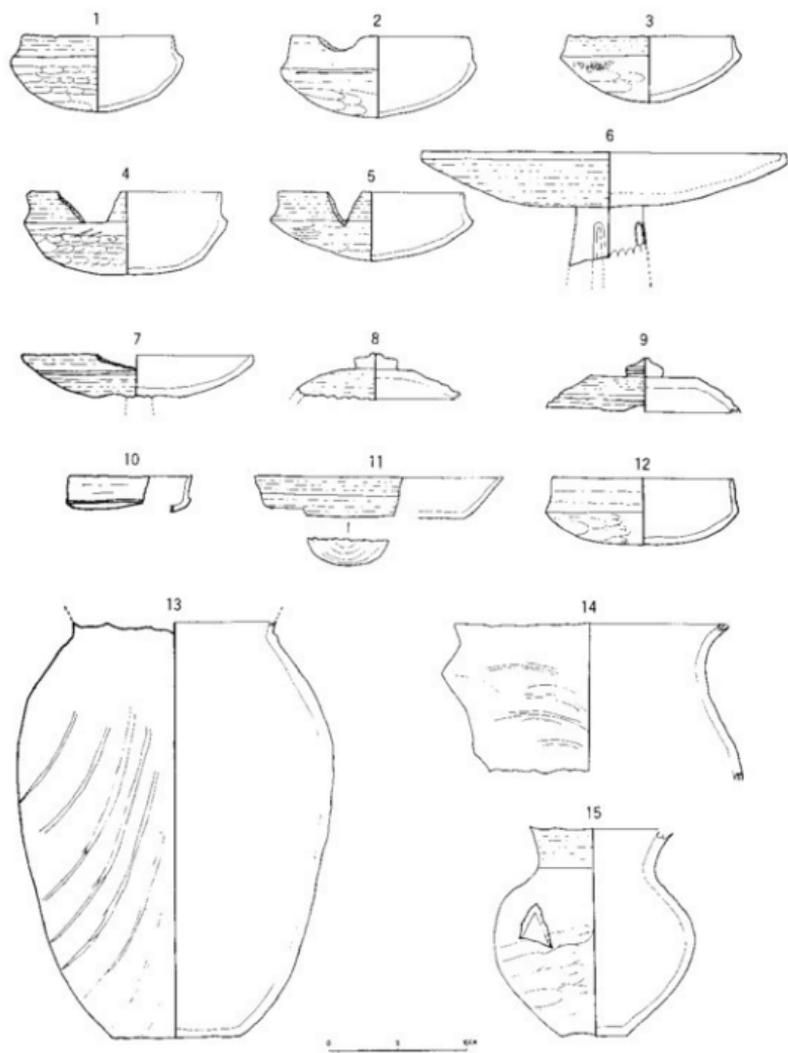
本住はSI04をこわして築造したもので1辺が3.90m、4.52mの方形プランで、SI04より構造は小さい。軸線はSI04にほぼ同じである。壁高は余り明確には判断されないが、壁穴が残されているからその構造が判明する。

P1'(27cm×45cm)、P2'(27cm×40cm)、P3'(30cm×38cm)、P4'(40cm×38cm)である。

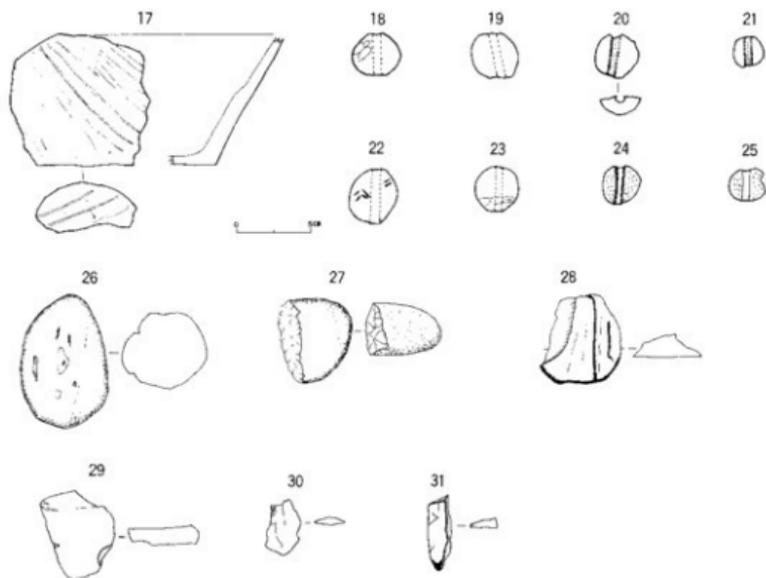
床面に凹凸がはげしいのは後世になって何等かの施設を造ったからであろう。なお、遺物については下記のとおりである。



第15圖 第1調査区第4号4'号壁穴住居址(S104・S104')平面実測図



第16图 第1調査区第4号竪穴住居址(Si04)出土遺物



第16図 第1調査区第4号竪穴住居址(SI04)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①10cm ②4.0cm ③0.4cm	口縁部は直立し、稍々内傾気味で、明確な稜を有す、外面はヘラナデ痕あり	良好 砂粒 赤褐色	完形
2	坏	①12cm ②4.0cm ③0.4cm	口縁部は横ナデで直立しており、稜を有する。ヘラケズリの後にヘラナデを行い内面は若干ミガキがかっている。	良好 砂粒 赤褐色	完形
3	坏	①12cm ②3.5cm ③0.4cm	明確な稜を有し、稍々内傾した口縁を有する外面はヘラケズリ痕あり	良好 砂粒 黒褐色	完形
4	坏	①11.3cm ②4.0cm ③0.4cm	稜を有し、口縁部はほぼ直立し、比較的巾広の口縁部である。	普通 黒褐色	完形

遺物

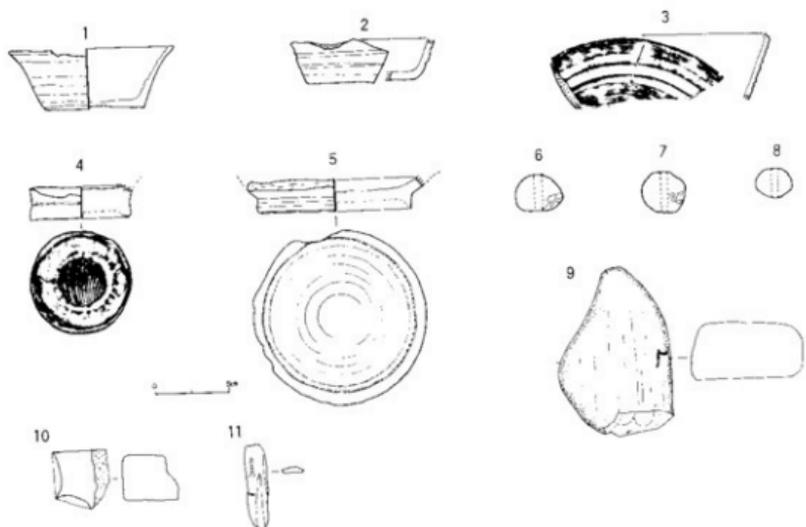
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	坏	①13.0cm ②4.0cm ③0.3cm	横ナデを施した口縁部で大きく外反する。稜を有する	普通 砂粒 淡褐色	完形
6	高坏 (須恵)	①2.3cm ②2.0cm ③0.3cm 脚14.0cm 底部13.0cm 厚さ2.0cm	マドがあり、坏部は完形	良好 灰白色	坏部完
7	高坏 (須恵)	①16.0cm ②2.0cm ③0.8cm	坏部1部欠、ロクロ整形、回転ヘラナデで痕あり。	良好 灰白色	脚部欠
8	蓋 (須恵)	①13.0cm ②4.0cm ③0.6cm	ロクロ整形	良好 灰白色	稍々完
9	蓋	①9.0cm ②3.0cm ③0.4cm	回転ヘラナデ	良好 灰白色	稍々完
10	坏 (須恵)	②3.5cm ③0.2cm	2点あり(1個体)稜を有し立ち上りがほぼ直立している。ロクロ整形	良好 青灰色	稍々完
11	坏	①11.0cm ②3.5cm ③0.5cm	ロクロ整形	良好 青灰色	稍々完
12	坏	①13.0cm ②5.0cm ③0.4cm	ほぼ垂直に立上った口縁部で、稍々低くめの横を有する器面内は縦位のヘラナデ、外面はヘラケズリの後にナデを行っている。	良好 砂粒 褐色 黒色	完形
13	甕 (土師)	②2.28.0cm ③3.1.0cm ④4.9.0cm 胴径20.0cm	外面は粗雑なヘラケズリ、その後若干ナデを施した部分もあり、それは全て縦位になされている	普通 砂粒 茶褐色	1/2欠
14	甕 (土師)	①12.0cm ②6.5cm ③0.5cm	胴上部頸部にいたるまでの部位を残し、胴部のふくらみを想像できる	普通 砂粒 明褐色	完
15	壺 (土師)	①9.0cm ②14.5cm ③0.4cm ④5.0cm 胴16.0cm	底部から大きく外反して、胴部で大きくふくらみ、頸部で直立した後、口縁部は大きく外反する	普通 砂粒 淡褐色	

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
17	壺 (土師)	③1.0cm ④6.0cm	外面に斜位(左右)方向にヘラナデを行ったものである	良好 砂粒 褐色底部	1/3残
18	土鍾	①5cm 孔5cm	磨滅なし	褐色	完
19	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	完
20	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	1/2
21	土鍾	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	1/2
22	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
23	土鍾	①3.0cm 孔0.4cm	磨滅あり	褐色	完
24	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	1/2
25	土鍾	①2.5cm 孔0.4cm	磨滅あり	褐色	1/2
26	磨石		第16図参照		
27	磨石		第16図参照		
28	磨石		第16図参照		
29	不明石片		第16図参照		
30	不明石片		第16図参照		
31	不明石片		第16図参照		



第17図 第1調査区第4号竪穴住居址(S104)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (須恵)	①11.0cm ④7.5cm ③7.5cm	底部より少々外反気味に立ち上る ロクロを使用し横ヘラで整形	良好 灰白色	1/5残
2	坏 (須恵)	④8cm ③2.5cm	底部より外反しながら立上る 口縁部は欠けて不明。ロクロ使用、横ヘラで整形	良好 灰白色	1/5残
3	坏 (須恵)	②3.0cm ③2.5cm	ロクロ整形を内面、外面共に施している(工具痕あり)	良好 灰白色	1/5残
4	高台付 坏	①9.0cm ②1.5cm ③0.5cm	糸切りの後、高台を付け高台内部を縁部をすり消している	良好 淡褐色	底部
5	甕 (須恵)	④10cm ②2cm ③0.5cm	回転ヘラ切りロクロ整形	良好 灰白色	底部
6	土錘	①3.0cm 0.7cm	磨減なし	良好 淡褐色	底部

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 淡褐色	底部
8	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 淡褐色	底部
9	磨石		第17図参照		
10	砥石片		第17図参照		
11	石片		第17図参照		

第5号竪穴住居址 (SI 05) (第18図)

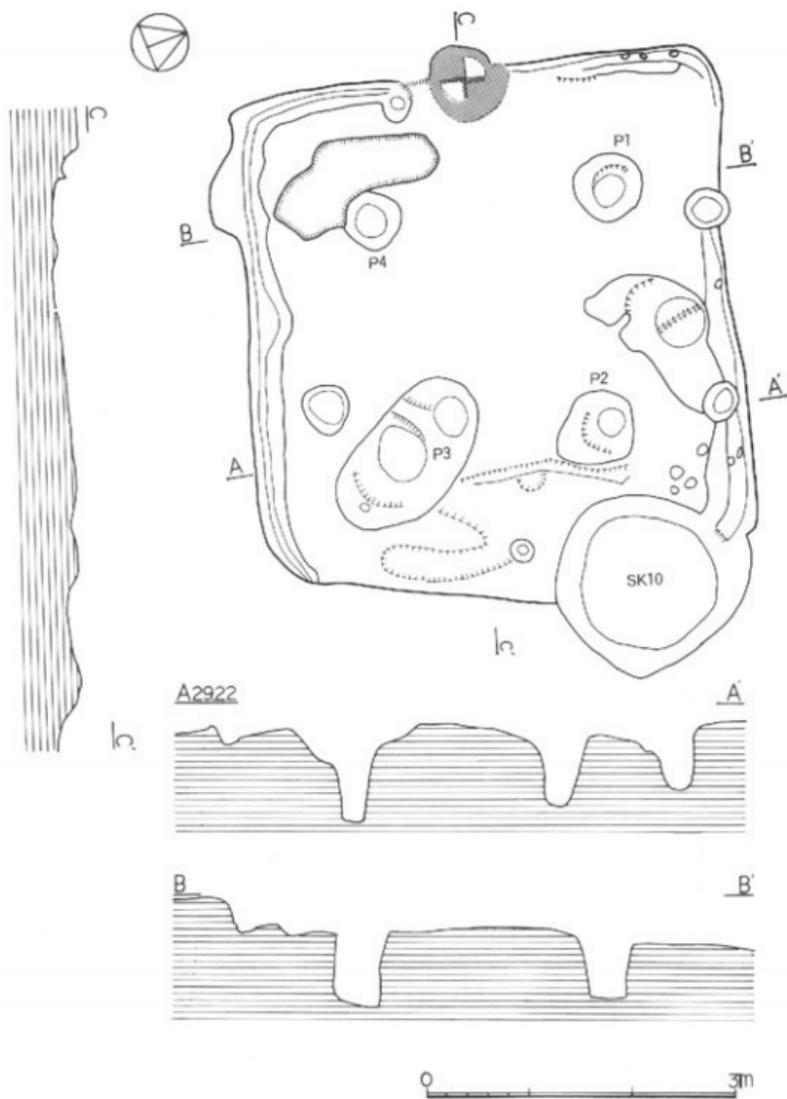
S 104 の東隣にあり1辺が4.70 mの正方形プランである。そして軸線をほぼ10度西方に向けて構築されている。

壁高は北壁で40 cm, 南壁で40 cm~30 cm, 東方壁で10 cm, 周溝は南側に25 cm×15 cm, 北側に15 cm×10 cm, 西側に15 cm×10 cm。なお、壁穴は西及び南側壁に残されている。

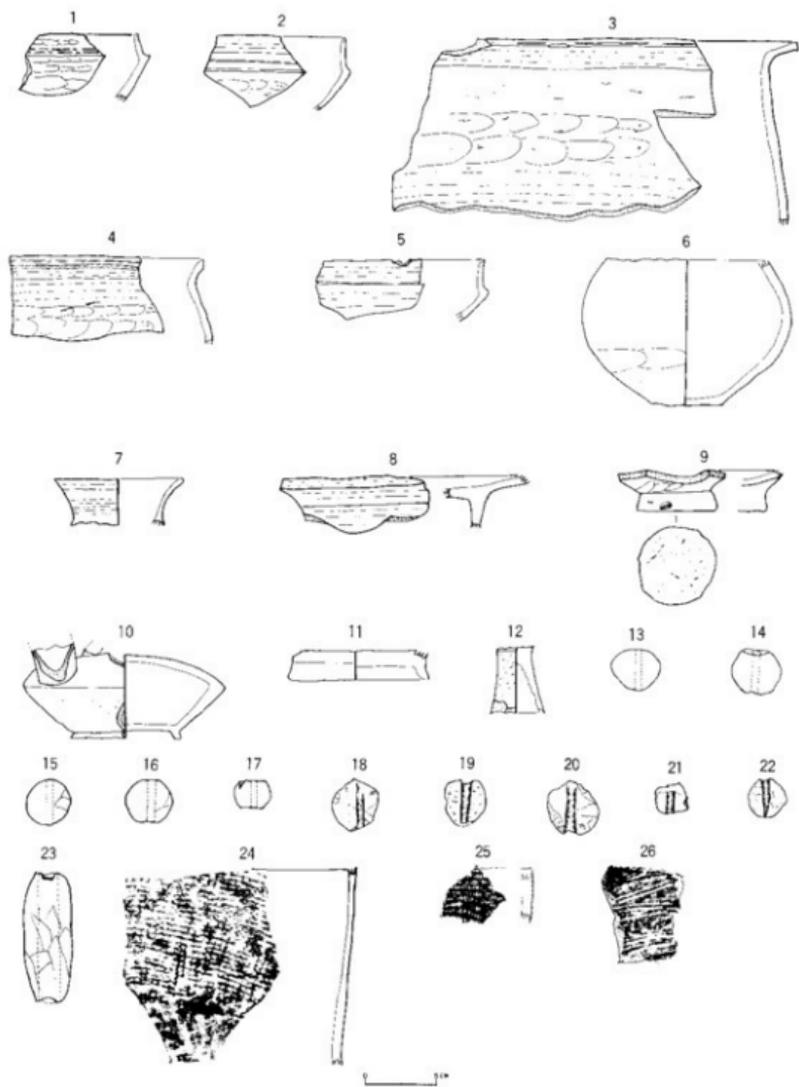
P1 (45 cm×75 cm), P2 (50 cm×70 cm), P3 (50 cm×65 cm), P4 (40 cm×85 cm) は主柱であろう。カマドは北壁に不完全ながら残されているが、それは70 cm×40 cm×20 cmである。

床面は平坦であるが北側付近はピットが不整然と多く、またSK 10も掘込まれる。更にP4付近もピットが多いが、これは後世になって何等かの目的で造られたものであろうが、中には掘立柱も含まれているようであった。

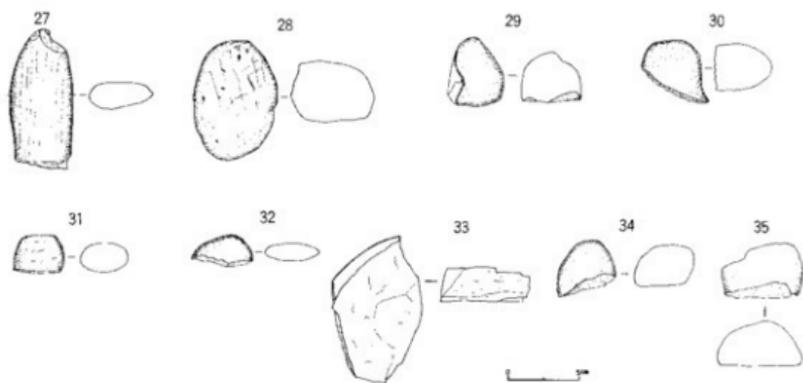
また遺物の中には鬼高期のものから平安期のものも多く出土した。それは下記に示したとおりである。



第18图 第1调查区第5号竖穴住居址(S105)第10号土坑状遗構(SK10)平面实测图



第19图 第1调查区第5号竖穴住居址(S105)出土遗物



第19図 第1調査区第5号竪穴住居址(S105)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	②2.0cm ③0.5cm	稜を有し、口縁部の立上りは内傾気味で外面には横ナデの痕跡がある	良好 砂粒 淡褐色	口縁片 2点
2	坏 (土師)	②2.0cm ③0.3cm	明確な稜を有し口縁部は直立している。内面はヘラナデ。	良好 明褐色	口縁部片 2点
3	甕 (土師)	②9.0cm ③0.5cm	胴部上半部から口縁部にかけて残る。(素形土器) 口縁部は大きく外反し、胴部のふくらみは稍々小さい。内部は荒い横ヘラの整形。外面はヘラナデ。	普通 砂粒 淡褐色	口縁部片 4点
4	甕 (土師)	②7.0cm ③0.3cm	胴部は稍々ふくらみを有し、頸部は短く外反する。口唇部外側はコの字形の整形が行なわれる。横ナデ(工具)	良好 黒褐色	1/4欠
5	坏 (須恵)	②2.0cm ③0.5cm	明確な稜を有し、口縁部は直立している。ロクロ整形。	良好 砂粒 灰白色1/4残	1/4残
6	壺	①110cm ②9.00cm ③0.5cm	底部より大きく開いた胴部で、胴上半部より口縁部までを欠く。	良好 砂粒 赤褐色	1/5欠

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	高台付 坏(土師)	①8.0cm ②9.0cm ③2.5cm	ロクロ整形、横ナデ飾。	良好 砂粒 明褐色	1/5欠 底部
8	高台付 坏(土師)	①6.0cm 高台高さ 2.5cm ③0.8cm	底部はほぼ平坦。 ヘラ使用、ロクロ整形	良好 砂粒 淡褐色	底部
9	高台付 坏(土師)	③0.3cm ④0.5cm 底部高さ 1.0cm		良好 砂粒 明褐色	底部
10	平瓶	①12.0cm ② 6.0cm ③ 0.4cm		良好 灰白色	稍々欠
11	高台付 (須恵)	①6.5cm ②8.0cm ③1.0cm		良好 灰白色	底部
12	高坏 (土師)	①2.5cm ②4.0cm ③0.5cm ④1.5cm		良好 明褐色	脚部
13	土鍾	①3.0cm 孔 径 0.5cm	磨減なし	良好 明褐色	完
14	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり	良好 明褐色	完
15	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり	良好 明褐色	完
16	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり	良好 明褐色	完
17	土鍾	①1.5cm 孔0.5cm	磨減あり	良好 明褐色	完
18	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 明褐色	1/2
19	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 明褐色	1/2
20	土鍾	①3.0cm 孔0.7cm	磨減なし	良好 明褐色	1/2
21	土鍾	①2.0cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 明褐色	1/3

遺物

(法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
22	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 明褐色	1/3
23	管玉	①9.0cm ②2.0cm ③1.5cm	磨減あり	良好 赤褐色	完
24	壺片 (須恵)	13.2× 10.6cm	外側器面に格子状のたたき工具痕あり、内側には指頭圧痕を残す	良好 灰白色	残片1/6
25	鉢片 (縄文)	4.6×4.3 cm	外器面に太縄文が左から右下の斜位に施されている。	良好	残片
26	深鉢片 (縄文)	6.6×5.6 cm	外器面ほぼ横位に太い沈線を施している。	良好	残片
27	磨石		第19図参照		
28	磨石		第19図参照		
29	磨石片		第19図参照		
30	磨石片		第19図参照		
31	磨石片		第19図参照		
32	磨石片		第19図参照		
33	石斧片		第19図参照		
34	磨石片		第19図参照		
35	磨石片		第19図参照		

第6号竪穴住居址 (SI 06) (第20図)

本住はSI 21と重なるし、西南部はSB 04に接し東南部はSB 03に隣接する。その形状や床面等は後世の欄穴や掘立柱等の造築のためすっかり破壊されて、柱穴等の確認は困難である。

形状も正確ではないが縦5.35m、横6.73mの方形状をなし、軸線をほぼ40度西に傾むけて構築されている。主柱はP1' (30cm×35cm)、P2' (30cm×40cm)で、後の主柱は不明である。

カマドも破壊され残されていない。遺物等の出土については多く鬼高期のものが多いようであるが、これについては下記のとおりである。

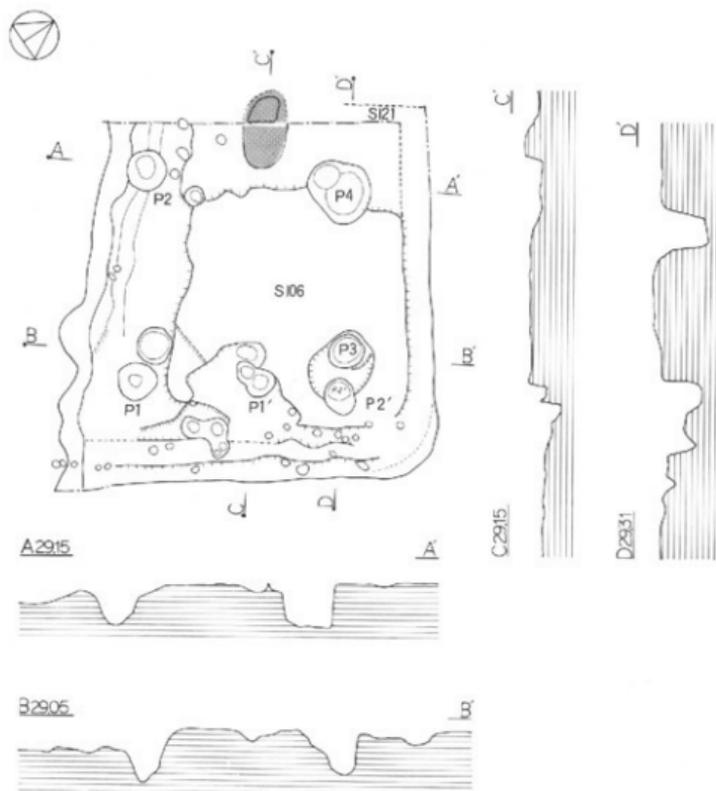
第21号竪穴住居址 (SI 21) (第20図)

住居址Noの順序が不順序であるが本住がSI 06と重なっているために、ここにあげることにした。平面形状は縦3.90m、横3.80mの方形プランで軸線をほぼ40度西へかたむけて構築されている。

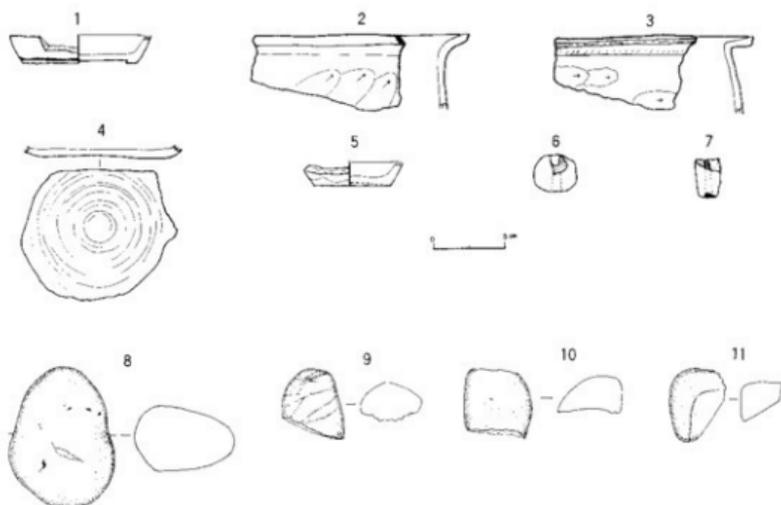
壁高は東南壁で 15 cm, 北東壁で 10 cm, 北西で 5 cm, 南西は不明である。周溝は南東部で 110 cm × 20 cm, 東北 25 cm × 5 cm, 北面にはない。なお壁柱のならばは南東, 東北部に残されている。

カマドは不完全ながら残されているがそれは 60 cm × 50 cm, 高さ 20 cm で, 床面は平坦であるが, 半分は破壊されている。

遺物については SI 06 の部と床面を共にしたので, SI 06 の部においてあげておいた。



第20図 第1調査区第6号21号竪穴住居址(SI06-SI21)平面実測図



第21図 第1調査区第6号竪穴住居址(S06)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏(土師)	①7.0cm ②1.0cm ③0.5cm	底部からゆるやかに立ち上る。 高台部分は全て削り取ってある。 ロクロによる回転ヘラケズリ。	良好 褐色	底部
2	甕 (土師)	②6.0cm ③0.5cm	胴部のふくらみはゆるやかで、口縁部は大きく 外反する。 口唇部外側にコの字状のヘラ削りを施している。	良好 茶褐色	口縁部
3	甕 (土師)	②5.0cm ③0.3cm		良好 茶褐色	口縁部
4	甕 (須恵)	②9.5cm ③0.4cm	外面は回転ヘラナデを施し 内面は回転クロクによる、ヘラナデを行っている。	良好 黒灰色	底部
5	甕 (土師)	②5.0cm ③0.8cm	外面はヘラケズリによる整形	良好 赤褐色	底部

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	土鉢	①2.5cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 褐色	完
7	管玉	①1.0cm ②0.5cm ③2.5cm		普通 黒褐色	1/3残
8	敲石		第21図参照		
9	磨石		第21図参照		
10	磨石片		第21図参照		
11	磨石片		第21図参照		

第7号竪穴住居址 (SI 07)・第7'号竪穴住居址 (SI 07') (第22図・23図)

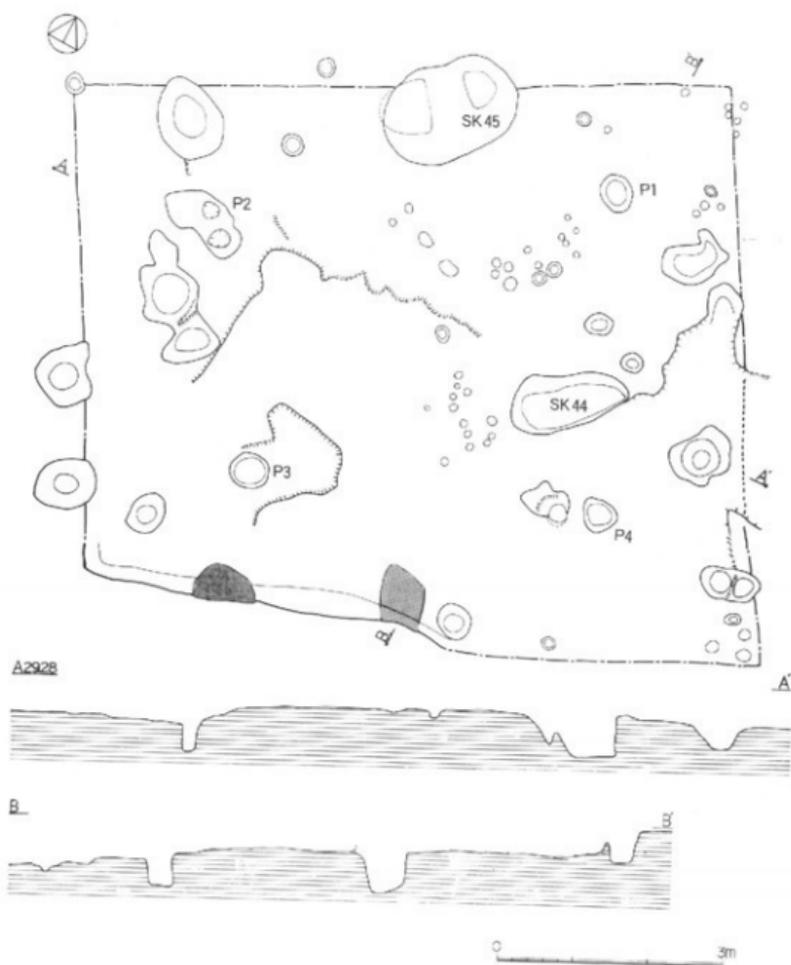
本住はSI 13の南隣にありSI 07'と重さなっている。この住の形状については後世の何等かの造作等によりすっかり破壊されて、凹凸がはげしく、住居址の面影は余り残されていない。形状については縦4.80m、横5.50mの方形プランで、軸線をほぼ40度西へ傾むけて構築されている。

壁高の判明するところは北壁の一部20cm、そこには周溝も一部僅かに残されていた。また、本住の床面にSK 24, 25, 26, 27が掘られていて床面の形状は不明で柱穴等も明確に確認するには至らなかった。東側にはカマドが残されてその形状は100cm×80cmであるが高さは不明であった。

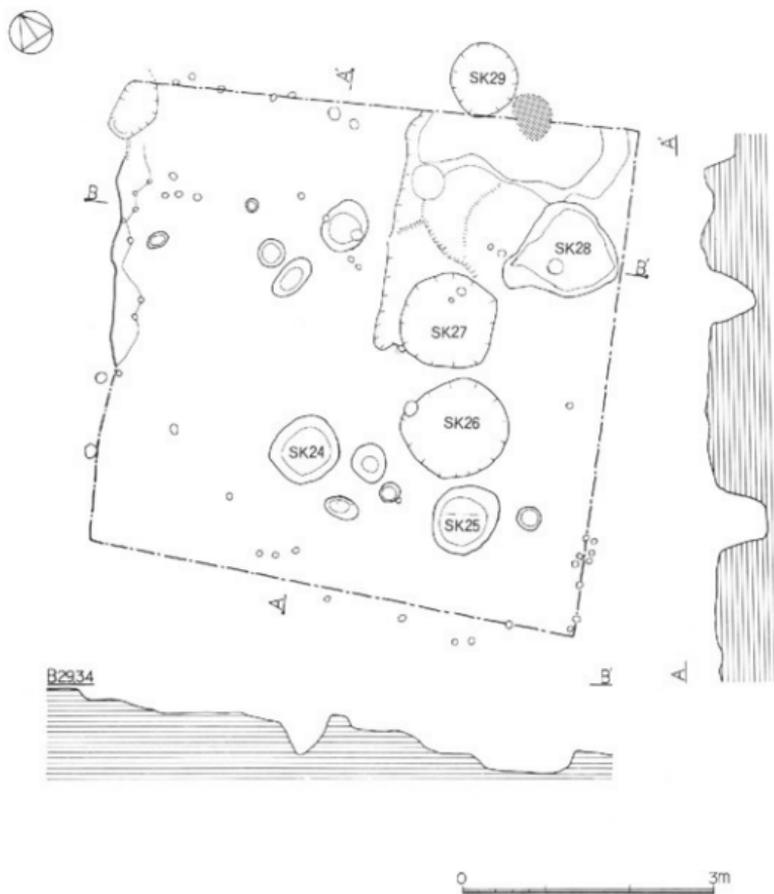
SI 07' (第23図)

本住の中にSI 07'を確認したが、その内外に6基の土壇やピット等が掘られ攪乱が甚だしいので、その形状は余り明確に検出されなかった。ここでは特に記録しなかった。

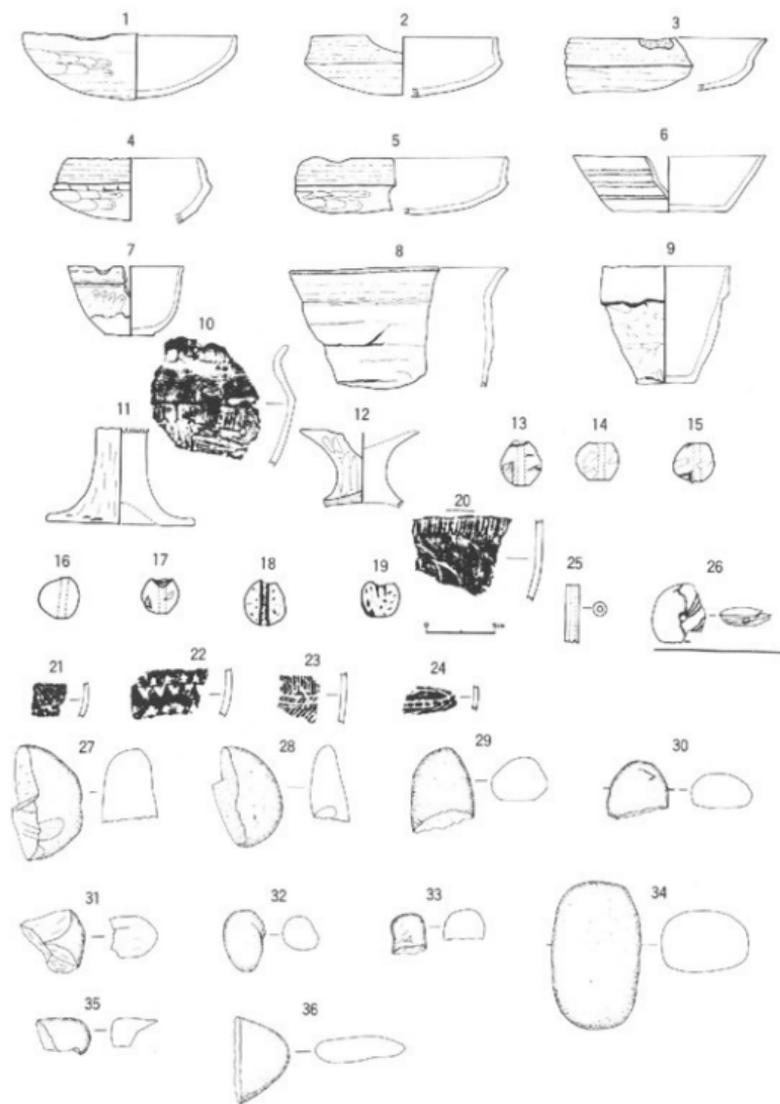
遺物等は多く検出されたので下記にあげておいた。



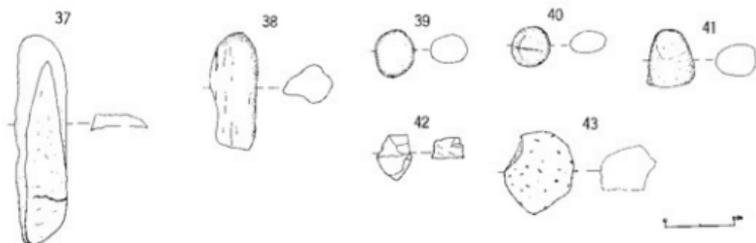
第22図 第1調査区第7号竪穴住居址(SK07)・第44号45号土壇状遺構(SK44・SK45)平面実測図



第23图 第1調査区第7'号竪穴住居(S107')・第24、25、26、27、28、29号土塚状遺構
(SK24、25、26、27、28、29)平面実測図



第24图 第1调查区第7号7'号髹穴住居址(S107.07')出土遗物



第24図 第1調査区第7号7'号竪穴住居址(S107) S107出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①14.0cm ②4.0cm ③0.3cm	丸底で底部からの立上りはゆるやかである。外側はヘラケズリで内側はヘラナデを施している。口縁部は直立している。	良好 砂粒 褐色	準完形
2	坏 (土師)	①13.0cm ②3.0cm ③0.3cm	口縁部外側には明確な稜を有し、稍々内反している。底部は丸底、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。	良好 砂粒 褐色	1/4残
3	坏 (土師)	① ②3.0cm ③0.5cm	稜を有し口縁部は稍々外反ぎみに立上る。丸底で縦位にナデを施した、内面・外面ヘラナデを横位に施している。	良好 砂粒 茶褐色	1/4残
4	坏 (土師)	②5.0cm ③0.6cm	外面には明確な稜を有し、口縁部は稍々外形気味となっている。器面内側は縦位に細ヘラ状工具によるみぎが入っている。	良好 砂粒 明褐色	1/4残
5	坏 (土師)	②3.0cm ③0.3cm	器面外側に明確な稜を有し、口縁部は中広の口辺で、稍々内傾する。	良好 砂粒 淡褐色	1/4残
6	坏 (土師)	①13.0cm ②3.0cm ③0.3cm ④8.0cm	ロクロ整形、糸切り痕が残っているが若干ヘラで削った痕跡を認めることができる	良好 砂粒 灰褐色	1/4残
7	碗 (土師)	①8.0cm ④3.5cm ②4.0cm ③0.3cm	底部より丸味を有して立上る。胴部上から口縁部にはほぼ垂直に立上る。	良好 赤褐色	1/2欠
8	甕	①8.0cm ②3.5cm ③4.0cm ④0.3cm	内面は横ナデ整形を行い外面は輪積み痕を残す胴部は稍々ふくらみを有し、口縁部は外反している。	良好 褐色	1/4残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	鉢形土器	①9.0cm ②7.0cm ③3.5cm	内外共に不整形で輪積痕を残す。	不良 淡褐色	完形
10	深鉢状(縄文)	9.8×7.8 cm	外器面に刺突状・隆線紋を連続的に施したものと		残片
11	高坏(土師)	4.11.0cm 脚高5.0 cm 4.0cm	器面は縦位にヘラナデを行っており、裾部は大きく広がりをみせる	良好 赤褐色	脚部
12	高坏(土師)	脚高2.5 cm 胴径3.0 cm ③0.3cm	器面に縦位にヘラナデが施され、底部裏面は黒色である 坏内面は縦位のヘラナデ、脚部は非常に短かく裾部より急角度に立ち上り底部で大きく外反する	良好 赤褐色	
13	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 淡褐色	完
14	土鍾	①2.5cm 孔0.6cm	磨滅なし	良好 淡褐色	完
15	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 淡褐色	完
16	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 淡褐色	完
17	土鍾	①2.5cm 孔0.4cm	磨滅なし	良好 淡褐色	完
18	土鍾	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	良好 淡褐色	1/2
19	土鍾	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	良好 淡褐色	1/2
20	鉢片(縄文)	6.0×7.3 cm	口唇部外側にヘラを縦位に用いてキャピラ状に押しつけてある口辺部の外器面に弧状に沈線を押し込んでいる		口縁部
21	鉢片(縄文)	2.5×2.2 cm	外器面に瓜形紋を施している		口縁部
22	鉢片(縄文)	5.2×3.4 cm	外器面にヘラ工具による鋸歯状の紋様を施している		
23	鉢片(縄文)	3.7×2.9 cm	やや外反した口縁部で外器面には横位に2条の沈線を施し、その沈線の下位にはLLの細条紋を施している		口縁部
24	鉢片(縄文)	5.6×2.5 cm	外器面に半截竹管紋を施す		
25	管玉		第24図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

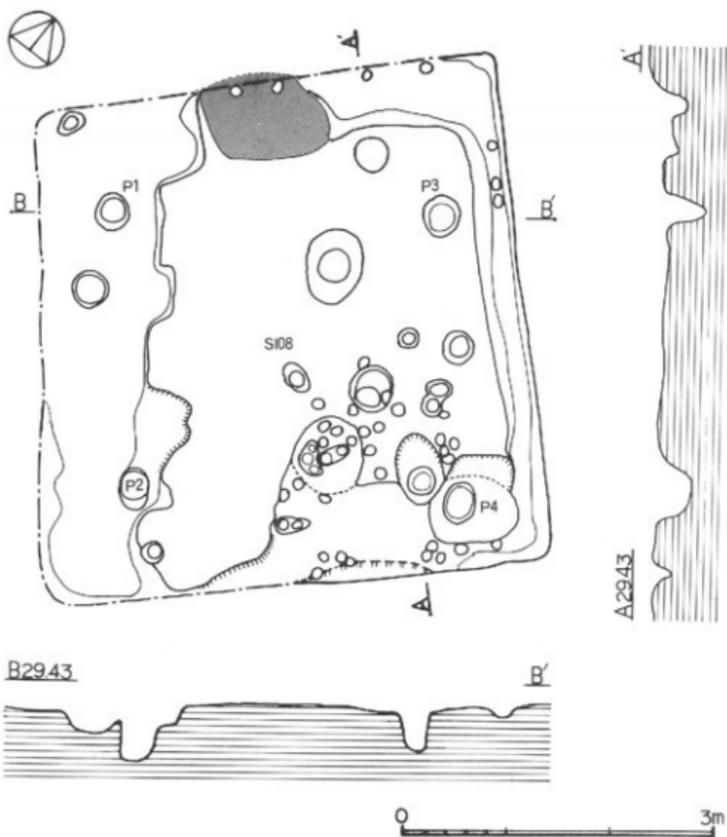
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
26	紡錘車		第24図参照		
27	敲石片		第24図参照		
28	磨石片		第24図参照		
29	磨石		第24図参照		
30	磨石		第24図参照		
31	磨石片		第24図参照		
32	磨石		第24図参照		
33	磨石片		第24図参照		
34	磨石片		第24図参照		
35	磨石片		第24図参照		
36	磨石		第24図参照		
37	磨石片		第24図参照		
38	磨石		第24図参照		
39	磨石		第24図参照		
40	磨石		第24図参照		
41	磨石		第24図参照		
42	メノウ石片		第24図参照		
43	軽石		第24図参照		

第8号竪穴住居址 (SI 08) (第25図)

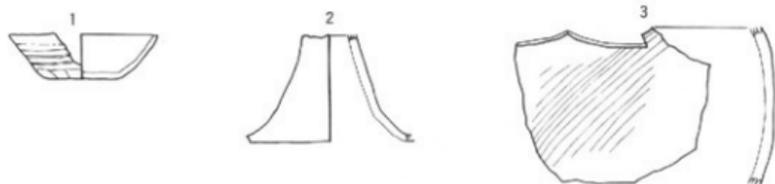
本住はSI 11の西隣にあってその平面形状は1辺が4.85mの正方形プランをなす。軸線をほぼ40度西方にかたむけて構築されている。壁高はほぼ25cmとなっているが西南壁はSI 11を造るとき切り込まれてなくなったものであろう。周溝はほぼ明確に残されているが、それは幅20cm、高さ10cmである。

ピットはP1 (30cm×45cm)、P2 (27cm×36cm)、P3 (30cm×68cm)、P4 (34cm×73cm)でこれは支柱であろう。後のピットは後世に掘られたものか不明。床面は凹凸がはげしく、また、カマドも残されているがその形状を把握することは不可能であった。

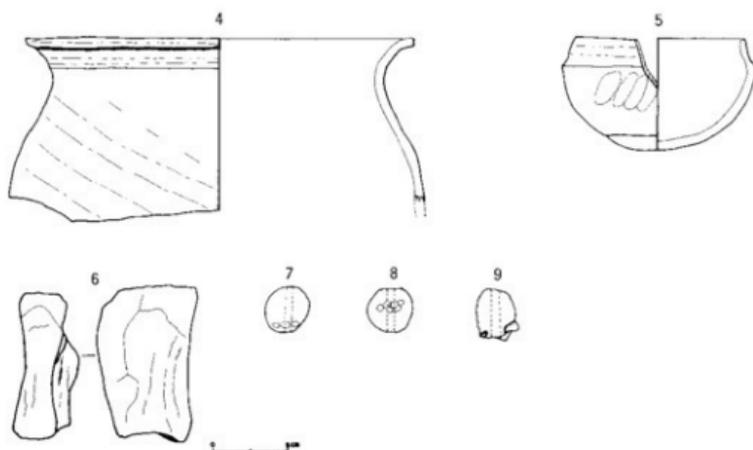
遺物については下記のとおりである。



第25図 第1調査区第8号竪穴住居址(S108)平面実測図



第26図 第1調査区第8号竪穴住居址(S108)出土遺物



第26図 第1調査区第8号竪穴住居址(S108)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①10.0cm ②2.5cm ③0.5cm 7.0cm	ロクロ整形を施し、底部には糸切りのヘラ横ナデを行ったもの。	良好 砂粒 褐色	1/8残
2	高坏 (土師)	④11.0cm 脚高7.0 cm ③0.7cm	外面は磨きが施され、内面はヘラナデ及び節状道具痕あり	良好 破粒 茶褐色	脚部
3	壺	③1.0cm	胴はややふくらみを有する。胴部内外面はヘラナデ。	良好 破粒 茶褐色	胴部
4	壺	①22.0cm ②12.0cm ③0.7cm	胴部は稍々ふくらみを有し、口縁部は大きく外反。口唇部外側はくの字型に折をつけている。ヘラナデ(横位)	良好 淡褐色	口縁部
5	碗型 (土師)	①11.0cm ②6.0cm ③0.4cm ④6.0cm	底部から胴部にかけて球状をなし、外面には明確な稜を有する。口縁部は稍々内傾する。内面の色調は黒色、外面はヘラケズリ。丸底。	良好 淡褐色	部分欠
6	支脚	①11.0cm ②6.0cm ③4.0cm		良好 褐色	稍々完

遺物

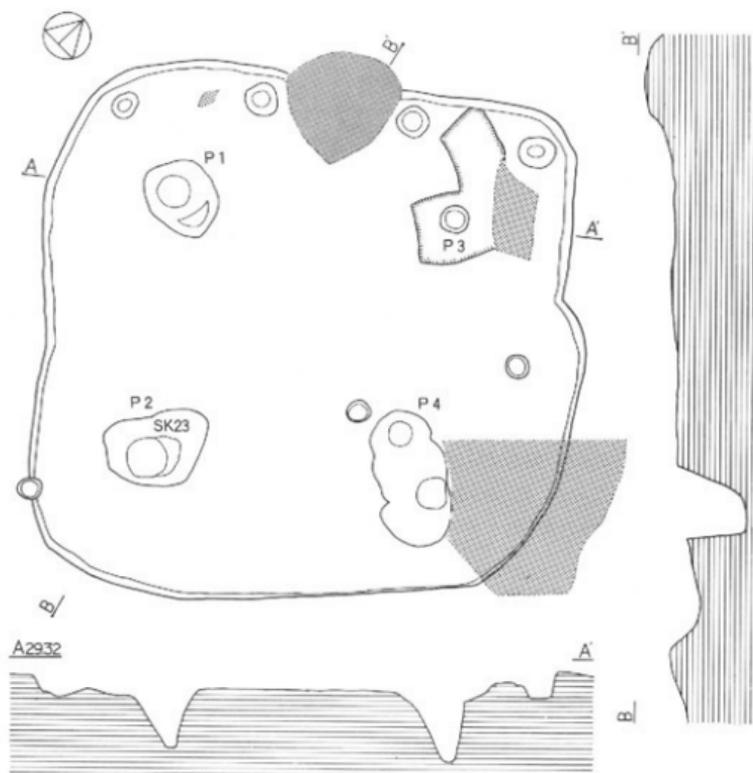
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	土錘	①3cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 淡褐色	完
8	土錘	①3cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 淡褐色	完
9	土錘	①3cm 孔0.7cm 長さ3cm	磨減あり	良好 淡褐色	完

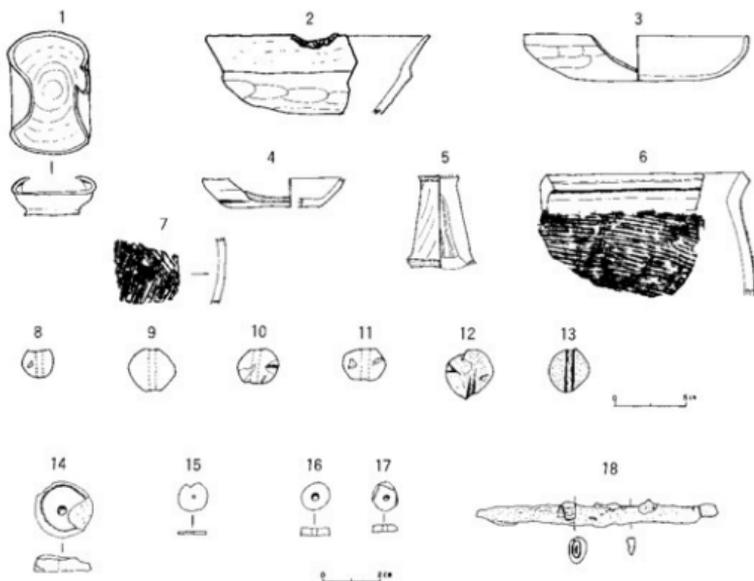
第9号竪穴住居址 (SI09) (第27図)

SI08の北隣にあって軸線をほぼ50度西の方向に向けて構築されている。形状は縦5.70m, 横5.50mの方形プランである。壁高は割合によく残されて30cm×25cmで, 周溝部も割合に明確で10cm×10cmとなっている。P1 (70cm×70cm), P2 (70cm×100cm, 深さ70cm), P3 (50cm×50cm), P4 (40cm×60cm) は主柱と判断された。但しP2の方は後から掘られたものが入れまじっている。

カマドは80cm×120cm, 高さ20cmで不完全ながら残されている。床面は平坦ではあるが, 後世の施設のため破壊された部分も多く, また, 周囲の壁面も凹凸が多い。本住は火災に遭つたらしく焼土が散乱していたが炭化材を明確にとらえることは出来なかった。遺物については下記のとおりである。



第27回 第1調査区第9号竪穴住居址(S109)第23号土橢状遺構(SK23)平面実測図



第28図 第1調査区第9号竪穴住居址(S109)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	耳皿 (鉛胎)	18.4× 5.5cm 22.7cm 30.3cm	底部に糸切痕を残し、器面全体的に鉛釉を施し仕上っている		
2	坏 (土師)	①13.0cm ②4.0cm ③0.8cm	丸底で稜を有し口縁部は外反して開いている。	良好 砂粒 外は褐色 内は淡褐色	1/8残
3	坏 (土師)	①13.0cm ②3.5cm ③0.4cm	丸底で胴部の立上りはゆるやか。口縁部は内傾している。	良好 黒褐色	1/8残
4	坏 (須恵)	②1.0cm ③0.7cm	底部はヘラナデを施し平坦で、胴部は大きく直線的に外に開きながら立上る。	良好 灰白色	1/8残

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	高坏 (土師)	① 上径 3.0cm ② 下径 4.0cm ③ 高5.0 cm	縦位にヘラナデを施している。	良好 明褐色	脚部
6	甕 (須恵)	②8.0cm ③1.2cm	胴部のふくらみはなく、口縁部に至って短かく外反する。外面は楕形状タタキ痕内面はヘラナデ。	良好 灰白色	口縁部片
7	甕片 (土師)	4.7×4.6 cm	外面面に櫛状工具によるヘラガキ沈線を有する	良好 破粒 明褐色	
8	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
9	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	完
10	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
11	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	完
12	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	1/2残
13	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	1/2
14	紡錘車		第28図参照		
15	有孔円板		第28図参照		
16	白玉		第28図参照		
17	白玉		第28図参照		
18	鉄器 刀子		第28図参照		

第10号竪穴住居址 (SI10)・第10'号竪穴住居址 (SI10') (第29図)

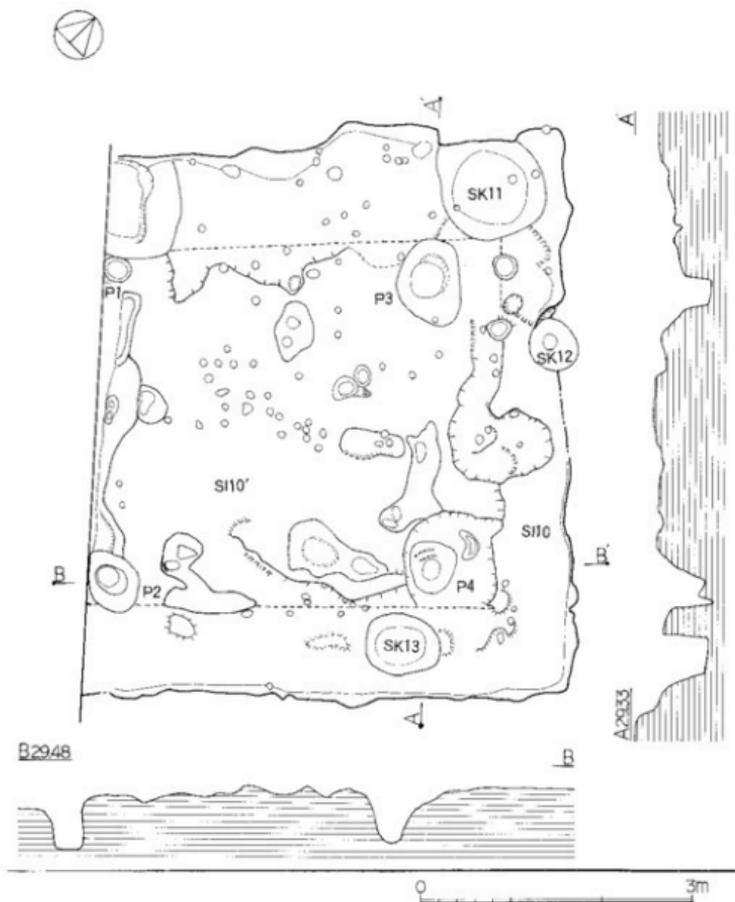
本住 SI10 の中に SI10' が造られている。南面は通路によって不明。平面形状は縦 6.20 m, 横 5.00 m の方形状プランをなす。軸線はほぼ 40 度西方に向けて造られている。

壁高は殆んど残され東壁 20 cm, 北東 20 cm, 北西 15 cm である。周溝部は確認されないが、それは床面の凹凸のはげしいためであろう。P1 (25 cm×40 cm), P2 (40 cm×60 cm), P3 (40 cm×50 cm), P4 (40 cm×50 cm) は支柱であろう。

SI10'

なお、本住の中に SI10' が切り込まれている。その形状は壁穴列の存在によって確認されたのであるが、縦 4.10 m、横 4.60 m の方形プランであった。そしてその主柱は SI10 をそのまま使用したものである。床面は柵穴や掘立柱状ピットのため攪乱され凹凸が極めてはげしい。

床面よりの出土遺物については下記のとおりである。



第29図 第1調査区第10号10'号竪穴住居址(SI10-SI10')・第11号12号13号土塚状遺構(SK11・12・13)平面実測図

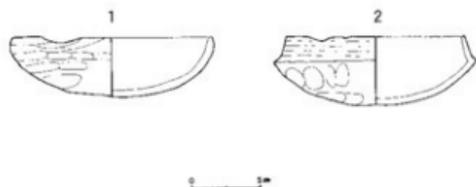


第30図 第1調査区第10号竪穴住居址(S110)第11号・12号・13号土壙状遺構(SK11・12・13)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏	①14.0cm ②3.5cm ③0.4cm	丸底でゆるく立上り口縁部に至り器部はほぼ直立する。	良好 黒褐色	完
2	高坏	①14.0cm ②6.0cm ③0.4cm	大きくラッパ状に開く。脚部は不明。	普通 淡褐色	脚部
3	高坏	①2.5cm ②5.0cm ③6.0cm		良好 淡褐色	脚部
4	深鉢片 (土師)	10.3× 9.1cm	棒状の工具により縦位と横位の太沈線紋を施す	良好 砂粒 淡明褐色	胴下部
5	石製模 造剣		第30図参照		
6	石製模 造剣		第30図参照		
7	石製模 造剣		第30図参照		
8	石斧		第30図参照		
9	磨石		第30図参照		
10	鉄器 刀子片		第30図参照		



第31図 第1調査区第10'号竪穴住居址(SI10')出土遺物

SI10'

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①14.0cm ②3.0cm ③0.4cm	丸底でゆるやかに立上り、口縁部は少々内傾する。	良好 黒褐色	完
2	坏 (土師)	①13.0cm ②3.0cm ③0.5cm	丸底で稜を有し、口縁部は稍々内傾する。横へらを使用する。	普通 外は褐色 内は黒褐色	完

第11号竪穴住居址(SI11)(第32図)

本住はSI02, SI08に隣接し、軸線をほぼ40度西方に向けて構築されている。平面形状は1辺が6.80mの正方形プランである。

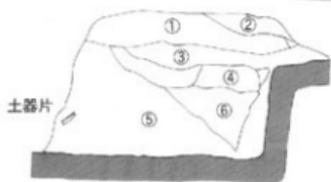
壁高は南西35cm~15cm, 南北30cm, 北東40cm, 南東25cmそして周溝部は不明である。本住の床面も後になってからの手工のあとがあり、床面の大部分は凹凸があり攪乱されている。P1(45cm×40cm), P2(50cm×30cm), P3(27cm×35cm), P4(30cm×40cm)は全て支柱であろう。P5は貯蔵穴(90cm×56cm, 深さ50cm)ではなかろうか。カマドは横巾55cm, 奥行80cm, 高さ25cmであった。

遺物については下記の通りである。



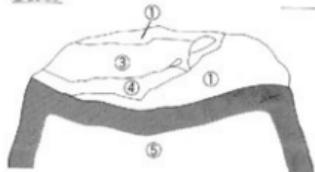
SI11 カマド

L.29.32



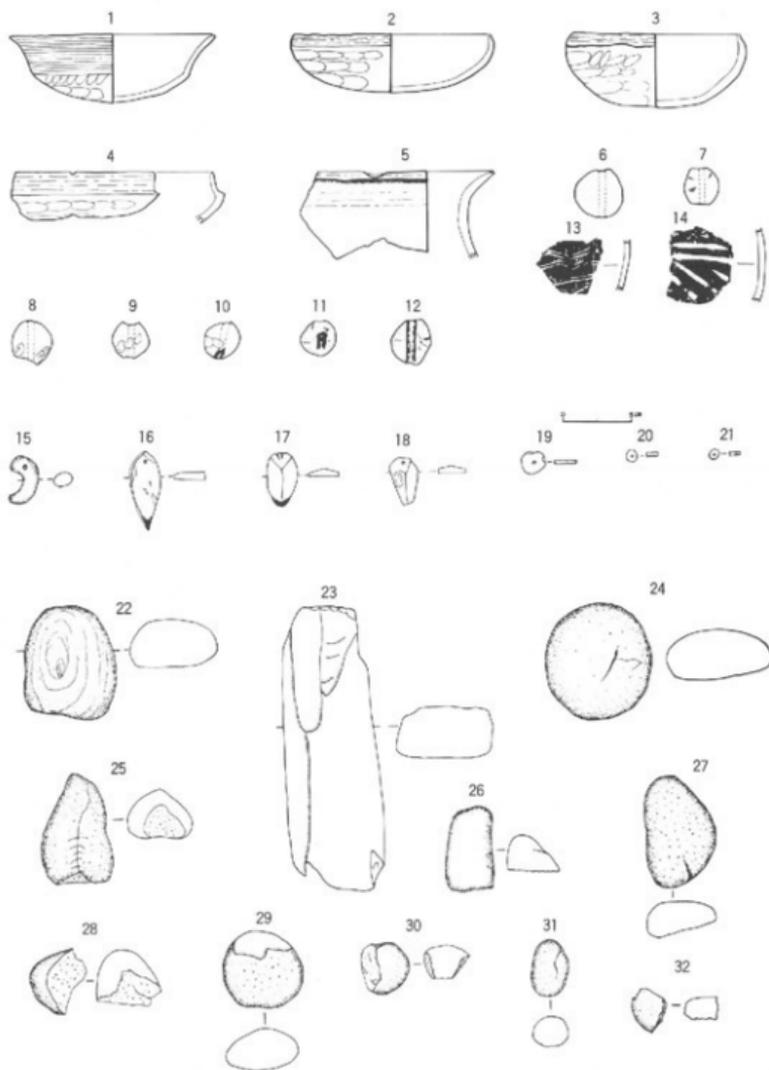
土器片

L.29.32

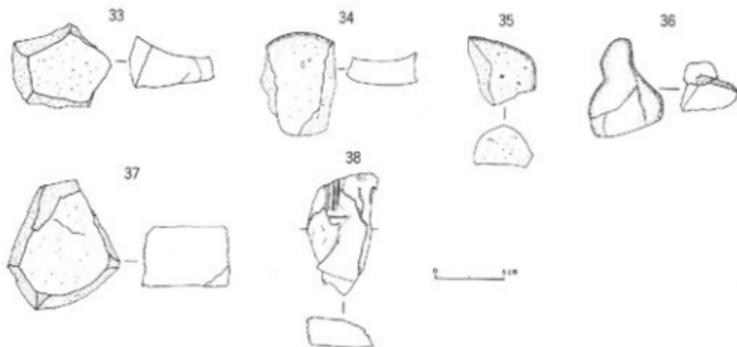


- ①赤褐色土
- ②褐色粘土
- ③焼土
- ④焼土(木炭)
- ⑤淡黄褐色粘土
- ⑥赤褐色土(焼土混合)

第32図 第1調査区第11号竪穴住居址(SI11)平面実測図



第33图 第1調査区第11号竪穴住居址(SI11)出土遺物



第33図 第1調査区第11号竪穴住居址(S11)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①15.0cm ②5.0cm ③0.3cm	底部は丸く、胴部と口縁部は稜によってわかれる。口縁部の立上りは少々急で、しなやかに外反する。内外共にヘラで整形。	良好 明褐色	完
2	坏 (土師)	①14cm ②3cm ③3cm	丸底で立上り、形は丸くゆるやかな感じ。口縁部は少々内傾する。	良好 ㊦黒塗り	完
3	坏 (土師)	①12.0cm ②4.0cm ③0.6cm	同上	良好 ㊦黒塗り	完
4	甕 (土師)	①17cm ②6cm ③0.8cm	胴部のふくらみはない感じ。口縁部の立上りは短かくて外反する。横ヘラ使用。	普通 ㊦淡褐色	口縁部
5	坏 (土師)	①12.0cm ②3.0cm ③0.4cm	丸底で立上り丸味をもってゆるやか。口縁部の立上りは、少々垂直で内反する	良好 ㊦黒塗り	1/8残
6	土錘	①3cm 孔5mm	磨減なし	良好 褐色	完
7	土錘	①3cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 褐色	完
8	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨減あり	良好 褐色	完
9	土錘	①3.0cm 孔0.7cm	磨減あり	良好 褐色	完

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
10	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 褐色	1/2
11	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm	磨減あり	良好 褐色	1/2
12		①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり		
13	鉢片 (縄文)	4.0×4.8 cm	やや外反する胴部で外器面にヘラによる縦位の細沈線と横位に屈節を有する平行沈線紋を施している	良好 砂粒 暗褐色	
14	鉢片 (縄文)	5.8×4.4 cm	外器面に2条の太沈線をもち、右上から左下へのヘラによる太斜線紋を施している	良好 砂粒 褐色	
15	曲玉		第33図参照		
16	石製模 造剣		第33図参照		
17	石製模 造剣		第33図参照		
18	石製模 造剣		第33図参照		
19	有孔円 板		第33図参照		
20	白玉		第33図参照		
21	白玉		第33図参照		
22	磨石		第33図参照		
23	石斧		第33図参照		
24	磨石		第33図参照		
25	磨石		第33図参照		
26	磨石		第33図参照		
27	磨石		第33図参照		
28	磨石斧		第33図参照		
29	磨石		第33図参照		
30	磨石片		第33図参照		
31	磨石		第33図参照		
32	磨石片		第33図参照		
33	敲石片		第33図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

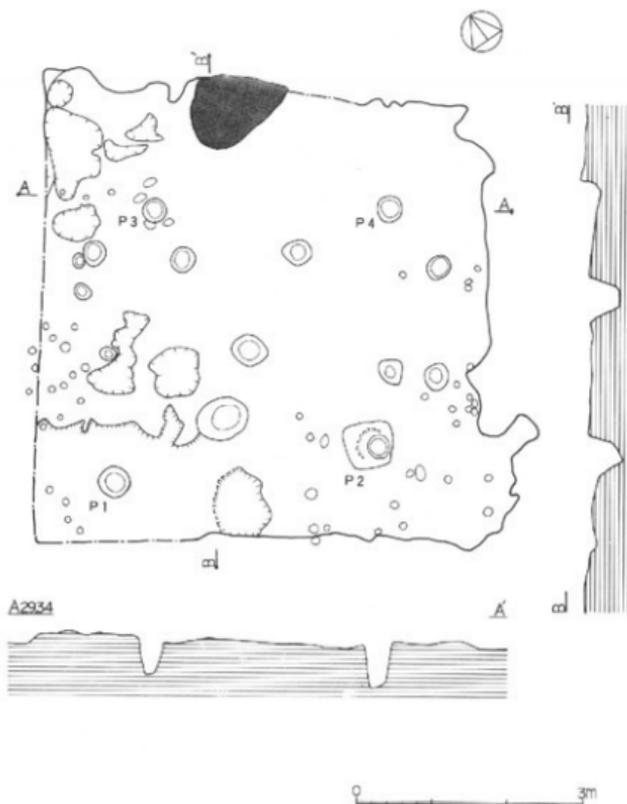
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
34	蔽石片		第33図参照		
35	鞆石		第33図参照		
36	メノウ 原石 (使途 不明)		第33図参照		
37	蔽石片		第33図参照		
38	石核		第33図参照		

第12号竪穴住居址 (SI12) (第34図)

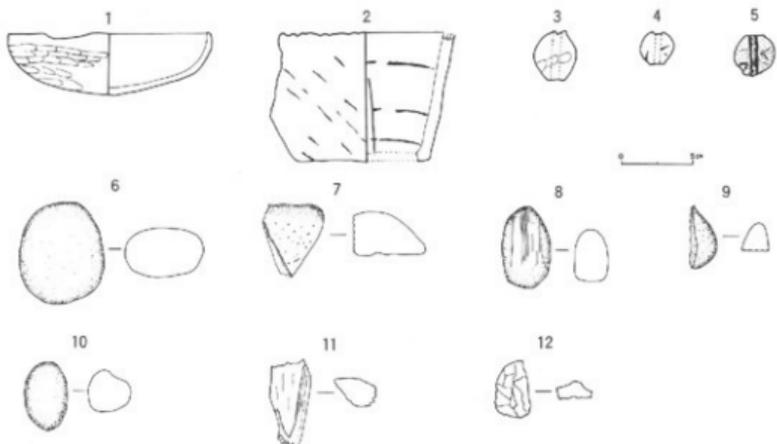
本住はSI16を切り込んで構築され、軸線をほぼ50度東方に向けて建てられている。平面形状は縦5.20m、横5.79mの方形プランをなす。

壁高は北東壁10cm、南東壁15cm、南西壁15cmで、周溝は確認されないが、壁穴列が全体に明確に掘られていた。P1 (30cm×40cm)、P2 (45cm×60cm)、P3 (30cm×55cm)、P4 (35cm×60cm)の4つは支柱であろう。床面は凹凸が甚だしい。カマドも不完全ながら残されているがそれは80cm×60cm、高さ20cmである。

遺物については下記の通りであるが、鬼高期のものが多いようであった。遺物については下記のとおりである。



第34図 第1調査区第12号竪穴住居址 (SI12) 平面実測図



第35図 第1調査区第12号竪穴住居址(SI12)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

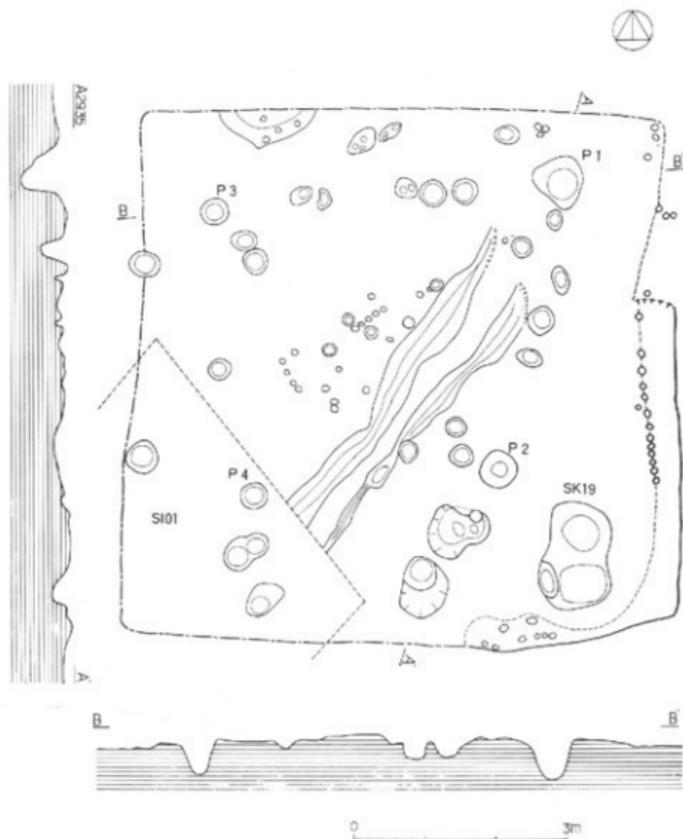
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①14.0cm ② 3.0cm ③ 0.3cm	丸底で胴部はやや丸味をおびて立ち上り、口縁部は稍々内傾する。内面は縦位にヘラミガキをなし、外面は横位に雑なヘラミガキをなしている。粉の圧痕あり	良好 砂粒 茶褐色	1/4欠
2	甗	①13.0cm ② 8.0cm ③ 1.0cm	甗の底部で内面に輪積み痕が明確に残してある。ヘラナデを施してある	普通 砂礫 淡褐色	底部片
3	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
4	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	完
5	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	完
6	磨石		第35図参照		
7	磨石片		第35図参照		
8	磨石		第35図参照		
9	磨石片		第35図参照		
10	磨石		第35図参照		
11	石片		第35図参照		
12	磨石片		第35図参照		

第13号竪穴住居址 (SI13) (第36図)

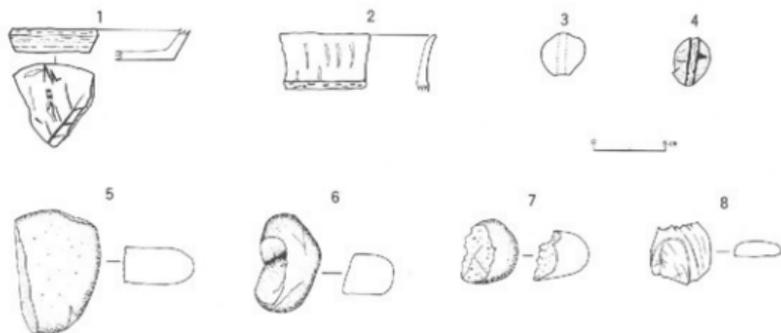
本住はSI01の東隣に位置し軸線をほぼ30度東に向けて構築されている。平面形状は1辺が7.30mの正方形プランである。

本住は後世の遺構造築等により殆んど攪乱され、その形状等については余りよく判明しない。ただ、主柱とみられるものには、P1(70cm×50cm、深さ60cm)、P2(50cm×60cm)、P3(35cm×60cm)、P4(30cm×45cm)があげられる。また、カマドラしきものもあつたが計測不能であつた。

遺物等については小片のみで注記されるものは少くなかつた。時代をしいて言えば鬼高期の住居址とみうけられた。



第36図 第1調査区第13号竪穴住居址 (SI13) 第19号土坑状遺構 (SK19) 平面実測図



第37図 第1調査区第13号竪穴住居址(SI13)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	②2.0cm ④7.0cm ③0.3cm	内外共にヘラナアで整形、外部の横へらは入念になされる	普通 褐色 砂粒	底部
2	壺 (土師)	①90cm ②3.0cm ③0.8cm		良好 褐色 砂粒	口縁部
3	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 褐色	完
4	土錘	①3.02 孔0.5cm	磨減なし	良好 褐色	完
5	敲石		第37図参照		
6	磨石		第37図参照		
7	磨石		第37図参照		
8	磨石片		第37図参照		

第14号竪穴住居址(SI14)・第15号竪穴住居址(SI15)(第38図)

SI14

本住の東壁はSI15のため、北壁はSI03構築のため切り込まれている。軸線をほぼ20度東の方に向けて造られている。

平面形状は縦4.90m、横不明の方形のプランをなす。

壁高は南壁の20cm、東壁の1部20cmが残されている。カマドラしきものも北壁に僅か残され

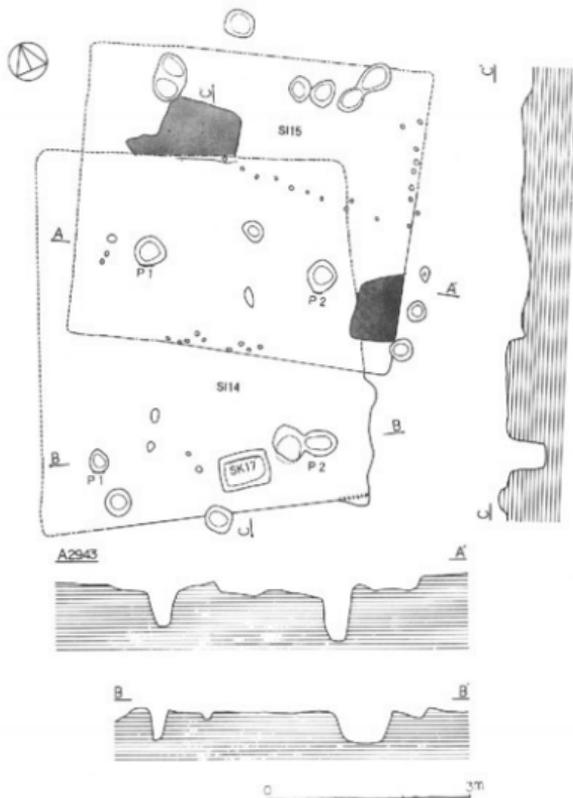
ているがそれは170 cm×50 cm、高さ30 cmである。支柱はP1 (30 cm×40 cm)、P2 (25 cm×50 cm)が残されている。床面は後世の造築等により大半は破壊され不明である。

遺物については下記のとおりであるが、殆んどが鬼高期のものとみうけられた。遺物については下記のとおりである。

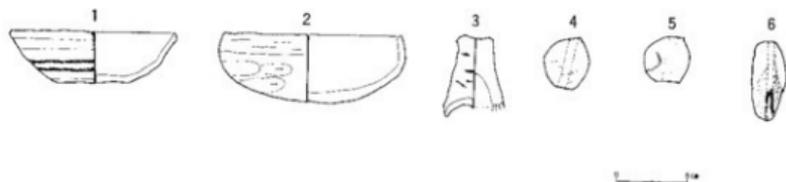
SI 15

本住については縦の長さ3.20、横不明の方形プランである。壁高は南壁30 cm、東壁30 cm、西壁の1部15 cmが残されている。支柱はP1 (40 cm×55 cm)、P2 (50 cm×75 cm)の2つが残される。床面の凹凸甚だしい。

遺物の検出も困難であったが、その小片からみてして鬼高期のものと判断された。



第38図 第1調査区第14号15号竪穴住居(SI14・SI15)・第17号土壇状遺構(SK17)平面実測図

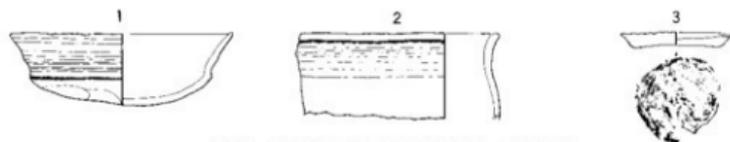


第39図 第1調査区第14号竪穴住居址(S114)出土遺物

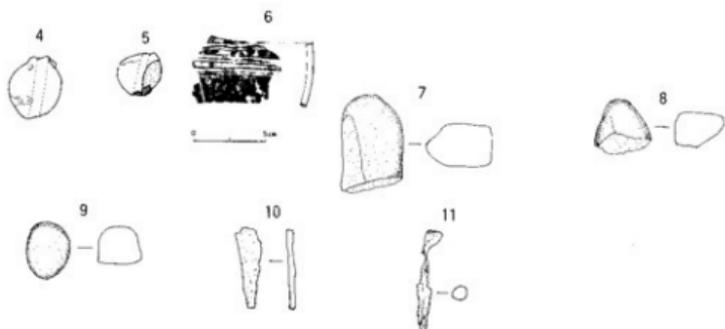
遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏	①12.0cm ② 3.0cm ③ 0.3cm	底部は糸切痕を残す。その後ヘラナデによる削りを行う痕跡も認められた。口縁部はゆるやかに外反する	良好 砂粒 淡褐色	1/4残
2	坏	①12.0cm ② 3.0cm ③ 0.3cm	底部は丸底で丸味をおびてゆるやかに立上る。稜を持ち、口縁部はほぼ垂直に立上る。内面はヘラナデ、外面は横位のナデ	良好 砂粒 明褐色	1/4残
3	高坏	①2.0cm ②5.0cm ③0.6cm		普通 砂粒 褐色	脚部
4	土錘	①3.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	良好 砂粒 褐色	完
5	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 砂粒 褐色	完
6	土錘	①1.0cm 孔0.8cm 長さ5.0cm	磨滅あり	良好 砂粒 褐色	1/4欠



第40図 第1調査区第15号竪穴住居址(S115)出土遺物



第40図 第1調査区第15号竪穴住居址(S15)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ② 4.0cm ③ 0.4cm	丸味をもった底部で、稍々ふくらみをもち、ゆるやかに立上がり、稜にいたる。口縁部は幅広くて外反する。ヘラ整形。	良好 砂粒 赤褐色	完
2	甕 (土師)	①19.0cm ② 5.0cm ③ 0.6cm	稍々外反した口縁部で、口唇部は更に外反して開く。	良好 砂粒 赤褐色	口縁部片
3	坏 (土師)	①8.0cm ②1.0cm ③0.4cm	底部には明確な糸切痕が認められる。	良好 砂粒 淡褐色	底部
4	土錘	①3.0cm 孔0.8cm	磨滅あり	良好 褐色	完形
5	土錘	①3.0cm 孔0.4cm	磨滅あり	良好 褐色	完形
6	甕 (縄文)	6.2×4.8 cm	やや外傾気味、胴上半部で、紋様は縦位に施した沈線と横位に施した2条の平行沈線を基調としている。	良好 砂粒 明褐色	
7	磨石		第40図参照		
8	磨石片		第40図参照		
9	磨石		第40図参照		
10	不明の 鉄片		第40図参照		
11	不明の 鉄片		第40図参照		

第12号竪穴住居址 (SI 12)・第16号竪穴住居址 (SI 16) (第41図)

SI 12

本住はSI 16構築のとき切り込まれた。軸線をほぼ40度東方に向けて造る。平面形状は縦5.20 m, 横5.79 mの方形プランをなす。

壁高は北東壁10 cm, 南東15 cm, 南西15 cm。周溝はないが壁穴列は全壁にそって残されていた。P1 (30 cm×46 cm), P2 (45 cm×60 cm), P3 (30 cm×55 cm) は主柱であろう。カマドは東北壁に不完全ながら残され、それは80 cm×60 cm。高さ20 cmであった。床面は凹凸が甚だしい。

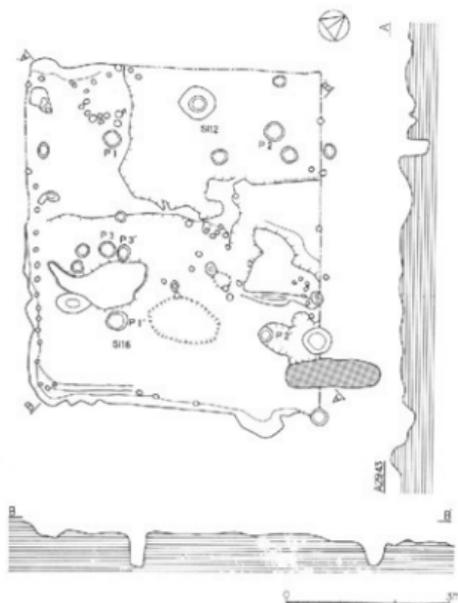
SI 16

本住はSI 12を切り込んで構築。平面形状は縦5.80 m, 横6.24 mの方形プランをなす。

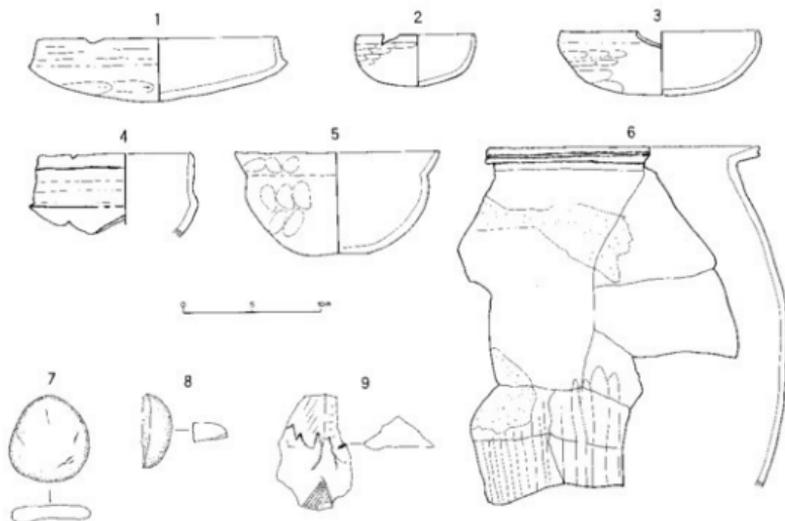
壁高は南壁20 cm, 南西壁1部分10 cm, 北西で僅か5 cm, 周溝は床面が攪乱されているため検出不可能であったが、壁柱列が南西壁と南東壁で確認されたので、その形状を理解することが出来た。

P1' (30 cm×60 cm), P2' (45 cm×50 cm), P3' (30 cm×50 cm) は主柱とみられたが、床面の攪乱によって他は検出不可能であった。

遺物については両住とも縄高期の所産と思われるがSI 16として下記にあげておいた。



第41図 第1調査区第12号16号竪穴住居址 (SI12・SI16) 平面実測図



第42図 第1調査区第16号竪穴住居址(SI16)出土遺物

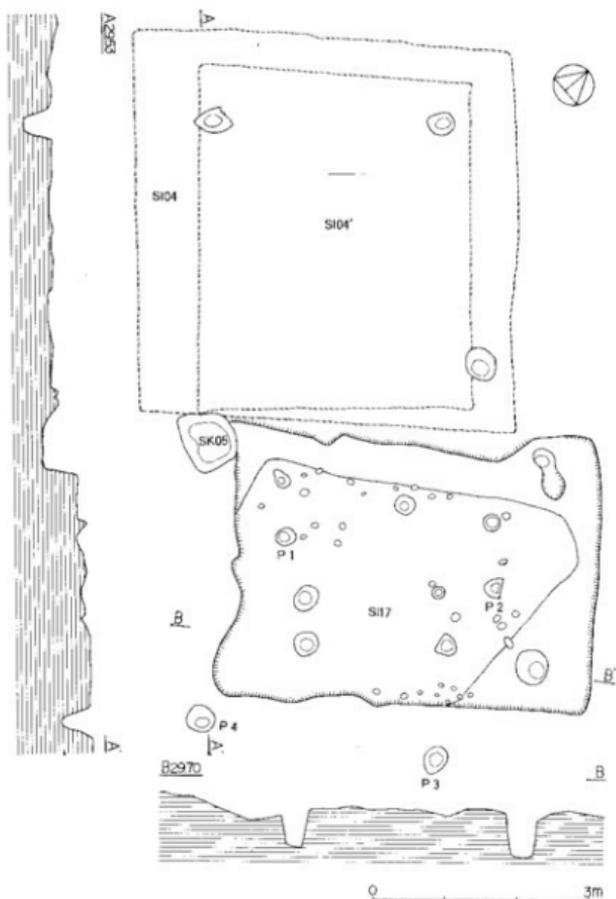
遺物

(法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

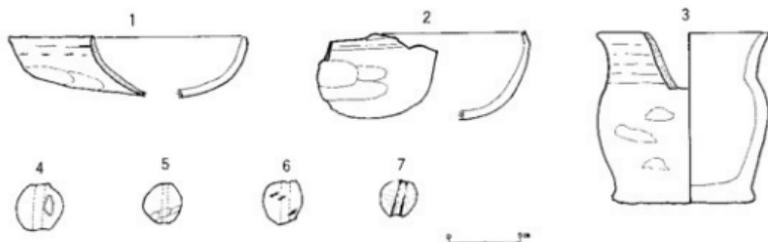
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ② 4.0cm ③ 0.3cm	底部は丸味を有し、ゆるやかに立上がる。胴部上で明確な稜を残し、口縁部は内傾して立上がる。外面は横位のヘラナデ。	良好 砂粒 ⑥褐色⑦黒色	楕々完形
2	坏 (土師)	①8.5cm ②2.5cm ③0.2cm	全体的に丸味をおびた器形。口縁部で稍々内傾している。	良好 砂粒 黒褐色	楕々完形
3	坏 (土師)	①14.0cm ② 3.0cm ③ 0.3cm	丸底の底部でゆるやかに立上り、口縁部で稍々内傾する。	良好 砂粒 黒褐色	楕々完形
5	鉢形土器	①14.0cm ② 5.0cm ③ 0.9cm	底部は平坦で胴部は稍々丸味を有して立ち上る。口縁部は大きく外反する。内外共にヘラナで整形。	良好 砂粒 淡褐色	1/4残
6	壺 (土師)	①12.0cm ②26.0cm ③ 1.0cm	胴部はふくらみがすくなく、ほぼ直立し、口縁部は大きく開いて外反する。 口唇部外各側にくの字状の折をつけている。		
7	磨石		第42図参照		
8	磨石片		第42図参照		
9	石核		第42図参照		

第17号竪穴住居址 (SI17) (第43図)

本住はSI04の南方隣に位置し、軸線をほぼ40度西に向けて造られている。平面形状は南壁が破かいされて調査不能のため計測しにくいが、北側の長さ4.10m、東側現長3.10m、西側現長1.00mとなり、方形状プランであることが理解された。周濬は不明、壁高は15m~20m、そして支柱P1(38cm×45cm)、P2(35cm×47cm)、P3(37cm×40cm)、P4(40cm×38cm)となっていた。なおP3、P4は土地攪乱のためはつきりとえらることが不可能であった。床面は凹凸がげしかった。



第43図 第1調査区第17号竪穴住居址(SI17)第5号土塊状遺構(SK05)平面実測図



第44図 第1調査区第17号竪穴住居址(SI17)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①15cm ②3cm ③0.4cm	丸底でゆるやかに立上るが、口唇部は稍々内反する。内外共にヘラケズリ整形。	良好 褐色	1/2残
2	坏 (土師)	①11cm ②4cm ③0.3cm	丸底で立上がりは稍々急である。内外共にタテヘラを使用。	良好 淡褐色	1/2残
3	壺 (土師)	①15cm ②11cm ③0.8cm	底部は不明であるが立上がりは急でふくらみがなく、頸部のくびれ部から口縁部は垂直に立上がり、口唇部に至って外反する。	良好 褐色	3/4残
4	土鏝	①3cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	完
5	土鏝	①2.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
6	土鏝	①2cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	完
7	土鏝	①2cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	1/2残

第18号竪穴住居址(SI18)・第1号掘立柱建物遺構(SB01)(第45図)

SI18

SI34の南西, SI05の南東にある。軸線をほぼ、30度西方の方向にかたむく。平面形状は縦7.25m, 横6.90mの方形のプランである。

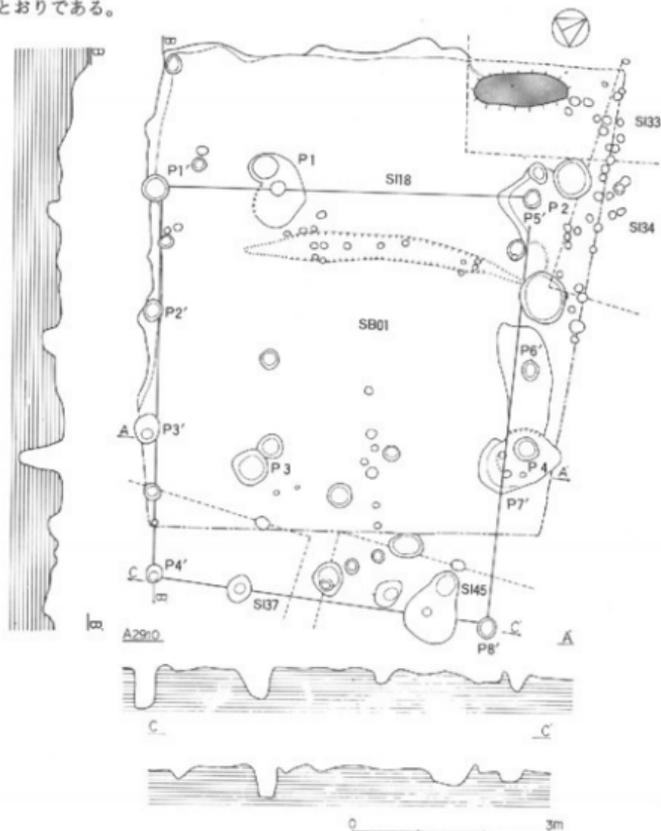
壁高は北西壁に20cm, 南西の1部に20cm~10cmにあるだけで周溝は認められない。壁柱列残

存のためその形状を把握することが出来た。P1 (45 cm×60 cm), P2 (25 cm×45 cm), P3 (45 cm×47 cm), P4 (45 cm×45 cm) は支柱であろう。本住は火災に逢ったらしく焼上が床面に散乱していた。

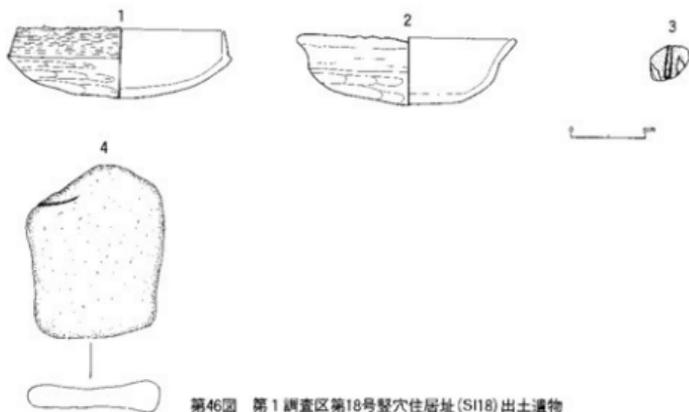
SB 01

本住は SI 18 と重なっており、支柱は P1' (35 cm×30 cm), P2' (30 cm×35 cm), P3' (40 cm×70 cm), P4' (20 cm×20 cm), P5' (30 cm×55 cm), P6' (30 cm×40 cm), P7' (20 cm×35 cm), P8' (30 cm×20 cm) であった。縦長 5.80 m, 平面形状は横長 5.65 m の方形プランであった。

遺物の検出については SI 18 についてのみで SB 01 についてはその検出をみなかった。それは下記のとおりである。



第45図 第1調査区第18号竪穴住居址(SI18)・第1号掘立柱建物遺構(SB01)平面実測図



第46図 第1調査区第18号竪穴住居址(SI18)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13cm ②3.5cm ③0.4cm	底部丸底、立ち上がりはゆるやか。 稜を有し口縁部は垂直ぎみに立ち上がる。 口唇部に至って内反する。外部は横ヘラを使用 するが粗雑である。	良好 灰黄色	1/4残
2	坏 (土師)	①13cm ②3cm ③0.4cm	底部部はゆるやかな丸底、稜を有するが、口縁 部は大きく外反する。	良好 外は淡黄色 内は黒塗	1/4欠
3	土錘	①3cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	1/5残
4	敲石		第46図参照		

第19号竪穴住居址(SI19)・第2号掘立柱建物遺跡(SB02)(第47図)

SI19

本住はこの上部にSB12が建てられ、また東隣にSK34も掘りこまれている。軸線はほぼ50度東の方へ向けて構築される。平面形状は縦4.50m、横6.70mの方形プランである。

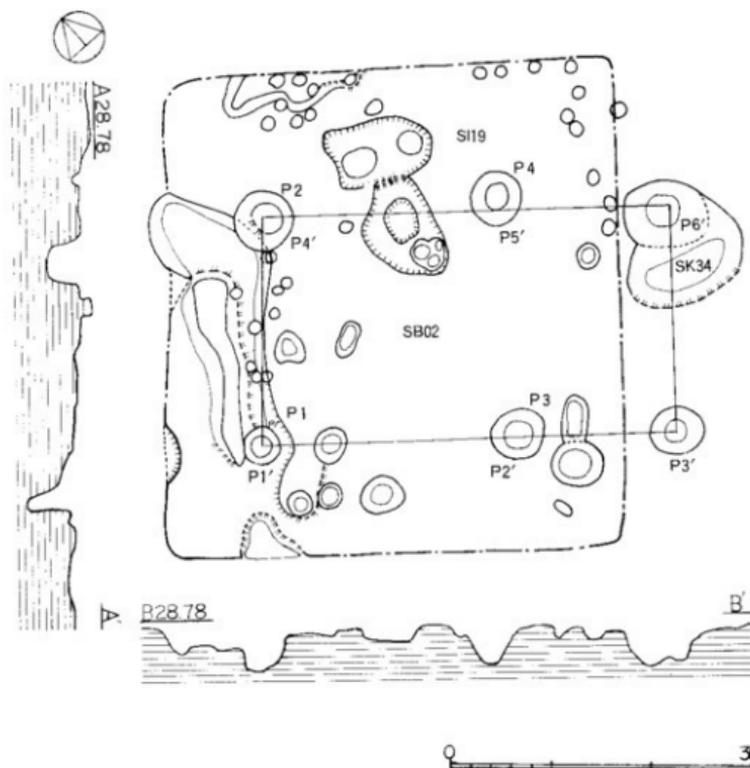
壁高は僅かに南西、東北、南東各壁に高さ15cmの程度に残るのみである。床面は後世の手工の

ため凹凸が甚だしく全く攪乱されているが、柱穴は確認出来るようである。P1 (25 cm×55 cm), P2 (30 cm×35 cm), P3 (46 cm×40 cm), P4 (40 cm×40 cm) は主柱であろう。本住は鬼高期のものと思われるが、カマド等全く破壊されて検出は不可能であった。

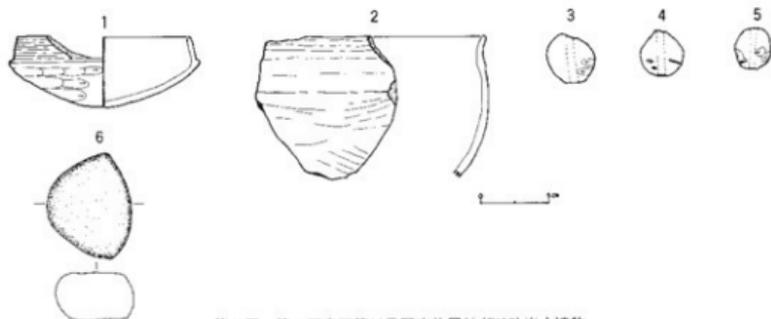
(SB 02)

なお、本住に重ってその上に SB02 が建てられている。その独立柱 P1' (30 cm×60 cm), P2' (45 cm×40 cm), P3' (40 cm×25 cm), P4' (40 cm×55 cm), P5' (40 cm×40 cm), P6' (70 cm×40 cm) であるが、中には SI19 の主柱と重複するものもあった。

平面形状は西側 4.00 m, 南側 2.25 m, 東側 3.90 m, 北側 2.20 m の梢々不整形方形プランであった。



第47図 第1調査区第19号竪穴住居址(SI19)・第2号独立柱建物遺構(SB02)・第34号土壇状遺構(SK34)平面実測図



第48図 第1調査区第19号竪穴住居址(SI19)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12cm ②5cm ③0.3cm	丸底で上がりはゆるやか。稜を有し、口縁部の立上がりは急で、少々内反する。内外共にヘラナデ整形。	良好 淡褐色 黒塗り	完
2	壺 (土師)	①10cm ②10cm ③0.4cm	胴部は稍々ふくらみを有し、口縁部は短かく少々外反気味。外部は横ヘラで整形。	良好 褐色	1/8残
3	土錘	①3.5cm 孔0.8cm	磨滅あり	良好 褐色	完
4	土錘	①3cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	完
5	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	完
6	磨石		第48図参照		

第36号竪穴住居址(SI36)・第40号竪穴住居址(SI40)・第54号竪穴住居址(SI54) (第49図)

第3号掘立柱建物遺構(SB03) 第20号掘立柱建物遺構(SB20) (第49図)

SI36

本住はSI40, SI54を切り込んで造る。軸線はほぼ40度東方へ向けて建てられている。平面形

状は縦長 4.40 m, 横長 4.30 m の方形プランである。

壁高は東 25 cm, 南壁 20 cm~55 cm, 西 20 cm~40 cm, 北 17 cm となっている。周溝は判明しないが壁柱列が残されている。また, P1 (35 cm×30 cm), P2 (40 cm×45 cm), P3 (35 cm×30 cm), P4 (40 cm×40 cm) は主柱であろう。カマドは東北側に残存するが, それは 1.20 m×1.00 m, 高さ 25 cm となっており, 床面は平坦で固いが, 出土遺物は小破片のみで注記するには至らなかった。坏・甕類が多いがそれらは全て鬼高期のものと判断した。

SI 40

本住は SI54 築造のためその 3 分の 2 が切り込まれている。軸線はほぼ 40 度東方に向けられている。平面形状は縦 4.55 cm, 横長 5.20 m の方形プランである。

壁高は南側 25 cm だけで後は消失。周匝壁下に壁柱列が残されていたので, その形状を把握することが出来た。P1' (28 cm×45 cm), P2' (40 cm×30 cm) は主柱とみられた。床面は攪乱され, 凹凸が多く, 遺物等も小片だけが検出された。

SI 54

本住は SI36 に切り込まれ, また, その後 SB20 がその上に構築されているから, 残部の 3 分の 1 ぐらいであろうか。軸線はほぼ 50 度東方に向けられている。本住は外形が残されているので, その平面形状を把握することが出来た。それは縦長 7.60 m・横長 7.00 m の方形プランであった。

壁高は南側で 10 cm~50 cm, 西で 35 cm (2 分の 1), 北で 20 cm, 東で 10 cm 程度であった。周溝も東側の 1 部に 40 cm×15 cm が残され, また, 壁下には柵柱列も残されていた。主柱は P1'' (40 cm×60 cm), P2'' (45 cm×65 cm) の 2 つがそれにあたるものか。カマドは SI36 構築のためこわされ, 更に本柱には SK52, SK53 も掘られ, SB03 も建てられたから床面等の攪乱はひどかった。

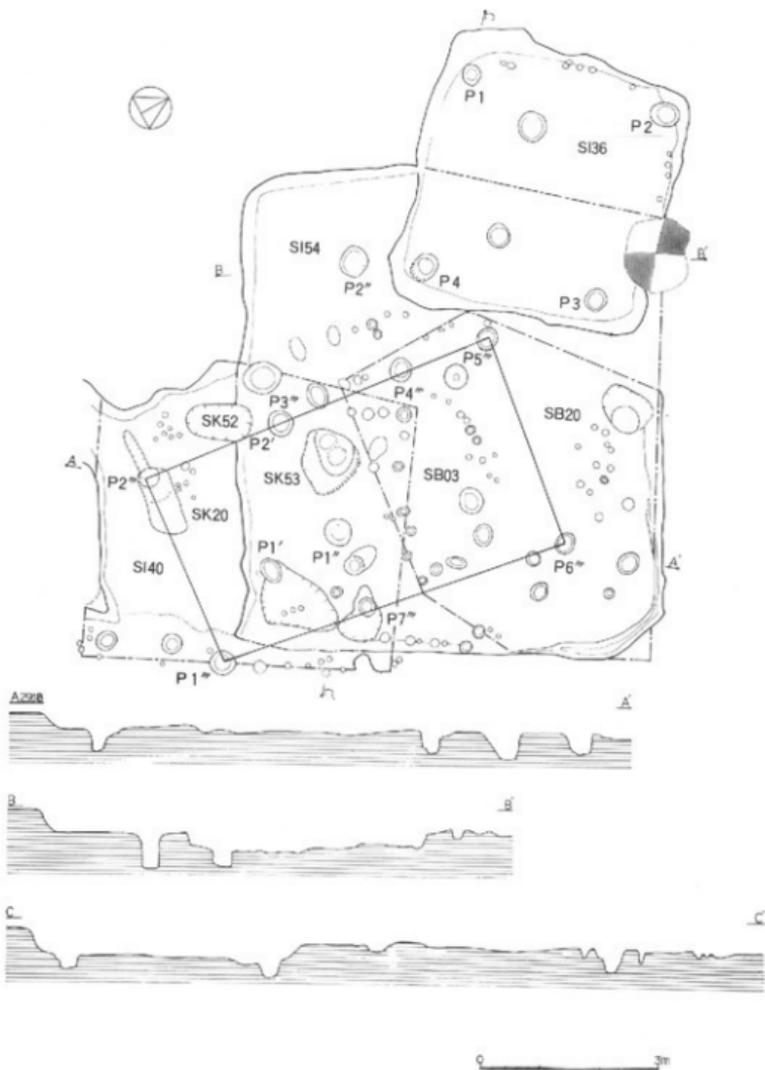
SB 03

本住は SI40, SI54 の上に建てられ, 軸線をほぼ 20 度西方にむけている。平面形状は縦長 6.20 m, 横長 3.60 m の方形掘立プランである。

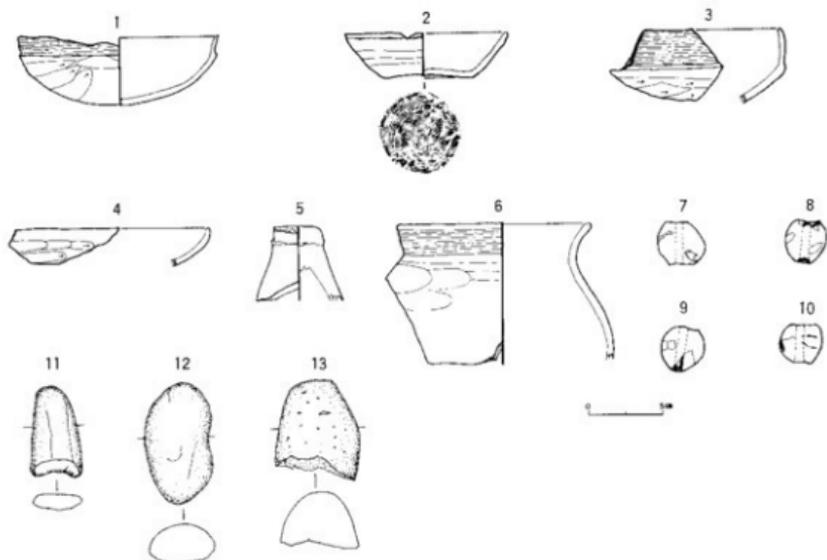
主柱は P1''' (40 cm×50 cm), P2''' (30 cm×30 cm), P3''' (40 cm×45 cm), P4''' (40 cm×50 cm), P5''' (40 cm×20 cm), P6''' (40 cm×15 cm), P7''' (40 cm×38 cm) は独立の主柱ではなかろうか。床面は後で手工された小ピット群や土壇等のためすっかり攪乱され凹凸がはげしく, 遺物等も小片が多く, SI40, SI54 出土品と見わけがつかない状態にあった。

SB 20

なお, これらの住居址の中に SI20 も含まれていたが, 主柱とみられるピットの規格が少々合致しない点もあったので, 一応 SB20 としてとらえておいた。



第49図 第1調査区第36号・40号・54号竪穴住居址(SI36・40・54)第3号・20号獨立柱建物遺構(SB03・20)・第20号52号第53号土壙状遺構(SK20・52・53)平面実測図



第50図 第1調査区第20号掘立柱建物遺構(SB20)出土遺物

遺物

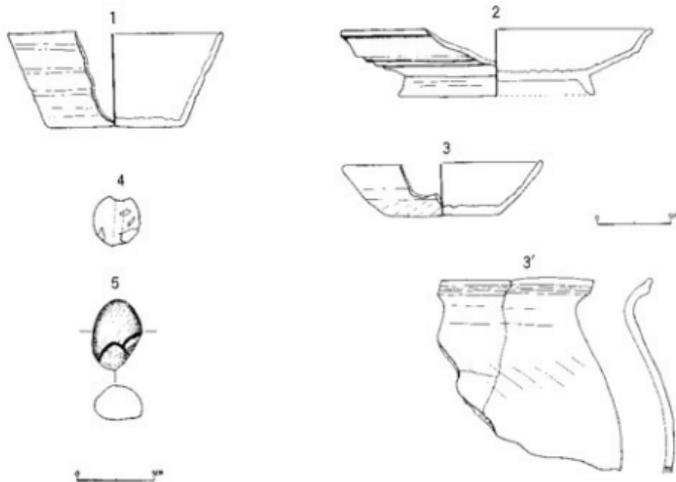
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12cm ②3cm ③3cm	丸底でゆるやかに上がる。 稜を有し口縁部は短く立ち上がる	良好 褐色	完形
2	坏 (土師)	①11cm ②2.5cm ③0.3cm	底部からの立ち上がりは少々丸味を帯びているが、稍々急である。底部は回転糸切り状をなしヘラ整形。	良好 茶褐色	1/2残
3	坏 (土師)	③0.3cm	底部は丸底で立ち上り、大変ゆるやか。 口唇部は稍々内反する。 外面は横へらで整形。	良好 淡褐色	1/2残
4	坏 (土師)	③0.3cm	底部は丸底で、立ち上がりはゆるやか。 稜を有し口縁部は稍々内反する。	良好 ⑧淡褐色 ⑨黒塗り	1/2残
5	高坏	①6.0cm ②3.0cm	胴からの立ち上がりは太くて、ゆるやかで短かい。	良好 褐色	脚部
6	壺	①16.0cm ②9.0cm ③0.5cm	胴部は稍々ふくらみを有し、口縁部は外反する。	良好 褐色	1/2残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	土鍾	①3.5cm 孔0.6cm	磨減なし	良好 褐色	完形
8	土鍾	①3cm 孔0.6cm	磨減あり	良好 褐色	完形
9	土鍾	①3cm 孔0.4cm	磨減なし	良好 褐色	完形
10	土鍾	①3cm 孔0.6cm	磨減あり	良好 褐色	完形
11	石斧		第50図参照		
12	磨石		第50図参照		
13	磨石		第50図参照		

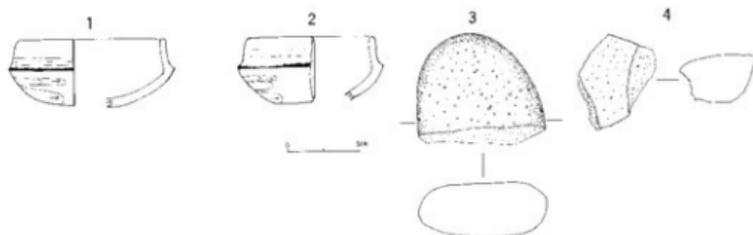


第51図 第1調査区第36号竪穴住居址(SIG6)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (須恵)	①14.0cm ②4.0cm ③0.4cm ④9.0cm	底部からの立ち上がりは稍々急で外反する。輪積み痕あり。	良好 灰青色	1/5残
2	高台付 坏(須恵)	①21.0cm ②4.0cm ③0.5cm 高台部径 13.0cm 高台部高 さ0.8cm	輪積み痕を有し、内外共にヘラ使用、立ち上がりはゆるやかで、口縁部は外反する。	良好 灰青色	1/5残
3	坏 (須恵)	①11.0cm ②3.0cm ③0.5cm	底部からの立ち上がりは稍々急で、外反する。輪積み痕あり、ヨコヘラナデ。	良好 灰青色	1/5残
3'	甕	①22.0cm ③11.0cm ④0.5cm	胴部のふくらんだ大形カメで、口縁部は外反し、のりを有する。ロクロヨコヘラ整形。	良好 砂粒 淡褐色	1/5残
4	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり		完
5	摺石	①40cm ②30cm ③3.0cm	第51図参照		1/5残



第52図 第1調査区第40号壜穴住居址(SI40)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏	①120cm ②40cm ③0.3cm	丸底で稜を有し、口縁部は内反する。ロクロヘラ仕上げ	良好 灰黒色	1/5残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

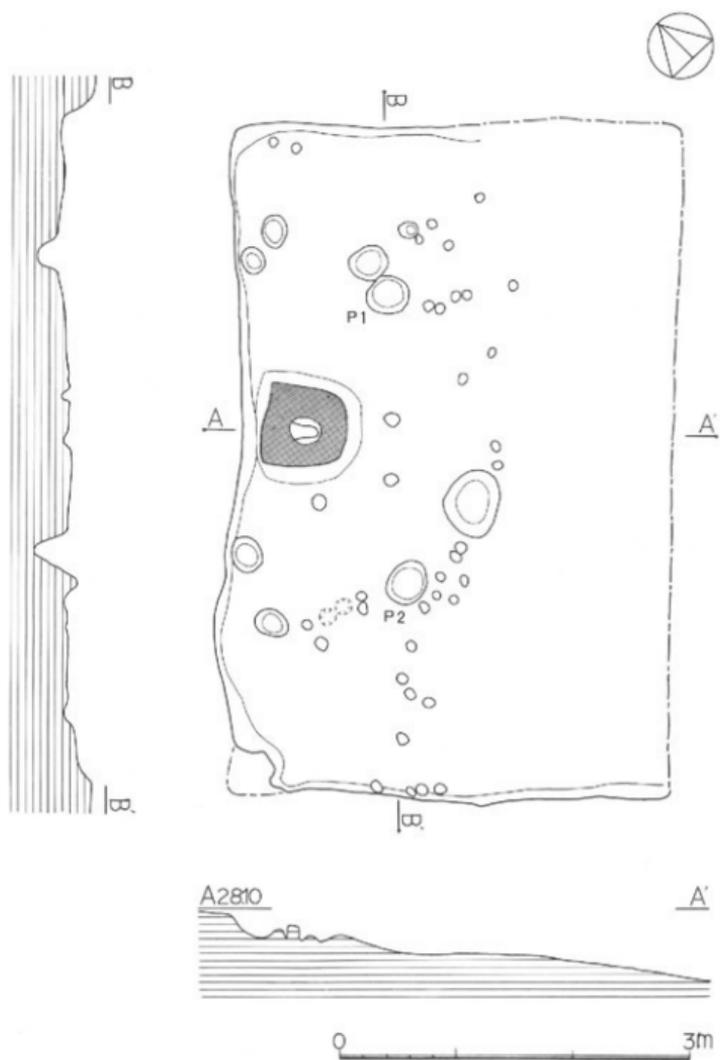
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	坏	①10.0cm ②3.0cm ③0.3cm	丸底で稜を有し口縁部は稍々内反する。 ロクロヨコヘラ整形。	良好 淡褐色	1/5残
3	摺石	①7.0cm ②8.0cm ③3.0cm	第52図参照		
4	摺石	①3.0cm ②6.0cm ③2.0cm	第52図参照		

第22号竪穴住居址 (SI22) (第53図)

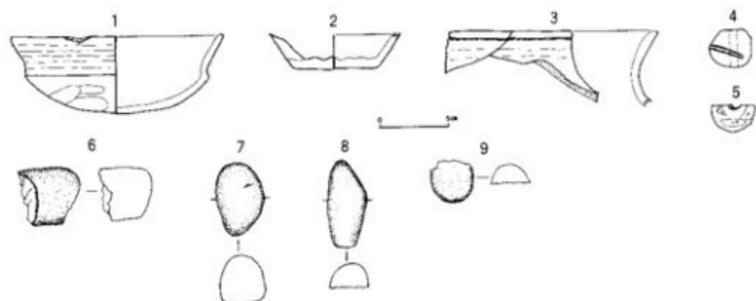
本住は SI35 の東側、第1調査区の南端にあたるため、南壁は後世の通路等に使用され調査不能であった。軸線をほぼ35度東方に向けて建てられている。その平面形状は縦(不明)、横5.90mの方形状のプランとみられた。

壁高は西壁で20cm、北壁25cm、東壁20cm、そしてP1(30cm×30cm)、P2(27cm×25cm)は支柱であろう。カマドはよく残され(100cm×70cm、高さ25cm)、その中に支脚がそのままの位置に置かれていた。

床面は小柵穴とみられるピットが無数に点在し床面はずっかり攪乱されていた。遺物については下記のとおりである。



第53図 第1調査区第22号竪穴住居址(SI22)平面実測図



第54図 第1調査区第22号竪穴住居址(S122)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏	①15cm ②4cm ③0.3cm	丸底でゆるやかに立ち上がる。 稜を有し口縁部の立ち上がりは稍々垂直。 口唇部は外反る。内外共にヘラによる整形。	良好 淡褐色	完形
2	坏	①6cm ②1cm ③0.5cm	内部には輪積痕が残されている。	良好 灰白色	1/4残
3	甕	②5cm ③8cm	口縁部は短かく外反する。 砂粒を含み、粗雑な整形。	普通 灰白色	口縁部 残片
4	土錘	①3cm 孔0.5cm	磨減なし	良好 褐色	完形
5	土錘	①3cm 孔0.5cm	磨減あり	良好 褐色	1/4残
6	磨石		第54図参照	良好 褐色	1/4残
7	磨石		第54図参照		
8	磨石		第54図参照		
9	磨石		第54図参照		

第 44 号竪穴住居址 (SI44)・第 38 号竪穴住居址 (SI38)・第 39 号竪穴住居址 (SI39)・第 23 号竪穴住居址 (SI23)・第 48 号竪穴住居址 (SI48)・第 43 号竪穴住居址 (SI43) (第 55 図)

SI 44

本住は互いに切り合いを重ねて構築されているが、それ等の関係は大変に複雑である。第 1 調の最南端に造られている。

まず SI38 住をこわして SI44 が造られた。本住は南東部は不明である。軸線をほぼ 40 度西方へ向けて造られている。平面形状は横の 5.85 m が判明しているだけであるが、方形のプランをなす。壁高は西壁 15 cm、北壁 15 cm、東壁 25 cm、となっている。床面は粘土になっていて凹凸は極めて少い。P1 (20 cm×20 cm)、P2 (20 cm×10 cm) は主柱かどうか。カマドは残されているが、それは 100 cm×1.10 cm、高さ 30 cm である。

SI38

本住は SI44 構築のため切り込まれる。軸線はほぼ 90 度西方にかたむいて造られている。そして平面形状は横長 3.85 cm でその他は不明であるが、方形プランをなしている。現在約 2 分の 1 が残存しているようである。

壁高は西壁 35 cm、東壁 15 cm で後は不明。周溝は東壁に 10 cm×10 cm が残され後は不明である。主柱も判明したい。床面は粘土よりなるが凹凸がはげしい。

SI39

本住は南壁はこわされて不明。西壁も壁高 20 cm が残る部分があるが後は不明。北壁は 30 cm 残存する。平面形状は横長 3.05 m が判明するだけで後は不明であるが、方形プランをなす。

主柱も不明であるが、カマドは 100 cm×90 cm×40 cm の約 2 分の 1 が残存する。床面は粘土からなり凹凸がある。

SI23

これは SI38 構築のため破壊され、僅か 1/2 が残存するだけである。平面形状は横長 6.50 m が残存するが、方形のプランからなっている。

壁高は西壁 30 cm がほぼ 3 分 2 残されている。北壁は 45 cm、東壁は SI48、SI38 のため残されていない。なお、P1 (30 cm×20 cm)、P2 (30 cm×30) は主柱であろう。P3 は炉ではないかと判断したがそれは 90 cm×70 cm×20 cm であった。

床面は後世の小ピット列のため攪乱され凹凸がはげしい。なお、本住は火災にかかったらしく炭化材 (長さ 1.30 m、径 20 cm) が倒れていたが、それは梁材ではなからうか。

SI 48

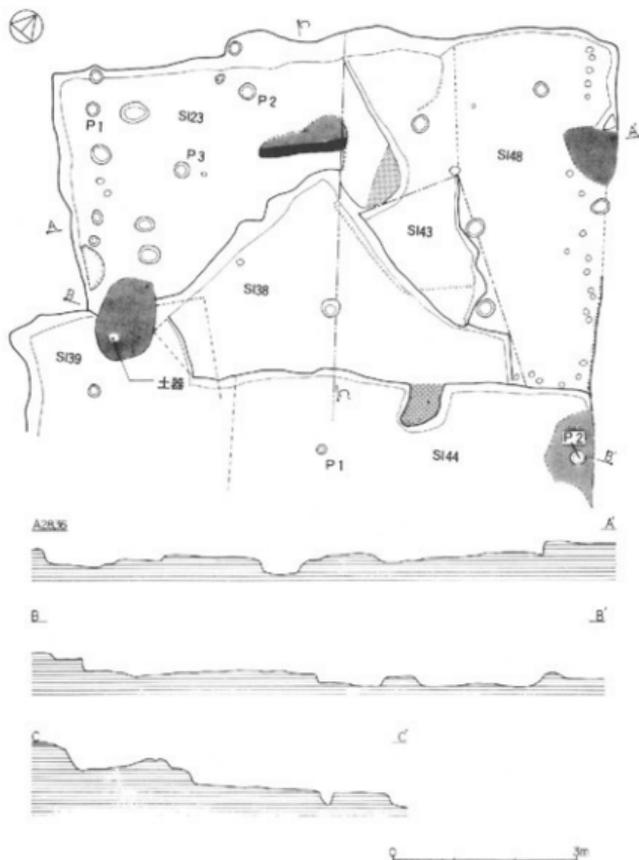
本住は SI43、SI23 構築のため 4 分 3 ぐらい切り込まれる。軸線はほぼ 50 度西方に向って造られている。平面形状は縦長 5.80 m、横長 4.30 m の方形プランよりなっている。壁高は北壁で 30 cm～40 cm、西壁、南壁はなく、東壁は僅かに壁柱列が残っているのでその形状が窺える。

カマドは不完全ながら残されているがそれは1.00 m×1.00 m×25 cmであった。床面は固くて平垣であった。

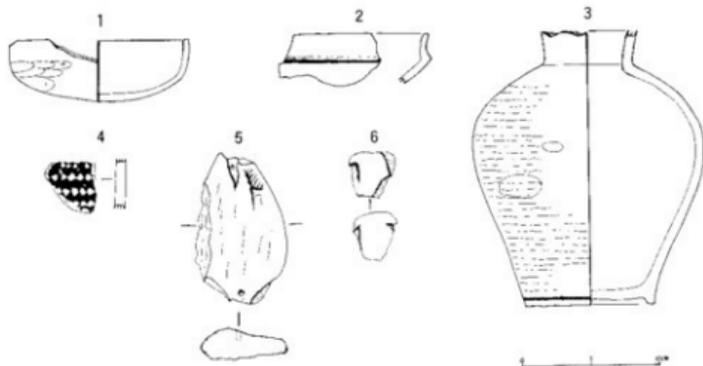
SI 43

本住SI38を造るのに切り込まれる。また、本住を造るのにSI48を切り込んでいる。形状は方形プランジなすが面積は判明しない。現在残存するのは5分の1程度であろう。床面は凹凸が多い。

出土遺物については下記のとおりである。



第55図 第1調査区第23号・38号・39号・43号・44号・48号竪穴住居址(SI23・38・39・43・44・48)平面実測図

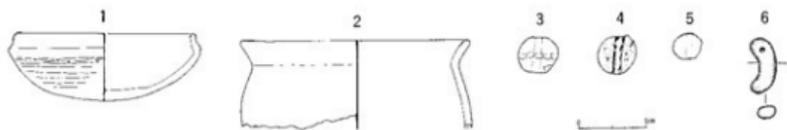


第56図 第1調査区第23号壺穴住居址(S123)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13cm ②4cm ③0.3cm	丸底、胴部の立ち上がり急。 口縁部は少々内反気味。 ヘラミガキ整形。	良好 淡褐色	完形
2	坏 (土師)	①10cm ②2cm ③0.4cm	丸底で明確なる稜を有する。 口縁部の立ち上がりは稍々垂直気味。 口唇部にいたって外反する。	良好 淡褐色	1/4残
3	壺 (須恵)	①6.0cm ②18.0cm ③0.3cm	胴部は丸味を有し、口縁部欠損。ロクロを用い 横ヘラで整形。 胴部には自然釉(赤味がかり)かけられる。	良好 灰白色	稍々 完
4	鉢片 (縄文)		やや丸味をおびた胴部片で、外器面の紋様には 横位に約3mm平均の棒状の工具による刺突列点 紋を施してある。	普通 砂粒 褐色	胴部片
5	不明の 石片		第56図参照		
6	磨石片		第56図参照		

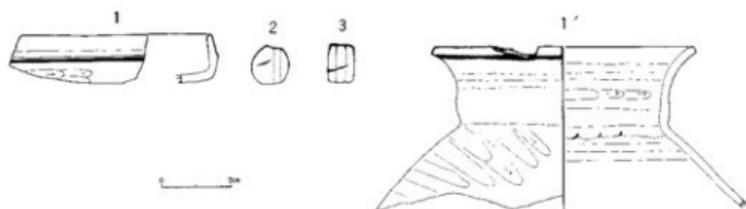


第57図 第1調査区第38号壺穴住居址(S138)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ②4.0cm ③0.4cm	丸底で立ち上がりはゆるやか。 稜を有し口縁部は内反する。	良好 淡褐色	稍々 完
2	壺(土師) (口縁部)	①14.0cm ②8.0cm ③0.3cm	胴部のふくらみは少く口縁部は短くて外反する。 ロクロヨコナデ。	良好 褐色	口縁部
3	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	完
4	土錘	①1.5cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	完
5	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	1/2残
6	曲玉		第57図参照		

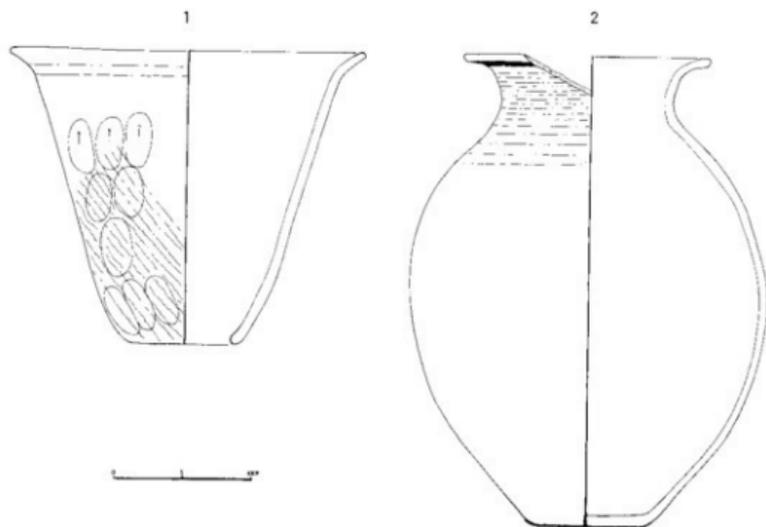


第58図 第1調査区第39号竪穴住居址(SI39)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①11.0cm ②4.0cm ③0.3cm	胴部は丸味を有し、稜をもち、口縁部は内反して立ち上る。 内外共にヨコヘラ整形	良好 黒褐色	1/4残
1'	壺 (土師)	①18.0cm ②13.0cm ③0.5cm	胴部は著るしくふくらみ、口縁部は垂直に立ち上る。そして口唇部に至って外反する。 砂粒を含む、内外共に横ヘラ整形。	良好 砂粒 淡褐色	口縁部
2	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	完
3	土錘	①2.0cm 孔0.8cm 長さ2.0cm	磨滅あり 円錐形	良好 褐色	完



第59図 第1調査区第44号竪穴住居址(S44)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甌 (土師)	①35.0cm ②22.0cm ③0.5cm ④7.0cm	底部からの立ち上りは急でふくらみはない。 口縁部は短くて外反する。 ロクロ整形、ヘラ仕上げ。	良好 淡褐色	
2	甕 (土師)	①31.0cm ②24.0cm ③1.0cm	胴部はふくらみを有し、頸部は内反し、口縁部 はいちじるしく外反する。	普通 灰黑色	

第24号竪穴住居址 (SI24)・第25号竪穴住居址 (SI25) (第60図)

SI24

本住はSI25を造るのに切り込まれる。軸線をほぼ40度西の方向に向けて造られている。平面形状については縦長6.30m, 横6.40mの方形のプランである。

P1 (60cm×60cm), P2 (70cm×50cm×60cm), P3 (50cm×50cm), P4 (80cm×6cm×60cm)は支柱とみうけたが, SI25と重なっているものもある。壁高は東壁30cm, 北壁30cm, 西壁で30cm, 南壁20cm~30cmとなっている。周溝は東壁に15cm×10cm, 西壁に15cm×10cmが不完全ながら残されている。

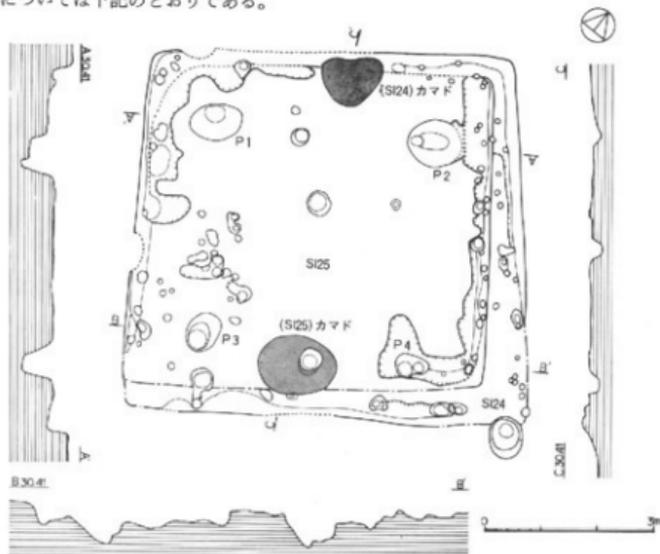
また, カマドは破壊されていたが100cm×10cm, 高さ不明が残されていた。

SI25

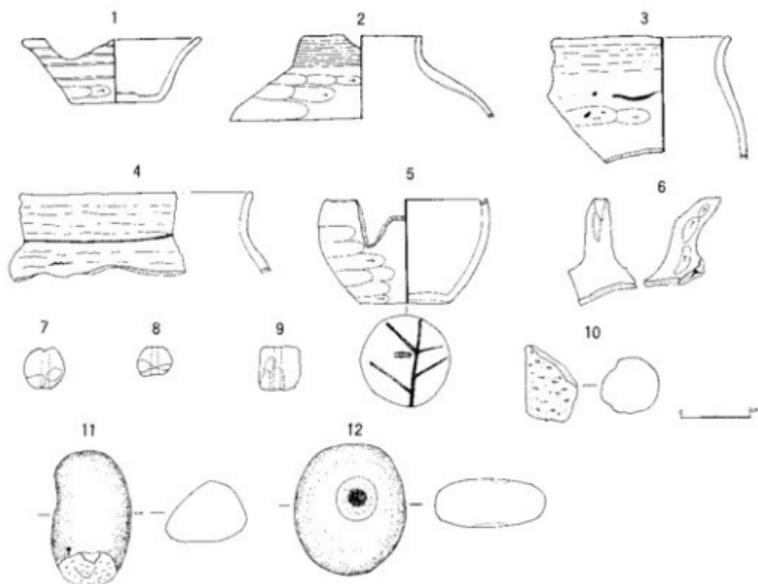
本住はSI24に約20cm土を積み重ねて造る。軸線はSI24とほぼ同じであるが, 平面形状は縦長5.90m, 横長6.05mの方形プランであった。

床面は平坦で固く後になって手工の跡はない。支柱はSI24と重なるものもあるが, P1 (60cm×55cm), P2 (50cm×60cm), P3 (40cm×50cm), P4 (40cm×58cm)で計測された。カマドは南壁に残されているが, それは1.20m×1.10m×15cm。なお, 周溝は確認されないが, 壁柱列が各壁に残されていた。

遺物については下記のとおりである。



第60図 第1調査区第24号・25号竪穴住居址(SI24・25)平面実測図



第61図 第1調査区第24号竪穴住居址(S/24)出土遺物

遺物

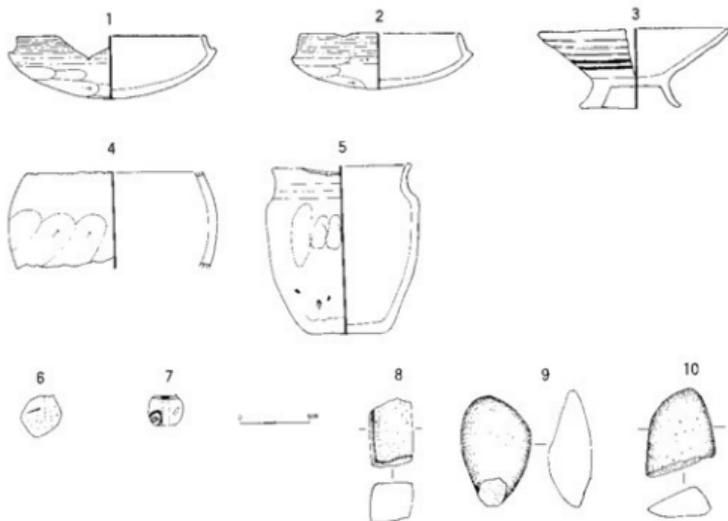
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (須恵)	①12cm ②4cm ③3cm	底部からの立ち上がりは急でふくらみはない。口唇は稍々外反。輪襖の痕があざやかに残り、内外よくロクロ整形されている。	良好 灰白色	1/4欠
2	壺 (土師)	①38cm ②6cm ③4cm	胴上部と口縁部とからなるが、胴部はふくらみを有する。口縁部は短かく外反する。	良好 黒褐色	1/4残
3	壺 (師)	①10cm ②8cm ③0.3cm	胴部は稍々ふくらみを有し、口縁部は短かく外反する。ヘラケズリ横ナデで内外共によく整形されている。木の圧痕2あり。	良好 淡褐色	1/4残
4	壺 (土師)	②6cm ③0.4cm	口縁部は厚く外反する。そして細かい横の波線の模様を残し、名部によく整形されている。	良好 褐色	1/4残
5	壺形土器 (土師)	④6cm ③0.6cm	底部からは丸味を帯びて立ち上り、口縁部は不明。底部には木の葉の圧痕あり	良好 褐色	2/4残

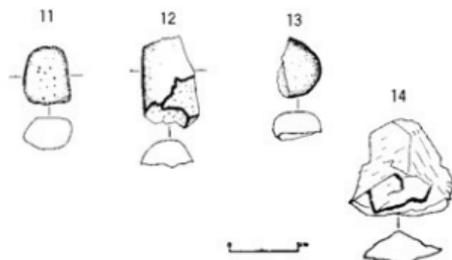
遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	杷 トツテ (土師)	①5cm ③ 1.8~2.5 cm	中央部を曲げてある。尖端は突出する。 ヘラ整形	良好 褐色	完形
7	土鉢	①3cm 孔0.5m	磨滅あり	良好 褐色	完
8	土鉢	①2.5cm 孔0.4cm	磨滅なし	良好 黒褐色	完
9	土鉢	①2cm 孔0.5cm 長さ3cm	磨滅なし 円錐形	良好 黒褐色	完
10	支脚	④1.3cm ②4cm		普通 赤褐色	1/4残
11	磨石		第61図参照		
12	磨石		第61図参照		



第62図 第1調査区第25号竪穴住居址(S125)出土遺物



第62図 第1調査区第25号竪穴住居址(S125)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13cm ②3cm ③0.3cm	丸底で胴部はゆるやかに立ち上がる 稜を有し口唇部は短かく内反する 内外共よくへら整形がなされる	良好 淡褐色	完形
2	坏 (土師)	①11cm ②4cm ③0.3cm	丸底で稜を有する 口唇部は短かく内反する 内外共よく整形されている	良好 黒褐色	完形
3	高台付 坏	④7cm 底部高 1.5cm ③0.3cm 台部から 口縁部の 高さ4cm	内外共に輪積みのあとが明らかでよく整形さ れている 底部からの立ち上がりはふくらみがなく外へ 向って大きく開く	良 少し赤味をもった 灰白色	1/8残
4	壺 (土師)	①12cm ②6cm ③8cm	胸部はふくらみを有する 内部は縦へら、外部は小し粗雑なへら整形	普通 黒褐色	1/8残
5	壺 (土師)	①10cm ④7cm ②12cm ③0.3cm 胴径9cm	胴部のふくらみは少なく、稜を有し口縁部は内 反し、口唇部は外反する 内部は木の葉状の紋様をえがく 外部の整形は粗雑で少し凹凸あり	普通 茶褐色	完形
6	土錘	①3cm 孔0.6cm	少し磨滅あり 不整形	普通 茶褐色	完形
7	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	普通 茶褐色	完形
8	支脚	①4cm ②10cm ③4~10 cm		普通 赤褐色	完形

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	砥石		第62図参照		
10	磨石		第62図参照		
11	磨石		第62図参照		
12	磨石		第62図参照		
13	磨石片		第62図参照		
14	磨石片		第62図参照		

第26号竪穴住居址 (SI26)・第31号竪穴住居址 (SI31)・第27号竪穴住居址 (SI27)・第32号竪穴住居址 (SI32)・第4号掘立柱遺構 (SB04) (第63図)

SI 26

本住は SI31 の上に造られるが、SI27 に切り込まれている。軸線はほぼ 30 度西方に向って建てられる。本住の平面形状は縦長 5.25 m、横長 6.80 m の方形プランである。

壁高は不明であるが、僅かに南西壁に 10 cm 残されている。周溝は浅くなっておりそれは 20 cm × 10 cm で、その中に壁柱列を北東と東南にめぐらしている。

床面は後世手工の跡がはげしく、凹凸があって平坦を欠く。なお、P1 (40 cm × 70 cm)、P2 (40 cm × 50 cm)、P3 (30 cm × 60 cm)、P4 (30 cm × 60 cm) は主柱とみうけられた。

SI 31

本住は SI26 を造るため切り込まれ、更には SI27 にも切り込まれている。SI26 は本住の上にすっぱり重なったという感じである。軸線は SI26 と同じで、また、この平面形状は縦長 5.30 m、横長 6.70 m の方形プランをなす。

壁高は西壁 15 cm、北東の 1 部 10 cm で後はなくなっている。

また、壁柱列が北東部に見うけられ、周溝は僅かに北東部に 10 cm × 5 cm が残されていた。主柱については P1、P2 は SI26 と重なって造られ、P1' (30 cm × 65 cm)、P2' (50 cm × 50 cm) となる。床面は後になって手工されたようでピット群になってすっかり攪乱されていた。

SI 27

本住は SI32 をこわして造られている。平面形状は縦長 3.70 m、横長 3.60 m の方形プランである。

壁高は北東壁 30 cm で 1 部分、南東 15 cm でこれも 1 部分、南西壁 20 cm で、周溝は東南 15 cm × 10 cm、南西 15 cm × 10 cm であった。また、主柱は P1'' (40 cm × 45 cm)、P2'' (30 cm × 40 cm)、K3''

(30 cm×50 cm), P4" (45 cm×700 cm) ではなからうか。カマドは消失し床面は凹凸がはげしい。

SI 32

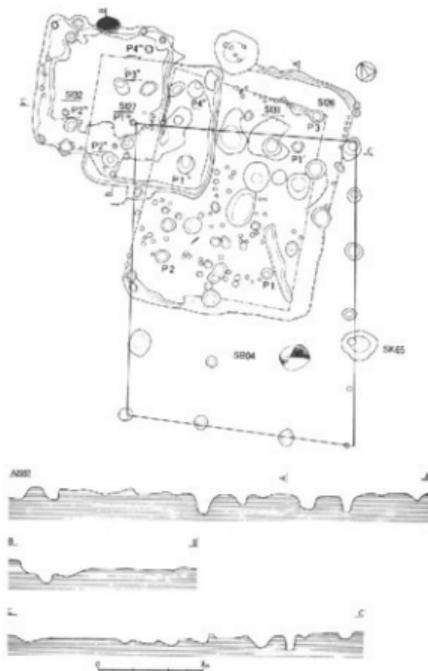
本住は SI27 を切り込んで造られている。軸線もほぼ SI27 と同じく 60 度西方にかたむいてい
る。平面形状は縦長 3.70 m, 横長 3.600 m の方形プランである。

壁高は南西壁で 1 部 25 cm, 北西壁で 25 cm, 北東で 20 cm, そして周溝は北西 10 cm~20 cm×10
cm, 北東 15 cm×10 cm, 南東で 15 cm×10 cm が計測された。P1" (30 cm×35 cm), P2"" (25 cm×45
cm), P3"" (25 cm×30 cm), P4"" (20 cm×15 cm) は主柱であろう。床面は平坦であるが, 西壁側
は後世の手工のため攪乱され, 凹凸が多い。

SB 04

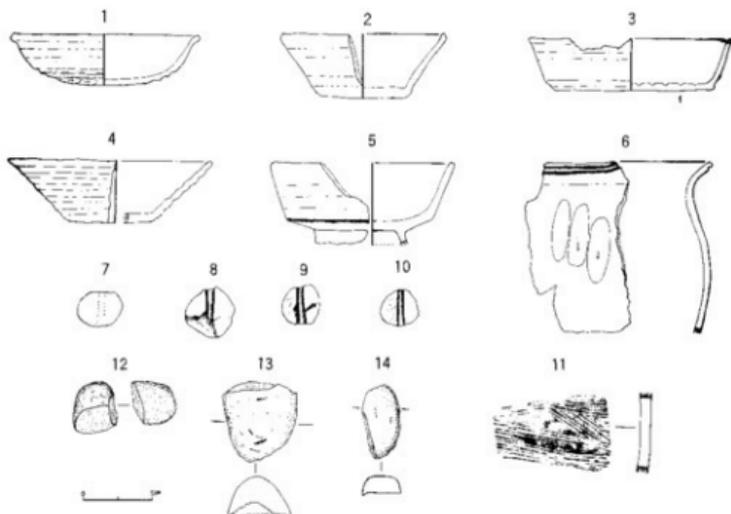
これら住居址の上に SB04 をとらえたが, その柱列は不明であったから解説をきけた。なお,
SI26 の南北に SK65 があったことを付加しておきたい。

遺物等については下記のとおりである。



第63図 第1調査区第26号27号31号32号竪穴住居址(SI26・27・31・32)第4号掘立柱建物遺構(SB04)

第65号土壇状遺構(SB65)平面実測図



第64図 第1調査区第27号竪穴住居址(S127)出土遺物

遺物

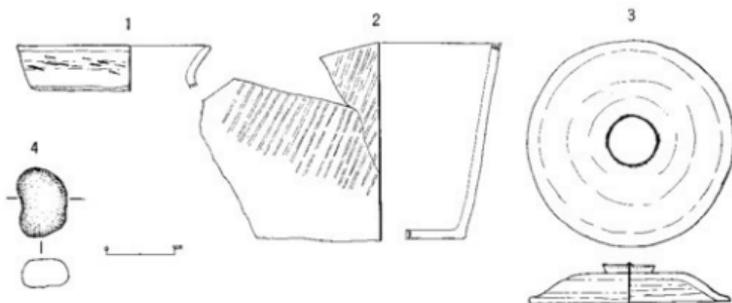
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13cm ②3cm ③0.3cm	底部は鮮明な回転糸切り状を呈し立ち上がりは徐々に急である ロクロ整形	良好 茶褐色	1/4欠
2	坏 (須恵)	①12cm ②3cm ③0.3cm	底部より徐々に立ち上がり、胴部のふくらみはない。砂粒を含み、外部は横へらナデ	良好 灰青色	1/4残
3	坏 (須恵)	①15cm ②3cm ③0.3cm	底部より急に上立がる 内外共に黒塗りである	良好 黒色	1/4欠
4	坏 (須恵)	①11cm ②4cm ③0.4cm ④6.0cm	底部より徐々にゆるやかに立ち上がる。 輪積みでへらを使用	良好 灰黒色	1/4残
5	高台付 坏 (須恵)	①14cm? ②4cm ③0.4cm ④10cm	台部のひろがりはなく、口縁部は外反する。口唇部にはのりを有する 砂粒を占む	良好 灰黒色	1/4残
6	壺 (土師)	②13cm ③0.3cm	胴部のふくらみはなく、口縁部は外反する 口唇部にのりを有する、そして砂粒を含む	普通 灰褐色	1/4残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
8	土鍾	①2.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	完
9	土鍾	①4.0cm 孔1.0cm	磨滅あり	良好 褐色	1/2残
10	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	1/2残
11	淺鉢片 (縄文)	8.6×5.9 cm	ほぼ直線的にひらいた口辺部片で、外表面の紋線は2条の平行沈線を基調として沈線紋を周囲させている。部分的には鉢位に施してある	良好 砂粒 褐色	1/2残
12	磨石片		第64図参照		
13	磨石片		第64図参照		
14	磨石片		第64図参照		



第65図 第1調査区第31号竪穴住居址(S131)出土遺物

遺物

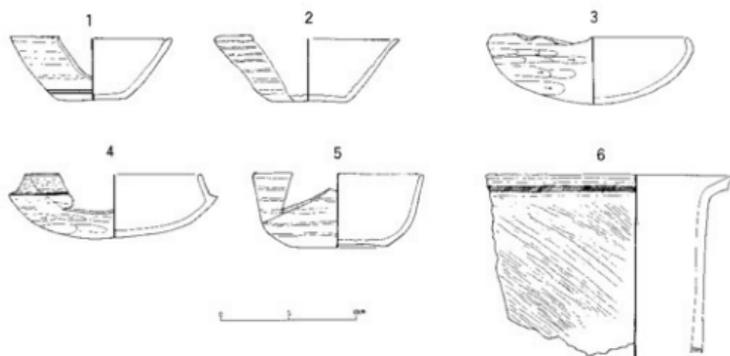
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 (土師)	①18cm ②3cm ③0.3cm	口縁部で内傾しながら、口唇部に至って少々外反。ロクロ整形。	良好 褐色	口縁部 1/2
2	甕 (須恵)	②14cm ③1cm ④10cm	底部よりの立ち上がりは急に外反し、ふくらみはない。内外共にクテヘラ整形。	良好 灰黑色	1/2残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏蓋 (須恵)	①15.0cm ②2.0cm ③0.3cm ツマミ 3.0cm	口唇部は美しいのりを有する。 内外共に横へら使用。	良好 灰黒色	完
4	磨石		第65図参照		



第66図 第1調査区第32号型穴住居址(S32)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12cm ②3cm ③0.3cm	底部は糸切り状をなし、立ち上がりは稍々丸味をもっている。 内部は黒塗り、ロクロ整形。	良好 淡褐色	稍々完 形
2	坏 (土師)	①1.4cm ②3.5cm ③0.4cm ④6.0cm	底部から直ちに外反して立ち上がる。 輪積みへら整形。 外部は黒塗り。	良好 黒色	1/3残
3	坏 (土師)	①14cm ②3cm ③0.4cm	底部は丸味を有しゆるやかに立ち上がる。 口唇部は稍々内反する。 内外共にへらケズリ。	良好 褐色	1/3残
4	坏 (土師)	①13cm ②4cm ③0.3cm	底部は丸味を有し、ゆるやかに立ち上がり、稜を有する。口縁部は短かく内反する。 内外共に黒ぬり。	良好 黒色	1/3残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	坏 (須恵)	①12cm ②5cm ③0.4cm ④8.0cm	底部より急に稍々垂直に立ち上がる。 輪積み、ヘラ整形。	良好 灰青色	1/3残
6	壺 (土師)	②12cm ③0.3cm	薄手の壺で胴部は稍々丸味あり。口縁部は短かく外反する。	普通 黒褐色	1/3残

第28号竪穴住居址 (SI28)・第29号竪穴住居址 (SI29) (第67図)

SI28

本住はSI29を切り込んで造られる。軸線をほぼ40度西方に向けて建てられている。平面形状は1辺が4.40mの正方形プランである。

壁高は南側で10cm, 東側で14cm, 北側で20cm, 西側で25cm, そして周溝は全壁下に20cm×7cmが確認された。主柱はP1(30cm×35cm), P2(30cm×35cm), P3(35cm×50cm), P4(25cm×30cm)がそれに当るようである。床面は平坦で固いが凹凸がある。

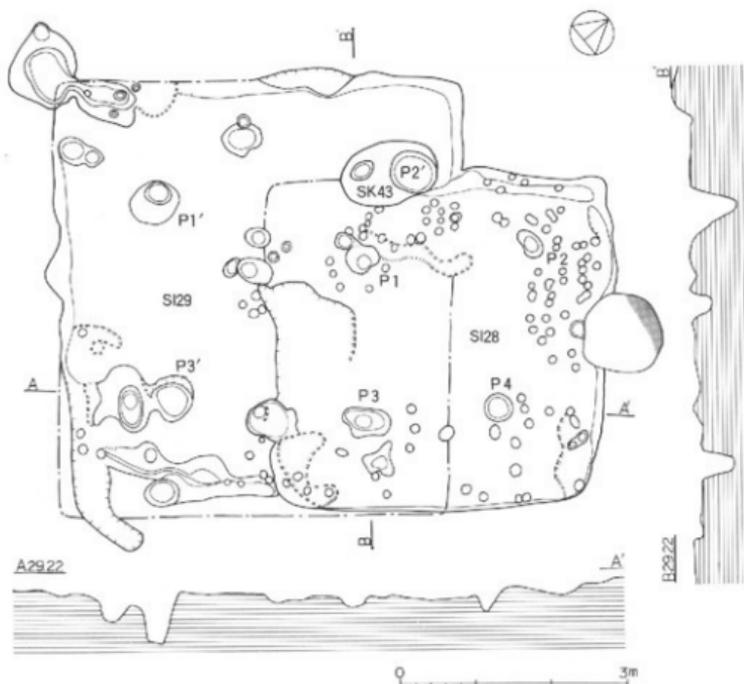
遺物については鬼高期のものと思われる坏, 壺片等が多数検出されたがそれは下記に示したとおりである。

SI29

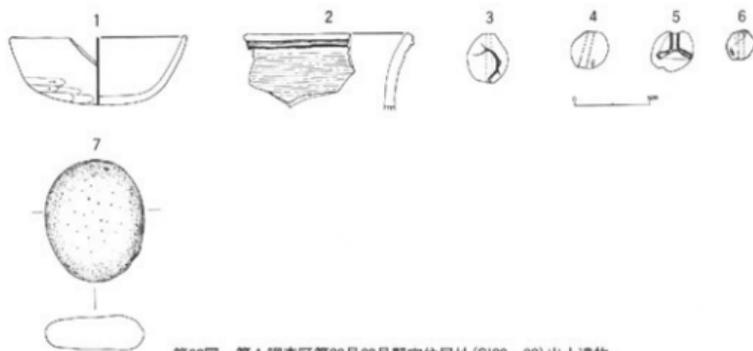
本住はSI28を造るため2分の1が切り込まれている。軸線はSI28と同じくほぼ40度西方にかたむいている。この平面形状は縦5.80m, 横5mの方形プランである。

壁高は南西20cm, 西北30cm, 北東1部27cm, 南東10cmで周溝は南東の1部に20cm×10cmが残されているだけであった主柱はP1'(40cm×85cm), P2'(40cm×70cm), P3'(50cm×75cm)で3P4'(35×50)はSI28のP3と同じところに掘り込んだものと思われる。

なお、遺物についてはSI28と同様に多数この出土をみたが、その主なるものは下記のとおりである。



第67图 第1调查区第28号·29号壁穴住居址(SI28·29)平面实测图

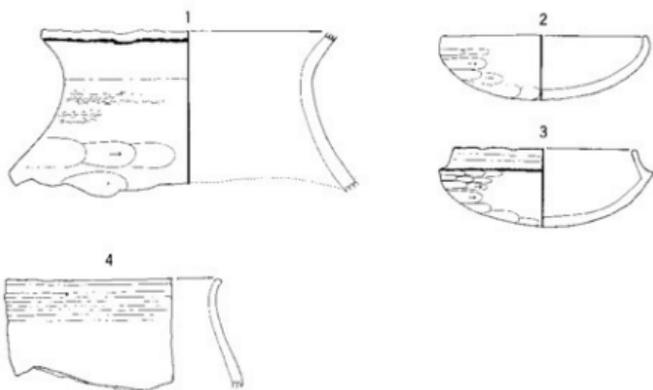


第68图 第1调查区第28号29号壁穴住居址(SI28·29)出土遗物

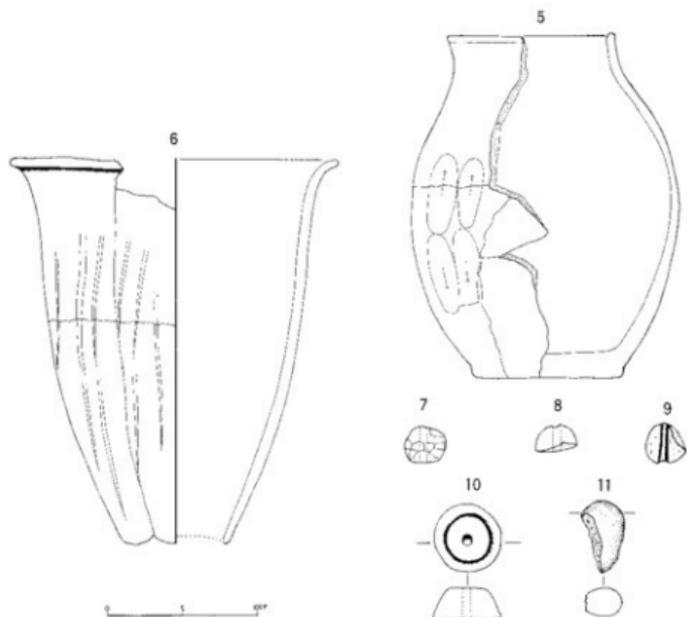
遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ②3.5cm ③0.3cm	底部からの上立がりは少ない。丸味をもつ。 内部は黒塗 外部はヘラゲズリで整形	良好 灰褐色	完形
2	壺 (土師)	③0.4cm	口縁部は極めて短かく、ふちを有する ロクロ整形か	良好 褐色	残片
3	土鍾	①3.0cm 孔0.3cm	磨減なし	良好 褐色	完形
4	土鍾	①3.0cm 孔0.3cm 磨減なし			
5	土鍾	①3.0cm 孔0.3cm	磨減なし	良好 褐色	3/4残
6	土鍾	①1.5cm 孔0.3cm	磨減なし	良好 褐色	完
7	敲石		第68図参照	良好 褐色	完



第69図 第1調査区第29号竪穴住居址(S129)出土遺物



第69図 第1調査区第29号竪穴住居址(S29)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13cm ②3cm ③0.3cm	丸底で立ち上がりはゆるやか 口唇部は少々内傾する 内外共に黒塗り 横へらで整形	良好 黒色	完形
2	坏 (土師)	①11cm ②5cm ③3cm	丸底でゆるやかに立ち上がる。 稜を有し口縁部は稍々内反する 内部はタテヘラ、外部ヨコヘラ整形	良好 黒褐色	完形
3	壺 (須恵)	①18cm ②12cm ③1.0cm	胴部はふくらみを有し 口縁部は大きく外反する ロクロ整形	良好 灰白色	1/3残
4	壺 (須恵)	②22cm ③0.5cm ④9cm	胴部のふくらみは稍々あり 口縁部は短かくて外反する 内部はタテヘラ使用	良好 灰褐色	1/3残
5	甕 (土師)	①22cm ②25cm ③0.3cm ④7cm	底部からの立ち上がりは急でふくらみがない。 口縁部は短く外反する。 内部はタテヘラで整形。	良好 黒まじり 褐色	稍々完

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	甕 (土師)	①11.0cm ②23.0cm ③ 0.5cm			
7	土唾	①3cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
8	土唾	①3cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	1/2残
9	土唾	①3cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	1/2残
10	紡錘車		第69図参照		
11	磨石		第69図参照		

第42号竪穴住居址 (SI42)・第30号竪穴住居址 (SI30) (第70図)

SI 42

本住の西北側はSI30に切り込まれ、そこにはSK46・SK48も掘り込まれ、西南側にはSK08もある。軸線はほぼ30度東方に向けて造られる。平面形状は縦長5.50m(現長)、横長6.70mの方形プランをなす。

壁高は東北壁30cm、東南壁30cmで後は不明、そして壁柱列は全壁下に掘られていたので、本柱の形状を理解することが出来た。主柱はP1(30cm×80cm)、P2(35cm×55cm)、P3(30cm×50cm)、P4(40cm×70cm)がそれに当るかと思われる。

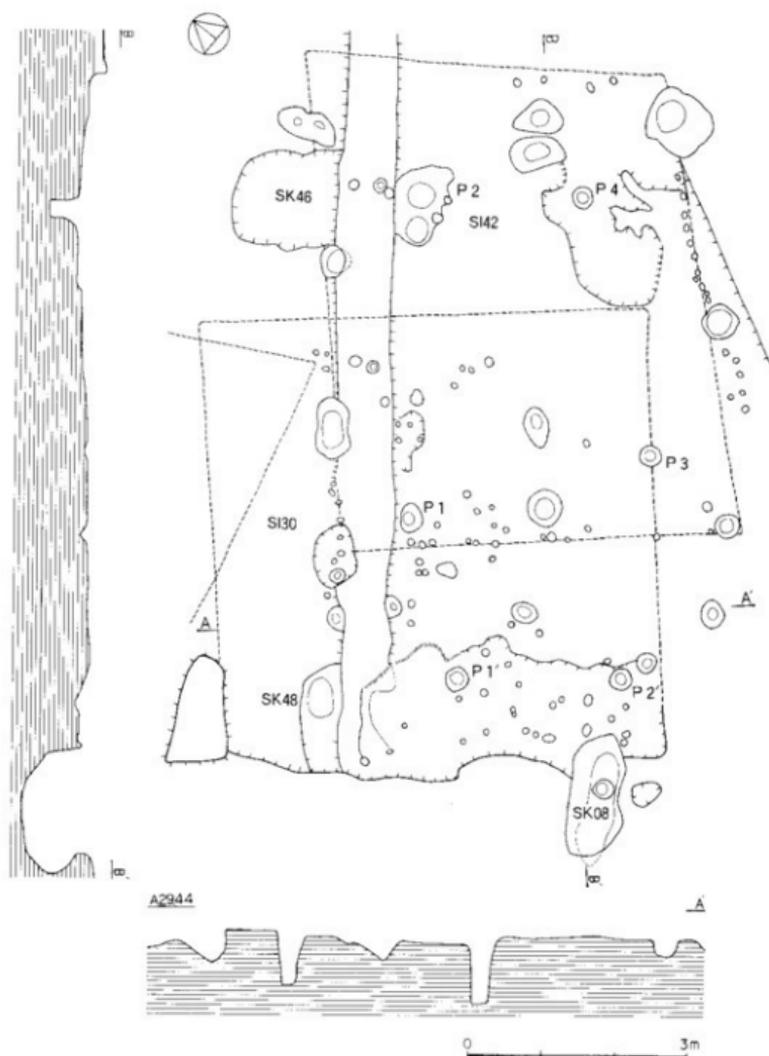
床面は内外ともに攪乱され、凹凸が多く遺物も破壊されて特に図示するようなものはなかった。

SI 30

SI30 本住はSI42を切り込んで構築してある。北側にはSI62ある。軸線はSI42と同じくほぼ30度西方にかたむいて造られ、平面形状は縦6.00m、横6.10mの方式プランをなす。

壁高は西南壁30cm、北西壁の1部25cmが残されるだけで、壁面1帯の攪乱は甚だしい。なお、柱についてはP1'(80cm×40cm) P2'(30cm×30cm)はそれに当ると思われるが、後は確認しにくかった。

床面の攪乱も甚だしく凹凸が多く、遺物等も全て小破片のみであったが、坏、甕等鬼高期のものが多かった。



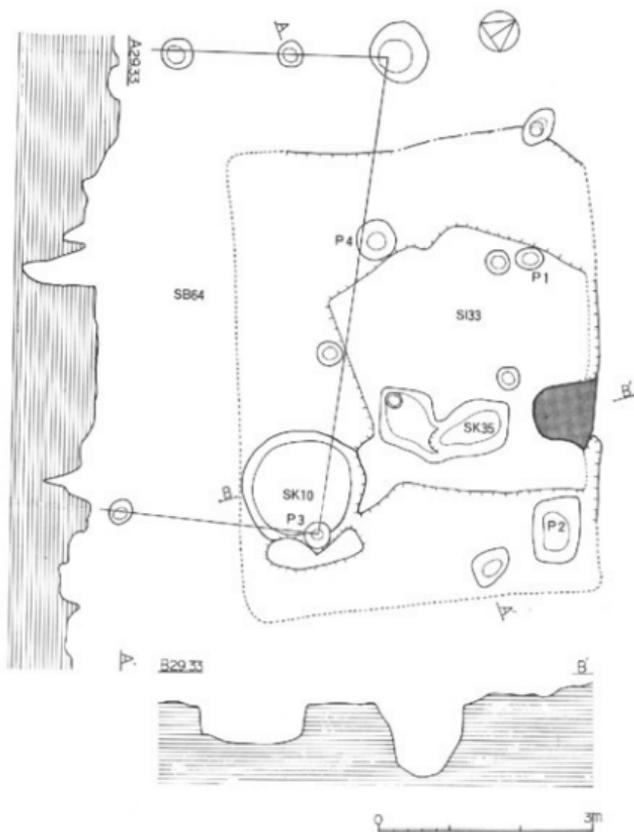
第70团 第1调查区第30号42号整穴住居址(SI30·42)第8号46号48号土壕状遺構(SK8·46·48)平面実測図

第33号竪穴住居址 (SI 33) (第71図)

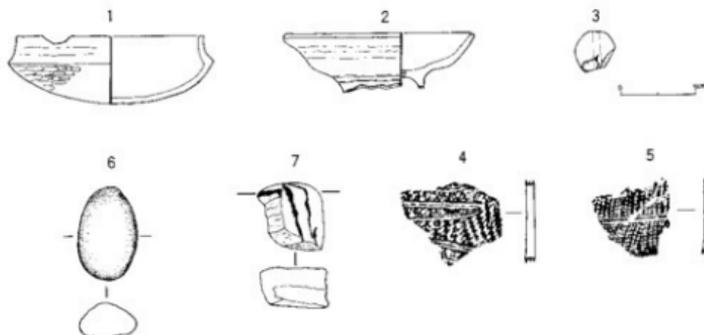
本住はSI24・SI25住を切り込んで造る。そしてSI05によって南壁が切り込まれる。軸線はほぼ30度西方に向けている。平面形状は縦6.4m, 横5.00mの方形プランをなす。

壁高は西側1部30cm, 北側25cmで後はなく, 壁柱列が本西北と残されていたので, 本柱の形状を把握することが出来た。P1 (46cm×40cm), P2 (30cm×25cm), P3 (45cm×40cm), P4 (35cm×45cm)は主柱であろう。本北壁にカマドを有するが, それは100cm×100cm×200cmであった。

床面は攪乱され凹凸がはげしく, 出土遺物も破片が多かったが, その主なものを下記にあげることにする。なお, 本住の中にSK35, SK45が掘られていたことを付説しておきたい。



第71図 第1調査区第33号竪穴住居址(SI33)第10号土壇状遺構(SK10)平面実測図



第72図 第1調査区第33号竪穴住居址(S133)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13cm ②4cm ③0.6cm	底部は丸味を有し、立ち上がりはゆるやか。稜を有し口縁部は短かく外反する。砂粒を含む。ロクロ整形。	良好 砂粒 灰黒色	完形
2	高台付 坏 (土師)	①13cm ②3cm ③0.6cm ④6.0cm	台部は稍々内傾気味。胴部の立ち上がりはゆるやか。ロクロ、ヘラナデ整形。	良好 灰褐色	3/5残
3	土錘	①3cm 孔0.6cm	磨減ない	良好 褐色	完形
4	深鉢 (縄文)	5.7×7.3 cm	ややひらきぎみの胴部で外器面の紋様はLRの縄文を施した上から半載の竹管による刻線紋様を施している。	良好 砂粒 石硬質含有 明褐色	
5	深鉢 (縄文)	5.2×5.2 cm	外器面の紋様は櫛状工具を平行に連続して施された紋様を基調として横位に平行沈線紋を2条施している。	普通 砂粒 砂礫 褐色	
6	磨石		第72図参照		
7	磨石片		第72図参照		

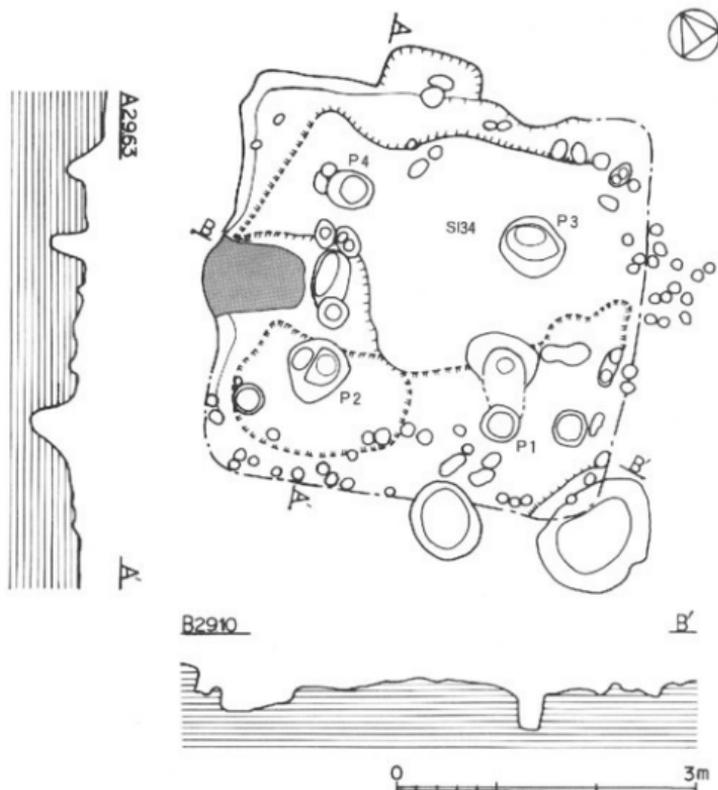
第34号竪穴住居址 (SI 34) (第73図)

本住はSI05の隣り当り、軸線をほぼ20度西方へ向けて建てられる。平面形状は縦3.8m、横3.90mの方形プランをなす。

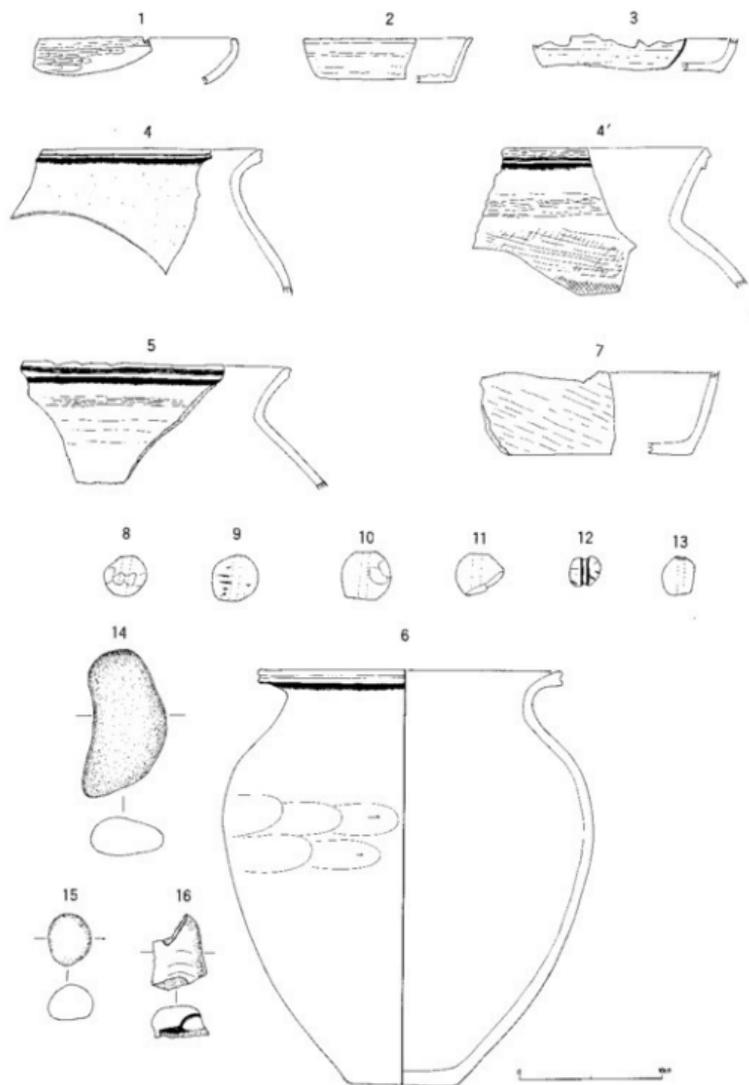
壁高は西北部に30cm、本南側に10cm(1部)、東北に25cmとなっており、周溝は本北側に25cm×10cm、西南側に25cm×10cmで壁柱列が殆んど全壁面に残されていた。

P1 (50cm×45cm)、P2 (30cm×40cm)、P3 (30cm×40cm)、P4 (40cm×30cm)は主柱であろう。カマドは、本北壁に70cm×70cm、高さ不明のものが僅かに残存していた。本住も攪乱されて床面の凹凸がはげしく、遺物の完形はすくなかったようである。

遺物については下記のとおりである。



第73図 第1調査区第34号竪穴住居址(SI34)平面実測図



第74图 第1调查区第34号竖穴住居址(SI34)出土遗物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①10cm ②2.5cm ③0.4cm	丸底でゆるやかに立ち上がり、口唇部は内反する。内部はタテヘラの跡あり。外部は横ヘラで整形。	良好 黒まじり 白色	1/4残
2	坏 (須恵)	①12cm ②3cm ③0.3cm ④9cm	底部から口縁部は急に立ち上がり外反する。輪積みでヘラナデ。	良好 青白色	3/5残
3	坏 (須恵)	③0.4cm ④9cm	ロクロで整形、のちにヘラケズリ。砂粒を含む。	良好 砂粒 青灰色	3/5残
4	甕 (土師)	①14cm ②10cm ③0.4cm	胴部はふくらみを有する。口縁部は強く外反し、口唇部にはのりを有すめ。砂粒を含む。ロクロ整形。	良好 砂粒 淡褐色	口縁部
4'	甕 (土師)	①22cm ②30cm ③0.4cm ④8.0cm	底部からの立ち上がりは稍々丸味を有する。口縁部は短いが急に外反する。ロクロ整形。	良好 黒褐色	1/4残
5	甕 (土師)	①20cm ②9cm ③1.0cm	胴部ふくらみを有する。口縁部は大きく外反する。口唇部は美しいノリを有する。砂粒を含む。ロクロ整形。	良好 砂粒 灰黒色	1/4残
6	甕 (土師)	②10cm ③1.0cm	胴部稍々ふくらみを有する。口縁部は大きく外反し三段ののりを有する。胴部には数条の横線がえがかれる。	良好 褐色	完
7	甕 (同上)	②7cm ③1cm ④7cm	胴部のふくらみはない。外部はヨコヘラ整形。	良好 褐色	底部と 胴部の 1部 1/4残
8	土錘	①3cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
9	土錘	①3.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	良好 褐色	完
10	土錘	①3.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	良好 褐色	完
11	土錘	①3.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	良好 褐色	完
12	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	良好 褐色	完
13	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	1/2
14	磨石		第74図参照		

遺物

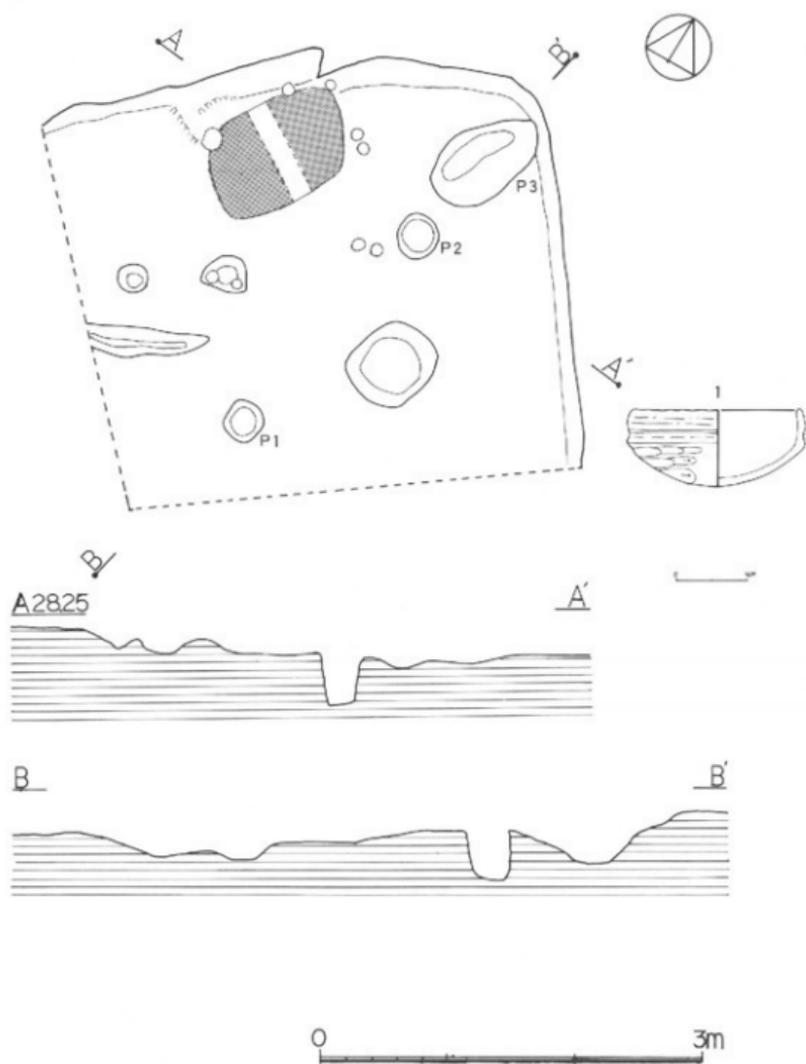
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
15	磨石		第74図参照		
16	敲石片		第74図参照		

第35号竪穴住居址 (SI 35) (第75図)

本住は本遺跡の最南端でSI22に隣接する。軸線はほぼ35度西方に向けて造られる。南側と西側は通路に当たるため調査は不能であるが、横長3.90mの方形プランで、約3分2残存とみた。

壁高は東10cm、北20cm、西30cmが計測された。なお、P1(30×40cm)、P2(35cm×40cm)は支柱ではないかとみられP3は貯蔵穴ではなかろうか。カマドは西北壁に100cm×90cm、高さ15cmが残されていた。床面は固いが凹凸がはげしく、遺物等も小破片のみで注記するほどのものはなかった。土器片は鬼高期が大部分であるように思われた。



第75図 第1調査区第35号竪穴住居址(S135)平面実測図・出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12cm ②4cm ③0.3cm	底部は丸味を有する。稜を有し口縁部の立ち上がりは急である。稍々内反ぎみであって、内部はタテヘラ、外部はヨコヘラ整形。	良好 褐色	完

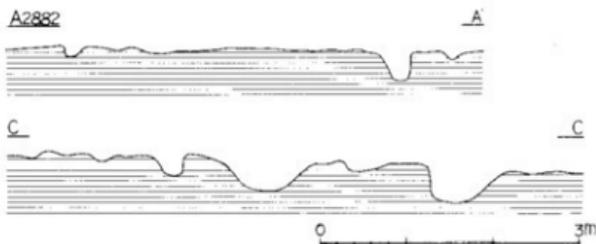
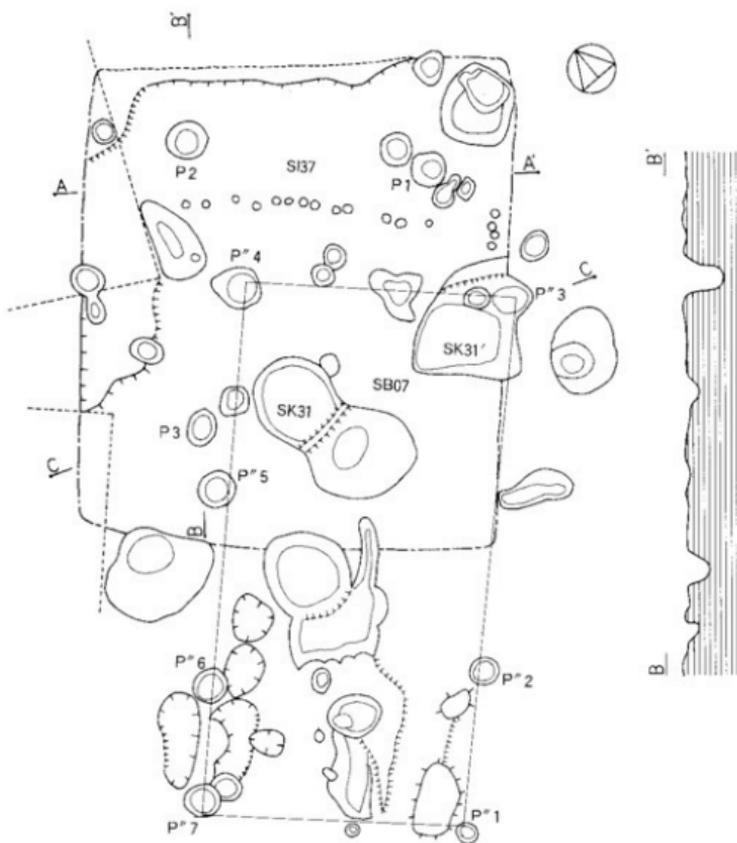
第 37 号竪穴住居址 (SI 37)・第 37' 号竪穴住居址 (SI 37') - 第 7 号掘立柱建物遺構 (SB 07)
(第 76 図)

SI 37

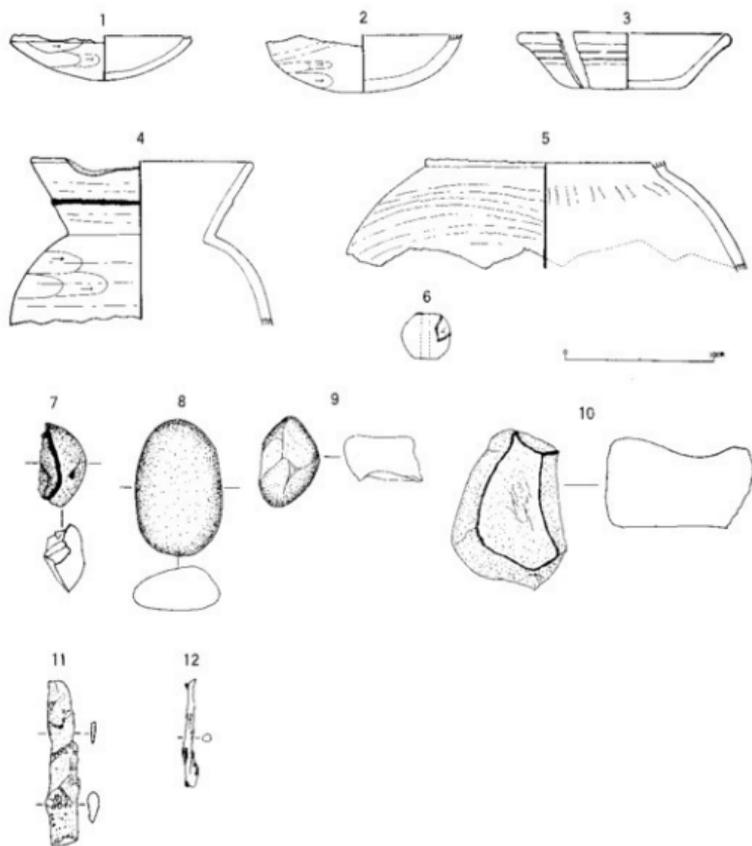
本住は SI19 の南東に位置し、SI37' と重なる。軸線をほぼ 50 度東方に向けている。平面形状は縦長 4.76 m、横長 5.60 cm の方形プランである。

壁高は北壁だけに 10 cm 残されているだけで後は消失したが、各壁下に壁柱列が残されていたので、その形状を知ることが出来た。床面はひどく攪乱され凹凸がはげしく、出土遺物も小片が多いようであるが、それらは鬼高期の坏片、甕片であると判断した。なお、主柱は P1 (30 cm×30 cm)、P2 (30 cm×40 cm)、P3 (35 cm×50 cm)、P4 は不明であった。

SB07 SI 3 7, SI38' の上に本住は建てられた。軸線もほぼ前者と同様であった。平面形状は縦長 6.15 m、横長 3.10 m の方形プランである。主柱は P1" (40 cm×50 cm)、P2" (30 cm×35 cm)、P3" (30 cm×25 cm)、P4" (20 cm×30 cm)、P5" (25 cm×30 cm)、P6" (30 cm×35 cm)、P7" (30 cm×40 cm) があげられる。



第76图 第1调查区第37号竖穴住居址(S137)第7号据立柱建物遺構(SB07)
第31号31'号土坑状遺構(SK31・31')平面実測図



第77図 第1調査区第37号竪穴住居址(Si37)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ② 1.0cm ③ 0.4cm	底部は丸味を有し、立上りはゆるやかである。 稜を有し口縁部は内傾。ロクロを被使用しヨコヘラ整形。	良好 褐色	1/3残
2	坏 (土師)	①12.0cm ② 3.0cm ③ 0.6cm	丸底は立上がりはゆるやか。口縁部では内反する。	良好 黒褐色	1/3残

遺物

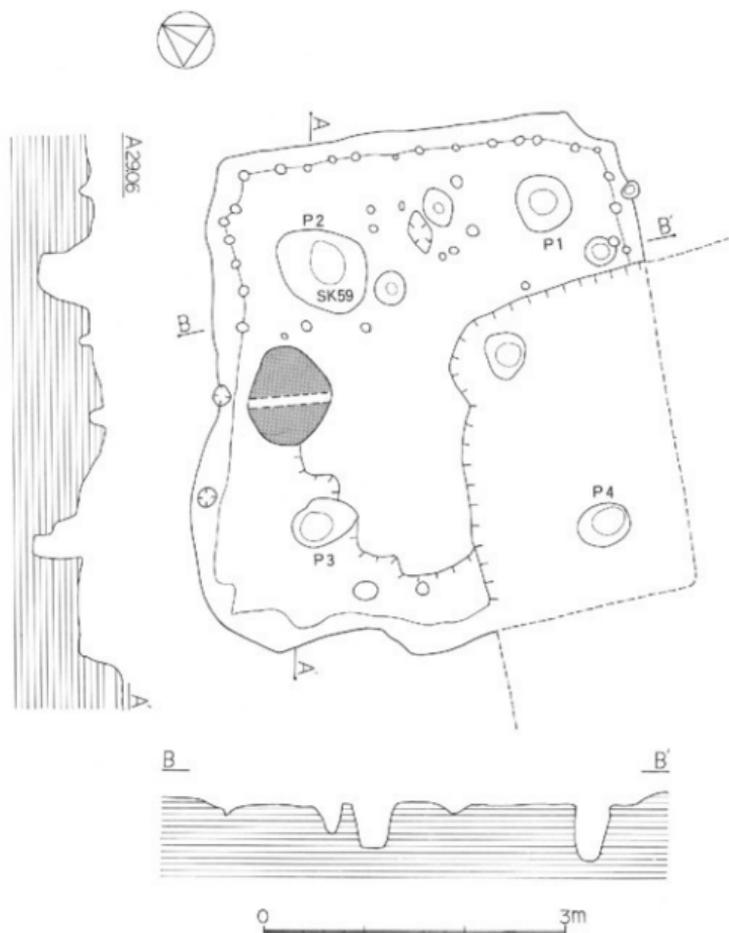
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏 (願恵)	①14.0cm ② 3.0cm ③ 0.3cm ④ 8.0cm	底部からの立上りは徐々に外反する。軸積み痕、ヘラ整形。	良好 灰黒色	1/4残
4	高台付 壺	①17.0cm ②14.0cm ③ 6.0cm ④12.0cm	高台部は高くひろがり有する。胴部はふくらみを持ち、ロクロヘラ整形。	良好 褐色	1/4残
5	甌	①31cm ③ 0.4cm	底部からの立ち上がりはゆるやか。ロクロ整形。	普通 黒褐色	1/4残
6	土鍾	①3.5cm 孔0.7cm	磨減あり	褐色 良好	完
7	磨石片		第77図参照		
8	磨石		第77図参照		
9	磨石		第77図参照		
10	敲石		第77図参照		
11	刀子		第77図参照		
12	不明の 鉄片		第77図参照		

第41号竪穴住居址 (SI 41) (第78図)

本住はSI36構築のため切り込まれ、約3分の2残存する。軸線をほぼ40度東方へ向けて建てられている。平面形状は縦4.60m、横5.50mの方形プランである。

壁高は西南壁40cm、西北30~10、東北5cm、東南10cm、そして周溝は西北壁20cm×15cm、北東20cm×15cm、東南20cm×15cm残されている。支柱はP1(40cm×50cm)、P2(35cm×50cm)、P3(30cm×55cm)P4(30cm×50cm)となっている。カマドは北西壁中央部に残され90cm×90cmそして高さは20cm。なお床面は固いが凹凸が多くSK59も掘られている。遺物も全て小片のみで注記すべきものはすくないが、鬼高期のものが多いようである。



第78図 第1調査区第41号竪穴住居址(S141)・第59号土壇状遺構(SK59)平面実測図



第79図 第1調査区第41号竪穴住居址(S141)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 (土師)	②16.0 ③1.0	胴部からふくらみはなく、口唇部は外反してのりを有する。ロクロ整形	良好 淡褐色	胴部のみ ^{1/4}
2	甕	②6.0 ③1.0	胴部は少々ふくらみを有し、口縁部はいちじるしく外反する。ロクロ、ヘラで整形、砂粒を含む	良好 砂粒 淡褐色	口縁部
3	土鍾	①3.0 孔0.7	磨減なし	良好 褐色	完

第47号竪穴住居址 (SI 47)・第5号掘立柱建物遺構 (SB 05) (第80図)

SI 47

本住はSI 46の東側に位置し、軸線をほぼ40度西方に向けて造られている。平面形状は縦長6.10 m、横長6.40 mの方形プランをなす。

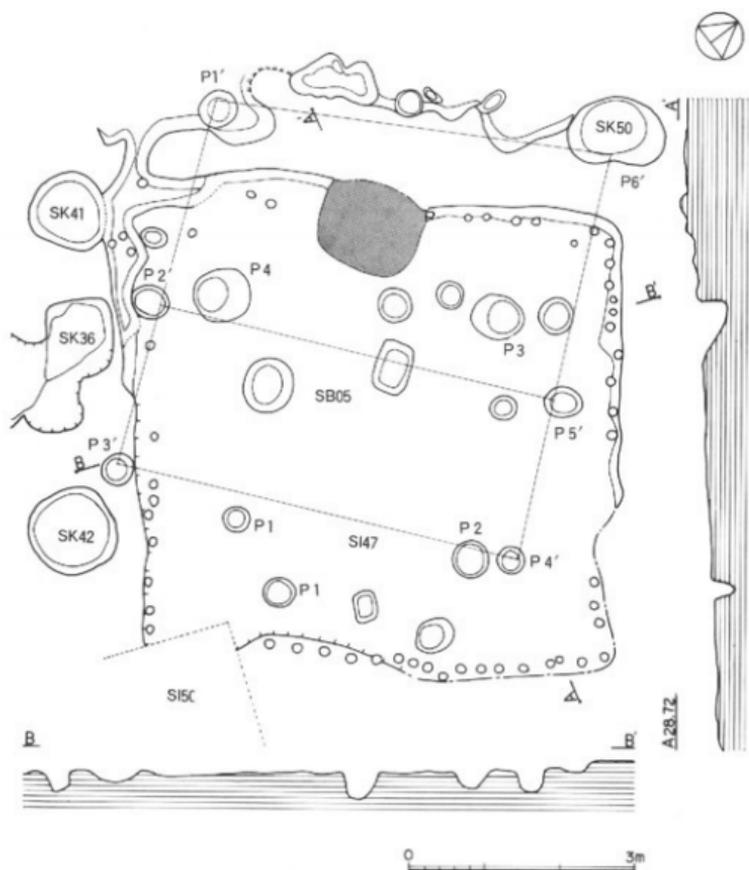
壁高は西側10 cm、北側15 cm、東側で10 cm、南側1部に10 cm残され、壁柱列は四方に造られていた。主柱はP1 (60 cm×70 cm)、P2 (30 cm×20 cm)、P3 (40 cm×30 cm)、P4 (60 cm×45 cm)がそれぞれあろうか。カマドは1.10 m×1.20 m×15 cmで、床面にはピットが多く掘りこまれているが、これは後になって造られたものであろう。

SB 05

本住はSI 47の上に建てられているが、軸線をほぼSI 47と同様であった。平面形状は縦長5.50 m、横長5.20 mの方形プランである。

主柱はP1' (120 cm×80 cm×50 cm)、P2' (40 cm×40 cm)、P3' (40 cm×50 cm)、P4' (30 cm×35 cm)、P5' (30 cm×30 cm)、P6' (30 cm×30 cm)、という配列になろうか。

なお、これらの住居址の中にSK 36、SK 41、SK 42、SK 50が掘られているが、それは後記したい。



第80图 第1調査区第47号竪穴住居址(SI47)第5号掘立柱建物遺構(SB05)
 第36号41号42号50号土壇状遺構(SK36・41・42・50)平面実測図

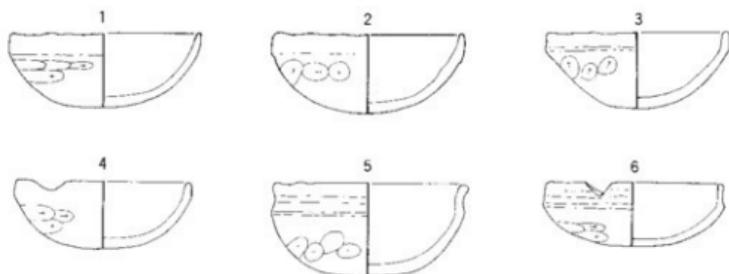


第81図 第36号土壊状遺構(SK36)出土遺構

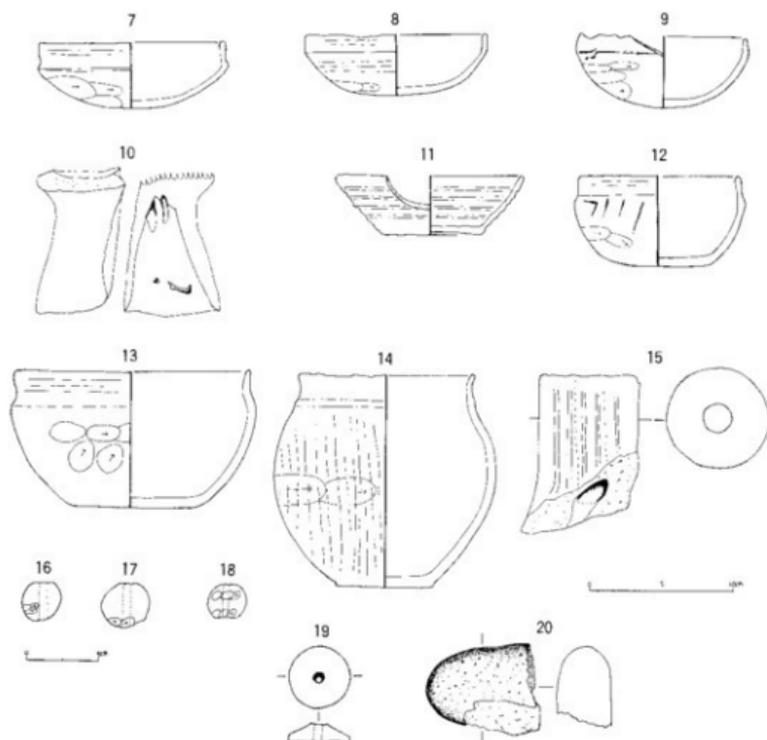
遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (須恵)	①14.0cm ②4.0cm ③0.4cm ④9.0cm	底部からの立ち上がりは稍々急で外反する。輪積み痕あり。	良好 灰青色	3/8残
2	坏 (須恵)	①11.0cm ②3.0cm ③0.5cm	底部からの立ち上がりは稍々急で、外反する。輪積み痕あり、ヨコヘラナデ。	良好 灰青色	3/8残



第82図 第1調査区第47号竪穴住居址(SI47)出土遺物



第82図 第1調査区第47号竪穴住居址(S147)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13.0cm ②4.0cm ③0.5cm	丸底で器肉が厚い。内外共にヨコヘラ	良好 褐色	完
2	坏	①13.0cm ②4.0cm ③0.5cm	同上	同上	完
3	坏	①13.0cm ②4.0cm ③0.5cm	同上	同上	完

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
4	坏	①12.0cm ②3.0cm ③0.5cm	同上	同上	完
5	坏	①13.0cm ②5.0cm ③0.5cm	丸底で稜を有し立ち上りは垂直である。	同上	完
6	坏 (土師)	①12.0cm ②4.0cm ③0.4cm	丸底で稜を有し立ち上りは急であるヘラ整形	良好 灰黒色	
7	坏 (土師)	①12.0cm ②4.0cm ③0.3cm	丸底で稜を有し、口縁部でやや内傾する	良好 黒塗	
8	坏 (土師)	①12.0cm ②4.0cm ③0.3cm	丸底で口縁部は立ち上る。内部黒塗り外部ヘラ整形	良好 褐色	
9	坏 (土師)	①11.0cm ②4.0cm ③0.3cm	丸底で口縁部で立ち上る内部黒塗	良好 褐色	
10	高坏 (土師)	③1.0cm ④8.0cm 脚高7.0cm	脚部は太く広がるタテヘラナデ	良好 褐色	脚部
11	坏 (須恵)	①12.0cm ②3.0cm ③0.4cm ④6.0cm	底部からの立ち上りは稍々急で外反する。輪積み痕を有する	良好 灰青色	1/4残
12	碗 (土師)	①11.0cm ②6.0cm ③0.4cm	底部からの立ち上りは丸味をおび、頸部に稜を有し、口縁部からの立ち上りは急である。内外共に横ヘラ・ナデ整形、器肉が厚く、胴部に柄の圧痕あり	良好 褐色	完
13	碗 (土師)	①16.0cm ②8.0cm ③0.4cm ④8.0cm	底部からの立ち上りは丸味を有し、頸部には明確な稜を有し、口縁部は内傾しながら口唇部で外反する。ロクロ横ヘラ整形	良好 褐色	完
14	壺 (土師)	①12.0cm ②15.0cm ③0.4cm ④6.0cm	底部からの立ち上りは稍々丸味を有し、頸部は大きく内反し、口縁部は短かく外反するロクロ横ヘラ整形	良好 褐色	完
15	支脚	①8.0cm ②6.0cm		良好 褐色	1/4残
16	土錘	①3.0cm 孔0.4cm	磨滅なし	良好 褐色	完

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
17	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
18	土鍾	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
19	紡錘車		第82図面参照		1/4
20	磨石		第82図面参照		

第50号竪穴住居址 (SI 50)・第51号竪穴住居址 (SI 51)・第52号竪穴住居址 (SI 52) (第83図)

SI 50

本住は本調査の最東端に当り、SI 52を造るものに3分1が切りこまれている、軸線をほぼ15度東方にかたむけて造られている。本住の平面形状は縦長5.50m、横長5.70mの方形プランである。

壁高は西側で40cm、北側で30cm、南、東側にはない。主柱はP1(40cm×25cm)、P2(40cm×35cm)、P3(30cm×25cm)、P4(30cm×25cm)でカマドは1.30m×1.20m、高さ20cmであった。床面は平坦で固く、遺物の出土も多かった。

SI 51

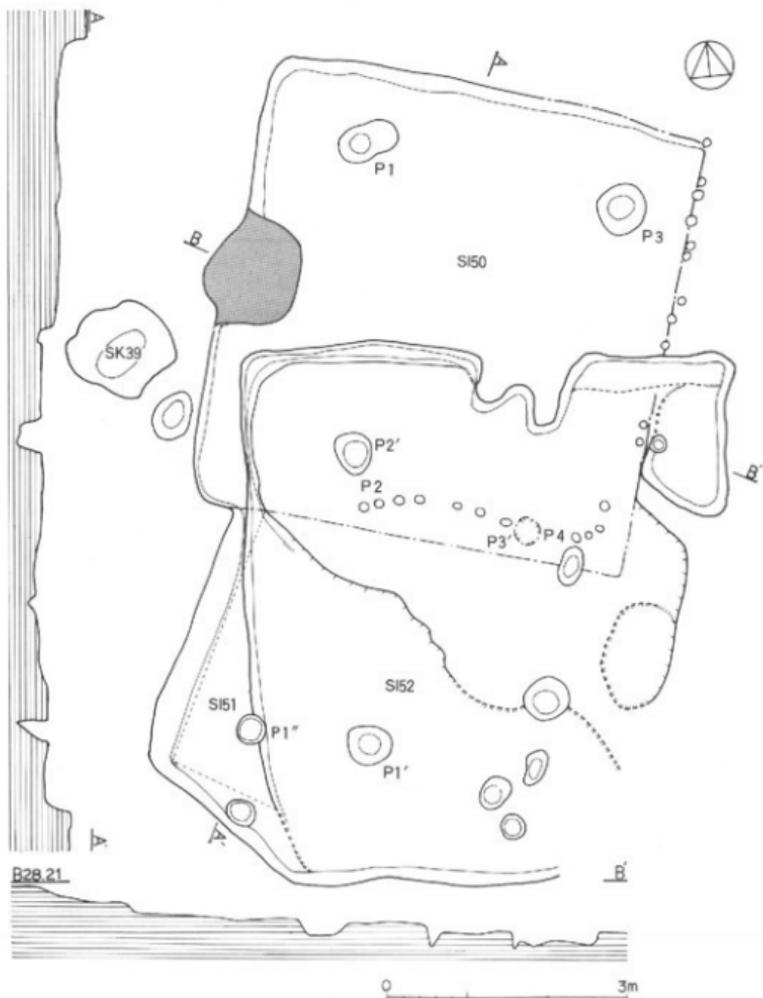
SI 52構築のため切りこまれ、極めて1部分しか残されていない。したがって構築状況もはっきりしないが、方形状プランであろう。

壁高の1部は残存するが南側で50cm、西側で40cm、そして主柱もP₁(25cm×40cm)がただ1つだけ残されていた。

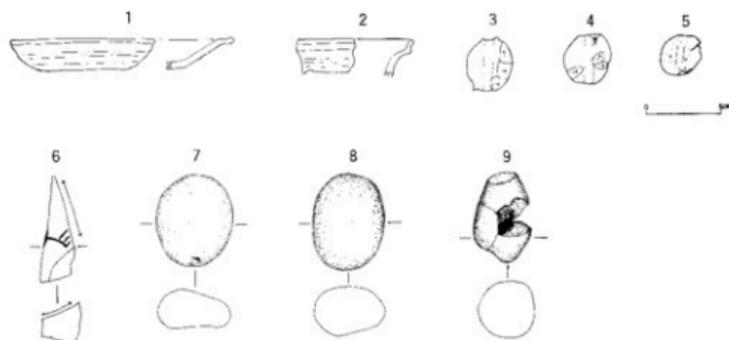
SI 52

本住はSI 51、SI 50を切りこんで造る。軸線をほぼ15度東へ向けて建てられている。

壁高は南側10cm、西側15cm、北側20cm、そして周溝は西壁下に15cm×15cm、北15cm×20cmが残されている。主柱はP1'(40cm×20cm)、P2'(35cm×35cm)、P3'(30cm×25cm)がそれに当るか。床面は固いが凹凸があり、遺物も小片のみで注記するには至らないが、鬼高期のものが多いようである。



第83图 第1調査区第50号51号52号竪穴住居址(SI50・51・52)第39号土壇状遺構(SK39)平面実測図

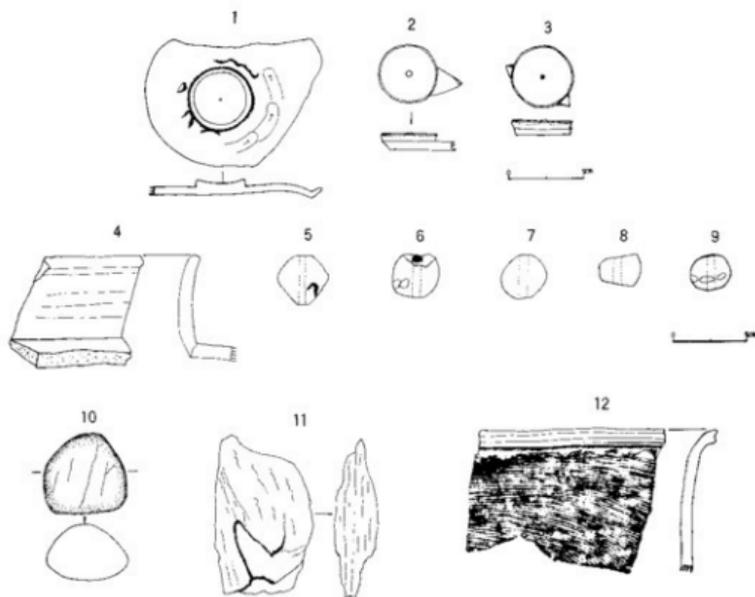


第84図 第1調査区第50号51号竪穴住居址(S150・51)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (須恵)	①12cm ②2.5cm ③0.4cm	底部からの立ち上がりはゆるやか。口唇部は 稍々外反する砂粒あり、ロクロ、ヘラナデ	良好 砂粒 灰白色	1/5残
2	坏 (須恵)	③0.3cm	口縁部は外反し、口唇部は垂直に立ち上がる	良好 灰白色	残片
3	土錘	①3.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	良好 褐色	完
4	土錘	①3.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
5	土錘	①2.5cm 孔不明	磨滅あり	良好 褐色	1/5
6	不明石 片		第84図参照		
7	磨石		第84図参照		
8	磨石		磨滅あり		
9	磨石片		磨滅あり		



第85図 第1調査区第52号竪穴住居址(S152)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (蓋) (須恵)	①10.0cm ②8.0cm ③0.5cm ツمام径 3.0cm	上部は一般に平担で口縁部になり、稍々内反気味。ツمامは丸形。ロクロ使用ヘラ整形	良好 淡褐色	1/3残
2	坏 (蓋)	③0.6cm	残片でツمامのみ。	良好 灰褐色	残片
3	坏 (須恵)	①4.0cm ③0.5cm	砂粒まじり、内部はくぼみハケ整形	良好 灰褐色	残片
4	甕 (須恵)	②6.0cm ③1.0cm	口縁部のみ。立ち上がりは急で外反し口唇部にはのりを有する、ロクロ使用、横ヘラナデ	良好 灰青色	口縁部
5	土錘	①3.5cm 孔0.6cm	磨減ない	良好 褐色	完
6	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減ない	良好 褐色	完

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

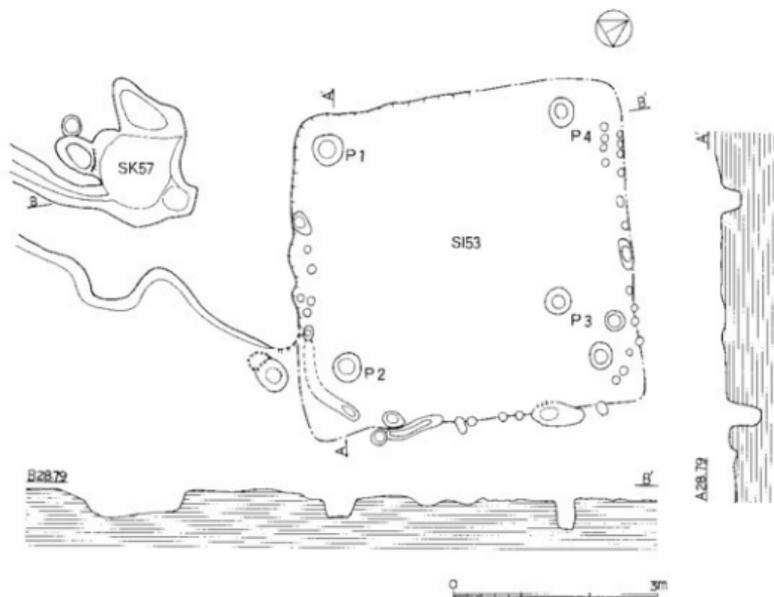
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
8	土錘	①2.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
9	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	良好 褐色	完
10	磨石		第85図参照		
11	石核		第85図参照		
12	広口甕 (須恵)	11.9 × 12.3cm	胴部から口縁部にかけて大きく開き、口唇部は急激に外反する。口唇部外側にはくの字状の整形が行われる。外器面は工具痕によるたたきをもっている。器面内側の整形は回転ヘラナデを施している。	普通 砂粒 黒灰色	口縁部 片

第53号竪穴住居址 (SI 53) (第86図)

本住はSI 20の東側に位置し、軸線をほぼ50度西方へ向けて造られている。平面形状は縦4.70 m、横4.80 mの方形プランである。

壁高は西側で10 cm、南で10 cm、後は残されていない。周溝は不明であるが、壁柱側が三方に廻らされているので、その形状を把握することが出来る。主柱はP1 (35 cm×30 cm)、P2 (40 cm×45 cm)、P3 (30 cm×48 cm)、P4 (25 cm×30 cm)、床面は平坦で固い。

本住の両側にSK 57が掘りこまれている。

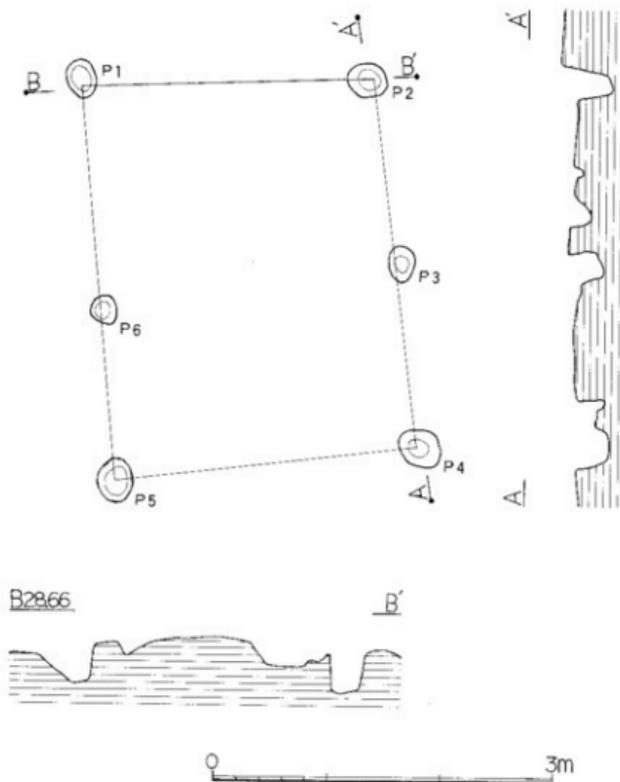


第86図 第1調査区第53号竪穴住居址 (SI53) 第57号土坑状遺構 (SK57) 平面実測図

第6号掘立柱建物遺構 (SB06) (第87図)

本住はSI10とSI11にはさまれている。軸線をほぼ10度西方に向けて建てられる。平面形状は縦長4m、横長で3mの割合に規格の礎りした築造で、方形プランをなしている。

主柱についてP1(1m×90cm)、P2(1.3m×1m)、P3(90cm×80cm)、P4(1.4m×1m)、P5(1.1m×80cm)、P6(1m×90cm)となる。床面は少々凹凸が認められた。



第87図 第1調査区第6号掘立柱建物遺構(SB06)平面実測図

(2) 第2調査区



第2調査区全景



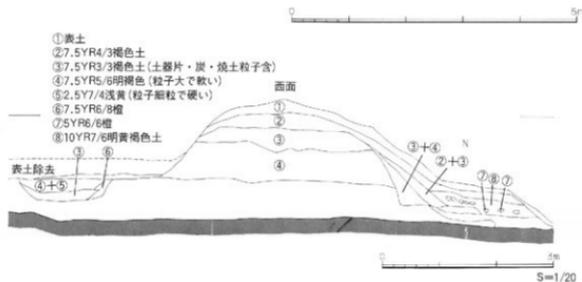
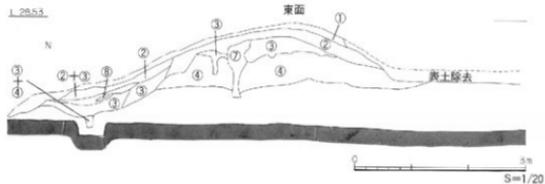
第88図 第2調査区発掘遺構全体図②

- ①7.5YR3/3褐色土 (ローム層)
- ②5Y7/1灰白色土
- ③10YR6/6黄褐色土
- ④2.5Y6/6明黄褐色土
- ⑤粘質

第2調査面



(長者) 第3調査区土層構造セクション図(北面)



第89図 第2調査区層位トレンチセクション図(南面)・第3調査区土層構造セクション図(北面)⑧

(2) 第2調査区

本調査区は、第1調査区に接続しその東北部に当る1,000m²の台地で、もしこれが城館ならば本郭に相当する場所である。ここでは掘立柱居址5棟が検出され、竪穴住居址は見られなかった。この中には土壌14が含まれていた。遺物は土師器が多いが、このうち高台付杯形土器、陶器、磁器片の出土を見たことから、これも第1調査区と同じくその上限は平安末期、そして下限は戦国期又はそれ以降のものとして推定したい。規格もやはり第1調査区と同じく大で9.00m×5.00m、小で5.00m×4.00mのもので、作業所か倉庫等に使用されたものであろう。

第1号掘立柱建物遺構 (SB01)・第2号掘立柱建物遺構 (SB02)・第3号掘立柱建物遺構 (SB03) (第90図)

本住は第2調査区のほぼ中央に位置し、SB02、SB03を重ねている。軸線はほぼ82度東方に向けられている。平面形状は縦長5.00m、横長8.90mの方形プランである。

主柱の配列についてはP1(40cm×20cm)、P2(50cm×20cm)、P3(40cm×30cm)、P4(40cm×30cm)、P5(30cm×30cm)、P6(30cm×30cm)、P7(40cm×30cm)、P8(30cm×25cm)、P9(40cm×30cm)、P10(30cm×35cm)。なお、P1、P3、P5は下屋柱であろう。

床面はほぼ平坦で、出土遺物については下記のとおりである。

SB02

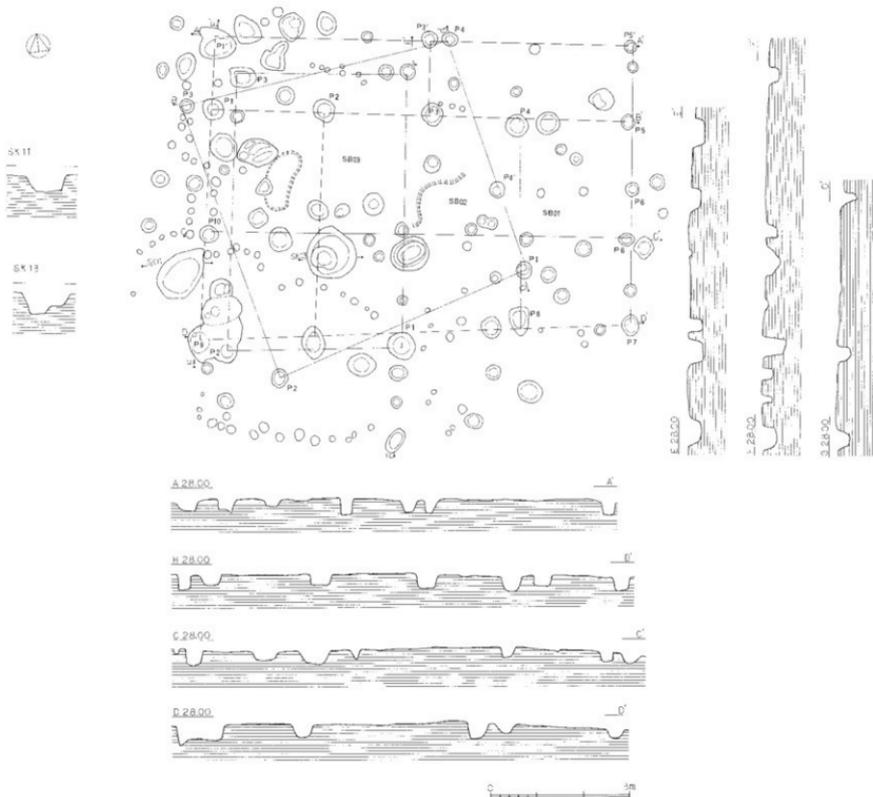
SB02はSB01と重なっていて、軸線をほぼ12度西方に向けている。平面形状は縦長4.00m、横長5.80mの方形プランである。

主柱はP1(40cm×30cm)、P2(35cm×30cm)、P3(30cm×20cm)、P4(30cm×20cm)であった。床面は平坦であるが軟い。

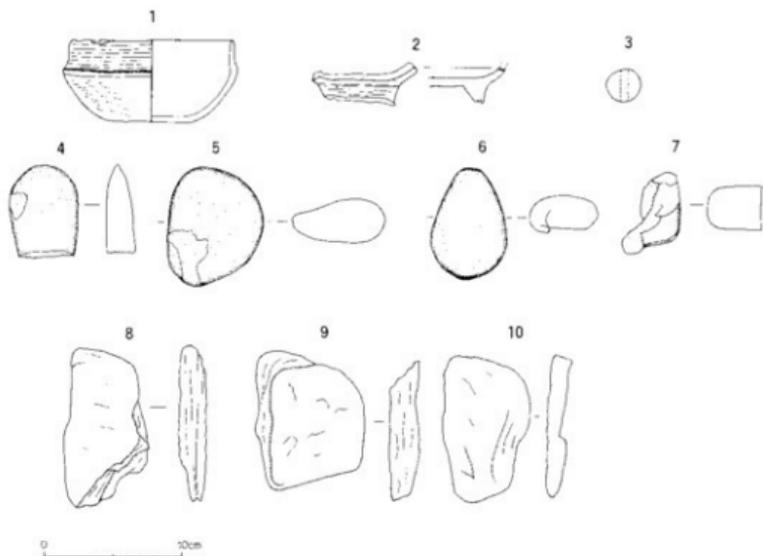
SB03

SB03はSB01とSB2と重複し、軸線はほぼ9度東方に向けて造られる。平面形状は縦長5.8cm、横長3.70mの方形プランである。

主柱はP1(50cm×25cm)、P2(20cm×45cm)、P3(50cm×20cm)、P4(20cm×40cm)である。床面は平坦で軟い。



第90图 第2调查区第1号2号3号孤立柱建物遺構(SB01・02・03)第11号・13号土壌伏遺構(SK11・13)平面実測図



第91図 第2調査区第1号掘立柱建物遺構(SB01)出土遺物

遺物

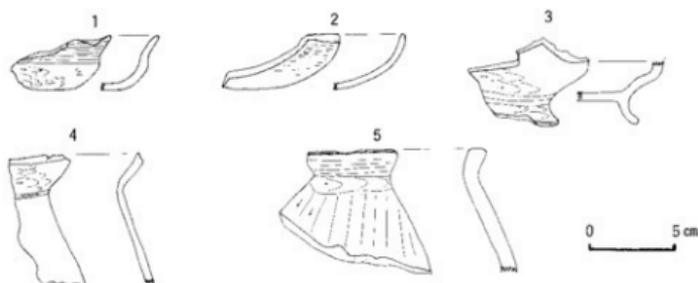
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ②6.0cm ③0.4cm	丸底で稜を有し、立ち上りはゆるやか、口縁部 稍々内傾。内外ヘラナデ	良好 淡褐色	1/2残
2	高台付 坏 (土師)	④6.0cm ⑤1.0cm	底部からの立ち上りはゆるやか ロクロ整形	良好 淡褐色	底部の み
3	土錘	①2.5cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
4	石斧		第91図参照		
5	磨石		第91図参照		
6	磨石		第91図参照		
7	磨石片		第91図参照		
8	不明石 片		第91図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	不明石片		第91図参照		
10	磨石片		第91図参照		

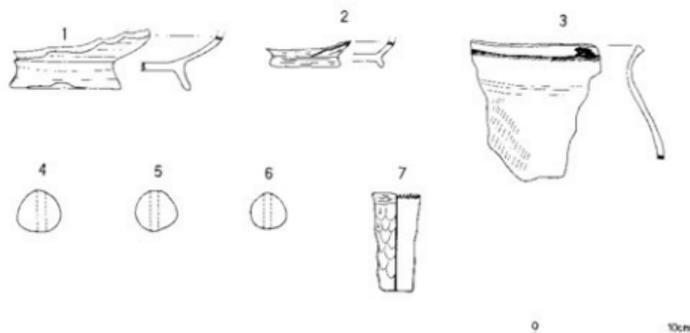


第92図 第2調査区第2号掘立柱建物遺構(SB02)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①11.0cm ②4.0cm ③0.4cm	底部は丸底でゆるやかに立ち上がり、腹をもち、口縁部外反する。内外横へら整形	良好 茶褐色	1/5残
2	坏 (土師)	①不明 ②4.0cm ③0.5cm	底部は丸底でゆるやかに広がり、口縁部は急に内反しながら立ち上がる。内外へらナデ	良 赤褐色	1/5残
3	高台付 坏 (土師)	②4.0cm ③0.3cm ④5.0cm	底部の高台は大きく広がり、胴部も稍々広がりを見せる ロクロ整形(粗雑)	普通 茶褐色	1/5残
4	壺 (土師)	①不明 ②8.0cm ③0.3cm	胴部はふくらみを有する。頸部から口縁部にかけては大きく外反する。内外ヨコへら整形	良好 茶褐色	
5	甗 (土師)	①19.0cm ②10.0cm ③1.0cm	胴部はふくらみを有し、頸部から口縁部は短くて外反する 内外タテへら整形	良好 褐色 (黒)	1/5残



第93図 第2調査区第3号掘立柱建物遺構(SB03)出土遺物

遺物

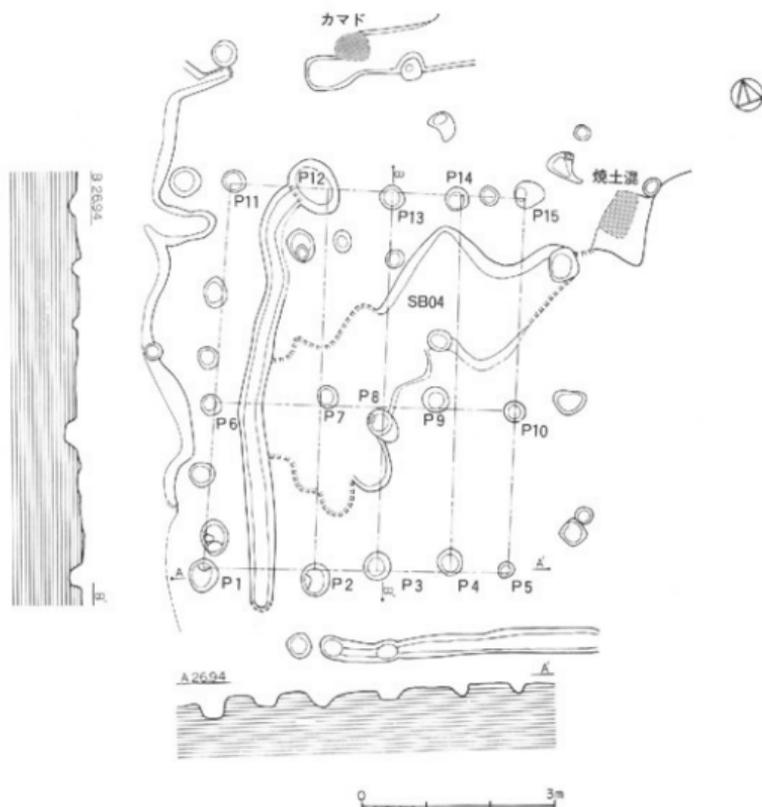
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏 (土師)	②4.0cm ③0.3cm ④8.0cm	底部は大きく広がる。胴部は大きく外反する ヘラ整形	良好 淡褐色	1/3残
2	高台付 坏 (土師)	②4.0cm ③0.3cm ④5.0cm	高台部の立ち上がりはやや垂直。胴部は大きく 広がる 内外ともにロクロ整形	良好 淡黄色	底部の み
3	甕 (土師)	①不明 ②9.0cm ③0.3cm	胴部のふくらみは少い。頸部から口縁部は大き く外反する 内外ヨコヘラ整形	良好 褐色	1/4残
4	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	完
5	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
6	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
7	支脚	上径3.5 cm 長7.0cm 下径2.5 cm			

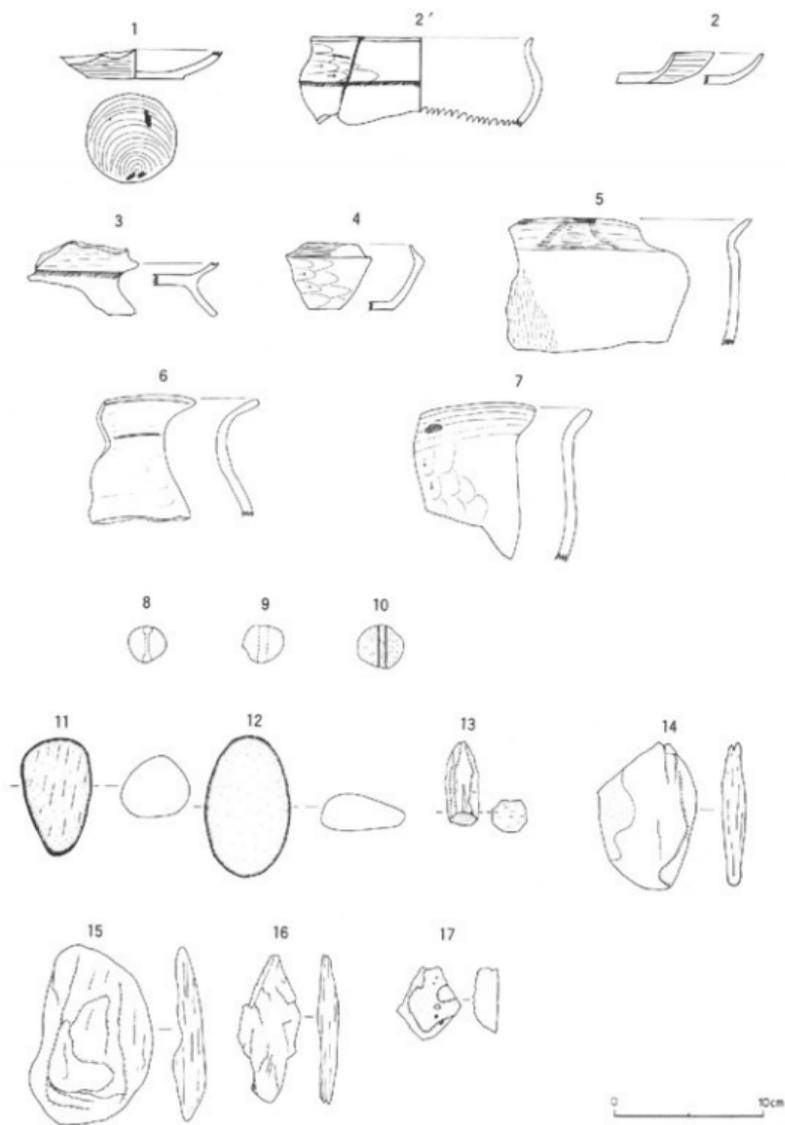
第4号掘立柱建物遺構 (SB04) (第94図)

本住はSB03に隣接し、軸線をほぼ15度東方に向けている。平面形状は縦長4.50m、横長5.50mの方形プランをなす。

主柱はP1 (50cm×37cm)、P2 (50cm×24cm)、P3 (45cm×21cm)、P4 (40cm×29cm)、P5 (20cm×20cm)、P6 (40cm×24cm)、P7 (30cm×17cm)、P8 (40cm×28cm)、P9 (45cm×22cm)、P10 (30cm×20cm)、P11 (40cm×30cm)、P12 (50cm×24cm)、P13 (40cm×25cm)、P14 (35cm×25cm)、P15 (50cm×20cm)となっており、割合に規格に合った掘立柱柱であった。床面は攪乱されたあとがあり、平坦ではなかった。



第94図 第2調査区第4号掘立柱建物遺構(SB04)平面実測図

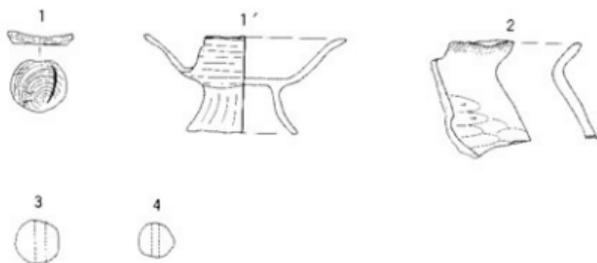


第95図 第2調査区第4号掘立柱建物遺構(SB04)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	②2.0cm ③0.4cm ④6.5cm	底部は回転糸切状。内部に輪積痕、底部からの立ち上がりはゆるやか。	良好 黄褐色	底部のみ
2	坏 (土師)	②2.0cm ③0.3cm ④5.0cm	底部は回転糸切状、底部からの立ち上がりはゆるやかに外反し口唇部で少々内傾する。	良好 淡褐色	1/2残
2'	坏 (土師)	①15.0cm ②6.0cm ③0.4cm	底部不明、頸部に稜をもち口縁部は内反するヨコヘラナデ	良好 淡褐色	
3	高台付 坏 (土師)	②2.5cm ③0.3cm ④6.0cm	底部の台の広がり大きい。立ち上がりは大きく外反するロクロ整形	良好 褐色	1/2残
4	坏 (須恵)	①9.0cm ④4.0cm	底部からの立ち上がりはやや急で稜を有し、口縁部は短くて内傾する。	良好 灰褐色	1/2残
5	甕 (土師)	①不明 ②8.0cm ③0.5cm	胴部のふくらみは少く、口縁部は口唇部にいたって外反する。タテヘラ削り	良好 黒まじり褐色	1/2残
6	甕 (土師)	①不明 ②8.0cm ③0.8cm	胴部のふくらみは少く、口縁部は強く外反するヘラナデ	普通 灰白色	口縁部 1/2残
7	甕 (須恵)	①不明 ②不明 ③0.8cm	胴部のふくらみは少く、頸部から口縁部にかけて外反する 胴部には輪状の模様	良好 青白色	1/2残
8	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	1/2
9	土錘	①2.5cm 孔0.7cm	磨減甚し、不整形	褐色	完
10	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
11	磨石		第95図参照		
12	磨石		第95図参照		
13	不明石片		第95図参照		
14	不石明片		第95図参照		
15	不明石片		第95図参照		
16	石核		第95図参照		
17	鉄器		第95図参照		
	1. 鉄滓		第95図参照		

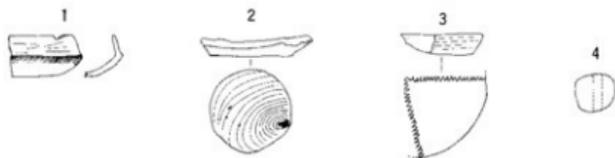


第96図 第2調査区第1号土坑状遺構(SK01)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	③0.3cm ④4.0cm	底部回転糸切状。 ロクロ整形	良好 黄白色	底部のみ
1'	高台付 坏 (土師)	①15.0cm ②7.0cm ③0.3cm ④8.0cm	台部から底郎にかけて広がり、立ち上がりは大きく外反し、口唇部でさらに外反する。輪積整形	良好 淡褐色	
2	壺 (土師)	①10.0cm ②8.0cm ③0.7cm	胴部のふくらみは少く、口縁部は大きく外反する。 内外ヘラ削り	普通 淡褐色	1/4残
3	土錘	径33.0cm 孔0.7cm	磨滅あり		完
4	土錘	径2.5cm 孔0.5cm	磨滅あり		完

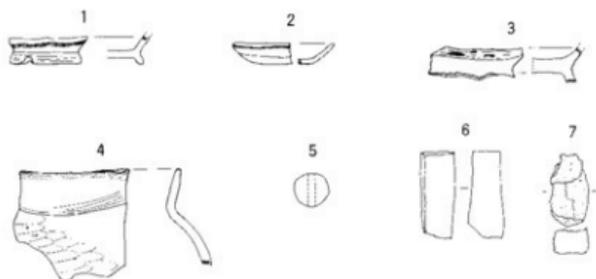


第97図 第2調査区第2号土壇状遺構(SK02)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①8.0cm ②2.5cm ③0.3cm	底より口縁部の立ち上がりは急でやや内反する 内外へら削り	良好 黒塗り	1/4残
2	坏 (土師)	①不明 ②5.0cm ③0.3cm	底部回転糸切状 ロクロ整形	良好 茶褐色	底部のみ
3	石皿	⑤5×5.5cm ③1.5cm			
4	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完



第98図 第2調査区第3号土壇状遺構(SK03)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

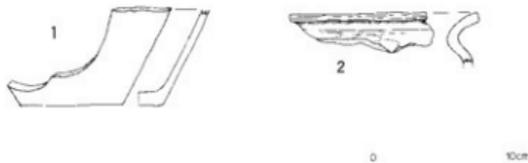
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏 (土師)	③0.3cm ④5.0cm	高台部の立ち上がりは垂直に近く、少々広がり をみせる 内部黒塗り、ロクロ使用ヨコヘラ整形	良好 灰白色	底部 のみ
2	坏 (土師)	①8.0cm ②.5cm ③0.3cm	丸底で立ち上がりはゆるやか。 軸横整形	良好 灰褐色	1/8残
3	高台付 坏 (土師)	①7.0cm ②1.5cm ③0.4cm	底部高台はやや広がり をみせる ヘラ削り	普通 灰褐色	底部 のみ
4	甕 (土師)	①7.0cm ②5.0cm ③0.4cm	胴部はふくらみを有し、頸部から口縁部の立ち 上がりは急でやや外反する。内外ともにヘラ整 形	良好 褐色	1/8残
5	土錘	径2.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
6	砥石		第98図参照		
7	鉄器 (鉄滓)		第98図参照		



第99図 第2調査区第4号土壇状遺構(SK04)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	②1.0cm ③0.3cm ④5.0cm	底部回転糸切り、黒塗り ヨコヘラ整形	良好 淡褐色	1/4残
2	土錘	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完



第100図 第2調査区第9号土壇状遺構(SK09)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕片 (土師)	②6.0cm ③0.4cm ④7.5cm	胴部のふくらみ少々。 内外ともにヘラ削り	良好 灰黒色	1/4残
2	甕 (土師)	①不明 ②3.0cm ③0.5cm	口縁部は大きく外反する 横ヘラ整形	良好 灰白色	口縁部

(3) 第3調査区



第3調査区全景



(3) 第3調査区

本調査区は第1調査区の中に含まれるものであるが、この中に通路を設けたので一応分けることにした。面積は800m²、西部にはるか下総沖積平野が一望のもとに見下ろされる。ここで検出された遺構は①竪穴住居址6、②掘立柱住居址3、③土壇1が検出された。遺物も第1調査区の出土品と全く同様で、掘立柱住居址もやはり平安末期からそれ以降に比定されるものと推定したい。また土壇もその殆んどが用途不明のものが多かった。なお、土壇は東側から西側斜面の左側を見ながら三段目の有段状遺構の最頂点に築造されているから東方から上って来た敵を防ぐために設けられた遺構であろうか。そうすると第3調査区は何等かの施設があったものなのか、掘立柱住居はそのため造られたものなのか。仲々に疑問の残る場所である。

第1号竪穴住居址 (SI01)・第7号竪穴住居址 (SI07) (第102図)

SI01

本住は第3調査区のほぼ中央部を占め、SI07を切りこんで造られている。軸線をほぼ45度東方にかたむけている。平面形状は1辺が5.00mの正方形のプランである。

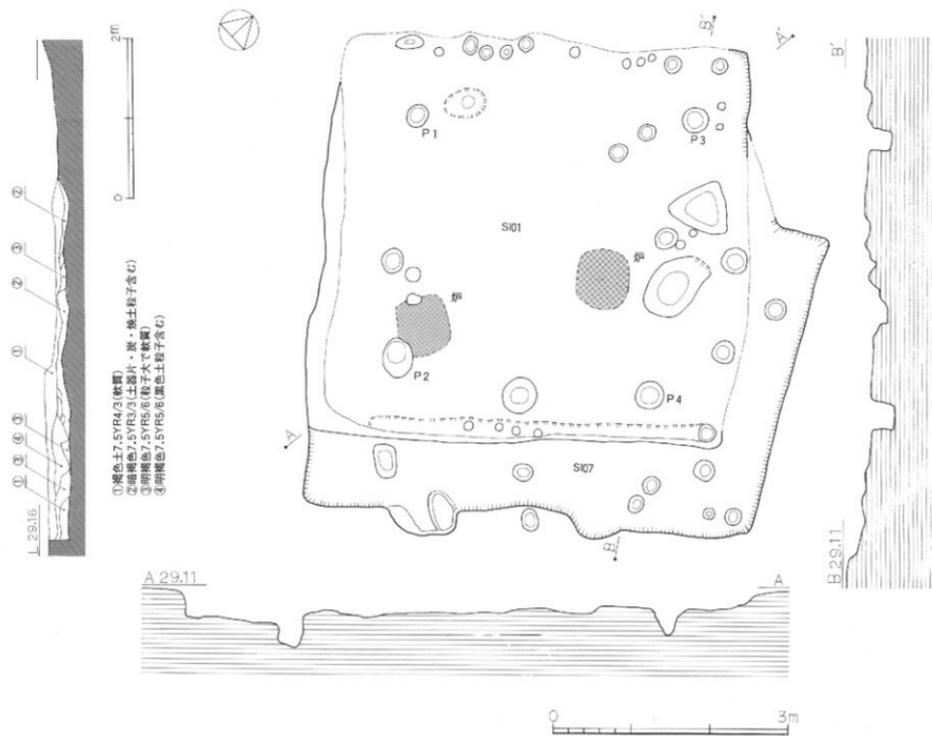
壁高は南東部で20cm～30cm、北東10cm、南西25cmとなっており、周溝は南東だけで15cm×10cm、そして全壁をとりまくように壁柱列が造られている。P1(25cm×30cm)、P2(25cm×30cm)、P3(30cm×40cm)、P4(30cm×30cm)。P5は3と判断されたがそれは40mm×40mm、高さ7cmであった。

床面は平坦で固い。遺物については下記のとおりである。

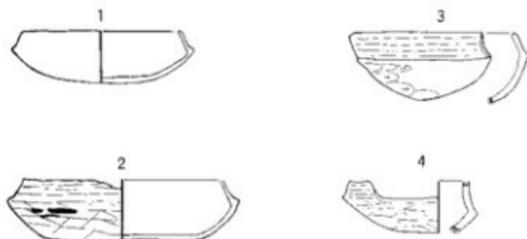
SI07

本住はSI01構築のため切りこまれ、その形状は5分の1程度しか残されていない。軸線はほぼSI01と同じである。平面形状は横長6.10mとなっているが縦長は現長3.70mのみで後は不明。方形と判断された。

壁高は北西1部15cm、北東15cm、南東20cm、南西の僅か1部は15cm、周溝は確認できないが、壁柱列は明確に残されていた。主柱→P3'(30cm×30cm)、P4'(25cm×30cm)はSI01に切りこまれたところで明確には判断しかねる。なお、遺物についてSI01に切りこまれた関係上、この中にまざっているように考えられる。



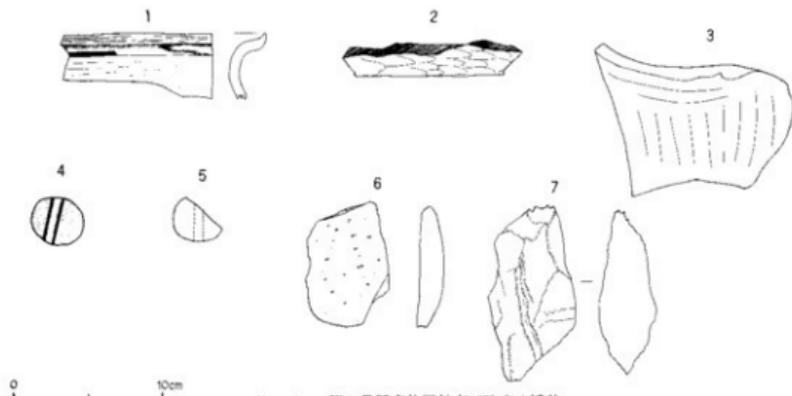
第102図 第3調査区第1号・7号壁穴住居址(S101・07)平面実測図



第103図 第1号竪穴住居址(S101)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①10.0cm ②3.0cm ③0.3cm	丸底でゆるやかに立ち上がる。稜を有し口縁部の立ち上がりは急で、少々内反する。横ヘラ整形	良好 黒ぬり	完
2	坏 (土師)	①12.0cm ②3.0cm ③0.3cm	底部はまるみをおび、稜を有し、口縁部の立ち上がりは短い内反する。内部タテヘラ、外部ヨコヘラ	良好 黒褐色色	1/4残
3	坏 (土師)	①不明 ②3.0cm ③0.4cm	底部はまるみを有し、稜から口縁部にかけての立ち上がりは内反、口唇部は外反	良好 褐色	1/4残
4	坏 (土師)	①不明 ②2.0cm ③0.3cm	底部はまるくゆるがやかに立ち上がり、稜を有する。口縁部は垂直に立上げるがやや内反する。ヘラナデ	良好 褐色	1/4残



第104図 第7号竪穴住居址(S107)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	①10.0cm ② 4.0cm (現高) ③ 0.3cm	胴部のふくらみはあるように思われる。口縁部は短かく大きく外反する。横位の沈線を有する。	良好 黒褐色	口縁部片
2	壺 (底部) 土師	①不明 ② 3 cm (現高) ③0.3cm	胴部の立上りはゆるやか。ロクロ使用ヘラケズリ。	良好 外黒褐色 内黒色	底部のみ
3	壺片	①不明 ②不明 ③不明		良好	胴部片
4	土鍾	① 3 cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
5	土鍾	①不明 孔0.5cm	磨減あり	褐色	1/4残
6	不明石片		第104図参照		
7	不明石片		第104図参照		

第2号竪穴住居址 (SI 02)・第3号竪穴住居址 (SI 03) (第105図)

SI02

本住はSI 01の南隣に位置し、SI 03構築のため切りこまれてほぼ3分の1程度残存するのみである。平面形状は縦長(現)4.50 m、横長(現)4.10 mの方形プランであるように思われる。

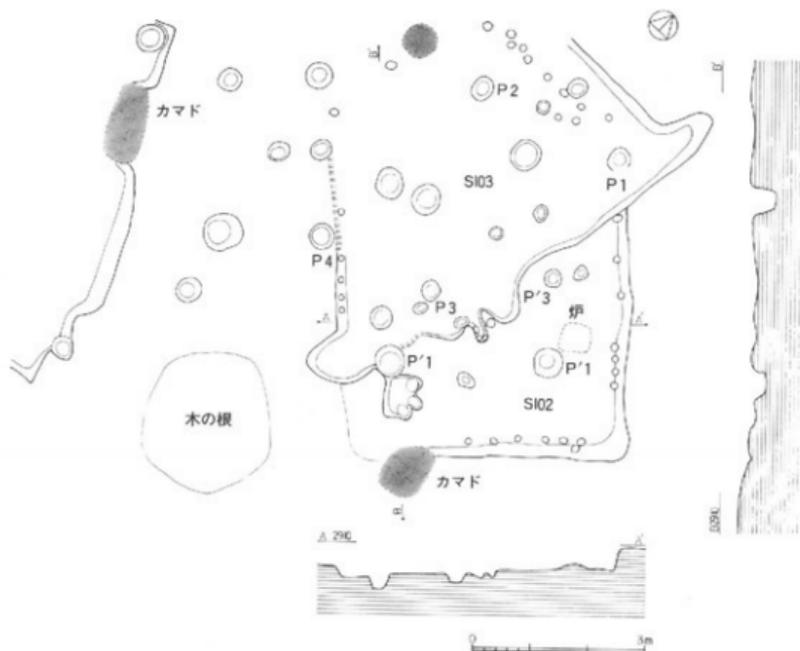
壁高は東北50 cm～45 cm、東南に20 cm～40 cm、周溝は不明である。支柱はP1だけで40 cm×60 cm、なおカマドが不完全な形で残されているがそれは70 cm×70 cm、高さ20 cmであった。

床面は平坦で、出土遺物も多く鬼高期とみられたが、下記のとおりになっている。

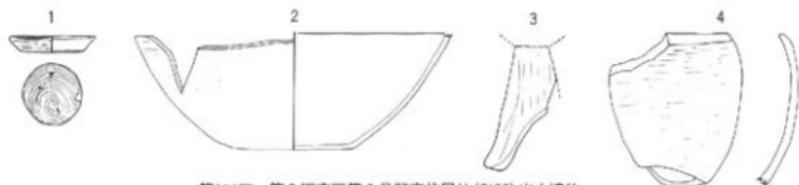
SI 03

本住はSI 02を掘りこんで造られている。軸線はほぼ15度東方に向けられている。平面形状は縦4.70 m、横長4.30 mの方形プランをなす。

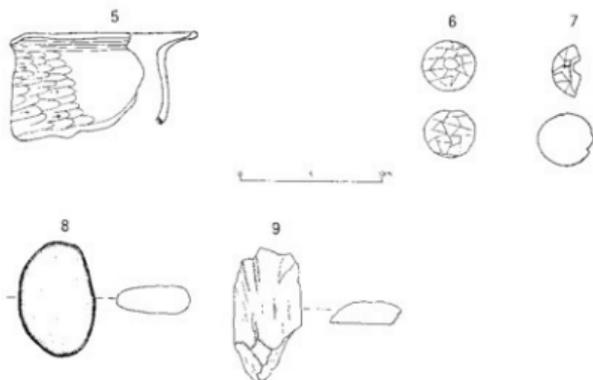
壁高は東側 25 cm×15 cm (1部残)、北 30 cm、西、南にはない。周溝は残されていないが壁柱列が四方にあるので住居の形状が理解された。壁柱の中には 10 cm×15 cm のものが多かった。主柱は P1' (30 cm×40 cm)、P2' (30 cm×40 cm)、P3' (30 cm×40 cm)、P4' は不明であった。床面北西側に炉が残されていたが、それは 65 cm×60 cm 深さ 50 cm であった。床面は平坦で固い。出土遺物については下記のとおりである。



第105図 第3調査区第2号・3号竪穴住居址(SI02・SI03)平面実測図



第106図 第3調査区第2号竪穴住居址(SI02)出土遺物

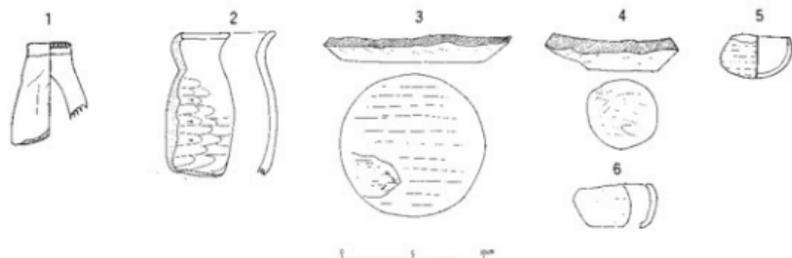


第106図 第3調査区第2号壘穴住居址(SI02)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	③0.3cm ④4.0cm	底部はより糸模様、ヘラナデ	良好 灰褐色	底部のみ
2	壘 (土師)	②5.0cm ③1.0cm ④8.0cm 胴部径 20.0cm	底部は小さく、胴部は大きく広がりまるみを有する。内外ヘラナデ	不良 灰褐色 砂粒含有	1/3残
3	高环脚部 (土師)	③1.0cm ④5.0cm	胴部は太く短い。 外部タテヘラ削り	良好 褐色	
4	壘 (土師)	①14.0cm ②9.0cm ③0.6cm ④7.0cm	胴部のふくらみは少ない。外部はヘラナデ。 造りはガッチリするも粗雑	良好 淡褐色	1/3
5	壘 (土師)	①不明 ②6.0cm ③0.8cm	胴部のまるみは少く、口縁部は強く外反する。 横ヘラ整形 内部に柄の圧痕あり	良好 褐色	口縁部 1/3残
6	土錘	①3.0cm 孔1.0cm	磨滅甚しい 整形不良	黒褐色	完
7	土錘	①3.0cm 孔不明	磨滅甚しい 整形不良	褐色	1/3残
8	磨石		第106図参照		
9	石核		第106図参照		



第107図 第3調査区第3号竪穴住居址(SK03)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高环脚部 (土師)	②6.0cm ③0.8cm ④2.0cm	脚部は短く太い。外部クテヘラ整形	良好 灰褐色	1/4残
2	壺 (土師)	①不明 ②10.0cm ③0.8cm	胴部のふくらみは少く、口縁部は短くて外反する	良好 褐色	胴と口縁部1/4残
3	壺底部 (土師)	①不明 ②10.0cm ③1.0cm	胴部はふくらみを有する 内外ヘラ整形	普通 褐色	1/4残
4	壺底部 (土師)	①不明 ②1.0cm ③1.0cm	胴部の立上りはゆるやか 外部横ヘラ整形	良好 褐色	1/4残
5	手ツク ネ土器 (土師)	①3.0cm ②2.0cm ③0.2cm	底部よるまるく立ち上がる。内外ともに不整形	普通 灰褐色	完
6	手ツク ネ土器 (土師)	①3.0cm ②3.0cm ③0.3cm	底部よりまるく立ち上がる。内外ともに不整形	普通 灰褐色	1/2残

第4号竪穴住居址 (SI 04)・第5号竪穴住居址 (SI 05) (第101図参照)

SI04

本住はSI 05を構築するために切りとられる。軸線はほぼ30度西方にかたむいている。その平面形状は、縦長は現長で2.70 m横も現長で1.30 mの方形プランをなす。残存部分は約4分の1程度であるように思われる。

壁高は北側で35 cm, 東側で20 cm, 主柱とみられるのはP₁のみで30 cm×40 cmである。床面はほぼ平坦で固い。

SI 05

本住はSI 05とSI 04を切り込んで作られる。軸線はほぼ50度西方に向けて建てられている。平面形状は横長4.00 m, 縦は切りこまれて不明だが現長で西側1.50 m, 東側2.40 mとなっており方形プランをなす。

壁高は南西20 cm, 北西20 cm～70 cm, 北東30 cm, 南東はない。周溝はみつからないが、主柱はP₁(40 cm×30 cm), P₂(30 cm×30 cm)で後は不明である。床面はほぼ平坦で固い。

第6号竪穴住居址 (SI06) (第101図参照)

本住は本調査区の南方に建てられた不明住居址築造のためその半分が切りこまれている。これは軸線をほぼ30度西方に向けて構築されている。平面形状は西側カマドの長さ9.3 mで東側で4 mとなり、後は切りこまれて不明であるが、方形プランをなしている。

壁高は30 cm～40 cm, 床面は凹凸が多い。主柱についてはP₁(35 cm×20 cm)、P₂(30 cm×25 cm)、P₃(32 cm×20 cm)がそれに当るものとみられた。なお西側に(1.5 m×0.5 m×40 cm)のカマドが残されていた。なお周溝部も20 cm×10 cmが明確に検出された。

第1号掘立柱建物遺物 (SB 01) (第101図参照)

本住は本調査区の東側に位置し軸線をほぼ5度西方に向けている。平面形状は縦長6 m, 横長5.50 mの方形のプランである。主柱はP₁(40 cm×35 cm), P₂(50 cm×56 cm), P₃(40 cm×35 cm) P₄(40 cm×40 cm)であろうが、それぞれの線上にピットの配列があり、例えばP₅(45 cm×25 cm), P₆(20 cm×20 cm), P₇(25 cm×20 cm), P₈(40 cm×25 cm)のように割合規格の太い柱列であった。遺物は小片が多く注記するものは少ないが、主に平安中期から後期に亘る遺物が多いようである。

第2号掘立柱建物遺構 (SB 02)・第3号掘立柱建物遺構 (SB 03) (第108図参照)

SB02

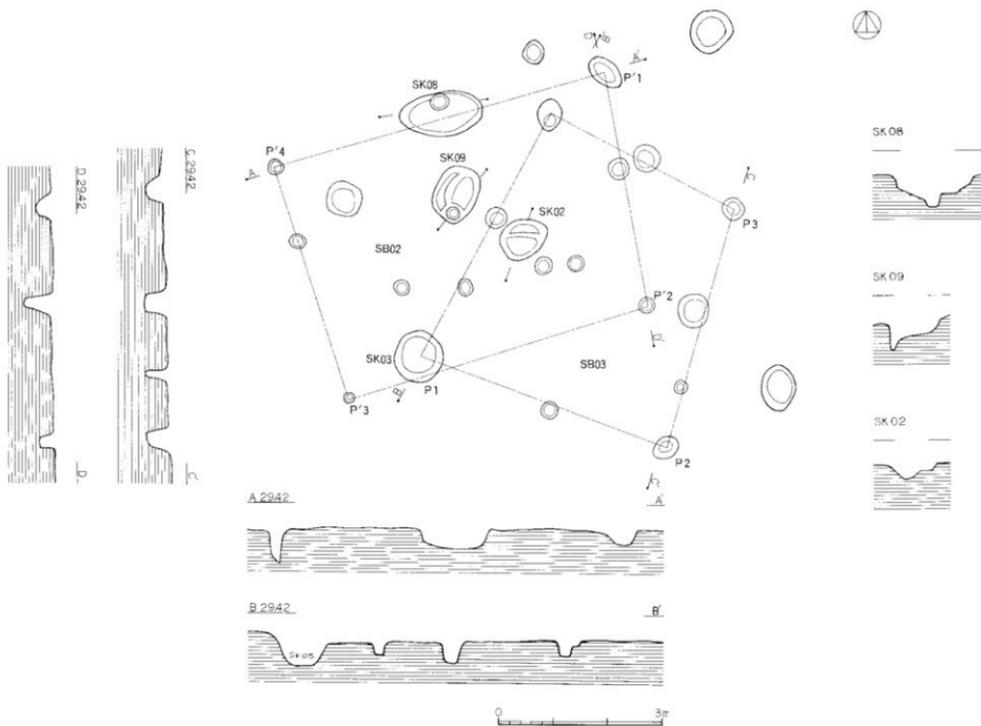
本住はSB 03の上に建てられ、軸線はほぼ40度西方にむけて造られている。平面形状は縦長4.

30 m、横長 6.30 m の方形プランで、主柱は P1 (50 cm×50 cm)、P2 (50 cm×40 cm)、P3 (30 cm×35 cm)、P4 (30 cm×36 cm) であろう。その中に平均 30 cm×20 cm 程度の柱列がみられる。床面は平坦であるが、出土遺物は割合い小片が多く注記するものは少い。遺物については下記のとおりである。

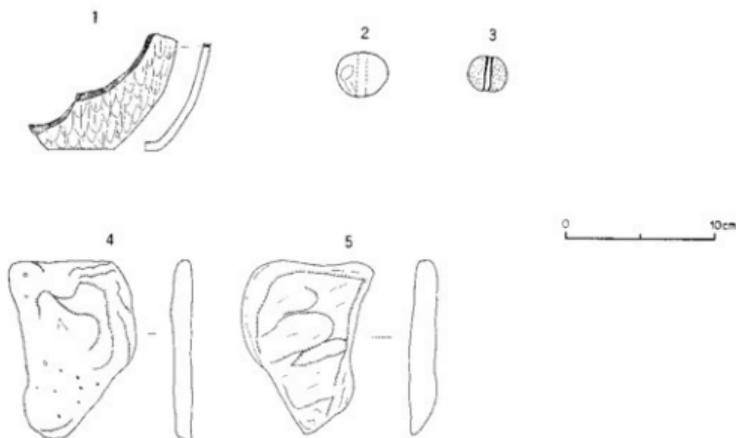
SB 03

本住は SB 02 構築のためその大半はこわされている。軸線はほぼ 10 度東方に向っている。その平面形状は縦長 4.00 m、横長 5.80 m の方形プランである。主柱は P1' (30 cm×60 cm)、P2' (50 cm×30 cm)、P3' (60 cm×25 cm)、P4' (70 cm×40 cm) であろうが、この線上に数本の支柱がある。床面は平坦である。

出土遺物については小片が多く注記するのは少いが、下記にあげておきたい。



第108図 第3調査区第2号・3号掘立柱建物遺構(SB02・03)平面実測図

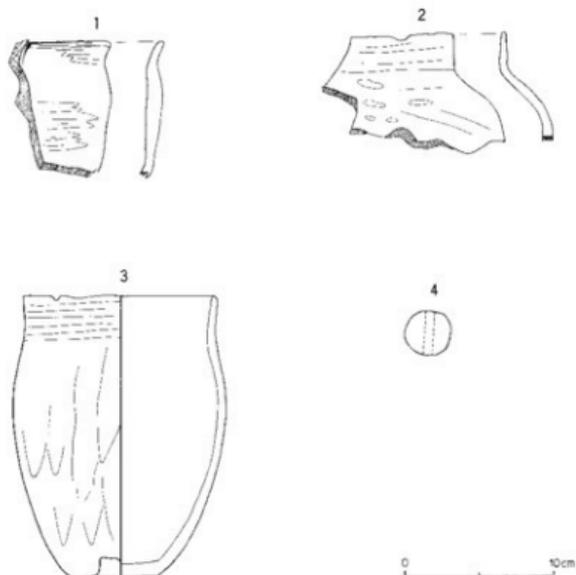


第109図 第3調査区第2号掘立柱建物遺構(SB02)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕胴部片 (土師)	②5.0cm ③0.4cm ④4.0cm	底部からの立ち上がりは少々ふくらみを有する。 外部タテヘラ整形、内部黒塗り	良好 黄褐色	1/4残
2	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	完
3	土鍾	①1.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	1/2残
4	不明石片		第109図参照		
5	不明石片		第109図参照		



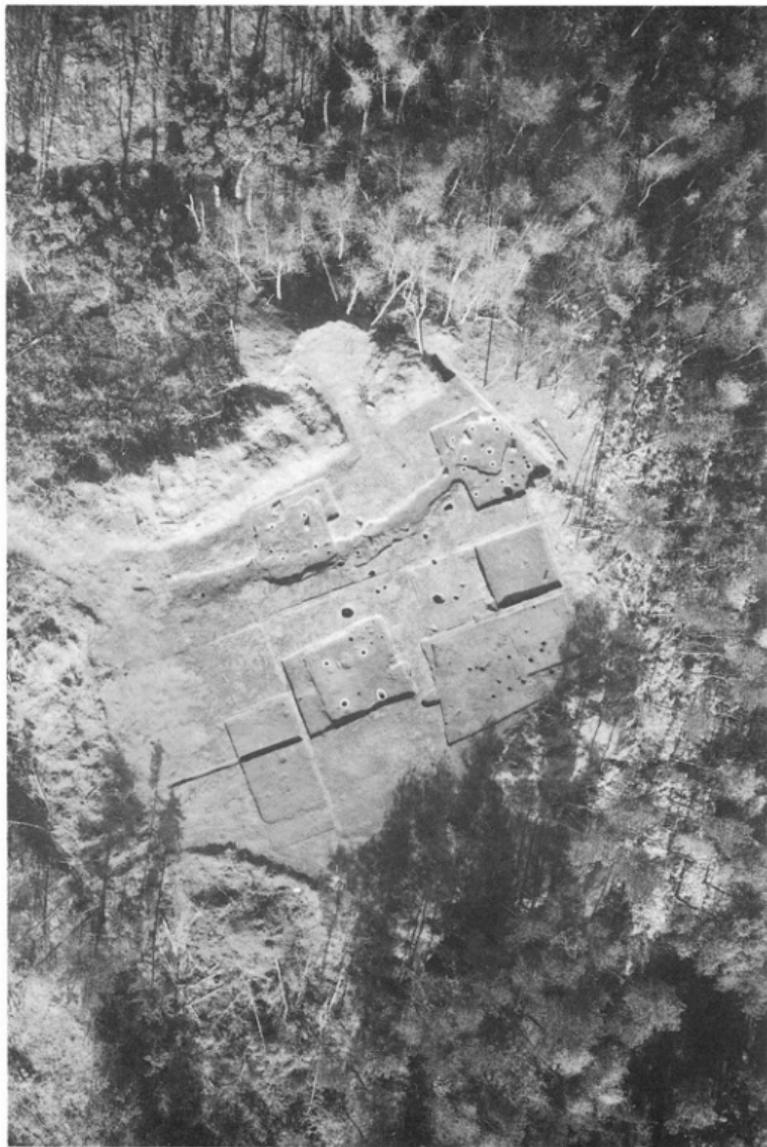
第110図 第3調査区第3号掘立柱建物遺構(SB03)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕片 (土師)	①11.0cm ③0.8cm	胴部のふくらみはなく、口縁部は短く外反する横へら整形	良好 褐色	1/4残
2	甕片 (土師)	①8.0cm ②10.0cm ③0.5cm	胴部はふくらみを有し、口縁部はやや外反し、横に沈線の模様がある。	良好 褐色	1/4残
3	甕 (土師)	①13.0cm ②19.0cm ③0.4cm ④6.0cm	底部からの立ち上がりは急で、口唇部で少々外反する横へら整形	普通 黒褐色	完
4	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完

(4) 第4調査区(A. B)



第4調査区全景



第111図 第4調査区(A)発掘遺構全体図

(4) 第4調査区 (A)

本調査区は第112図にあるとおり、本遺跡の西南端部の涯上の、面積600m²の平地にある。ここは別項で説明をしたように、元来は鬼高等の住居址のあった場所に約1メートル位の盛土をなして、その盛土上に建造された約5棟の掘立柱住居址よりなっている。それは鬼高式土器に混在して平安期の遺物が出土するところから、その建造物は平安以降のものであろう。

掘立柱住居址については何れもその規格が整然と建てられた方形状の住居で、その中には一辺が10m近い大形のものもあった。本遺跡の南下は長者久保(窪)と言われ長者伝説のある場所で、現在も古老によって伝承されている。その意味から長者屋敷は第4調査区を指したものであろうか。

なお、盛土の状況については土層の全面はぎ取りを実施した。

第1号掘立柱建物遺構 (SB01) (第112図)

本遺構は本調査区の中央部を占め、割合に規格の大きな住居址である。軸線はほぼ60度東西方に向けて建てられている。その平面形状は南西長9.00m、東北長9.40m、南東長4.70m、北西で4.50mの稍々不整形方形プランである。

主柱は多く建てられP1 (20cm×30cm)、P2 (30cm×40cm)、P3 (35cm×45cm)、P4 (35cm×70cm)、P5 (40cm×45cm)、P6 (40cm×40cm)、P7 (25cm×30cm)、P8 (30cm×40cm)、P9 (45cm×45cm)、P10 (30cm×30cm)、P11 (35cm×45cm)、P12 (40cm×50cm)、P13 (35cm×40cm)、P14 (25cm×35cm)、P15 (35cm×45cm)、P16 (25cm×45cm)、P17 (40cm×50cm)、P18 (40cm×45cm)、P19 (40cm×50cm)、P20 (50cm×65cm)、P21 (35cm×65cm)、P22 (40cm×40cm)、P23 (30cm×40cm)、P24 (30cm×45cm)、P25 (35cm×55cm)、P26 (45cm×50cm)、P27 (40cm×45cm)、P28 (30cm×65cm)となっている。

床面は平坦であるが軟い。

第2号掘立柱住居址 (SB02) (第112図)

本住はSB01の北西部に隣接し軸線をほぼ60度東西方に向けている。その平面形状は南西長3.40m、東北で2.80m、南東で4.70m、北西で4.40mの稍々不整形の方形プランである。

主柱はP1 (30cm×40cm)、P2 (30cm×30cm)、P3 (30cm×35cm)、P4 (25cm×40cm)、P5 (25cm×35cm)、P6 (30cm×40cm)、P7 (25cm×35cm)、P8 (25cm×35cm)、P9 (35cm×45cm)、P10 (25cm×25cm)、P11 (30cm×35cm)、P12 (30cm×45cm)となっている。

床面は平坦であるが軟い。

第3号掘立柱住居址 (SB03) (第112図)

本住はSB01の隣に位置し、軸線はほぼ8度西方にむけて造られている。その平面形状は南西長4.50 m、北東長4.80 m、東南長3.40 m、北西長3.30 mの稍に不整形方形プランとなっている。

支柱はP1 (30 cm×55 cm)、P2 (25 cm×40 cm)、P3 (40 cm×50 cm)、P4 (不明)、P5 (30 cm×35 cm)、P6 (40 cm×60 cm)、P7 (30 cm×40 cm)、P8 (35 cm×35 cm)で、その他床面に多くのピットをみたが、規格につながらないので記載しなかった。床面は盛土のため平坦ではあるが軟かであった。

第4号掘立柱住居址 (SB04) (第112図)

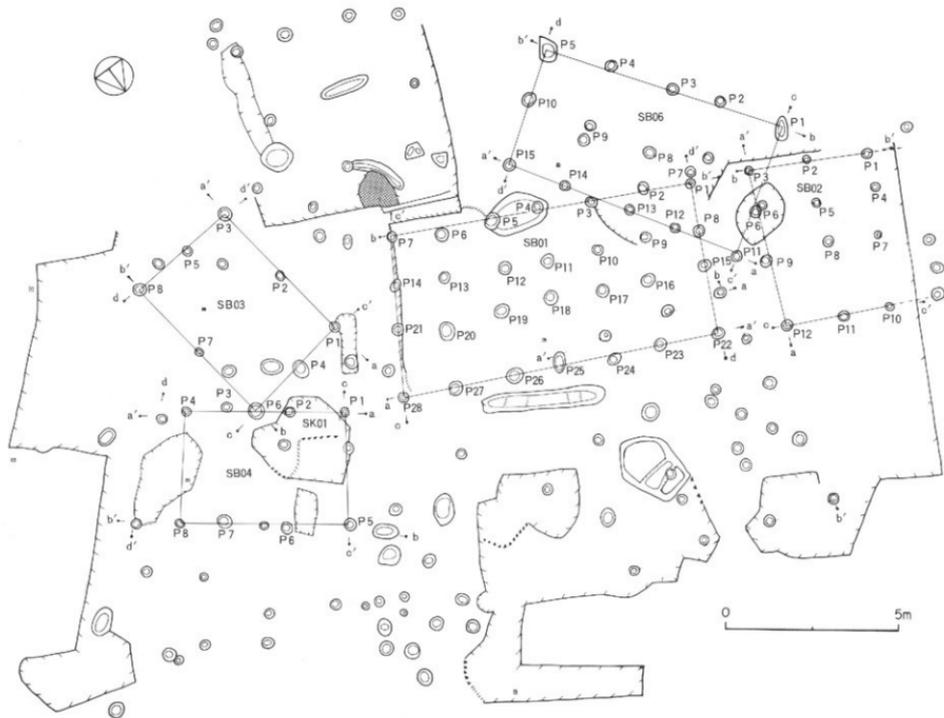
本住は本調査区SB03の北隣に位置する。軸線はほぼ53度、西方にかたむいて造られる。平面形状は、西南長3.80 m、東北長2.90 m、西北長3.30 m、南東長3.90 mの稍々不整形方形プランをなす。

支柱はP1 (25 cm×40 cm)、P2 (40 cm×50 cm)、P3 (35 cm×35 cm)、P4 (30 cm×35 cm)、P5 (30 cm×55 cm)、P6 (30 cm×45 cm)、P7 (35 cm×45 cm)がそれに当るものと思われる。他にもピットはあるが、その規格につながらないから取上げなかった。床面は盛土をして住居を造成したらし床面は一般に軟い。

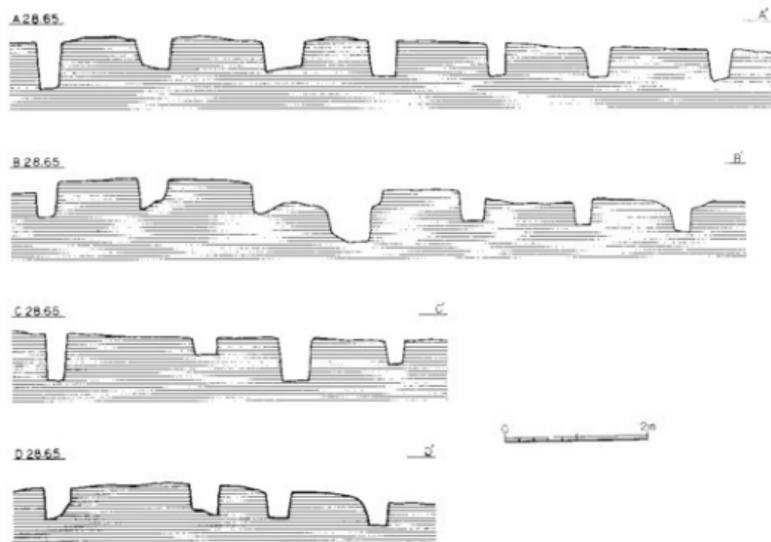
第6号掘立柱住居址 (SB06) (第112図)

本住はSB01に隣接し軸線はほぼ30度西方に向けて建ててある。その平面形状は、西南長7.20 m、東北で7.10 m、南東部で3.90 m、北西部で4.00 mの稍々不整形の方形プランとなっている。

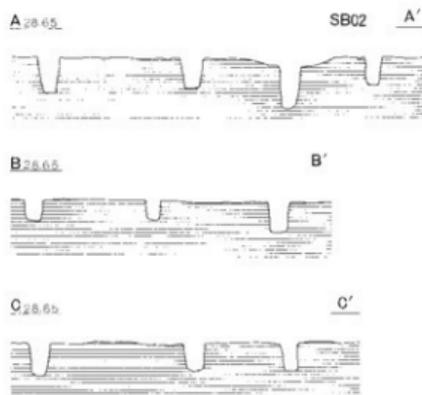
支柱はP1 (30 cm×35 cm)、P2 (30 cm×35 cm)、P3 (25 cm×30 cm)、P4 (30 cm×30 cm)、P5 (50 cm×30 cm)、P6 (25 cm×35 cm)、P7 (25 cm×40 cm)、P8 (30 cm×45 cm)、P9 (30 cm×25 cm)、P10 (35 cm×35 cm)、P11 (30 cm×30 cm)、P12 (30 cm×35 cm)、P13 (30 cm×40 cm)、P14 (30 cm×40 cm)、P15 (30 cm×35 cm)である。床面は平坦で軟い。



第112圖 第4調査区(A)第1号・2号・3号・4号・5号・6号 掘立柱建物遺構(SB01・02・03・04・05・06)平面実測図



第113図 第4調査区(A)第1号掘立柱建物遺構(SB01)エレベーション図

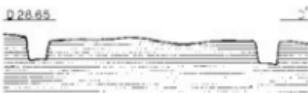
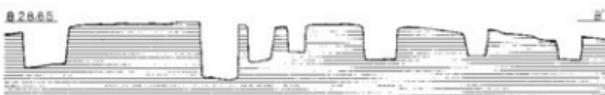
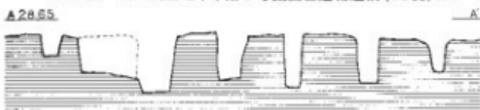


第114図 第4調査区(A)第2号掘立柱建物遺構(SB02)エレベーション図

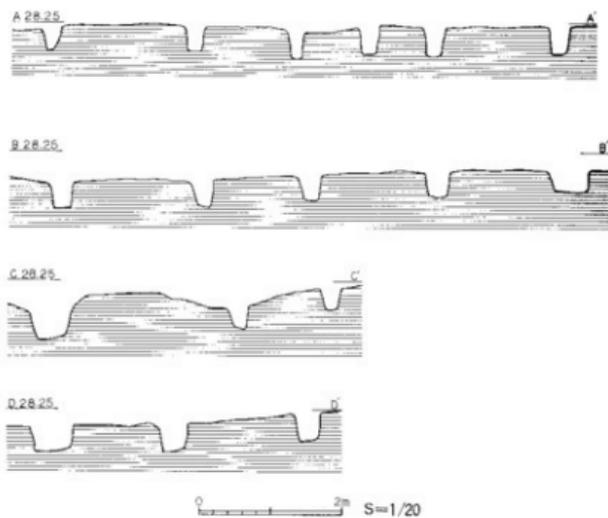


0 2m

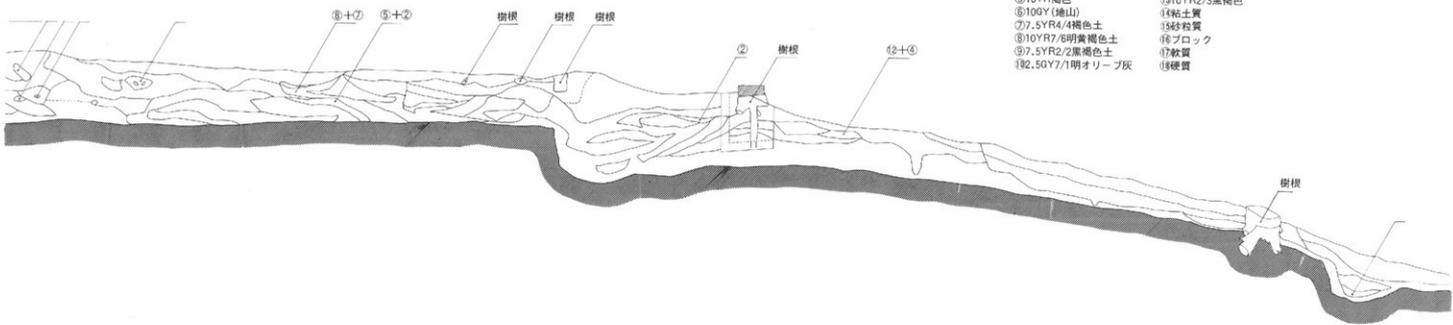
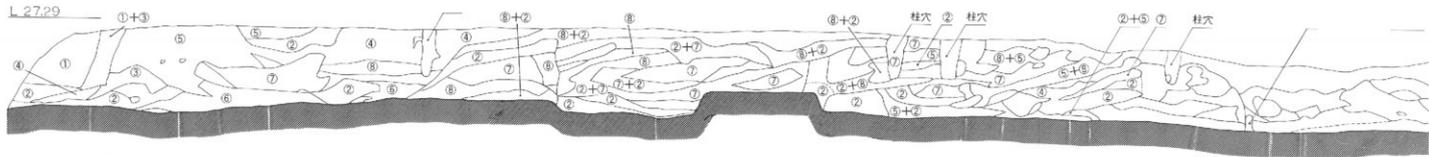
第115図 第4調査区(A)第3号掘立柱建物遺構(SB03)エレベーション図



第116図 第4調査区(A)第4号掘立柱建物遺構(SB04)エレベーション図



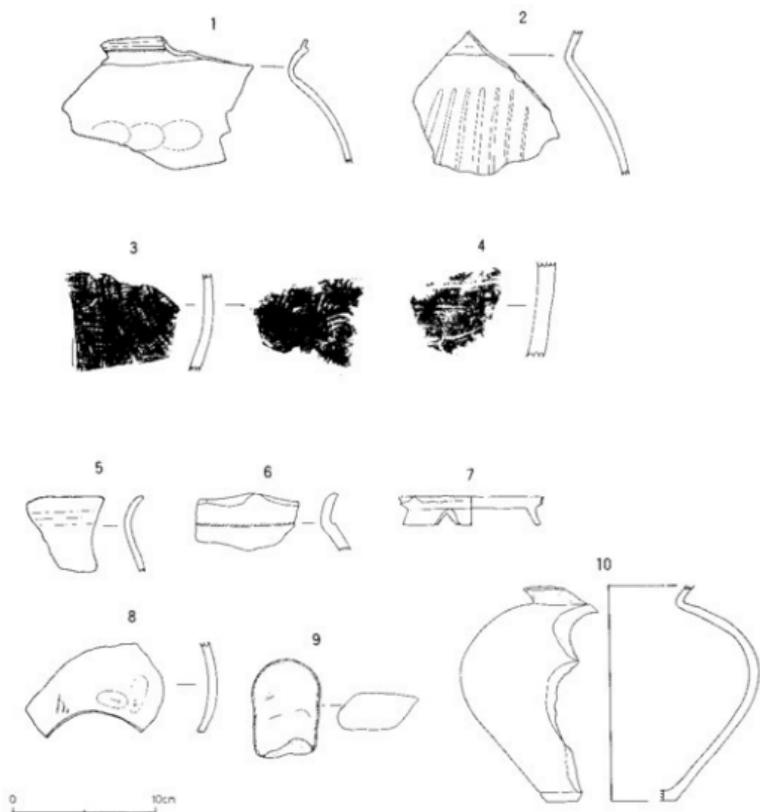
第117図 第4調査区(A)第6号掘立柱建物遺構(SB06)エレベーション図



- ① 7.5YR5/6(灰白色粘土ブロック含む)軟質—明褐色土
- ② 10Y粘土ブロック 10YR粘土ブロック混合—7/1明緑灰 5/6黄褐色
- ③ 10YR5/5かなり硬い
- ④ 10YR明黄褐色
- ⑤ 10YR褐色
- ⑥ 100Y(地山)
- ⑦ 7.5YR4/4褐色土
- ⑧ 10YR7/6明黄褐色土
- ⑨ 7.5YR2/2黒褐色土
- ⑩ 2.50Y7/1明オリブ灰
- ⑪ 7.5YR6 8程
- ⑫ 7.5YR4/6褐色
- ⑬ 10YR2/3黒褐色
- ⑭ 粘土質
- ⑮ 砂粘質
- ⑯ ブロック
- ⑰ 軟質
- ⑱ 硬質



第118図 第4調査区(A)大セクションレンテ東側図



第119図 第4調査区(A)南造成面出土遺物

遺物

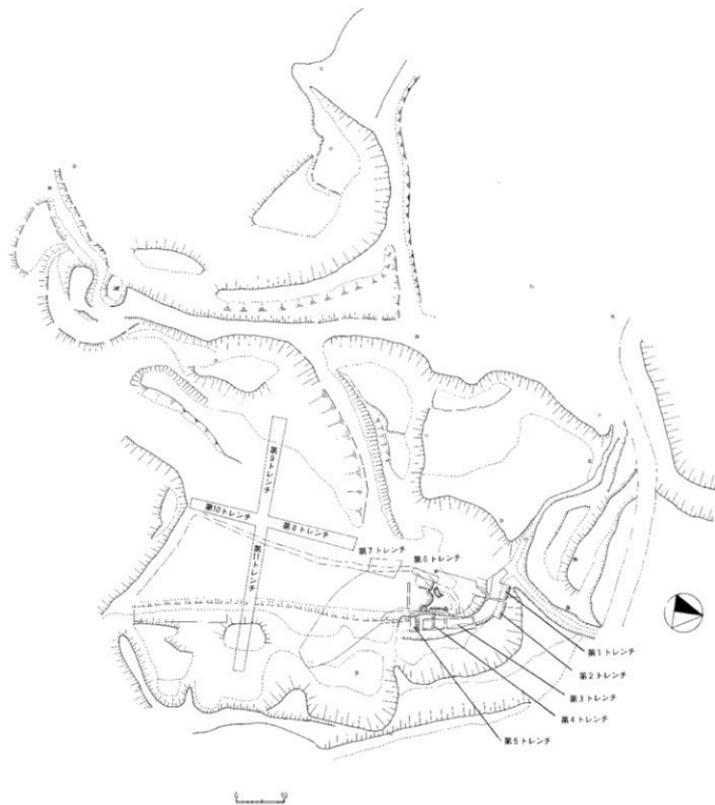
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺片 (土師)	①9.0cm ②3.0cm ③0.5cm	かなり球状を呈する胴部で、頸部にかけてかなり内向して、口縁部は大きく外反する、口縁部外側部分にはくの字状形態を呈している。	不良 砂粒 淡褐色	1/4残
2	壺片 (土師)	①10.5cm ②9.5cm ③0.7cm	頸部から胴上半部にかけてかなり丸味をおび内器面には輪積痕を残す。 外器面にはタテ位にヘラナデ痕が認められる。	普通 砂粒 明褐色	1/4残
3	壺片 (須恵)	①6.6cm ②9.5cm ③0.6cm	かなり大形の壺片で内器面には円弧状のたたき工具痕が残る、外器面には格子状のたたき工具痕があり、内面には自然釉が1部かかっている。	良好 砂粒 暗灰色	9世紀の須恵
4	鉢片 (縄文)	①7.0cm ②7.0cm ③1.3cm	ほぼ直線的に立上る胴部片で外器面の紋様は横位に沈線を施している。	普通 砂粒 褐色	残片
5	壺口縁 部片 (土師)	①5.2cm ②5.1cm ③0.5cm	ラッパ状に外反した口縁部(単純口縁)である	普通 砂粒 褐色	1/4残
6	壺口縁 部片 (土師)	①3.9cm ②7.1cm ③0.9cm	ラッパ状に外反した口縁部(単純口縁)である		1/4残
7	高台付 坏 (土師)	④9.5cm ⑤2.1cm	底部及高台部で胴下半部以上は意図的に欠いた痕せきが認められる。		底部片
8	轆 (土師)	①5.0cm ②9.5cm ③0.8cm	底部よりかなり丸味をおびて立ち上がる器形である。外器面には、ヘラ削りの痕せきが認められる。	普通 砂粒 明褐色	底部片
9	磨石		第119図参照		骨々完
10	壺 (須恵)	①不明 ②15.0cm ③0.7cm	底部よりほぼ直線的に外反しながら立ち上がる胴部で最大径を有する、肩の部分に至る肩部から頸部までは大きく内反し、さらに口縁部は大きく外反する、内器面にはヘラナデの痕せきをのこし胴部以下と肩部以上の部分を接合時の指圧痕が認められる	不良 砂粒 黒灰色	1/4残

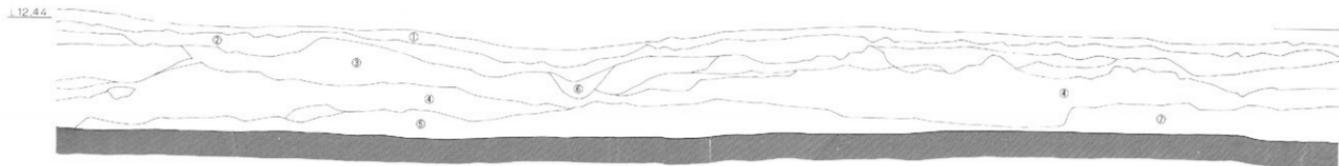
第4調査区（B）長者窪

第120図、第121図にあるとおり、第4調査区の東側所謂長者久保（窪）と称する入谷津状の地区である。この地区は入谷津状をなしてはいるが、斜面部の各所に小段状の削平遺構の存在が確認された。そのため埋没遺構を調査するトレンチ発掘を行った。その結果年代的に明確ではないが、通路状遺構と思われる強固な土質面を検出した。しかしこの強固な土質面には特別な遺構は認められなかった。

竪状大溝遺構。この遺構は同調査区の東側斜面部下よりセクションで確認された。このセクション面にあらわれた土層から大溝状遺構は二本存在することが判明したが、その規模、形状をすべて確認することは不可能であった。



第120図 第4調査区(B)発掘遺構全体図(長者堂)



長者窪地区 S=1/5

- ①黄土
- ②暗褐色土 (硬質)
- ③淡灰褐色土 (粘土)
- ④黄褐色砂
- ⑤茶褐色土
- ⑥黒褐色土 (砂粒含む)
- ⑦茶褐色砂

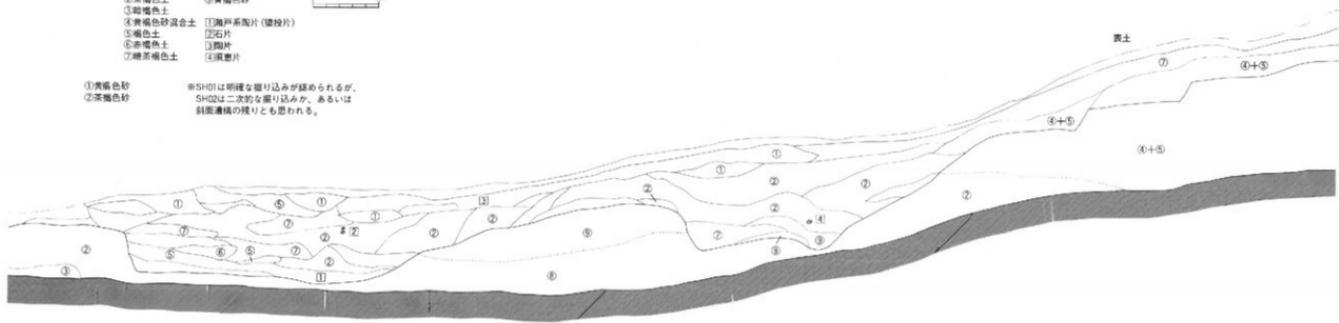


- ①茶褐色土
- ②茶褐色土
- ③暗褐色土
- ④黄褐色砂混合土
- ⑤褐色土
- ⑥黄褐色土
- ⑦緑茶褐色土
- ⑧茶褐色砂
- ⑨黄褐色砂
- ⑩江戸系陶片 (鑲嵌片)
- ⑪石片
- ⑫陶片
- ⑬炭片



- ①黄褐色砂
- ②茶褐色砂

※SH印は明確な層り込みが認められるが、SH印は二次的な層り込みか、あるいは斜面崩壊の痕りとも思われる。

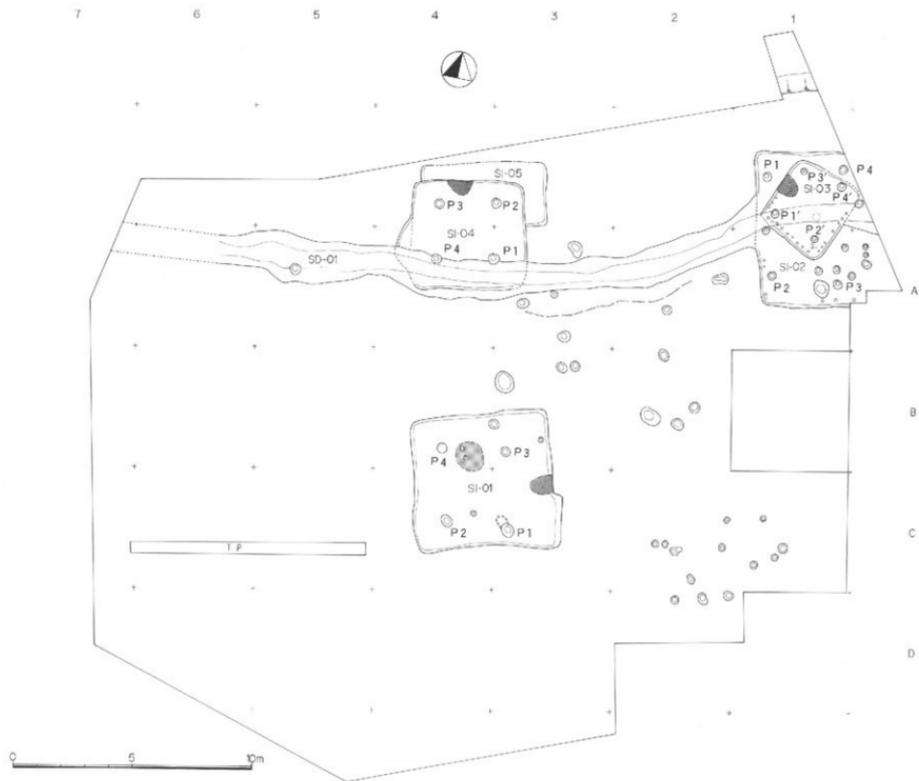


第121図 第4調査区(B)(長者窪)セクション図

(5) 第5調査区



第5調査区全景



第122図 第5調査区発掘遺構全体図

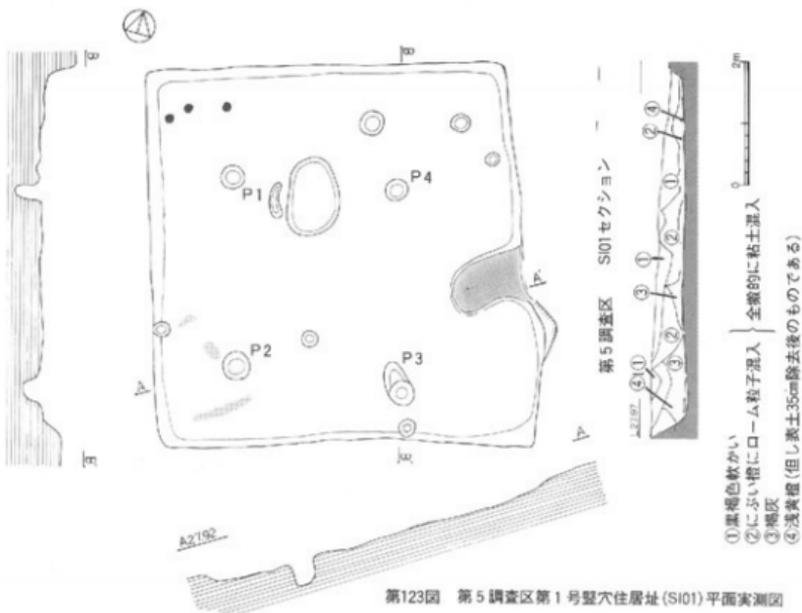
(5) 第5調査区

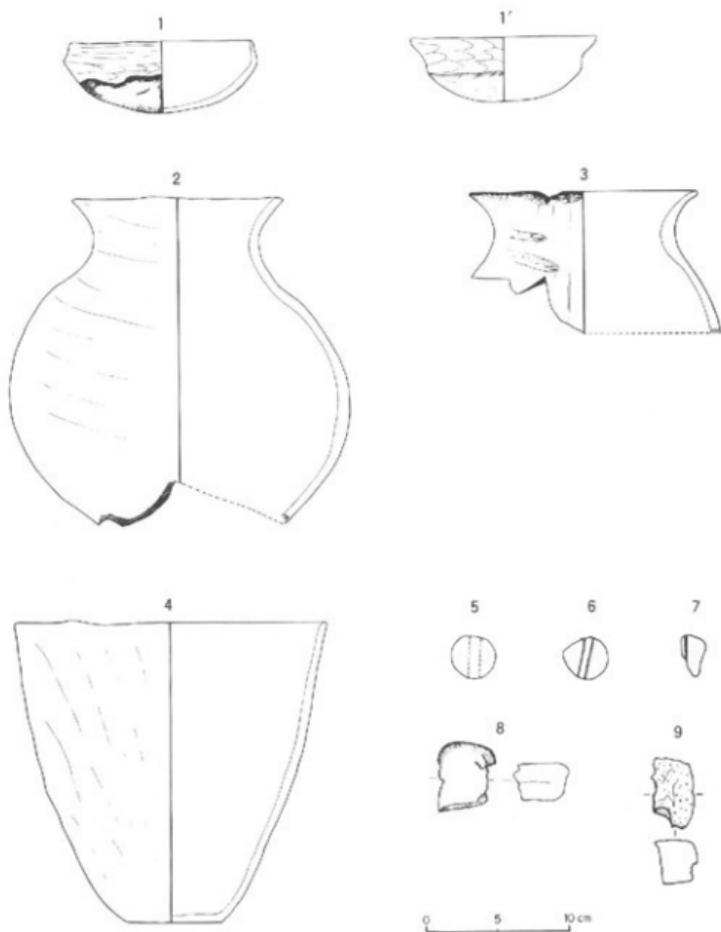
本調査区は本遺跡の最東端の、面積707㎡の台地を言う。本調査から検出された遺構の①竪穴住居址5、②溝状遺溝1が検出された。本住からは鬼高期に相当する遺物の出土が多かった。遺物としては坏、甕、土鐏、磨石等が見られたが、鉄滓も出土したので鉄器類の製造が行なわれていたものか。

第1号竪穴住居址 (SI 01) (第123図)

本住は本調査区のほぼ中央部に存在する。軸線は約12度西方にむけて造られている。平面形状は縦長5.80m、横長5.90mの方形プランである。

壁高は南側30cm、西側120cm、北側50cm、東側55cmで、あった。支柱はP1(35cm×30cm)、P2(35cm×40cm)、P3(30cm×40cm)、P4(35cm×40cm)となっており、床面は平坦で固い。なお東側に1.10m×80cm、高さ30cmのカマドが残されていた。出土遺物は下記のとおりである。





第124図 第5調査区第1号竪穴住居址(S101)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13.0cm ②5.0cm ③0.4cm	丸底で稜を有し、口縁部の立ち上がりは垂直である ロクロ整形	良好 褐色	
1'	坏 (土師)	①13.0cm ②4.0cm ③0.3cm	丸底で頸部に稜をもち、口縁部は外反する ロクロ整形	良好 淡褐色	
2	甕 (土師)	①15.0cm ②23.0cm ③0.4cm	胴部はふくらみをもち、口縁部は外反する ロクロ整形	良好 灰黒色	1/2残
3	甕 (土師)	①16.0cm ②10.0cm ③0.4cm	胴部はややふくらみ、口縁部は短く外反する	不良 黒褐色 砂粒含有	口縁部
4	甕 (土師)	①22.0cm ②21.0cm ③0.4cm ④7.0cm	底部からの立ち上がりはやや急である ロクロ、ヘラ整形	良好 黒褐色	
5	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	完
6	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	1/2残
7	土鍾	①3.0cm 孔不明	磨減なし	褐色	1/4残
8	磨石片		第124図参照		
9	鉄滓		第124図参照		

第2号竪穴住居址 (SI 02) (第106図)・第3号竪穴住居址 (SI 03) (第125図)

SI02

本住は本調査区の東北隅にあつて、SI 03に切りこまれて、わずかに2分1しか残存しない。軸線はほぼ66度位い西方にむけられている。平面形状は縦長6.40m、横長3.30(現長)の方形プランをなしている。東壁は山の境界のため調査不能となっている。

壁高は南壁で30cm、西30cm、北20cmとなつており、周溝は南壁下15cm×10cm、西壁の1部15cm×10cmとなつておる。壁柱も南壁側と西壁側の1部に残される。支柱はP1(20cm×40cm)、P2(20cm×25cm)、P3(30cm×35cm)、P4は不明である。北壁側にカマドが不完全な形で残存するがそれは1.10m×80cm、高さ20cmであつた。床面は平坦で軟い。出土遺物は下記のとおりである。

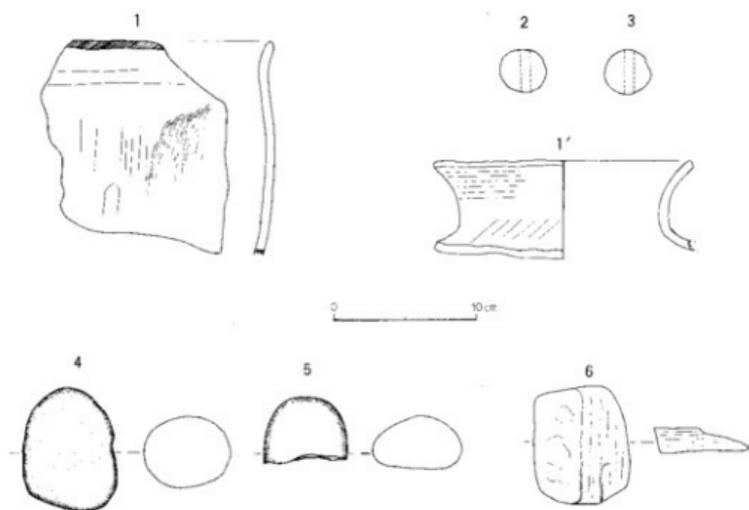
SI 03

本住はSI 02を切りこんで造られている。軸線はほぼ30度東方にむけている。平面形状は1辺が2.90mの正方形プランである。

壁高は南側で20cm、西10cm、東・北はそれぞれ20cmとなっている。周溝は南東側に残されていたが、それは90cm×60cm、高さ30cmであった。出土遺物についてはSI 02の遺物と混同したようであるが、いずれも鬼高期のものが多いようであった。



第125図 第5調査区第2号・3号竪穴住居址(SI02・03)第1号溝状濠溝(SD01)平面実測図



第126図 第5調査区第2号竪穴住居址(S102)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	①2.0cm ②11.0cm ③0.3cm	胴部のふくらみはなく、口縁部は短くやや外反する 内外ともクテヘラ整形	良好 茶褐色	胴片 1/10 残
1'	壺 (土師)	①19.0cm ②6.0cm ③0.8cm	胴部はふくらみ、口縁部は長く外反する	良好 淡褐色 砂粒含有	口縁部
2	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	完
3	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
4	磨石		第126図参照		
5	磨石		第126図参照		
6	敲石		第126図参照		

第4号竪穴住居址 (SI 04)・第5号竪穴住居址 (SI 05) (第127図)

SI04

本住は本調査区中央部の北側にあり、SI 05をこわして構築されている。軸線はほぼ20度西方に向けている。その平面形状は縦長4.10m、横長4.60mの方形プランであった。

壁は東壁40cm～20cm、北10cm、西30cm、南45cmとなっており周溝はみうけられなかった。支柱はP1(25cm×60cm)、P2(25cm×40cm)、P3(20cm×50cm)、P4(25cm×60cm)となっており、カマドは北壁中央部に100cm×70cm高さ25cmがあった。床面は凹凸があり軟い。

SI 05

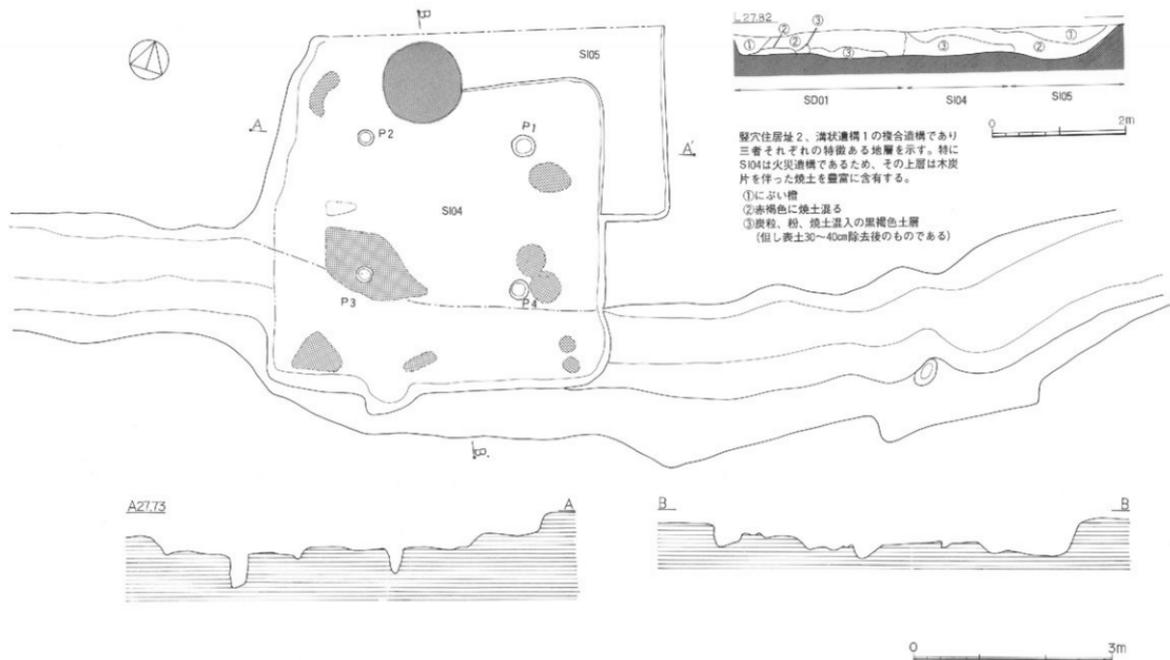
本住はSI 04構築のためこわされ、約3分の1残る。軸線はSI 04と同じで、その平面形状は横長で5.70m、縦は不明だが現長で2.80mの方形プランであった。

壁高は北壁は北の堺になるた不明、東30cm、西20cm、南はSI 04に切られているため不明。なお、柱穴、カマドも不明であった。床面は軟い。

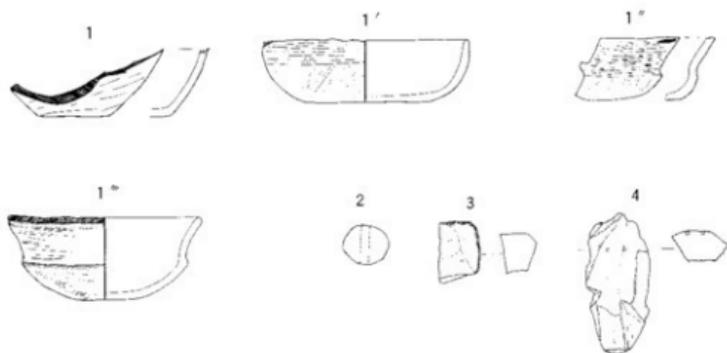
出土遺物については下記のとおりになっている。

第1号溝状遺構 (第127図)

本調査区のSI 04の西から東の方にむけて溝状遺構が残されていた。それは全長36.30m、巾2.20m～1.20m、深さ30cm～25cmとなっていた。そこからの出土遺物は下記のとおりである。



第127図 第5調査区第4号5号竪穴住居址(S104・05)第1号溝状遺構(SD01)平面実測図

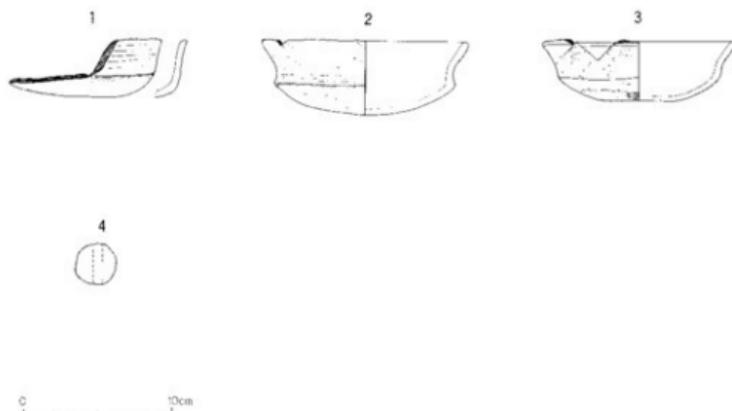


第128図 第5調査区第5号竪穴住居址(S105)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ②4.0cm ③0.6cm	底部からの立ち上がりはゆるやか ヘラナデ、極めて不整形	良好 砂粒 褐色	1/5残
1'	坏 (土師)	①14.0cm ②4.0cm ③0.4cm	底部からの立ち上がりはゆるやかである。内外 共にヘラ使用	良好 褐色	完
1''	坏 (土師)	①不明 ②4.0cm ③0.3cm	底部は平坦で浅く、頸部に稜を有し、口縁部は 外反する	普通 灰褐色	1/5残
1'''	坏 (土師)	①13.0cm ②5.5cm ③0.4cm	底部は丸底、稜を有し口縁部は長く内反し、口 唇部で外反する	良好 赤褐色	完
2	土錘	①3.0cm 孔0.6cm			
3	磨石		第103図参照		
4	不明石		第128図参照		



第129図 第5調査区第1号溝状遺構(SD 01)出土遺物

遺物

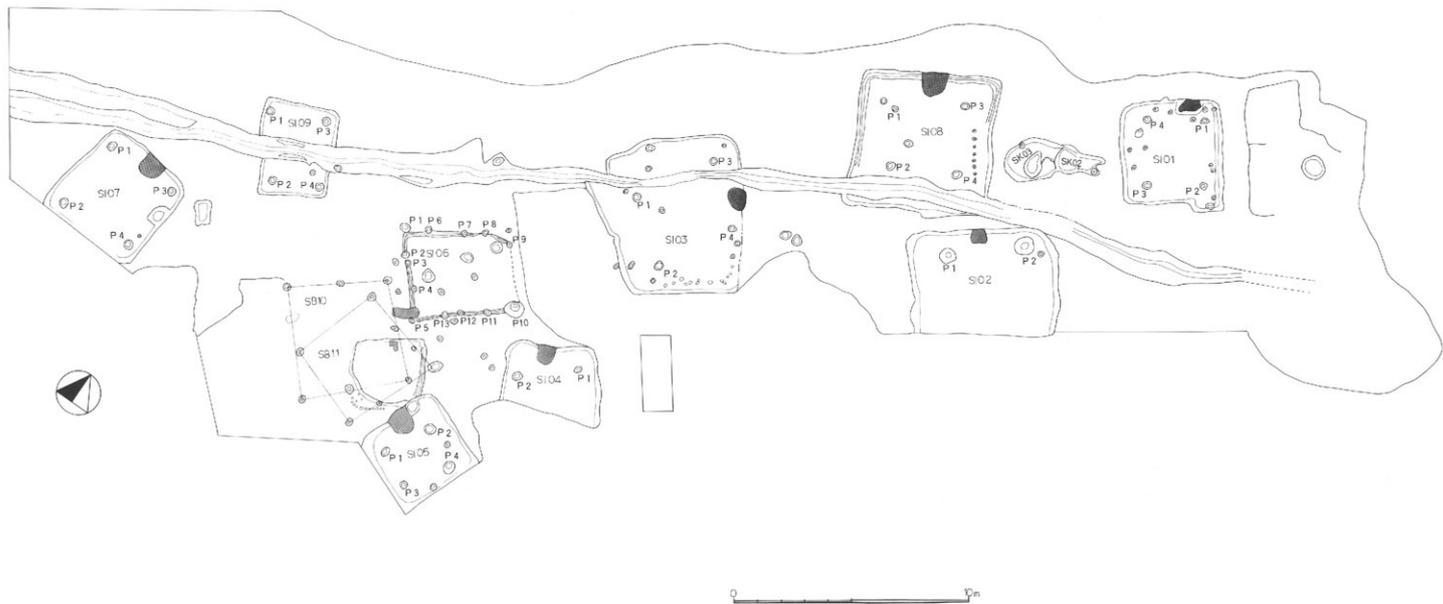
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①11.0cm ②4.0cm ③0.4cm	丸底・胴部からの立ち上がりは急で口縁部で内反し、口唇部で外反する。内部クテヘラ、外部ヨコヘラ整形	良好 褐色	1/4残
2	坏 (土師)	①14.0cm ②5.0cm ③0.4cm	底部はまるみをもち、頸部に稜を有し口縁部は内傾・口唇部に至って外反する ロクロ整形	良好 褐色	完
3	坏 (土師)	①13.0cm ②4.0cm ③0.3cm	底部はまるみを有し、稜をもち口縁部の立ち上がりはやや外反する ロクロ整形	良好 褐色	1/4欠
4	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	完

(6) 第6調査区



第6調査区全景



第130图 第6調査区発掘遺構全体図

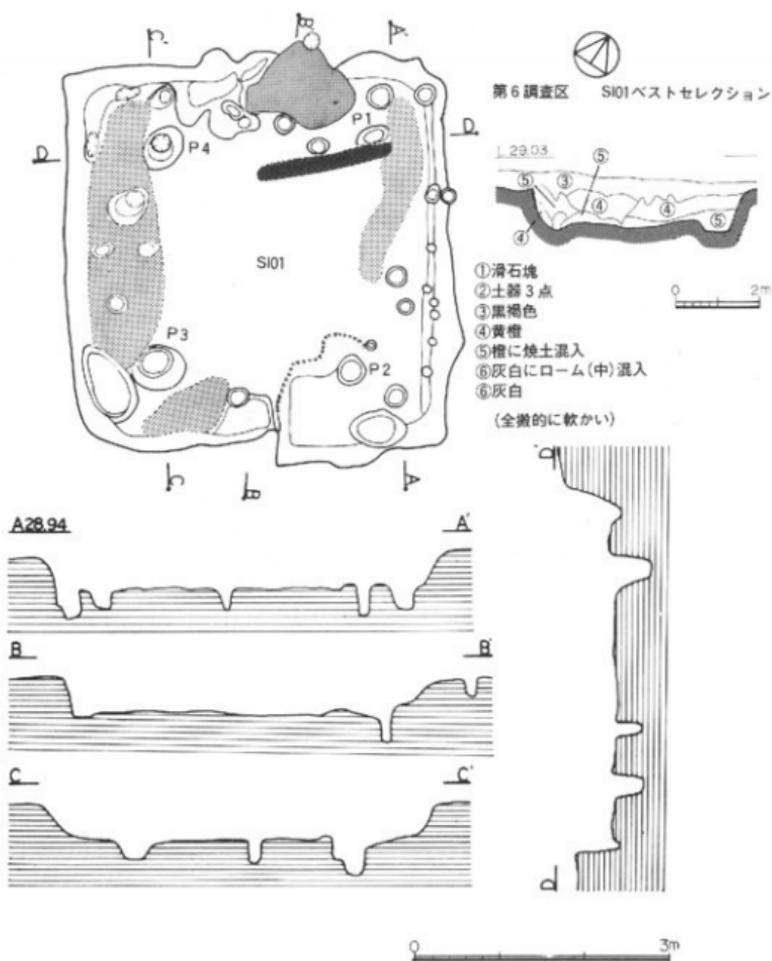
(6) 第6調査区

第8調査区の上の方、旧香取神社の西南に当たる面積675㎡の細長い台地である。北方筑波山を一望のもとにおさめる絶景の地である。検出された遺構は①竪穴住居址9、②掘立柱住居址2、③溝状遺構1があげられる。遺物としては、坏、甕、碗、高台付坏、紡錘車、磨石、土錘、模造剣、石製鏡、有孔円板等が出土した。一般に鬼高期のもが多かったが、掘立柱住居址からは平安期の遺物が出土した。また滑石の原石が多量に出土したことから石製品等の製作が実施されていたものと思われる。

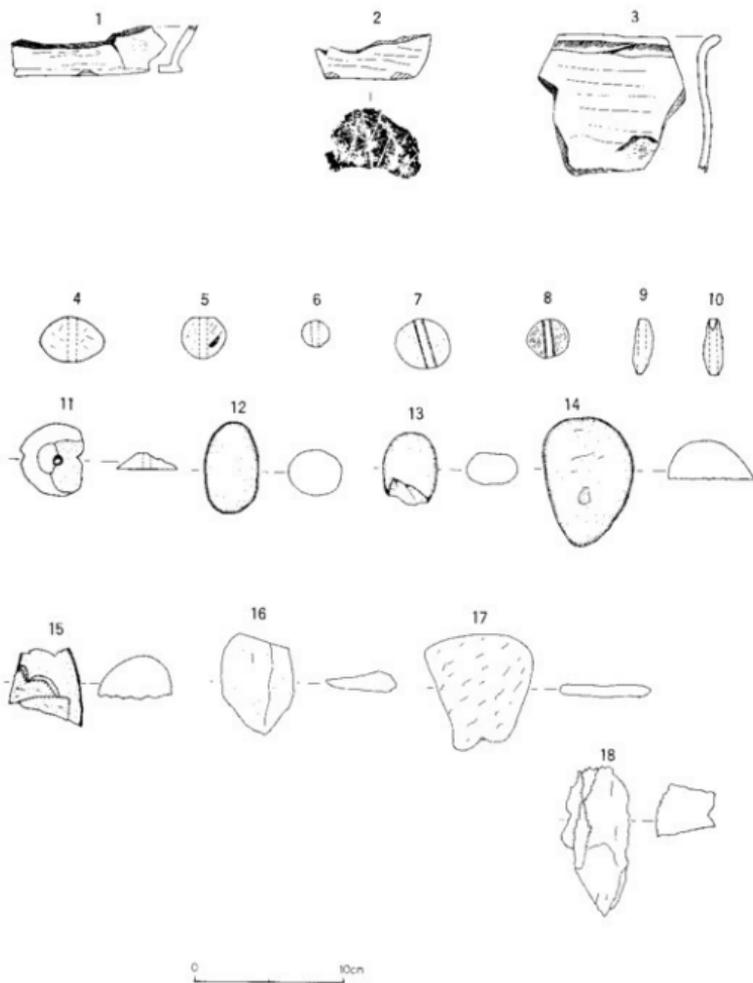
第1号竪穴住居址 (SI01) (第131図)

本住は本調査区の北東端に位置し、主軸をやゝ15度西方に向けて造られている。平面形状は1辺が4.30m正方形プランをなす。

壁高は北東側で55cm、南東50cm、南西45cm、北西55cmとなっており、周溝は北東側に10cm×10cm、南西側に8cm×5cmが残されており、そこには壁柱列とみうけられた。主柱はP1(30cm×25cm)、P2(30cm×40cm)、P3(35cm×35cm)、P4(30cm×30cm)となっており、カマドは1.20m×90cm、高さ45cmであった。床面は平坦で固い。出土遺物の主なるものは下記のとおりである。



第131図 第6調査区第1号竪穴住居址(SI01)平面実測図



第132图 第6調査区第1号竪穴住居址(SI01)出土遺物

遺物

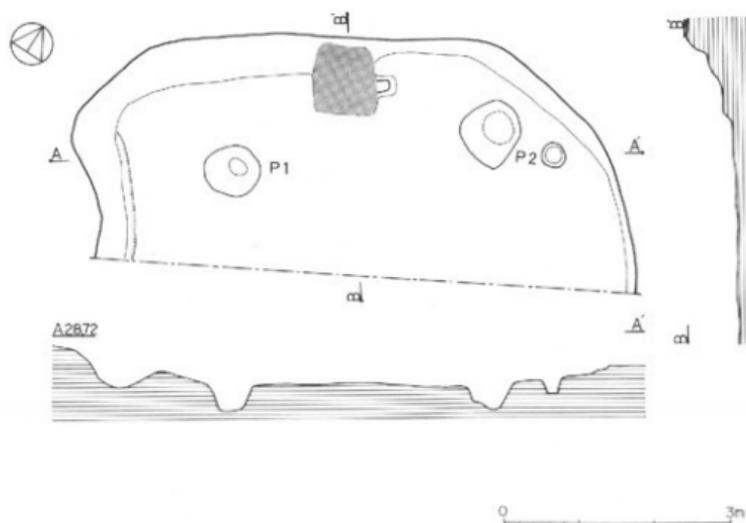
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	②3.0cm ③0.3cm ④9.0cm	底部からの立ち上がりはゆるやか。底部に木の葉の紋様がある 内外ともにヘラナデ	良好 黒塗り	底部 1/4残
2	坏 (土師)	②3.0cm ③0.3cm ④6.0cm	底部からゆるやかに立ち上がる。底部に木の葉の紋様あり。 内外ともに横ヘラ整形	良好 淡褐色	底部のみ
3	甕 (土師)	①9.0cm ②9.0cm ③0.5cm	胴部にまるみはなく、口縁部は短くて外反する。 内外ともにヘラ削り	良好 褐色	口縁部 1/4残
4	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり	褐色	完
5	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり不整形	褐色	完
6	土錘	①1.5cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
7	土錘	①3.0cm 孔0.4cm	磨減なし	褐色	1/4残
8	土錘	①2.0cm 孔0.4cm		褐色	1/4残
9	土錘	①0.8cm 孔0.4cm 長3.5cm	磨減なし	褐色	完
10	土錘	①0.8cm 孔0.6cm 長4.0cm	磨減なし	褐色	完
11	紡錘車片		第132図参照		
12	磨石		第132図参照		
13	磨石		第132図参照		
14	磨石片		第132図参照		
15	磨石片		第132図参照		
16	不明石片		第132図参照		
17	不明石片		第132図参照		
18	石核		第132図参照		

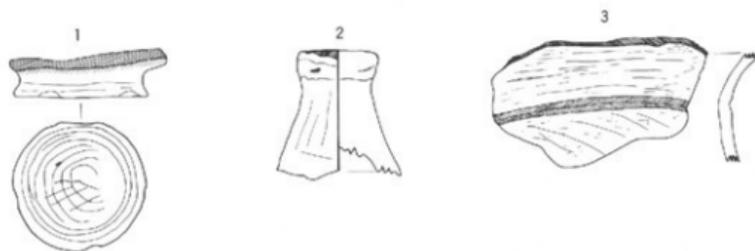
第2号竪穴住居址 (SI02) (第133図)

本住は SI01 の隣に南向きに位置し、南部は攪乱されて不明で残存約 2 分の 1 となっていた。平面形状は横のさ 5.90 m、縦の長さは不明だが現長は 2.90 m となって、方形状プランである。

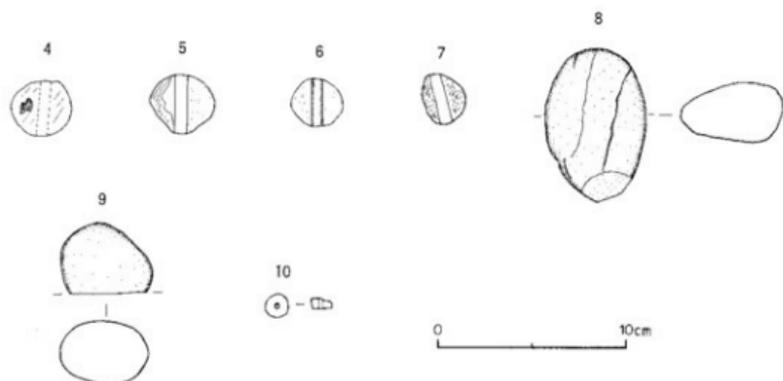
壁高は南西壁 40 cm、北西 45 cm、北東 30 cm、南東は不明。柱は P1 (60 cm × 40 cm)、P2 (70 cm × 40 cm) となっており、その他の支柱は不明であった。周溝はなく、カマドは 100 cm × 90 cm、高さ 35 cm が計測され、床面は固くて平坦である。出土遺物の主なものは下記にあげておいた。



第133図 第6調査区第2号竪穴住居址 (SI02) 平面実測図



第134図 第6調査区第2号竪穴住居址 (SI02) 出土遺物



第134図 第6調査区第2号竪穴住居址(SI02)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 杯 (土師)	③0.3cm ④6.0cm	底部の立ち上がりはやや垂直。 口縁整形	良好 淡褐色	底部のみ
2	高杯 (土師)	②6.0cm ③0.4cm ④6.0cm	脚部は短くふくらみを有する 内外ともに横へら整形	良好 淡黄色	脚部のみ
3	甕 (土師)	①11.0cm ②5.0cm ③0.5cm	脚部はややふくらみ、口縁部は外反し口唇部に ふちを有する 横へら整形	良好 黒塗り	口縁部
4	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
5	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/5残
6	土鍾	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	1/2残
7	土鍾	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	1/5残
8	磨石		第134図参照		
9	磨石		第134図参照		
10	白玉		第134図参照		

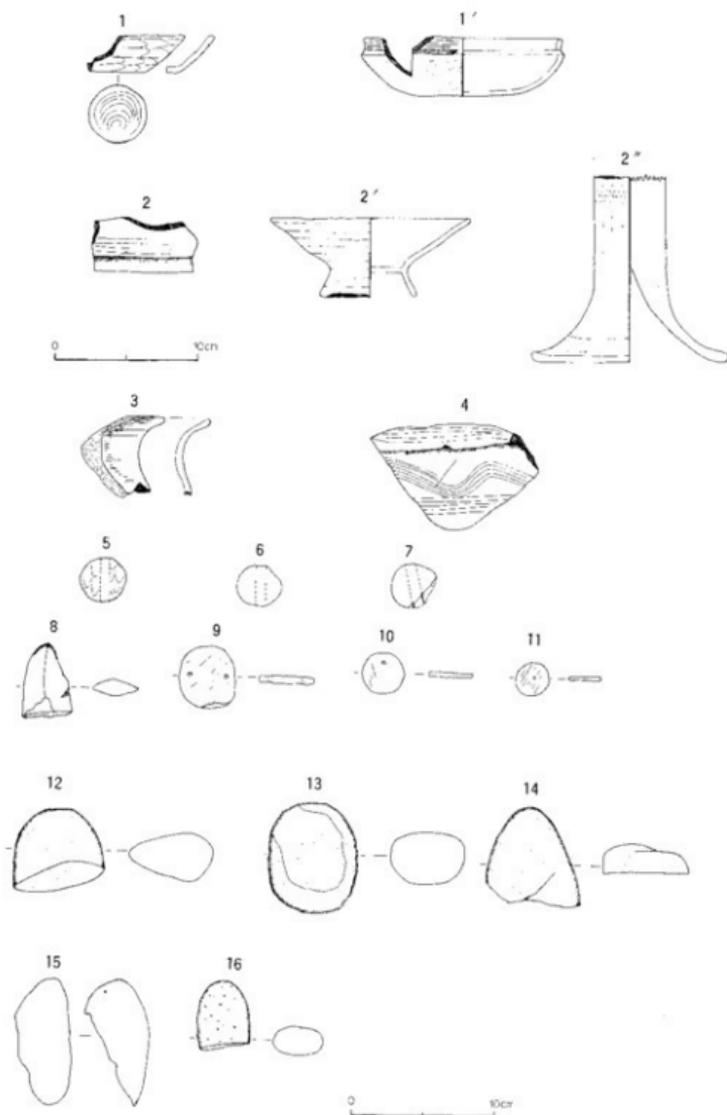
第3号竪穴住居址 (SI03) (第135図)

本住は本調査のほぼ中央部。SI02の南隣にあたる。軸線はほぼ45度西方に向けて掘られている。その平面形状は横の長さで6.50 m、縦の長さで6.20 mの方形プランをなす。

壁高は南東壁で30 cm、南西40 cm、北西30 cm、北東の1部で15 cm、周溝は北東部は不明であるが、その他は40 cm×10 cmが残り、壁柱列もいくらかみられた。柱はP1 (35 cm×35 cm)、P2 (40 cm×40 cm)、P3 (35 cm×35 cm)、P4 (40 cm×40 cm)であった。なお、カマドは北東壁に140 cm×100 cm、高さ20 cmが残され、床面平坦で固い。なお、本住は溝状遺構遺物の主なるものは下記のとおりである。



第135図 第6調査区第3号竪穴住居址 (SI03) 平面実測図



第136图 第6調査区第3号竪穴住居址(SI03)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

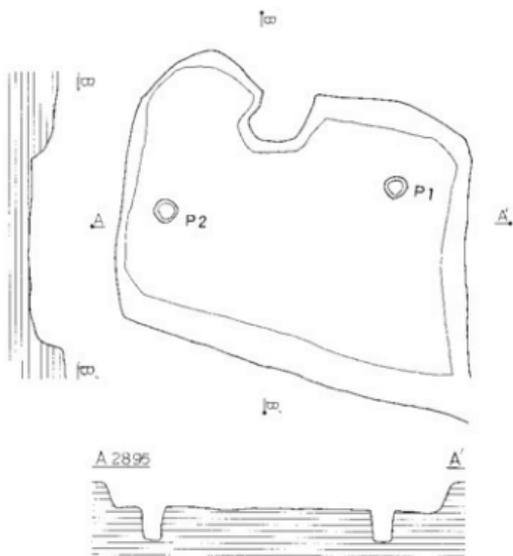
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①6.0cm ②1.0cm ③0.3cm ④4.0cm	底部からの立ち上がりは大変ゆるやかで、底部は回転糸切状である 内外ともに横ヘラで整形	良好 淡黄色	1/2残
1'	坏 (土師)	①14.0cm ②4.0cm ③0.3cm	丸底で立ち上がりはゆるやか、稜をもち口縁部の立上りは垂直である。ロクロ使用ヘラ整形	良好 淡褐色	
2	高台付 坏 (土師)	②3.0cm ③0.5cm ④6.0cm	台は短く広がりをもさせる。台から胴部にかけてくびれを有する立ち上がりは少々急である ロクロ整形	良好 茶褐色	
2'	高台付 坏 (土師)	①14.0cm ②5.5cm ③0.3cm ④6.0cm	台部は広がりを有する。立ち上がりは外反してややゆるやかである、輪積整形	良好 淡褐色	
2''	高坏 (土師)	②12.0cm ③0.4cm ④14.0cm	脚部は長くスマートである。底部はゆるやかに大きく広がる ロクロ整形	良好 褐色	
3	甕 (土師)	①10.0cm ② 4.0cm ③ 0.6cm	胴部はふくらみ、口縁部は強く内反する	良好 淡黄色	口縁部 1/4残
4	甕 (須恵)	①不明 ②7.0cm ③0.6cm	胴の上部に沈線模様がある 内外ともにヘラ使用	良好 灰白色	口縁部
5	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
6	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
7	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	やや完
8	石製模 造剣		第136図参照		
9	有孔円 板		第136図参照		
10	有孔円 板		第136図参照		
11	有孔円 板		第136図参照		
12	磨石		第136図参照		
13	磨石		第136図参照		
14	磨石		第136図参照		

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
15	磨石		第136図参照		
16	磨石		第136図参照		

第4号竪穴住居址 (SI04) (第137図)

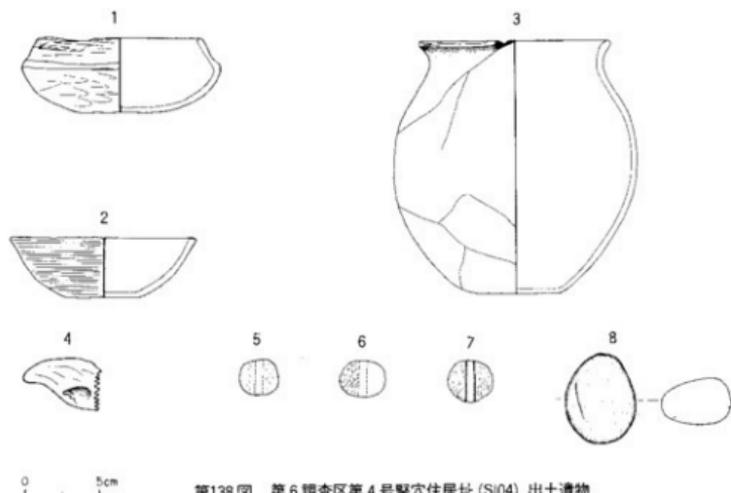
本住はSI03の南隣に当り、軸線をほぼ34度西方にむけている。南面は攪乱されて不明となっているが、その平面形状は横の長さ3.80m、縦は不明だが現長で3.10mにあたり、方形のプランをなす。現在残存するのは約3分の2に当ろうか。

壁高は北側35cm、東で30cm、西で15cmとなっており周溝は北側に15cm×5cm、西側に10cm×5cm。なお、支柱としてP1(30cm×40cm)、P2(25cm×40cm)で後は不明。カマドは北側壁に80cm×80cm、高さ25cmが残される。床面は平坦であるが軟い。出土遺物については下記のとおりである。



第137図 第6調査区第4号竪穴住居址(SI04)平面実測図





第138図 第6調査区第4号竪穴住居址(SI04)出土遺物

遺物

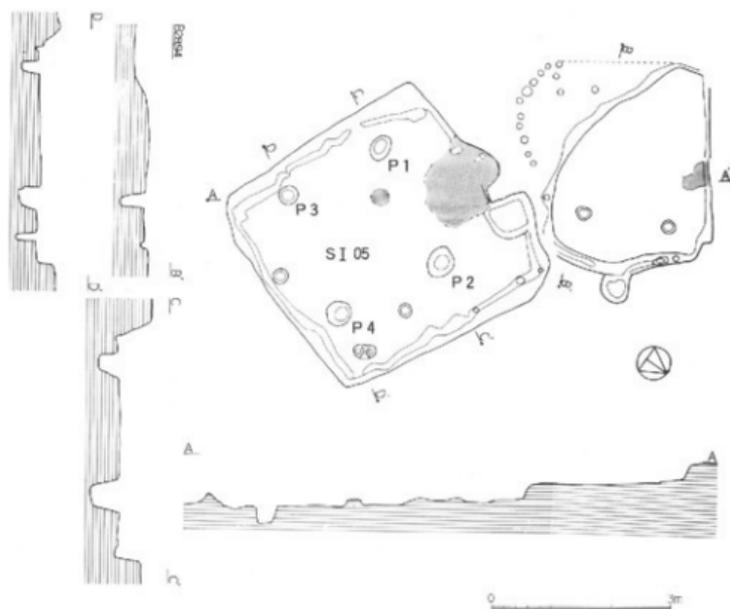
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①11.0cm ②5.0cm ③0.4cm	丸底で稜を有し、口縁部は内傾する。 内部タテヘラ、外部ヨコヘラ整形。	良好 褐色	完
2	坏 (土師)	①12.0cm ②3.5cm ③0.3cm ④5.0cm	底部からゆるやかに立ち上がる ロクロ使用。ヘラ整形	良好 淡黄色 砂粒を含む	完
3	甕 (土師)	①13.0cm ②17.0cm ③0.4cm ④6.0cm	胴部はややふくらみを有し、頸部から口縁部の 立ち上がりは大きく外反する。ロクロ整形。	良好 黒褐色	完
4	トッテ 片 (土師)	①4.5cm ③2.5~ 1.0cm	先端は弓形、タテヘラ削り	良好 淡褐色	残片
5	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
6	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
7	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	1/4残
8	磨石		第138図参照		

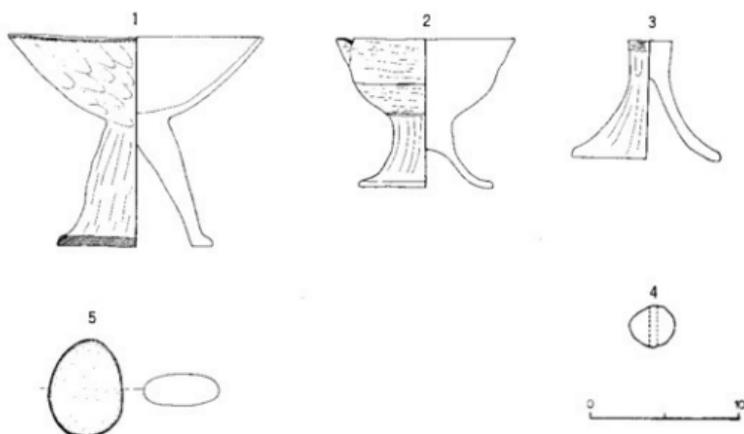
第5号竪穴住居址 (SI05) (第139図)

本住はSI06の南隣に当り、軸線をほぼ60度西方に向けている。平面形状は縦長3.70 m、横長3.40 mの方形プランをなす。

壁高は南壁60 cm、東20 cm、北40 cm、西20 cmとなっており、周溝は南側10 cm×7 cm、東10 cm×5 cm、北10 cm×7 cm、西側は10 cm×5 cmで各所に壁柱の配列がみうけられた。主柱はP1(35 cm×30 cm)、P2(40 cm×50 cm)、P3(30 cm×35 cm)、P4(40 cm×40 cm)となっており、床面各所に補助柱とみられるものもある。カマドは西壁中央部に120 cm×100 cm×20 cmが残される。床面は平坦で軟い。出土遺物については下記のとおりである。



第139図 第6調査区第5号竪穴住居址(SI05)平面実測図



第140図 第6調査区第5号竪穴住居址(S105)出土遺物

遺物

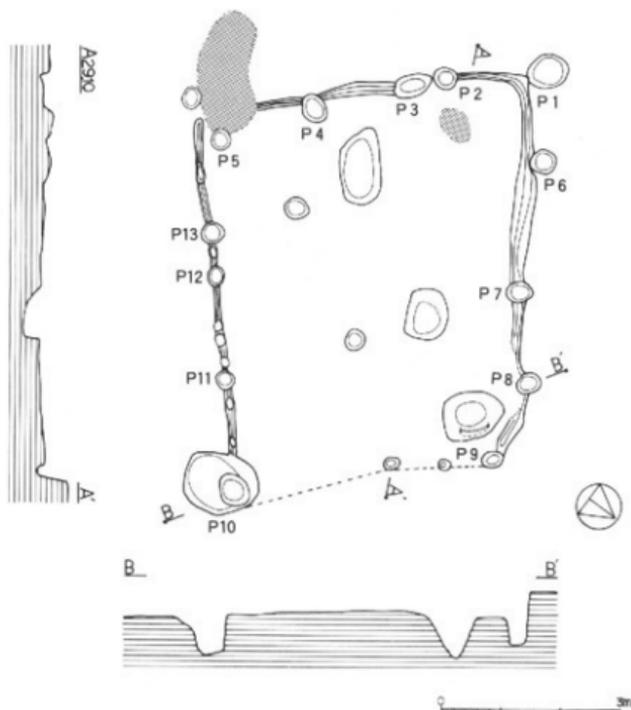
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	①17.0cm ②14.0cm ③0.3cm ④10.0cm	脚部は太く短い。胴部の広がりはややゆるやかなロクロ整形	良好 淡褐色	
2	高坏 (土師)	①12.0cm ②9.0cm ③0.3cm ④9.0cm	脚部は短く、底部は広がり有する。胴部の立ち上がりに稜を有し、口縁部の立ち上がりはやや外反する ロクロ整形	良好 褐色	
3	高坏 (土師)	①不明 ②不明 ③0.3cm ④10.0cm	脚部は細く短い。底部の広がり大きい 内部ヨコヘラ、外部タテヘラ整形	良好 褐色	脚部のみ
4	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
5	磨石		第140図参照		

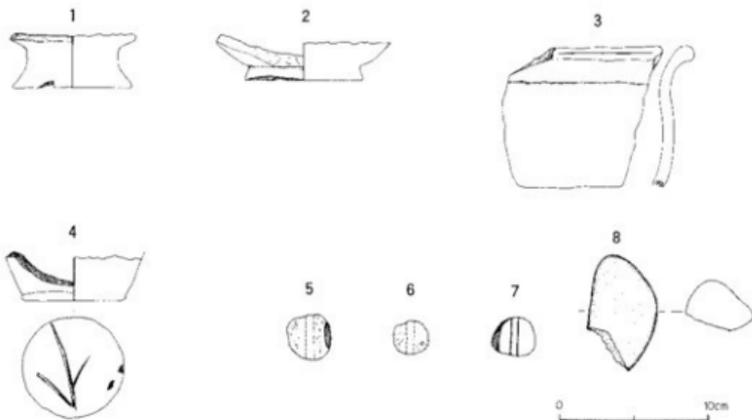
第6号竪穴住居址 (SI06) (第141図)

本住はSI05に隣接し、軸線を63度東方に向けている。平面形状は縦3.50 m、横4.50 mの方形プランとなっている。

掘立柱住居として柱の配列を見たが、柱穴列が縦と横とが合わないので掘立の規格にもって行けないのと、壁高が残されていたので一応本住を竪穴住として取扱ってみた。壁高は北側で20 cm、東側で35 cm、西で5 cmとなっていた。主柱は床面ではとらえることが出ないので、壁列にそって掘られたのが主柱列ではないかと思われる。但し前述のとおり主柱の規格が合わないので柱としては特にとり上げなかったが、何回も柱の立替えをなしたものと思われる。なお、主柱についてP1 (50 cm×40 cm)、P2 (38 cm×40 cm)、P3 (30 cm×35 cm)、P4 (35 cm×38 cm)、P5 (30 cm×30 cm)、P6 (40 cm×45 cm)、P7 (38 cm×40 cm)、P8 (33 cm×40 cm)、P9 (36 cm×40 cm)、P10 (80 cm×60 cm)、P11 (37 cm×40 cm)、P12 (36 cm×45 cm)、P13 (40 cm×45 cm)。



第141図 第6調査区第6号竪穴住居址(SI06)平面実測図



第142図 第6調査区第6号竪穴住居址(S106)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

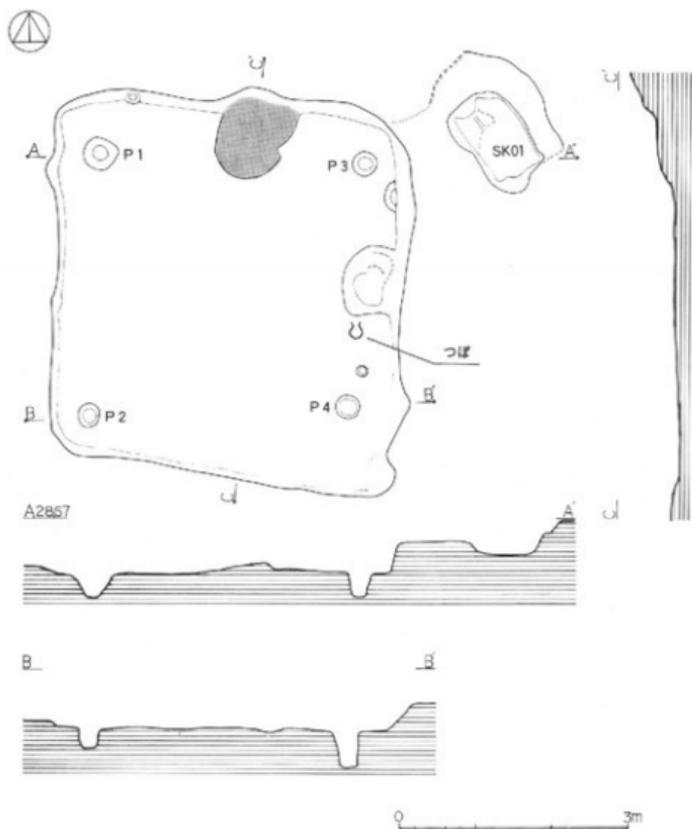
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏 (土師)	②3.5cm ③0.3cm ④8.0cm 台高3.0 cm	台部は大きく広がる 内外ともにクロコ整形	良好 淡褐色	底部こ み
2	高台付 坏 (土師)	③0.4cm ④8.0cm 台高10cm	台部は短くて垂直に立ち上がる。底部回転糸切 状 内部黒塗り	良好 淡褐色	底部の み
3	甕 (土師)	①不明 ②9.0cm ③1.0cm	胴部のふくらみはすくなく、頸部から口縁部にか けては内傾し口唇部は外反し、ふちを有する。 ヨコヘラ整形	良好 淡褐色	口縁部
4	甕 (土師)	②0.3cm ④7.0cm	底部からの立ち上がりは急である。底部に木の 葉の圧痕がある。 内外ともにヘラ整形	良好 灰黒色	底部
5	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
6	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨減あり	褐色	完
7	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/3残
8	磨石		第142図参照		

第7号竪穴住居址 (SI 07) (第143図)

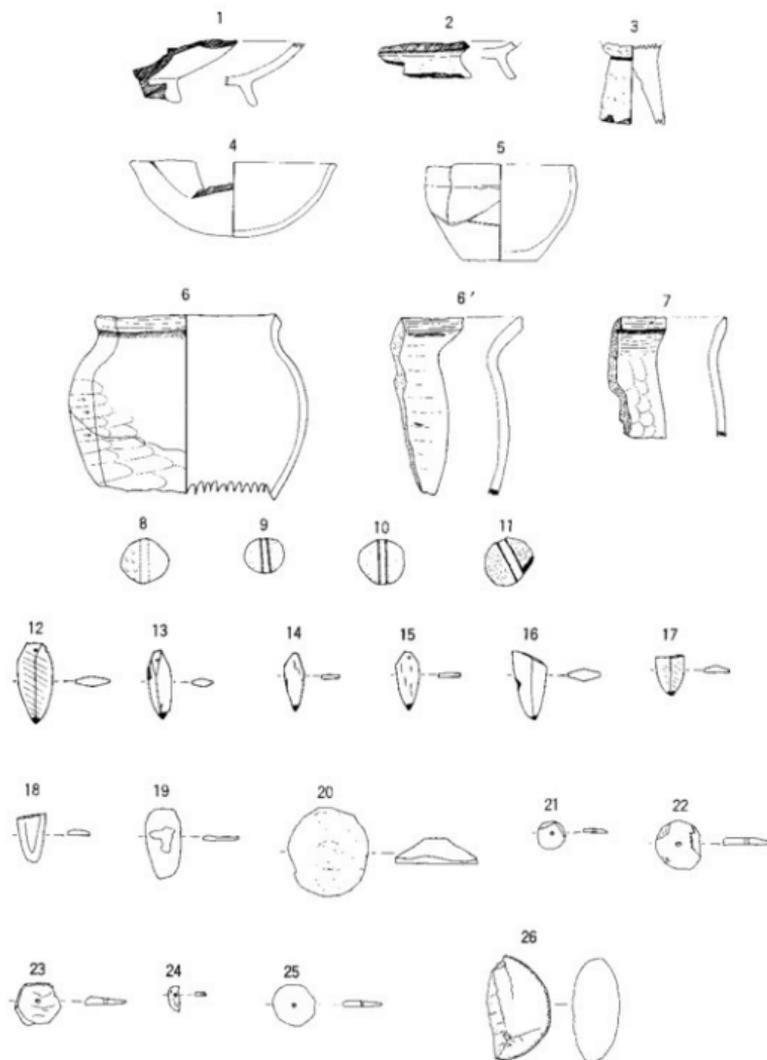
本住はSI 09の西隣に当り、軸線をほぼ10度東方にかたむけて造られている。平面形状は縦長4.00 m、横で4.50 mの方形状のプランをなす。

壁高は北側壁29 cm、西で13 cm、南9 cm、東24 cmで周溝は10 cm×5 cmが残されていた。主柱はP1 (45 cm×25 cm)、P2 (30 cm×23 cm)、P3 (30 cm×23 cm)、P4 (30 cm×40 cm)。カマドは80 cm×78 cm、高さ29 cmとなっていた。床面は平坦で固い。

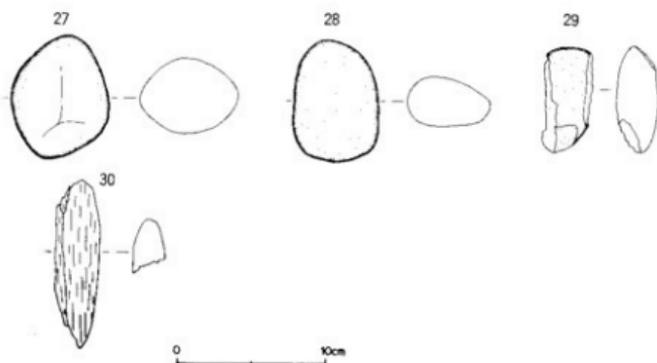
本住の床面から多数の滑石の原石と模造剣6点、有孔円板5点、石製鏡等が検出されたことから、本住はそれらの製作所ではなかったかと思われる。遺物については下記のとおりである。



第143図 第6調査区第7号竪穴住居址 (SI07) 平面実測図



第144图 第6調査区第7号竪穴住居址(SI07)出土遺物



第144図 第6調査区第7号竪穴住居址(S107)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏 (土師)	②4.0cm ③0.3cm ④6.0cm 台高1.5 cm	台部はやや広がり有する。立ち上がりはゆる やか ロクロ整形	良好好 灰褐色	1/4残
2	高台付 坏 (土師)	②1.5cm ③0.5cm ④6.0cm	台部は広がり有する内外ロクロ整形	良好 褐色	底部
3	高坏 (土師)	②5.0cm ③0.5cm ④6.0cm	底部からの立ち上がりは長く急である。タテヘ ラ整形	良好 褐色	脚部 1/4残
4	坏 (土師)	①14.0cm ②5.0cm ③0.3cm ④5.0cm	底部からの立ち上がりはゆるやがで、口唇部で 小々外反する、内部黒塗りヨコヘラナデ。	良好 褐色	1/4残
5	碗 (土師)	①10.0cm ②6.5cm ③0.4cm ④5.0cm	底部からの立ち上がりはやや急。胴の上部で 少々ふくらみを有する。口縁部の立上り急、内 部黒塗りヨコヘラ整形。	良好 褐色	梢々完
6	甕 (土師)	①12.0cm ②13.0cm ③0.4cm	頸部にくらみがあり、口縁部は短く外反す る。口縁部にふちを有する。ロクロ整形。	良好 褐色	1/4残
6'	甕 (土師)	①23.0cm ②11.0cm ③1.0cm	頸部から口縁部にかけての立ち上がりはゆる やかに外反し、口唇部にはふちを有する。ロク ロ使用ヘラ整形	良好 褐色	1/4残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	甕 (土師)	①2.0 ②8.0cm ③1.0cm	胴部のふくらみはすくなく、口縁部は外反し、口唇部にふちを有する。	良好 褐色	1/2残
8	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	完
9	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	1/2残
10	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	1/2残
11	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/2残
12	石製模造剣		第144図参照		
14	石製模造剣		第144図参照		
15	石製模造剣		第144図参照		
16	石製模造剣		第144図参照		
17	石製模造剣		第144図参照		
18	石製模造剣		第144図参照		
19	石製模造剣		第144図参照		
20	石製鏡		第144図参照		
21	有孔円板		第144図参照		
22	有孔円板		第144図参照		
23	有孔円板		第144図参照		
24	有孔円板		第144図参照		
25	有孔円板		第144図参照		
26	磨石		第144図参照		
27	敲石		第144図参照		

遺物

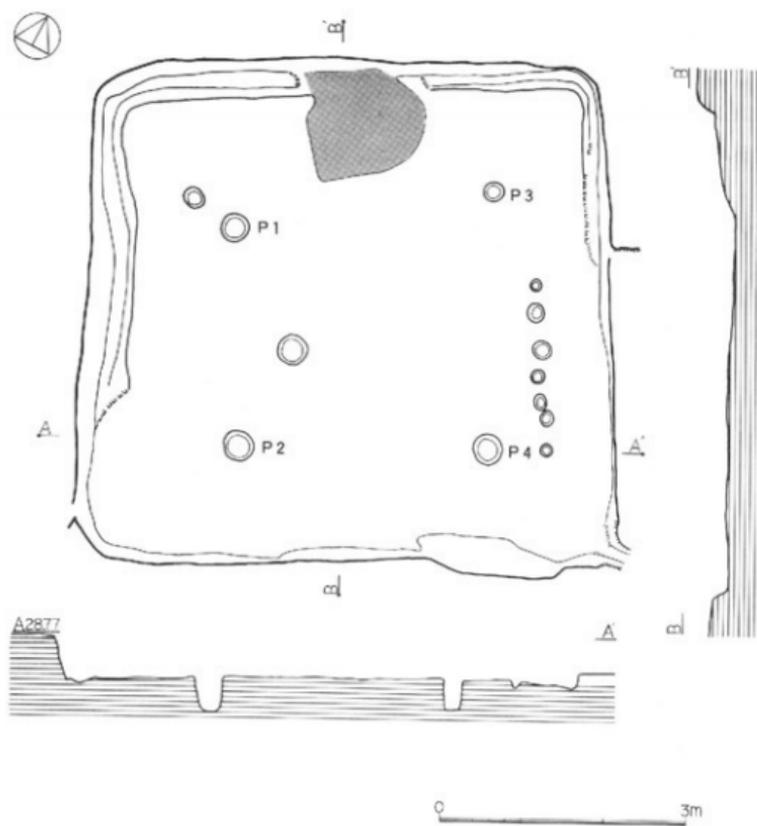
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
28	磨石		第144図参照		
29	磨石		第144図参照		
30	磨石		第144図参照		

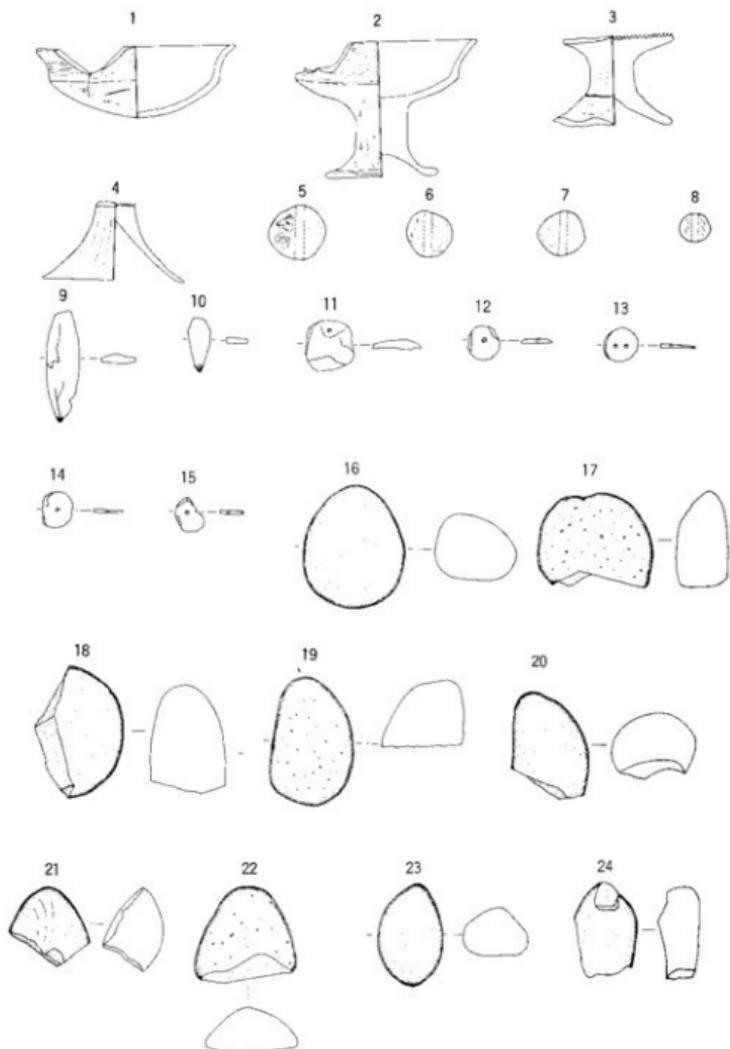
第8号竪穴住居址 (SI 08) (第145図)

本住はSI 01の西隣に当り、軸線をほぼ26度西方にむけて建てられている。その平面形状は縦長6.50 m、横長6.10 mの方形状のプランである。

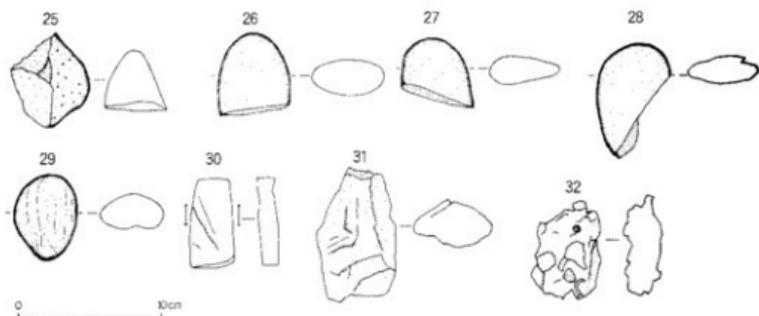
壁高は西壁62 cm、東17 cm×50 cm、北で49 cm、南69 cmとなっており、南方の壁面近くに溝が通じているが、これは後で掘られたものであろう。周溝は西、東、北、南各壁下に15 cm×10 cmが残されており、壁柱もいくらか東側に残存する。支柱はP1 (30 cm×30 cm)、P2 (38 cm×50 cm)、P3 (28 cm×35 cm)、P4 (30 cm×40 cm)となっている。本住は火災にあったらしく、焼土が床面に散乱している。カマドは北壁中央部に110 cm×100 cm×30 cmが残されていた。床面は一般に固く平坦である。なお、本住からも多数の原石とともに模造遺物が出土した。出土遺物の主なるものについては下記のとおりである。



第145图 第6调查区第8号竖穴住居(SI08)平面实测图



第146图 第6调查区第8号整穴住居址(S108)出土遗物



第146図 第6調査区第8号竪穴住居址(S108)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①14.0cm ②5.0cm ③0.4cm	丸底で稜を有し、口縁部の立ち上がりは内傾しながら外反するロクロ整形	良好 淡褐色	完
2	高坏 (土師)	①14.0cm ②9.0cm ③0.4cm ④8.0cm 脚高5.0cm	脚部は細く短い、底部は広がり有する。胴上部に稜をし口縁部は外するロクロ整形	良好 淡褐色	2/3残
4	高坏 (土師)	③0.3cm ④10.0cm	タテヘラ整形	良好 褐色 砂粒含有	脚座部のみ
5	土錘	①4.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
6	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
7	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
8	土錘	①2.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
9	石製模造剣		第146図参照		
10	石製模造剣		第146図参照		
11	有孔円板		第146図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
12	有孔円板		第146図参照		
14	有孔円板		第146図参照		
15	有孔円板		第146図参照		
16	磨石		第146図参照		
17	磨石		第146図参照		
18	敲石		第146図参照		
19	敲石		第146図参照		
20	磨石		第146図参照		
21	磨石		第146図参照		
22	磨石		第146図参照		
23	磨石		第146図参照		
24	磨石		第146図参照		
25	磨石		第146図参照		
26	磨石		第146図参照		
27	磨石		第146図参照		
28	磨石		第146図参照		
29	磨石		第146図参照		
30	砥石		第146図参照		
31	石核		第146図参照		
32	鉄器		第146図参照		

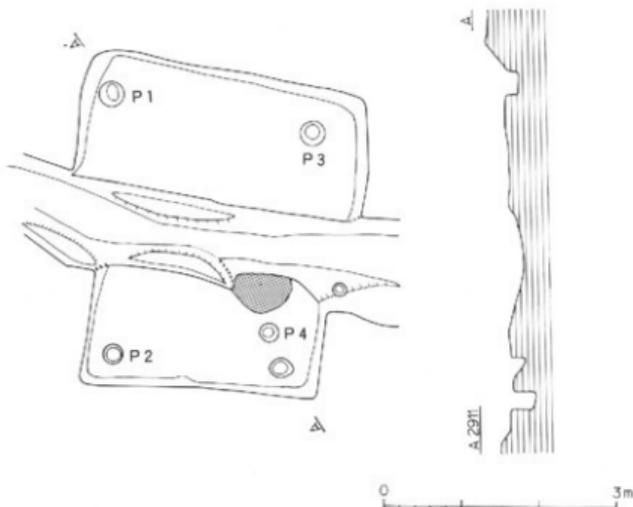
第9号竪穴住居址 (SI 09) (第147図)

本住はSI 07の東隣に位置し、軸線をほぼ30度西方に向けて建てられる。平面形状は縦の長さ4.38 m、横の長3.48の正方形プランである。

壁高は北側壁27 cm、西21 cm、南12 cm、東38 cmとなっていた。P1(30 cm×26 cm)、P2(22 cm×31 cm)、P3(31 cm×29 cm)、P4(30 cm×30 cm)は支柱であろう。床面は平坦で軟い。

本住の中央床面を上幅91 cm、下幅20 cm、高さ30 cmの溝が通っているが、これは後で掘られた溝であろう。

出土遺物については下記の通りである。



第147図 第6調査区第9号竪穴住居址(SI09)平面実測図・出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①14.0cm ②2.5cm ③0.5cm	丸底でゆるやかに立ち上がる。 ロクロ整形	良好 黒塗	1/3残
2	高台付 坏 (土師)	①不明 ②不明 ③0.3cm ④6.0cm ⑤1.0cm	台部は底部に向って広がりをみせる。胴部は極めてゆるやかに立ち上がる。内部黒塗。 内外ともにロクロ整形。	良好 淡黄色	1/3残
3	高台付 坏 (土師)	①不明 ②不明 ③0.3cm ④6.0cm ⑤2.5cm	台部の広がりは大きく長く、ロクロ整形。	良好 淡黄色 砂粒含有	1/3残

第10号掘立柱建物遺構 (SB 10)・第11号掘立柱建物遺構 (SB 11) (第148図)

SI06

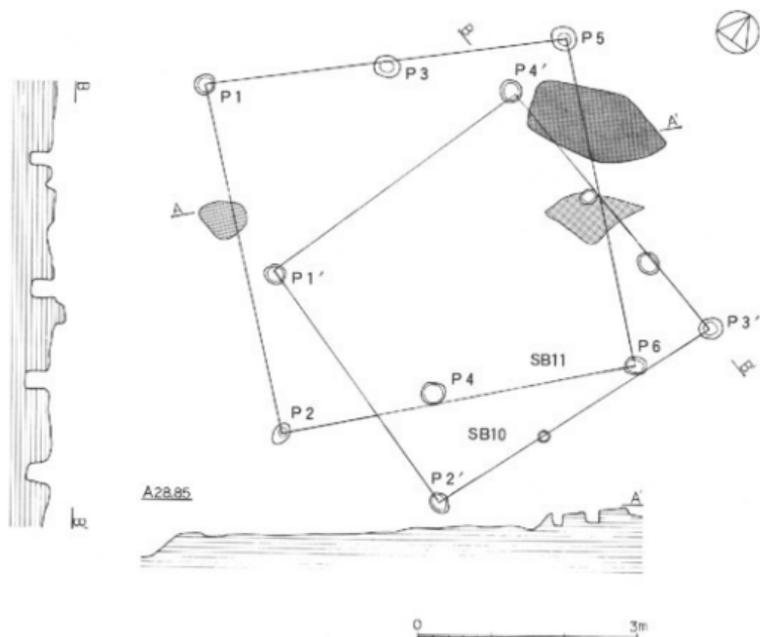
本住はSI06の南隣に位置し、SB11と重なっている。軸線をほぼ25度東側にむけている。その平面形状は縦の長さ4.80m、横の長さ4.80mの正方形のプランであるが、東の長さ4.60、南側の長さ5.00mと少々規格が異なるので完全な正方形とは言えない。支柱はP1(28cm×40cm)、P2(28cm×27cm×18cm)、P3(30cm×13cm)、P4(30cm×20cm)、P5(31cm×25cm)、P6(28cm×42cm)となる。また東側壁にカマドを有するがそれは100cm×40cm、高さ20cmとなっている。床面は平坦で軟い。

SB11

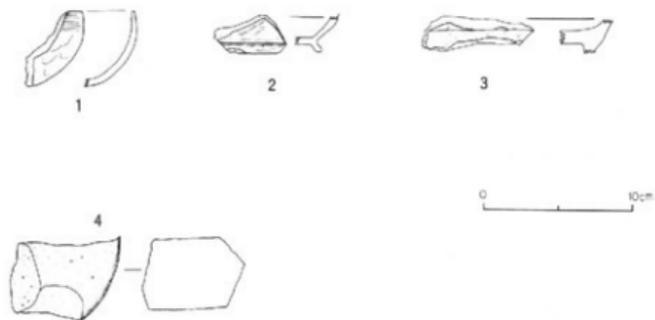
本住はSI10の上に建てられたものと思われる。軸線をほぼ51度ぐらいい東にかたむけているようである。この平面形状は西南長4.20m、西北長4.50m、東北で4.60m、東南で4.00mと長さが異なっていて完全な方形プランではない。

支柱はP1'(28cm×10cm)、P2'(21cm×24cm)、P3'(26cm×25cm)、P4'(53cm×40cm×29cm)となり、床面は平坦で軟い。

出土遺物については高台付坏等の出土が多く見られ、掘立柱柱の変遷が理解されるようである。遺物については下記にその主なるものを示しておいた。



第148图 第6調査区第10号・11号掘立柱建物遺構(SB10・11)平面実測図

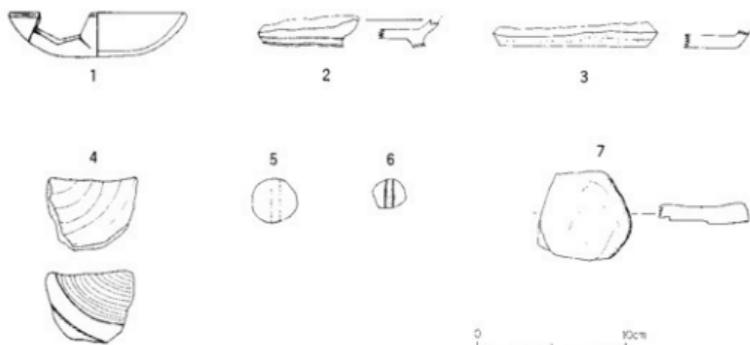


第149图 第6調査区第10号掘立柱遺構(SB10)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏片 (土師)	②5.0cm ③0.5cm	丸底で胴部もまるみを有する。口唇部は少々内反する内部黒塗、ロクロ整形	良好 灰黒色	1/4残
2	高台付 坏 (土師)	②1.0cm ③0.3cm	高台部は短くて広がる。ロクロ整形	良好 黒褐色	底部のみ
3	高台付 坏 (須恵)	②1.0cm ③0.4cm	ロクロ整形	良好 青白色	座部のみ
4	磨石		第149図参照		



第150図 第6調査区第11号掘立柱遺構(SB11)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ②3.0cm ③0.3cm	丸底でゆるやかに立ち上がる。口唇部は少々内反する ロクロ整形	良好 淡褐色	1/3残
2	高台付 坏 (土師)	③0.4cm ⑥6.0cm	ロクロ整形	良好 淡褐色	

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

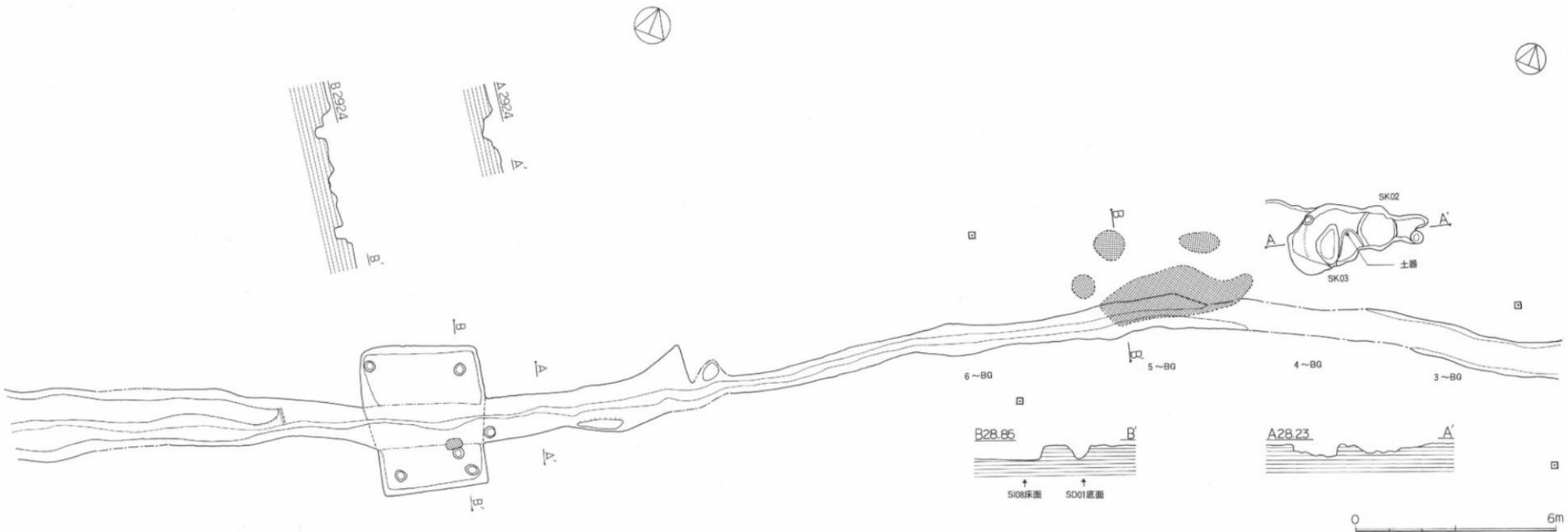
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	甕 (土師)	③1.0cm 他不明	ロクロ整形	黒褐色	底部のみ
4	坏 (須恵)	③0.3cm	底部回転糸部	良好 青白色	底部のみ
5	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅なし	褐色	完
6	土鍾	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	1/4残
7	磨石		第150図参照		

第1号溝状遺構 (SD 01) (第151図)

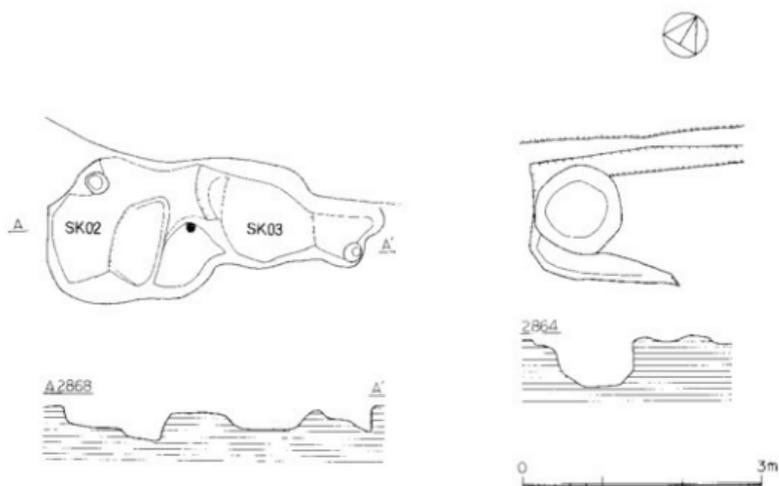
本調査区の西から東の方向に溝状遺構がある。

初めにSI 07の北側脇を幅60 cm、高さ15 cm、次にSI 09の中央を貫流し、SI 06の北西部を幅1.30 m、高さ40 cmで流れ、そしてSI 03の北西部を幅60 cm、高さ30 cmをもって貫流し、SI 08の南壁下を通過し、SI 02の南側を幅100 cm、高さ15 cmをもって東の方向に流れる溝である。

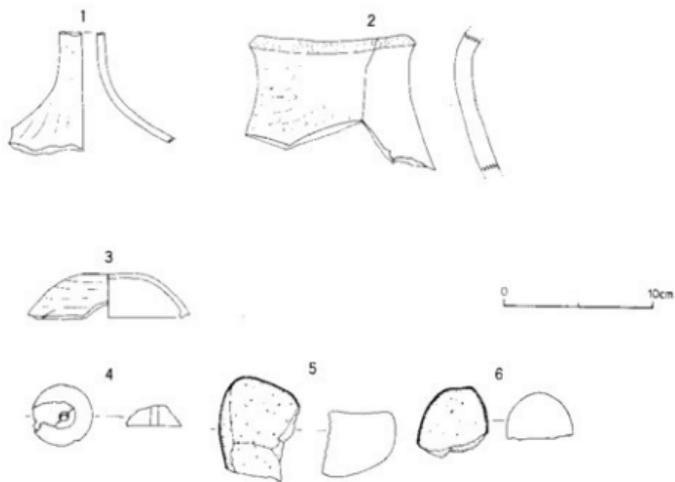
この溝は後世において掘られたものではなかろうか。



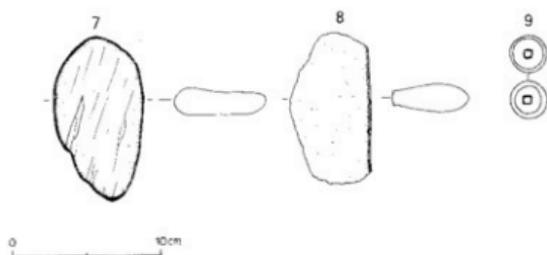
第151図 第6調査区第1号溝状遺構(SD01)第2号・3号土壇状遺構(SK02・03)平面実測図



第152図 第6調査区第2号・3号・4号土壇状遺構(SK02・03・04)平面実測図



第153図 第6調査区第1号溝状遺構(SD01)出土遺物



第153図 第6調査区第1号溝状遺構(SD01)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	①13.0cm ②8.0cm ③0.5cm	脚部は細く、底部はゆるやかに広がる ロクロ整形	良好 褐色	脚底部
2	壺 (土師)	①不明 ②9.0cm ③1.0cm	胴部の広がりは少なく、口唇部不明 ロクロ整形	良好 淡褐色	口縁部
3	坏ノ蓋 (須恵)	①11.0cm ②3.0cm ③0.3cm	上部からの下りはゆるやかで、口縁部は少々外 反する輪積整形	良好 灰青色	
4	紡錘車		第153図参照		
5	敲石		第153図参照		
6	磨石		第153図参照		
7	磨石		第153図参照		
8	磨石		第153図参照		
9	古銭		第153図参照		

(7) 第7調査区



第7調査区全景



第154团 第7调查区兔窟遗址全图

(7) 第7調査区

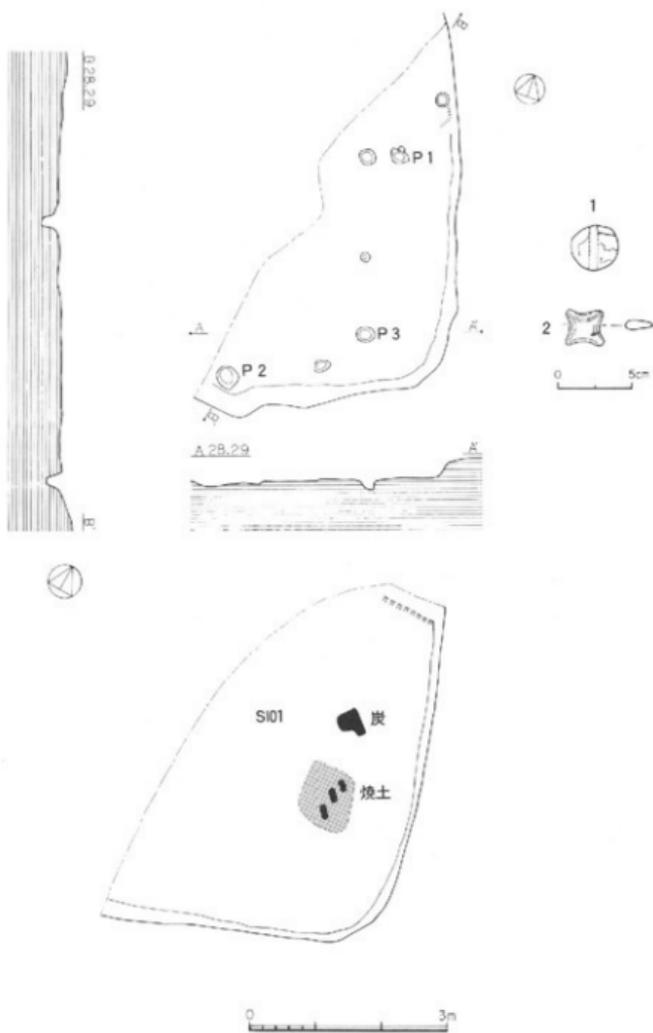
本調査区は本遺跡の西北部の面積 1375 m²に当る台地に存在する。ここで検出された遺構は①竪穴住居址 27, ②掘立住居址 9, ③土壇 5, ④溝状遺構 1 があげられる。本調査区の出土遺物として先ずあげられるのは、極めて数多く出土した祭祀遺物(石製模造鏡すなわち有孔円板。石製模造剣, すなわち有孔尖板。玉の類すなわち, 曲玉: 管玉: 切子玉等)である。それに伴う滑石の原石は各住居址ごとにおびただしい出土を見た。中には半製品も多く含まれていたため、この住居址全体がそれらの祭祀遺物の製作所ではなかつたかと思われるのである。本調査区の竪穴住居址は床面から和泉式土器の出土が多く、鬼高式がこれにつくが、高台付坏等も見られる。なお、掘立柱住居址の床面から滑石等の原石や製品の出土も多く見られる。

第1号竪穴住居址 (SI01) (第155図)

本住は本調査区の最北西端にあたり、SI07の両隣に位置する。軸線はほぼ30度東方にむいてい
る。西側の方は通路によって切られ調査不能。したがってその2分の1が残存するが南側壁は4.
60 m東側は5.20 mとなっており、方形プランとなろうか。

壁高は東の方で26 cm, 南で16 cmが残されている。主柱はP1(33 cm×17 cm), P2(28 cm×19 cm),
P3(28 cm×25 cm)がそれに当たる。床面は平坦で少々固い。

なお床面から滑石の原石が多く出土、その中から石製模造剣の完形5こも検出されたことから、
本住はその製作所ではなかつたかと思われる。遺物については下記のとおりである。



第155图 第7調査区第1号竪穴住居址(SI01)平面実測図・出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土鉢	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり	褐色	
2	不明石 製品				

第2号掘立柱建物遺構 (SB02)・第14号掘立柱建物遺構 (SB14) (第156図)

SB02

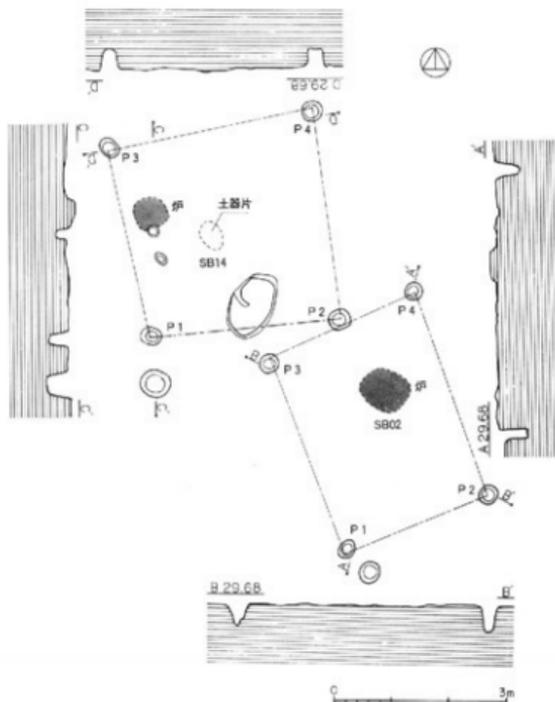
本住はSI03, SI14に隣接する。軸線はほぼ26度西方にむけられている。平面形状は西側3.50m, 北2.70mの方形プランである。

主柱はP1 (30cm×35cm), P2 (27cm×37cm), P3 (21cm×37cm), P4 (30cm×32cm)となり、床面中央部に60cm×40cm, 高さ8cm, また、北西側にも50cm×50cm, 高さ6cmの炉を有する。

SB14

本住はSB02の, SB08の東側に位置し, 軸線をほぼ23度西方にかたむけている。平面形状は西側で4.00m, 南3.90m, 東3.80m, 北3.60mの不整形方形プランである。

主柱はP1 (26cm×29cm), P2 (24cm×32cm), P3 (28cm×30cm), P4 (24cm×14cm)となっており, 床面中央の床面の南側に90cm×80cm, 高さ15cmの炉を有する。床面は平坦で軟い。

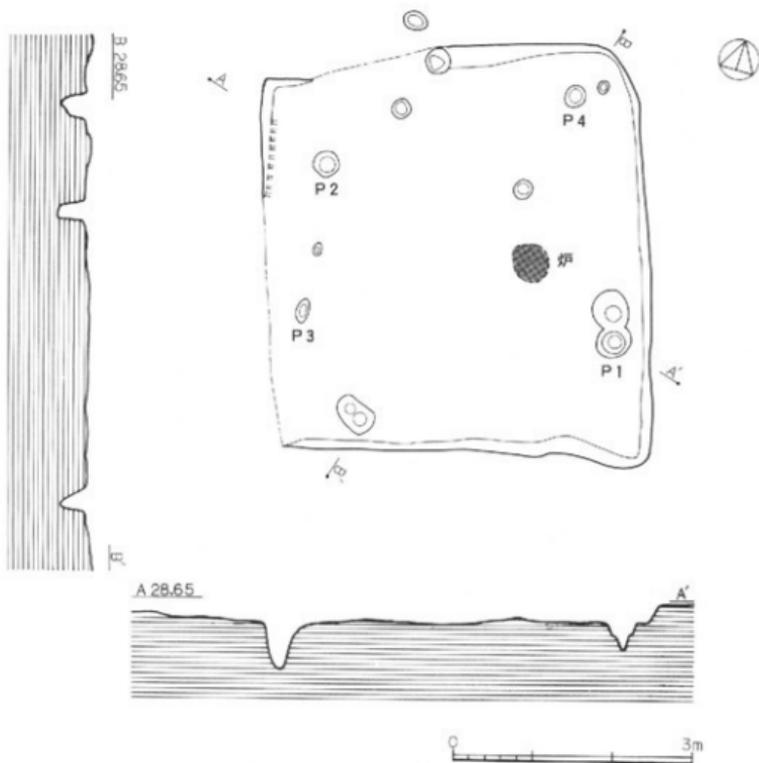


第156図 第7調査区第2号・14号掘立柱建物遺構(SB02・14)平面実測図

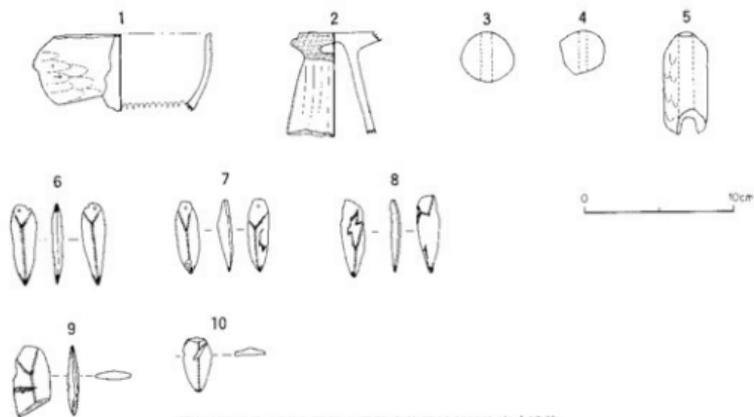
第3号竪穴住居址 (SI03) (第157図)

本住はSI05の東隣, SI09の西隣に当る。軸線はほぼ20度西方に向ける。平面形状は1辺が5.00mの正方形プランである。

壁高は東壁20cm, 南10cm, 北壁1部8cmとなっている。主柱はP1(40cm×41cm), P2(34cm×38cm×20cm), P3(30cm×20cm), P4(28cm×30cm)となっている。床面中央に炉があるがそれは76cm×53cm×5cmとなっている。床面は平坦で軟い。



第157図 第7調査区第3号竪穴住居址(SI03)平面実測図



第158図 第7調査区第3号竪穴住居址(S103)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13.0cm ②5.0cm ③0.4cm	胴部はまるく、口縁部の立ち上がりは垂直。 内外へら整形	良好 褐色	1/8残
2	高坏脚部 (土師)	②7.0cm ③0.4cm	脚上部はふくらみ短い。へらナデ	良好 砂粒 褐色	脚部のみ
3	土錘	①3.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
4	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	完
5	土錘	①2.0cm 長7.0cm 孔1.0cm	磨滅あり	褐色	完
6	石製模造剣		第158図参照		
7	石製模造剣		第158図参照		
8	石製模造剣		第158図参照		
9	石製模造剣		第158図参照		
10	石製模造剣		第158図参照		

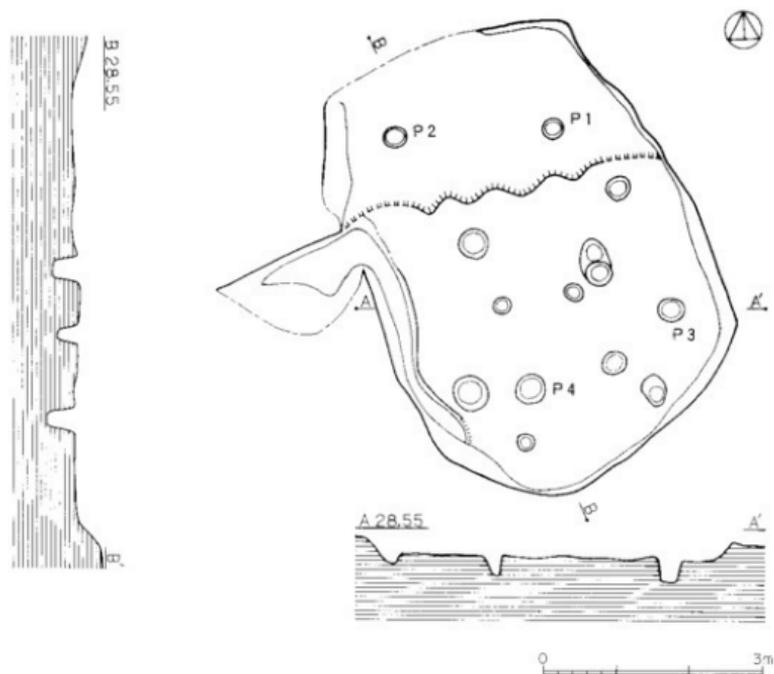
第4号竪穴住居址 (SI 04) (第159図)

本住は本調査区の東端に位置し、軸線をほぼ20度西方へ向けている。平面形状は不整形楕円形状をなしているが、縦軸が5.08 m、横軸で4.50 mのプランである。

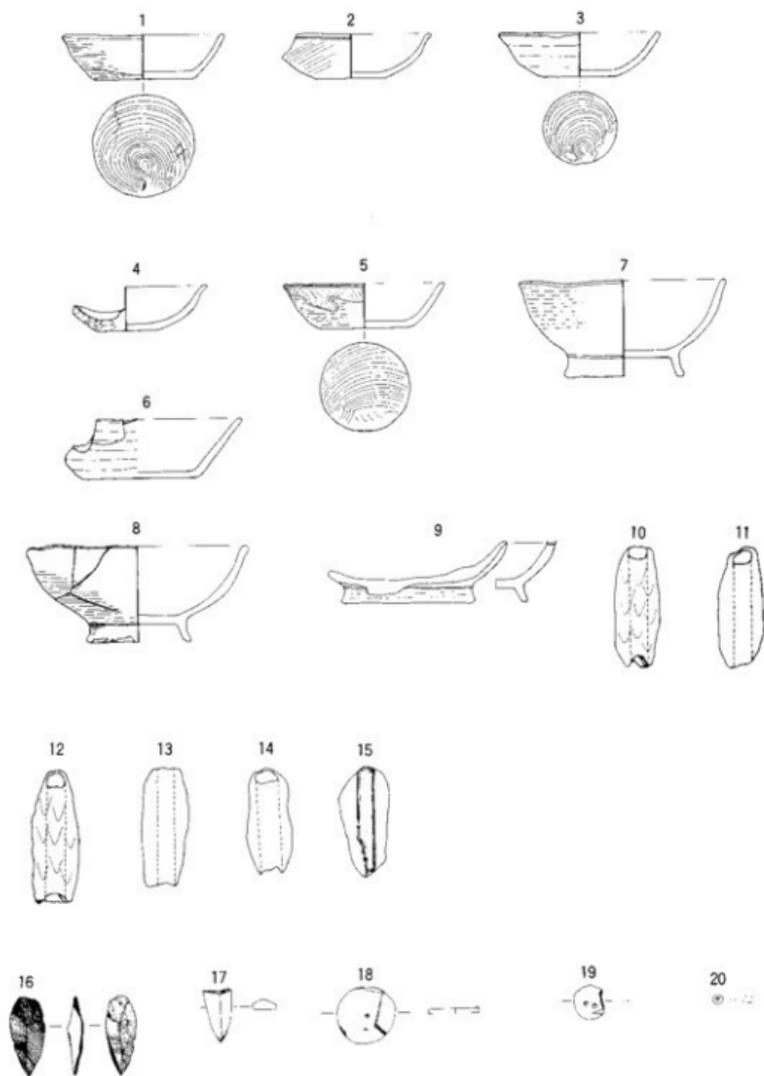
壁高は西側30 cm、南側19 cm、東側17 cm、北側で5 cmとなっており、周溝は西側で30 cm×15 cmでその他にはない。支柱はP1 (33 cm×23 cm)、P2 (33 cm×40 cm)、P3 (30 cm×29 cm)、P4 (31 cm×30 cm)。東壁にカマド 70 cm×50 cm高さ15 mがつけられていた。

床面は凹凸があって軟いが、床面各所に焼土が散乱していることから火災にかかったものではなかろうか。

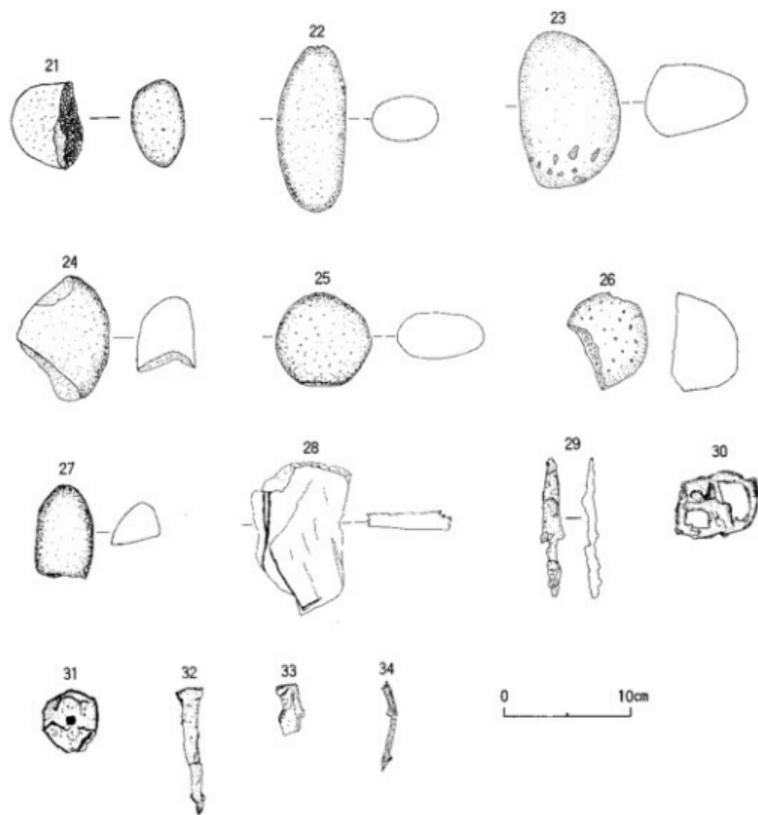
なお本住から石製品、及び鉄器の類が多く出土したことは大変注目すべきものではなかろうか。その中には馬具の類もあった。出土遺物については下記の通りである。



第159図 第7調査区第4号竪穴住居址(SI04)平面実測図



第160图 第7调查区第4号整穴住居址(SI04)出土遗物



第160図 第7調査区第4号竪穴住居址(SI04)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①11.0cm ②3.0cm ③0.3cm ④7.0cm	底部は回転糸切状で底部からの立ち上がりはやや外反しながら立上る。ロクロ整形	良好 灰褐色	完
2	坏 (土師)	①11.0cm ②3.0cm ③0.3cm ④5.0cm	底部は回転糸切状で、底部からやや外反しながら立ち上がる ロクロ、横ヘラナデ	良好 灰白色	梢々完

遺物

(法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏 (土師)	①11.0cm ②3.0cm ③0.4cm ④5.0cm	底部からの立ち上がりはゆるやかで、口唇部で外反する。 輪積痕ヘラナデ	良好 灰褐色	完
4	坏 (土師)	①不明 ②3.0cm ③0.4cm	底部は回輪転糸切状、底部からの立ち上がりはゆるやかで口唇部で外反する。ロクロ整形	良好 褐色	1/8残
5	坏 (土師)	①11.0cm ②3.0cm ③0.4cm ④6.0cm	底部かざらの立ち上がりはやや急である。 底部は回転糸切状	良好 灰褐色 内部黒塗	完
6	坏 (須恵)	①14.0cm ②4.0cm ③0.3cm ④8.0cm	底部からの立ち上がりはゆるやかである 輪積方式、外部横ヘラナデ	良好 灰青色	
7	高台付 碗 (土師)	①14.0cm ②6.0cm ③0.4cm ④8.0cm ⑤1.0cm	台部の立ち上がりは垂直である。胴部はゆるやかに内傾し、口唇部で外反する 内外共に横ヘラ整形	良好 褐色	完
8	高台付 碗 (土師)	①15.0cm ②6.5cm ③0.4cm ④7.0cm ⑤1.0cm	台部の立ち上がりは垂直である。胴部はゆるやかに上り、口唇部でやや外反する。 ロクロ、外部横ヘラ	良好 灰褐免 内部黒塗	1/8残
9	高台付 碗 (土師)	①4.0cm ③0.4cm ④8.0cm	外部の立ち上がりは垂直、胴部はゆるやかに立上る	良好 灰褐色	1/8残
10	土鍾	①3.0cm 孔1.2cm 長8.0cm	磨滅あり	褐色	完
11	土鍾	①3.0cm 孔1.2cm 8.0cm	磨滅あり	褐色	完
12	土鍾	①3.0cm 孔1.2cm 長9.0cm	磨滅あり	褐色	完
13	土鍾	①3.0cm 孔1.2cm 長9.0cm	磨滅あり	褐色	完
14	土鍾	①3.0cm 孔1.3cm 長7.0cm	磨滅あり	褐色	完

遺物

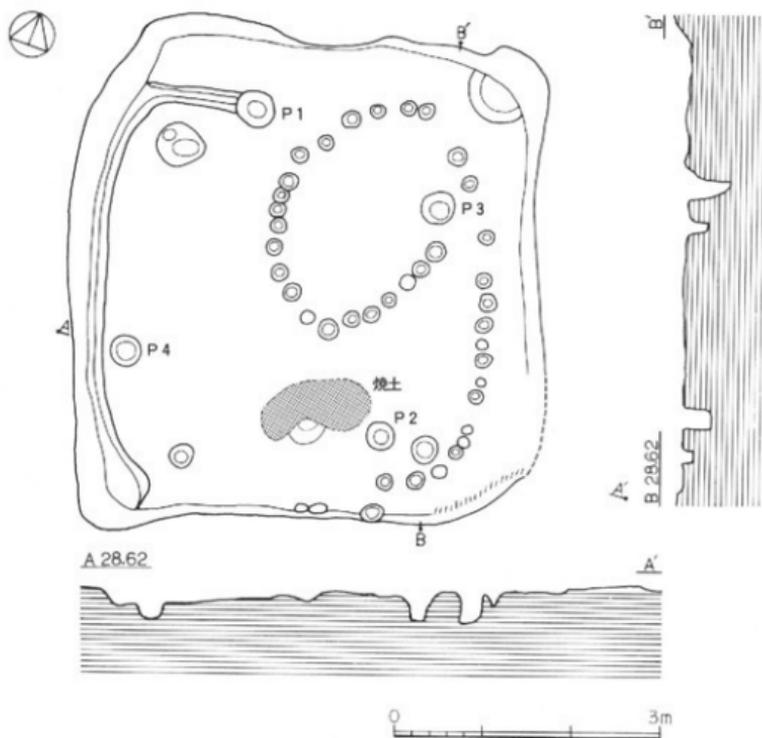
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
15	土鍾	①3.0cm 孔1.2cm 長7.0cm	磨減あり	褐色	1/2残
16	石製模造剣		第160図参照		
17	石製模造剣		第160図参照		
18	有孔円板		第160図参照		
19	有孔円板		第160図参照		
20	白玉		第160図参照		
21	磨石		第160図参照		
22	磨石		第160図参照		
23	磨石		第160図参照		
24	磨石		第160図参照		
25	磨石		第160図参照		
26	磨石		第160図参照		
27	磨石		第160図参照		
28	石核		第160図参照		
29	鋳		第160図参照		
30	馬具		第160図参照		
31	不明鉄片		第160図参照		
32	不明鉄片		第160図参照		
33	不明鉄片		第160図参照		
34	不明鉄片		第160図参照		

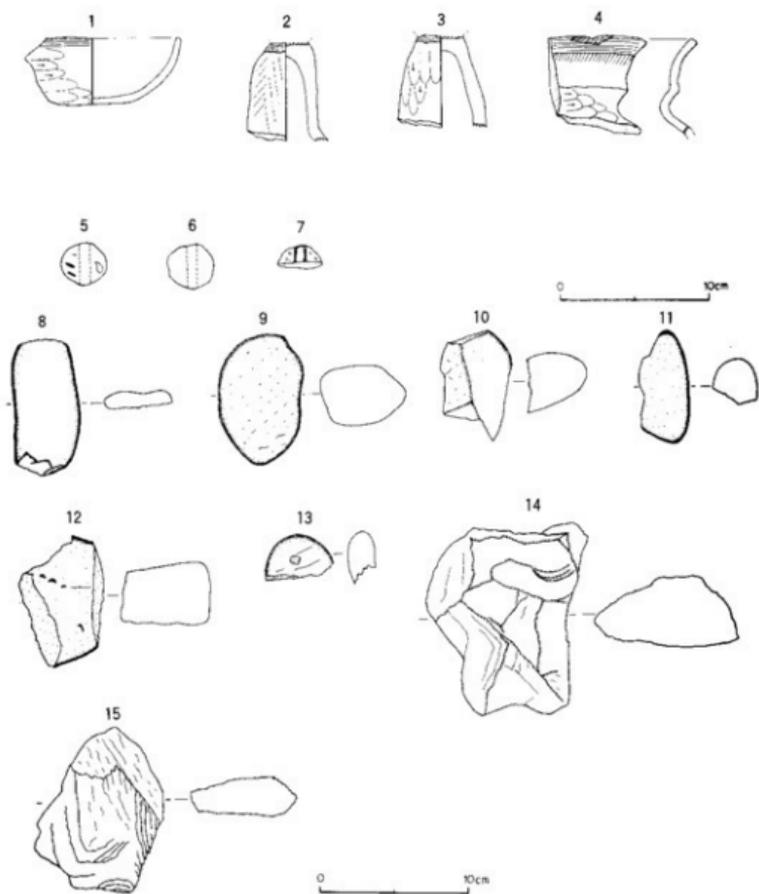
第5号竪穴住居址 (SI 05) (第161図)

本住は SI03 の北隣、本調査区の北端、軸線はほぼ 20 度西方にかたむく。この平面形状は縦長 5.50 m、横で 5.00 m の方形プランであった。

壁高は本壁側 5 cm、南 10 cm、西 30 cm、北 15 cm となっていた。主柱は P1 (40 cm×40 cm)、P2 (28 cm×30 cm)、P3 (35 cm×37 cm)、P4 (35 cm×36 cm) となっていた。床面南東部に炉があったが、それは 50 cm×103 cm 高さ 10 cm となっていた。なお床面は平坦で軟かかったが、両壁下には 20 cm×10 cm の周溝があった。なお床面には円形状の小ピットが検出された。



第161図 第7調査区第5号竪穴住居址 (SI05) 平面実測図



第162图 第7調査区第5号竪穴住居址(S105)出土遺物

遺物

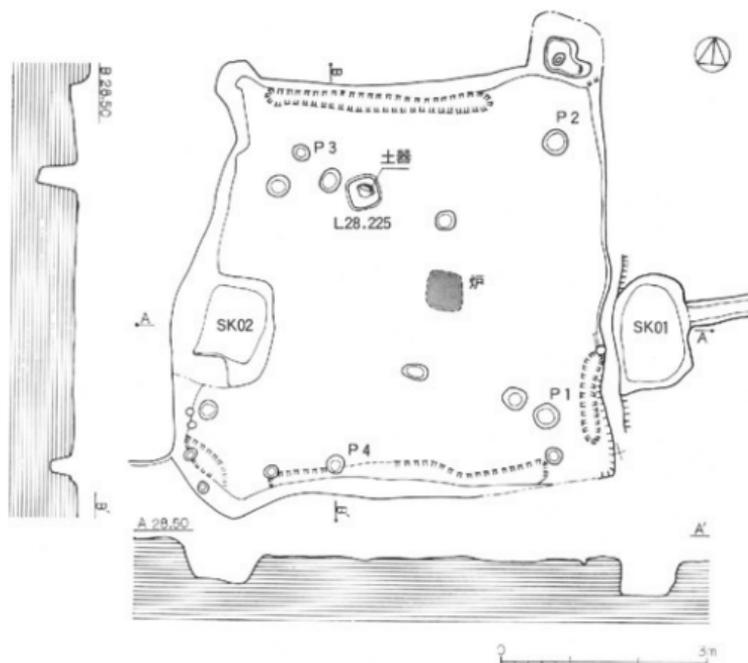
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①12.0cm ②4.5cm ③0.4cm	丸底で口縁部で少々内傾し、口唇部で外反する。 ロク、ヘラナデ	良好 褐色 砂粒含有	1/4残
2	高坏脚部 (土師)	②6.0cm 他不明	脚部はややふくらみを有する。 タテヘラ削り。	良好 褐色	残片
3	高坏脚部 (土師)	①6.0cm ③0.6cm	脚部のふくらみは大きくて短い。 タテヘラ削り。	良好 褐色	残片
4	甕口縁部 (土師)	②6.0cm ③0.4cm	胴部は広がり、頸部に稜を有し口縁部は内反しながら立ち上がる。口唇部で外反する。 ヘラナデ。	良好 灰褐色	残片
5	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
6	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
7	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/4残
8	石斧片		第162図参照		
9	敲石		第162図参照		
10	磨石		第162図参照		
11	磨石		第162図参照		
12	敲石片		第162図参照		
13	磨石		第162図参照		
14	石核		第162図参照		
15	石核		第162図参照		

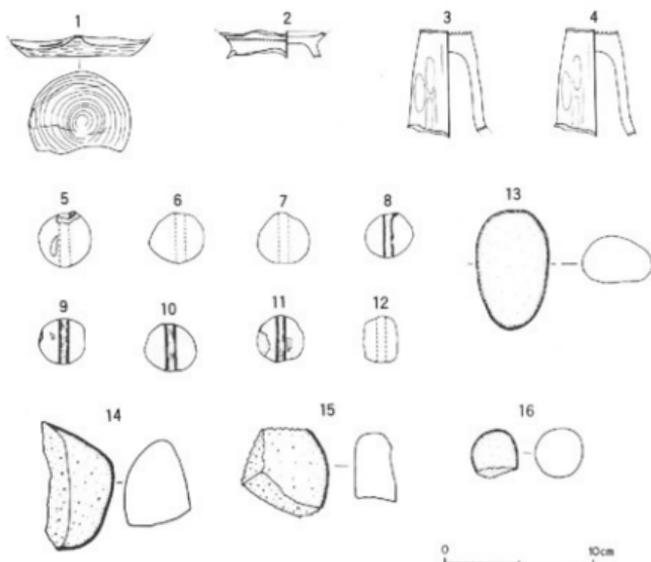
第6号竪穴住居址 (SI 06) (第163図)

本住は本調査区のほぼ中央部、SB12の南隣りに当り、軸線はほぼ90度西方にむけられていた。この平面形状は縦長6.00m、横で5.10mの方形プランであった。

壁高は西壁20cm、南21cm、東30cm、北32cmとなっており、周溝は西壁下20cm×5cm、南20cm×10cm、東20cm×10cm、北20cm×6cmとなっていた。主柱はP1(40cm×40cm)、P2(40cm×38cm)、P3(25cm×25cm)、P4(30cm×33cm)となる。更に床面はほぼ平坦で軟いが床面中央部に炉とみられるものがあり、それは50cm×40cm×高さ5cmとなっていた。



第163図 第7調査区第6号竪穴住居址(SI06)第1号・2号土壇状遺構(SK01・02)平面実測図



第164図 第7調査区第6号壺穴住居址(SI06)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏底部 (土師)	③0.4cm ④7.0cm	底部は回転糸切状、他不明。	良好 灰白色	残片
2	高台付 坏 (土師)	③0.3cm ④6.0cm	内外共に黒塗り。	良好 黒色	台部 のみ
3	高坏脚 部 (土師)	②6.0cm ③0.4cm	脚部は稍々細く長い、タテヘラ。	良好 褐色	残片
4	高坏脚 部 (土師)	②8.5cm ③0.4cm	脚部は稍々細く長い、タテヘラ。	良好 褐色	残片
5	土鏝	①3.5cm 孔0.5cm	磨減あり	褐色	完
6	土鏝	①3.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

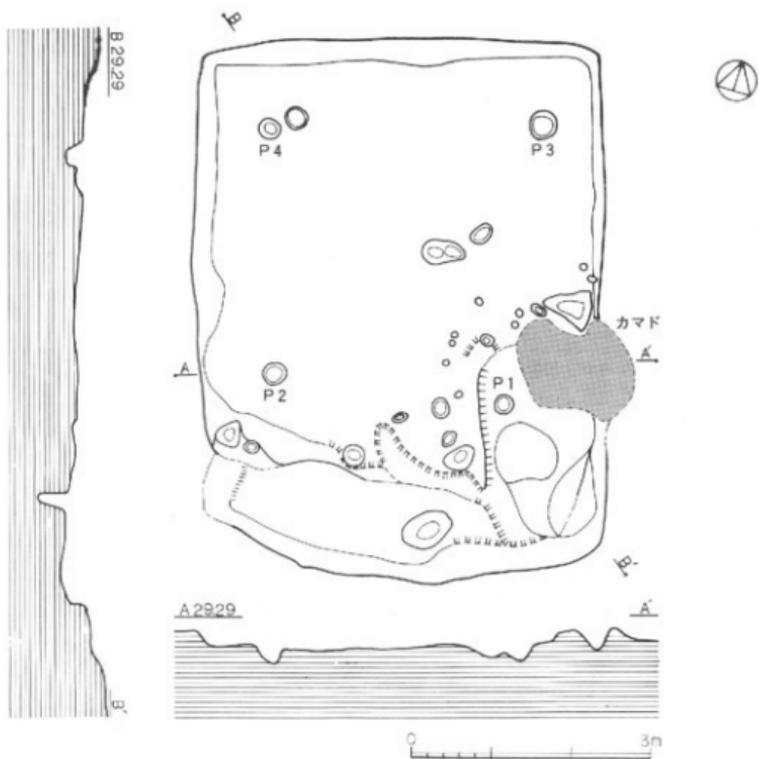
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
8	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	黒褐色	1/2残
9	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	1/2残
10	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり	褐色	1/2残
11	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐免色	1/2残
12	土鍾	①2.0cm 孔0.6cm 長3.0cm	磨減あり	褐色	完
13	磨石		第164図参照		
14	磨石		第164図参照		
15	磨石		第164図参照		
16	磨石		第164図参照		

第7号竪穴住居址 (SI07) (第165図)

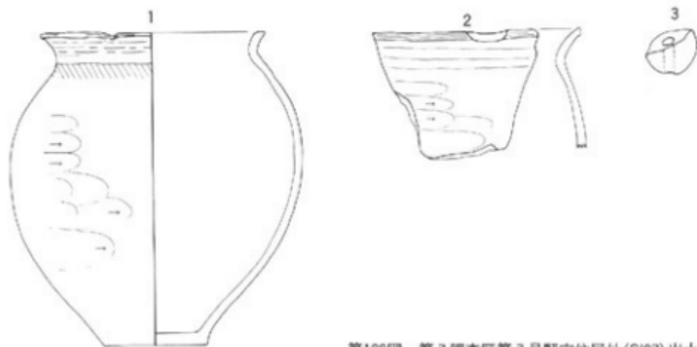
本住は本調査区の東端にあって、軸線はほぼ69度東方にかたむけている。その平面形状は縦長4.90 m、横で4.95 mの方形プランである。

壁高は北で33 cm、西で118 cm、南で14 cm、東で23 cmとなっており、主柱はP1(28 cm×19 cm)、P2(30 cm×26 cm)、P3(37 cm×32 cm)、P4(25 cm×38 cm)であった。なお、カマドが南壁中央部にあり80 cm×145 cm、高さ28 cmとなっていた。

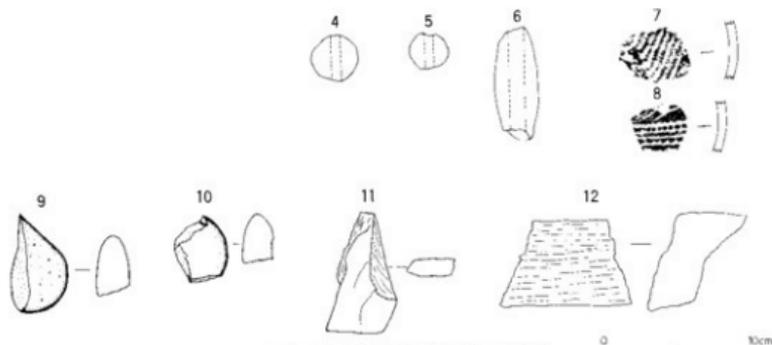
床面はほぼ平坦で南西隅に土掘とみられるものがあつた。



第165図 第7調査区第7号竪穴住居址(SI07)平面実測図



第166図 第7調査区第7号竪穴住居址(SI07)出土遺物



第166図 第7調査区第7号竪穴住居址(S107)出土遺物

遺物

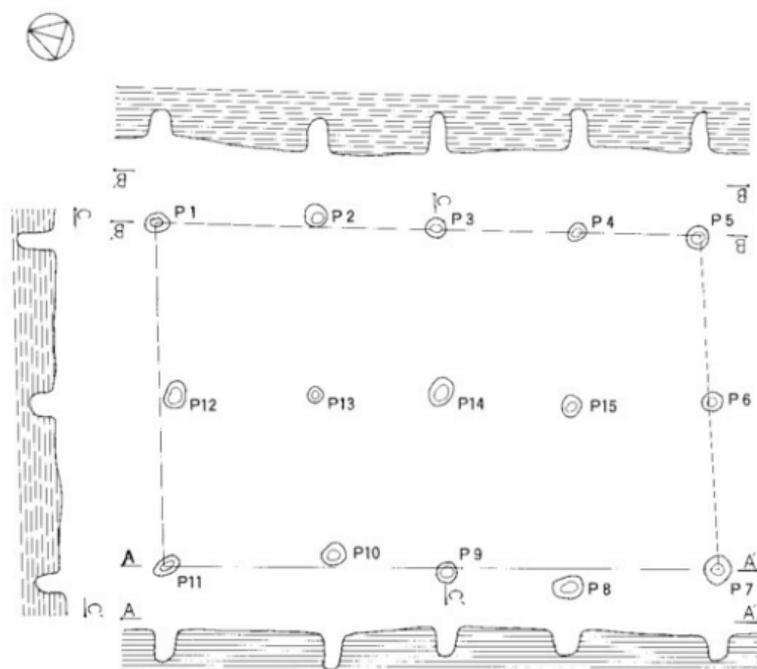
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	①15.0cm ②21.0cm ③0.5cm ④7.0cm	胴部にふくらみを有し、口縁部は短く外反する。 内外ともに横ヘラ。	良好 褐色	完
2	壺 (土師)	②8.0cm ③0.4cm	胴部にふくらみを有し、口縁部は外反する。	良好 灰黒色	口縁部のみ
3	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	1/2残
4	土鍾	①2.5cm 孔0.6cm	磨減なし	褐色	完
5	土鍾	①3.5cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
6	土鍾	①3.5cm 孔1.0cm 長7.0cm	磨減なし	褐色	完
7	深鉢片 (縄文土器)	4.8×3.7 cm	外器面の紋様はRLの太縄文を施している。	不良 砂粒 淡褐色	
8	鉢片 (縄文土器)	3.0×3.6 cm	口縁部片で口辺部の外側には半蔵の竹管状の 工具による紋様と横位に周回させている。	不良 砂粒 灰褐色	
	磨石		第166図参照		
10	磨石		第166図参照		
11	石核		第166図参照		
12	石核		第166図参照		

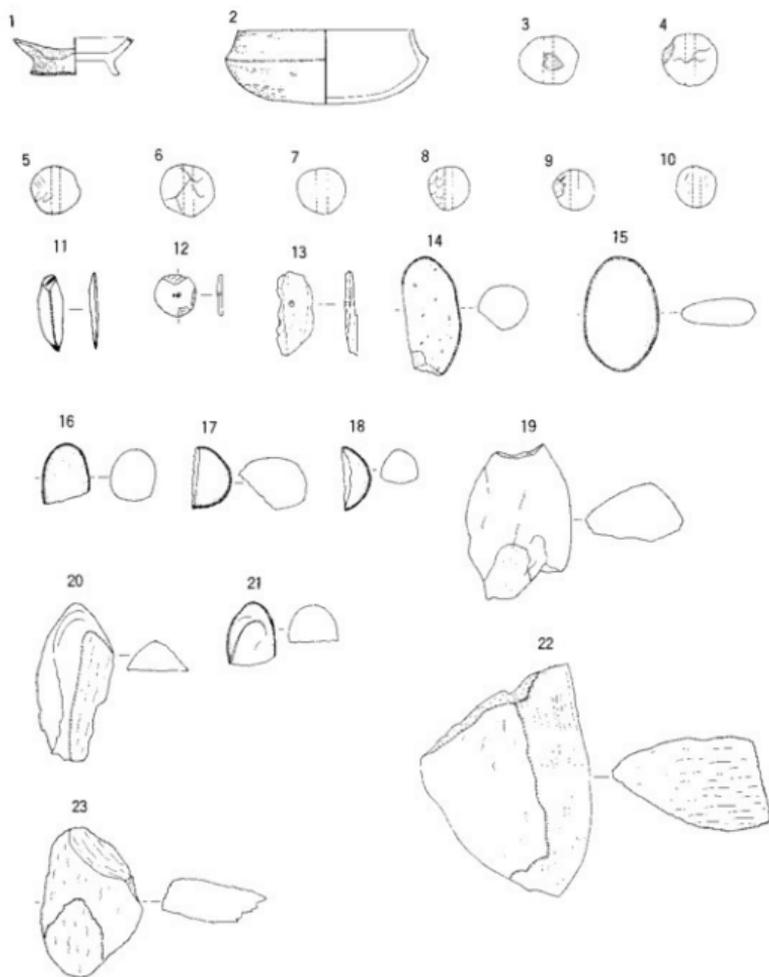
第8号掘立柱建物遺物 (SB08) (第167図)

本住居址は第7号住の隣に位置し、軸線はほぼ18度西に向けて造られている。平面形状は長径6.20m、短径4.10mの方形プランをなす。支柱間の間隔も正確で大変整った掘立柱建物であった。P1 (22cm×30cm)、P2 (27cm×26cm)、P3 (24cm×26cm)、P4 (20cm×22cm)、P5 (28cm×25cm)、P6 (25cm×25cm)、P7 (35cm×32cm)、P8 (26cm×35cm)、P9 (24cm×24cm)、P10 (26cm×30cm)、P11 (20cm×35cm)、P12 (32cm×24cm)、P13 (20cm×18cm)、P14 (35cm×30cm)、P15 (28cm×24cm)、となっている。

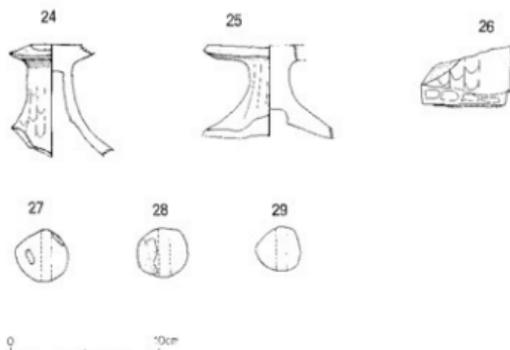
遺物については高台式土器が多いが、土砂運搬のとき鬼高期の土器も運ばれたようでそれが混在して床面から出土している。床面は平坦であるが少々やわらかい。



第167図 第7調査区第8号掘立柱建物遺構 (SB08) 平面実測図



第168团 第7调查区第8号据立柱建筑物遺構(SB08)出土遺物



第168図 第7調査区第8号型立柱建物遺構(SB08)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏 (土師)	③0.4cm ④6.0cm ⑤1.0cm	底部は浅いが垂直に立上る。	良好 褐色	1/2残
2	坏 (須恵)	①12.0cm ②5.0cm ③0.4cm	丸底で稜を有し、口縁部は内傾する。 ロクロ整形。	良好 灰青色	
3	土鍾	①3.5cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
4	土鍾	①3.5cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
5	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
6	土鍾	①3.5cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
7	土鍾	①3.0cm 孔0.7cm	磨減なし	褐色	完
8	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
9	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm	磨減なし	褐色	完
10	土鍾	①2.5cm 孔0.6cm 磨減なし	褐色	完	

遺物

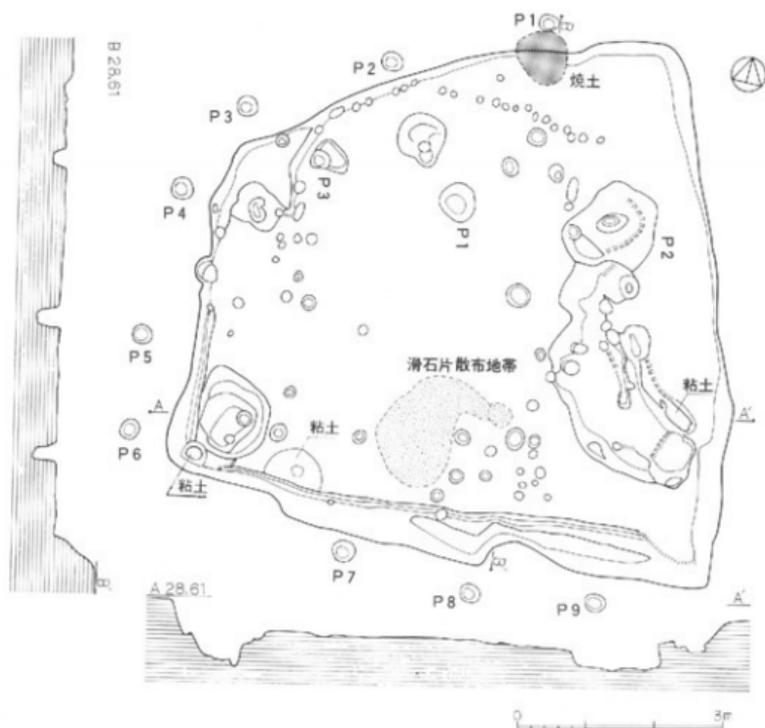
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
11	石製模造剣		第168図参照		
12	有孔円板		第168図参照		
13	不明石片		第168図参照		
14	磨石		第168図参照		
15	磨石		第168図参照		
16	磨石		第168図参照		
17	磨石		第168図参照		
18	磨石		第168図参照		
19	敲石片		第168図参照		
20	敲石片		第168図参照		
21	敲石片		第168図参照		
22	石核		第168図参照		
23	石核		第168図参照		
24	高坏脚部 (土師)	2.9.0cm 3.0.4cm	脚部は短く、座部は大きく広がる タテヘラ整形	良好 淡褐色	1/5残
25	高坏 (土師)	2.6.0cm 3.0.7cm	脚部は短く、底部にしたがって大きく広がる。 タテヘラ整形	良好 褐色	1/5残
26	支脚	現 ①6.0 cm 2.4.0cm		良好 褐色	1/10残
27	土鍾	①3.5cm 孔0.6cm		褐色	完
28	土鍾	①3.5cm 孔0.7cm		褐色	完
29	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm		褐色	完

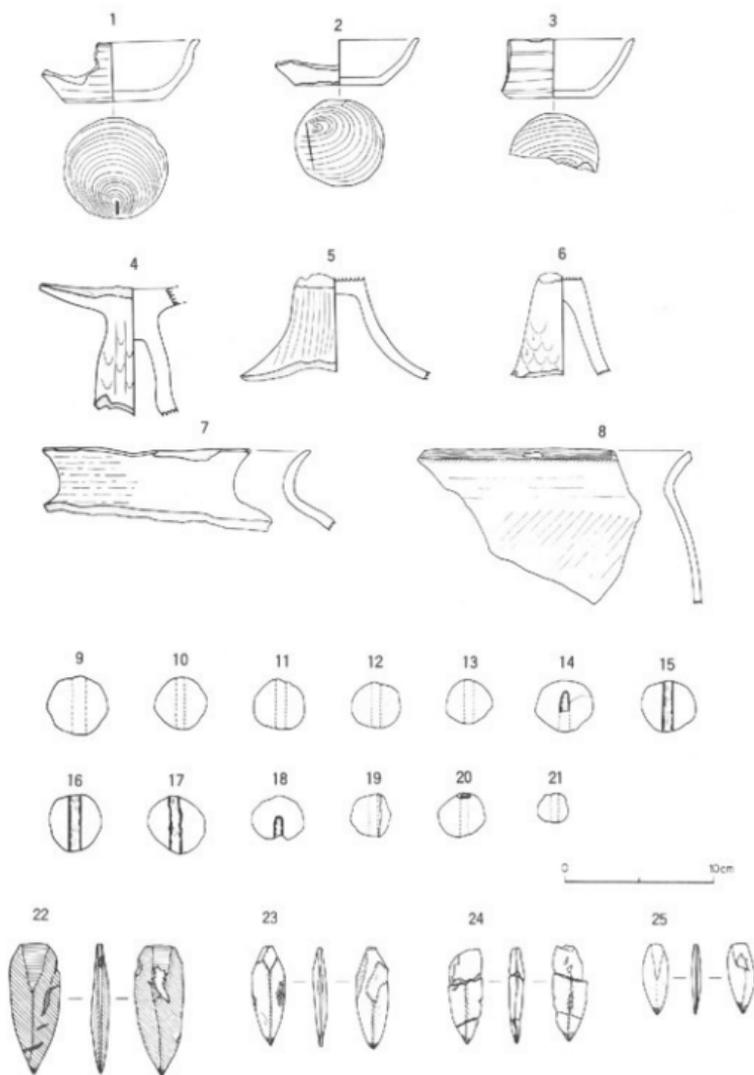
第9号竪穴住居址 (SI09) (第169図)

本住は本調査の東側でSI03の南隣に位置する。軸線はほぼ15度東方に向けられる。平面形状は不整形方形プランをなしている。縦軸はほぼ7m、横7.50mぐらいが計測されようか。南壁の方は調査不能になっていた。

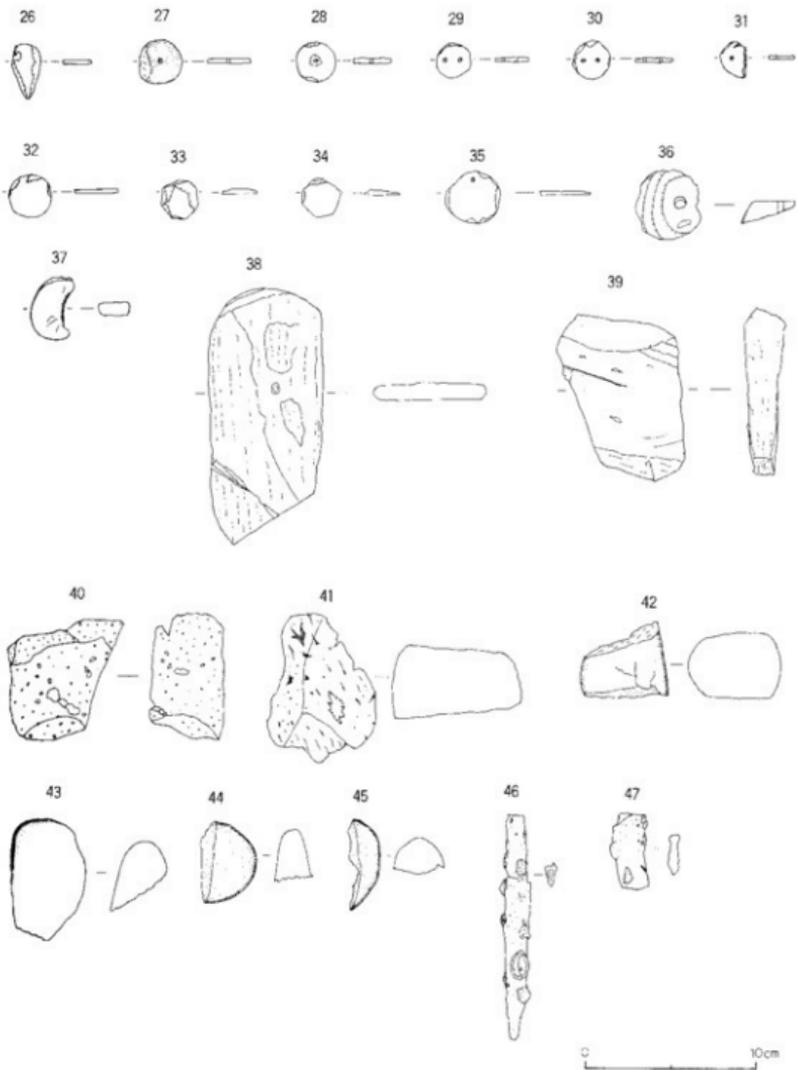
壁高は南側60cm、西側57cm、北側22cmとなっていた。本住は多くのピット群が床面にあってその支柱を把握することは大変に困難なことであった。また、本住には外柱の配列も整然と存在することである。P1(50cm×60cm、深さ30cm)、P2(130cm×100cm、深さ40cm)は貯蔵穴ではあるまいか。P3(50cm×57cm)は滑石の製品、原石が多く積み重なっていることから考えると、これはそれらの製品を製造する作業場ではなかったかと思われる。



第169図 第7調査区第9号竪穴住居址(SI09)平面実測図



第170图 第7調査区第9号竪穴住居址(SI09)出土遺物



第170图 第7調査区第9号竪穴住居址(S109)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	②4.0cm ③0.4cm ④7.0cm	底部は回転糸切状、胴部は外反するが、中央部に大きなふくらみを有し、口縁部も又外反する。 内部黒塗り、横へら整形。	良好 灰白色	2/3残
2	坏 (土師)	②3.0cm ③0.4cm ④6.0cm	底部は回転糸切状、胴部は外反するが、中央部に大きなふくらみを有し、口縁部も又外反する。 内部黒塗り、横へら整形。	良好 灰白色	2/3残
3	坏 (土師)	②4.0cm ③0.4cm ④6.0cm	底部回転糸切状、底部からの立ち上がりは稍々急、内部黒塗り、横へら整形。	良好 灰黒色	2/3残
4	高坏脚部 (土師)	②9.0cm ③0.7cm	脚部は中央部にふくらみを有する タテヘラナデ	良好 褐色	残
5	高坏脚部 (土師)	②8.0cm ③0.4cm ④13.0cm	底部は大きく広がる。 タテヘラナデ。	良好 灰黄色 砂粒含有	残
6	高坏脚部 (土師)	②7.0cm ③0.5cm	底部に近くゆるやかなふくらみを有する。	良好 褐色	残
7	甕 (土師)	①14.0cm ②5.0cm ③0.4cm	胴部はふくらみを有する、頸部から口縁部にかけては垂直に立ち上がる。 口唇部は大きく外反する。 ロクロ整形。	良好 淡褐色	口縁部のみ
8	甕 (土師)	②9.0cm ③0.4cm	口縁部は外反し、口唇部にふちを有する。 胴部に斜線数條。 内部横へら。	良好 褐色	完
9	土鍾	①4.0cm 孔0.8cm	磨滅あり	褐色	完
10	土鍾	①3.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
11	土鍾	①3.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	完
12	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	完
13	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/2残
14	土鍾	①3.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/2残
15	土鍾	①3.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	1/2残
16	土鍾	①3.5cm 孔0.8cm	磨滅あり	褐色	1/2残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
17	土鍾	①3.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/4残
18	土鍾	①3.5cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	1/4残
19	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	1/4残
20	土鍾	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
21	土鍾	①2.0cm 孔0.5cm	磨滅なし	褐色	完
22	石製模 造剣		第170図参照		
23	石製模 造剣		第170図参照		
24	石製模 造剣		第170図参照		
25	石製模 造剣		第170図参照		
26	石製模 造剣		第170図参照		
27	有孔円 板		第170図参照		
28	有孔円 板		第170図参照		
29	有孔円 板		第170図参照		
30	有孔円 板		第170図参照		
31	有孔円 板		第170図参照		
32	円板		第170図参照		
33	円板		第170図参照		
34	円板		第170図参照		
35	有孔円 板		第170図参照		
36	紡錘車		第170図参照		
37	曲玉		第170図参照		

遺物

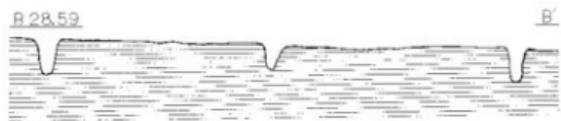
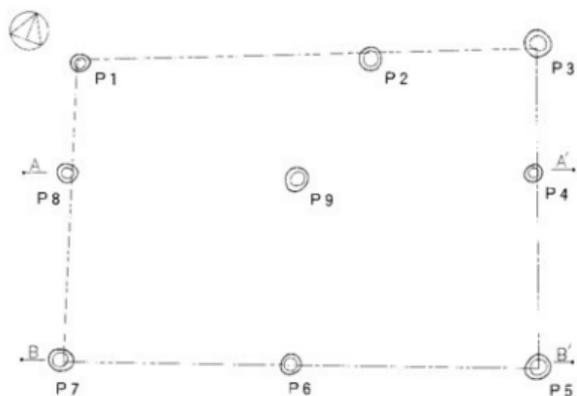
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
38	磨石		第170図参照		
39	砥石		第170図参照		
40	軽石		第170図参照		
41	軽石		第170図参照		
42	磨石		第170図参照		
43	磨石		第170図参照		
44	磨石		第170図参照		
45	磨石		第170図参照		
46	刀子		第170図参照		
47	不明鉄片		第170図参照		

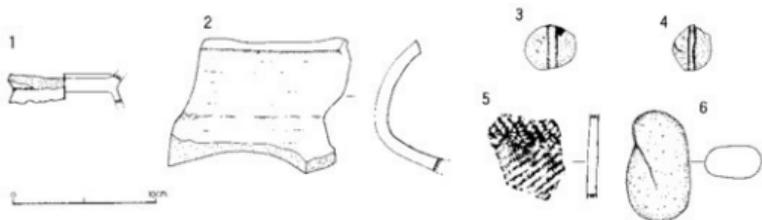
第10号掘建柱建物遺構 (SB10) (第171図)

本住はSB11の南隣に位置し主軸をほぼ20度西方に向けて構築されている。その平面形状は長径で25m、短径で16mの極めて正確な方形プランをなす。

P1 (26cm×24cm), P2 (23cm×30cm), P3 (35cm×35cm), P4 (25cm×25cm), P5 (30cm×35cm), P6 (27cm×30cm), P7 (30cm×35cm), P8 (28cm×26cm), P9 (35cm×30cm) となっていて、割合には正確な主柱の配列であった。覆土からの出土遺物に縄文土器片があったのは、土盛のときに持ちこまれたものであろう。検出された遺物は少なかったが、下記にあげたとおりである。



0 3m



第171图 第7調査区第10号掘立柱建物遺構(SB10)平面実測図・出土遺物

遺物

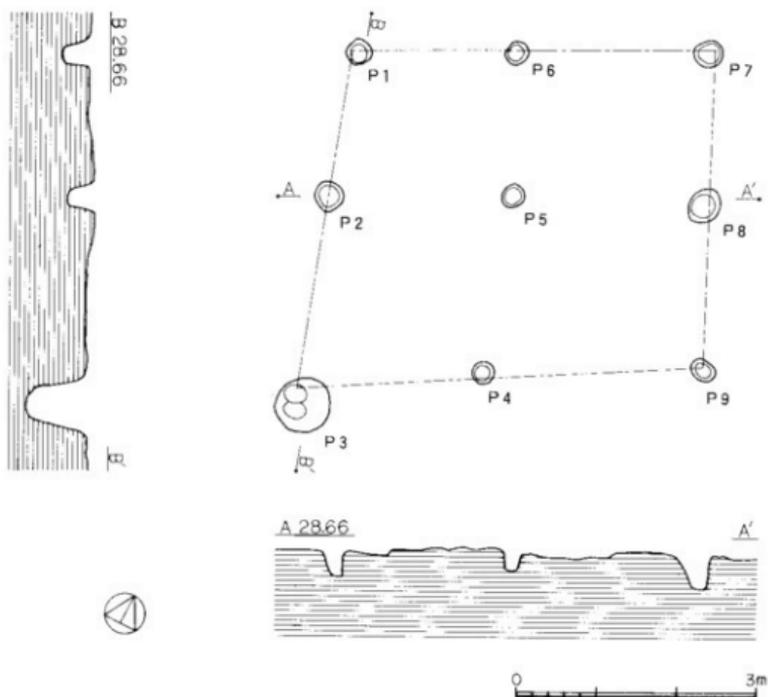
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付 坏 (土師)	③0.4cm ④7.0cm ⑤1.0cm	台部は垂直、坏部の広がりはゆるやか。 ヘラナデ	良好 灰褐色	
2	壺 (須恵)	②8.0cm ③1.5cm	胴部は大きく広がり、口縁部は高く稍々反する。 ロクロ整形	良好 灰青色	口縁部 1/10残
3	土錘	①3.0cm 孔0.7cm	磨減あり	褐色	1/5残
4	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/5残
5	深鉢付 (縄文)	5.8×5.4 cm	ほぼ直線的に開いて立上る胴部片で、外器面の 紋様は太縄文を折返し施紋したものである。	普通 褐色	
6	磨石		第171図参照		

第11号掘立柱建物遺構 (SB11) (第172図)

本住はSB12の東隣にあたり、軸線をほぼ20度東方にむけている。平面形状は西側で3.50m、南側で3.5m、東側で3.00m、北側で3.5mの不整形方形プランをなす。

主柱はP1 (27cm×31cm)、P2 (30cm×33cm)、P3 (60cm×65cm)、P4 (23cm×22cm)、P5 (22cm×24cm)、P6 (24cm×25cm)、P7 (32cm×26cm)、P8 (30cm×42cm)、P9 (23cm×25cm)となっており、床面は平坦で軟い。

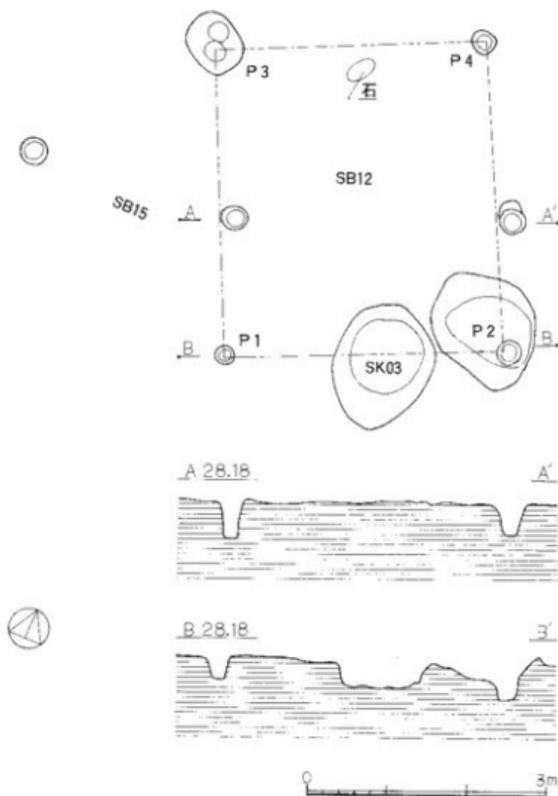


第172図 第7調査区第11号掘立柱建物遺構(SB11)平面実測図

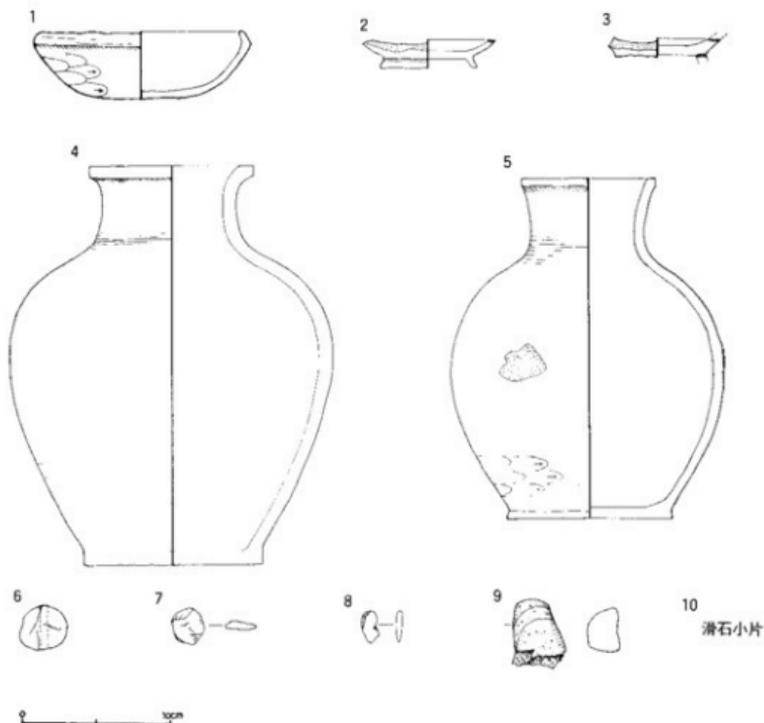
第12号掘立柱建物遺構 (SB 12) (第173図)

本住はSB 11の南隣に当り、軸線をほぼ70度西方に向けている。平面形状は縦3.50 m、横3.50 mの方形プランである。主柱はP1 (65 cm×58 cm)、P2 (23 cm×27 cm)、P3 (28 cm×32 cm)、P4 (30 cm×33 cm)となる。床面は平坦で軟い。

なお、本住にはSK 03を掘りこんでいる。



第173図 第7調査区第12号掘立柱建物遺構 (SB12) 第3号土壇状遺構 (SK03) 平面実測図



第174図 第7調査区第12号掘立住居址(SB12)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13.0cm ②4.0cm ③0.5cm	丸底で口縁部内傾。 内外横ヘラ整形。	良好 褐色	完
2	高台付 坏 (土師)	③0.4cm ④7.0cm	台部は短く、稍々外反する坏は大きく広がる。 ロクロ整形。	良好 褐色	1/3残
3	高台付 坏 (土師)	③0.4cm ④6.0cm	台部は短く、稍々外反する、坏部は大きく広がる。 ロクロ整形。	良好 淡褐色	1/3残

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
4	甕 (須恵)	①11.0cm ②27.0cm ③1.0cm ④10.0cm	胴上部にふくらみを有し、口縁部は直立、口唇部にふちを有する。ロクロ横ヘラ整形・緑釉がかかる。	良好 緑釉	2/3残
5	甕 (須恵)	①9.0cm ②2.0cm ③0.8cm ④11.0cm	胴上部にふくらみを有し、口縁部は長く直立、口唇部にふちを有する。ロクロ、ヘラ整形。	良好 緑釉	完
6	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
7	磨石片		第174図参照		
8	磨石片		第174図参照		
9	磨石片		第174図参照		
10			第174図参照		

第16号竈穴住居址 (SI16) 第1号溝状遺構 (SD01) (第175図)

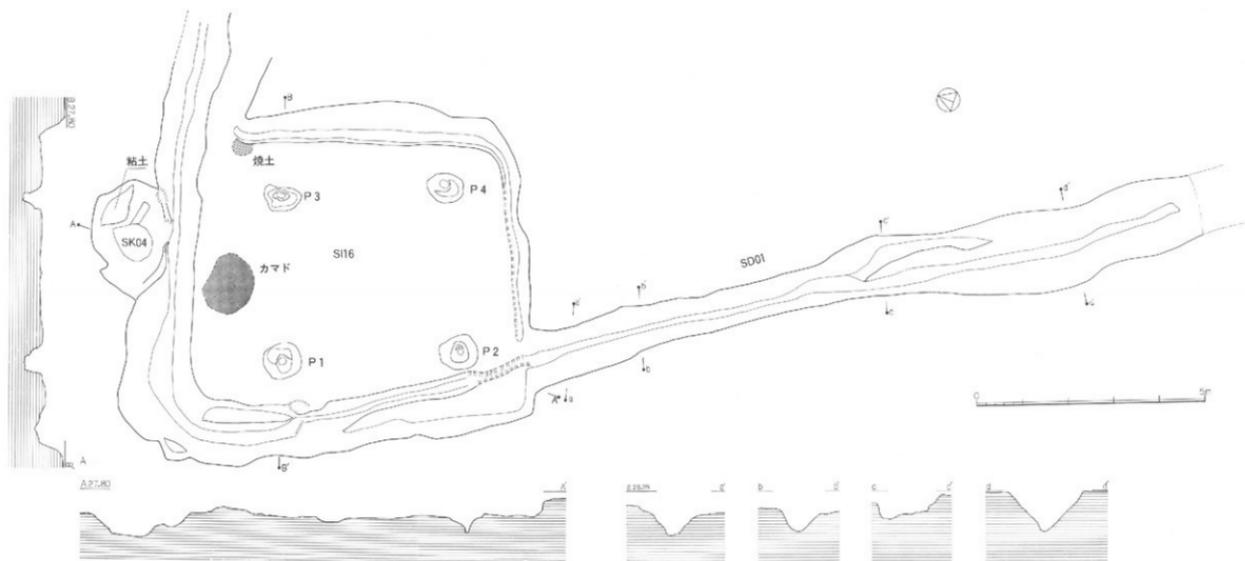
本住は本調査区の最北端に位置し、軸線をほぼ30度西方にかたむけている、平面形状は、本住の西側を南北の方向にSK04が据られており、西壁、南壁が破壊されているので、これを完全な形で把握することは出来ないが、西側で約6.00m、南の現長4.50m、東で現長5.50m、北で現長5.00mの不整形方形プランである。

壁高は南1部30cm、東40cm、北35cmとなっており、支柱は、P1(50cm×44cm)、P2(55cm×41cm)、P3(50cm×41cm)、P4(50cm×41cm)で、カマドは100cm×100cm、高さ20cmとなっていた。

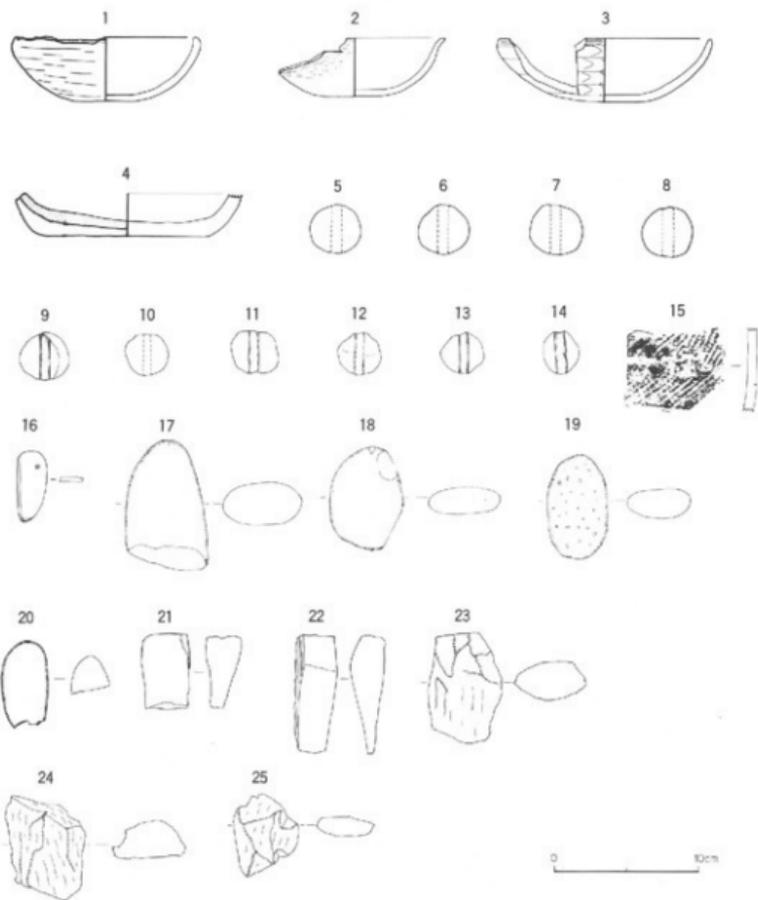
床面は平坦で固い。

第1号溝状遺構 (SD01) (第175図)

この溝は第16住の西壁にそって、そしてその西壁を稍々直角に曲って東方に向って流れる溝である。現長約40m、巾は広い部分で2m、狭い部分で約1m、高さは1m～0.7mとなっている。



第175図 第7調査区第16号竪穴住居址(SI16)第1号溝状遺構(SD01)第4号土塚状遺構(SK04)平面実測図



第176図 第7調査区第16号竪穴住居址(S16)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13.0cm ②4.5cm ③0.4cm	底部は丸底、口唇部にいたって稍々内傾する。 ロクロ使用、ヘラナデ。	良好 褐色	完

遺物

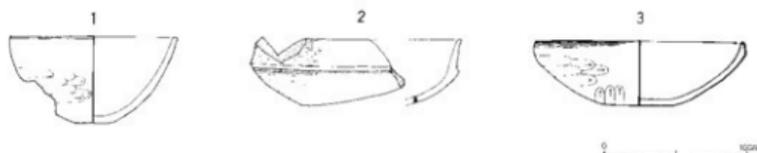
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	坏 (土師)	①不明 ②4.5cm ③0.4cm	丸底で口縁部の立ち上がりは外反する。 内部黒塗り。	良好 灰褐色面	1/2残
3	坏 (土師)	①15.0cm ②4.5cm ③0.4cm	丸底でゆるやかに立ち上がり、口唇部で内反する。	良好 灰白色	1/2残
4	壺 (土師)	③0.8cm ④12.0cm	ヘラ削り	良好 褐色	底部のみ
5	土鍾	①3.5cm 孔0.7cm	磨減なし	褐色	完
6	土鍾	①3.5cm 孔0.7cm	磨減なし	褐色	完
7	土鍾	①3.5cm 孔0.7cm	磨減なし	褐色	完
8	土鍾	①3.5cm 孔0.7	磨減なし	褐色	完
9	土鍾	①3.5cm 孔0.7cm	磨減なし	褐色	1/2残
10	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨減あり	褐色	完
11	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/2残
12	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/2残
13	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/2残
14	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/2残
15	深鉢片 (縄文)	6.8×5.5 cm	かなり丸味をおびた胴部で、外器面の紋様はRLの縄文を下地に施し横位に蛇行状を呈す。 押型沈線紋を有する。	普通 砂粒 明褐色	
16	石製模 造刺		第176図参照		
17	磨石		第176図参照		
18	磨石		第176図参照		
19	磨石		第176図参照		
20	磨石		第176図参照		
21	砥石		第176図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
22	砥石		第176図参照		
23	石核		第176図参照		
24	石核		第176図参照		
25	石核		第176図参照		



第177図 第7調査区溝状遺構(SD01)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

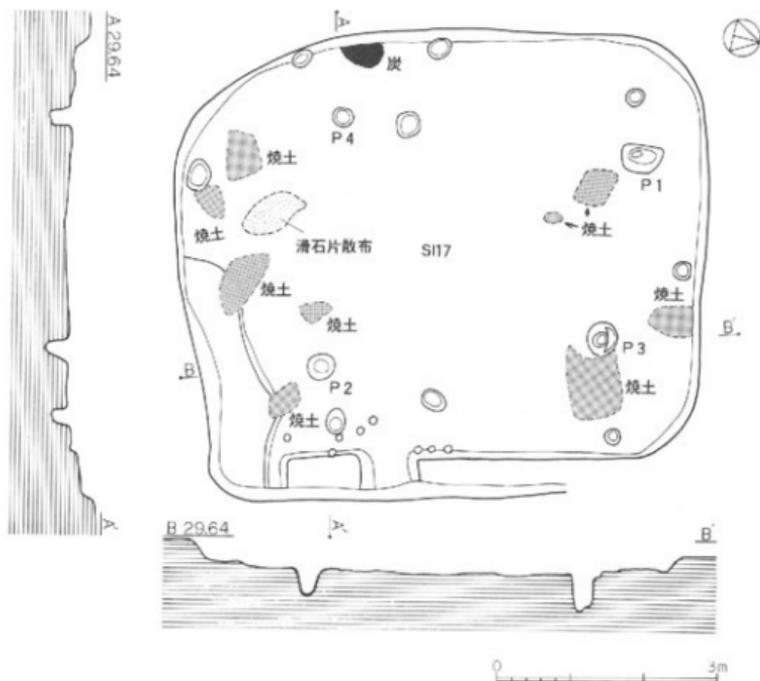
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①15.0cm ②5.0cm ③0.5cm ④4.0cm	底部よりゆるやかに立ち上がる。 内外ともに横ヘラ整形。	良好 褐色	完
2	坏 (須恵)	①不明 ②不明 ③0.4cm	稜を有し、口縁部は稍々外反する。 輪積横ヘラ整形。	良好 灰青色	1/4 残
3	坏 (土師)	①14.0cm ②5.0cm ③0.4cm	丸底でゆるやかに立ち上がり、口唇部は稍々内反する。 内外ヨコヘラナデ。	良好 黒色	完

第17号竪穴住居址 (SI17) (第178図)

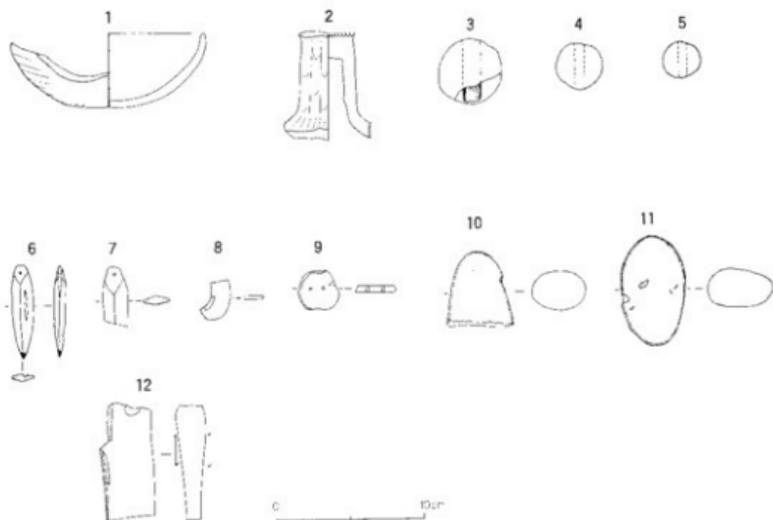
本住は SI05 の西隣に位置し、軸線をほぼ 21 度西方に向けて造られる。平面形状は縦長 7.30 m、横で 5.70 m の隅丸方形プランである。

壁高は南壁 15 cm、西は 18 cm、北 23 cm、東 12 cm となっている。支柱は P1 (40 cm×53 cm)、P2 (40 cm×33 cm)、P3 (37 cm×51 cm×38 cm)、P4 (29 cm×28 cm) となっている、周溝は南側で 13 cm×7 cm、東側で 11 cm×12 cm、なお壁柱の列も散見する。

床面は平坦であるが、床面に滑石製の製品や原石が散乱しているところから、これらの製造工場ではなかったかと想像される。その製品は主に有孔円板、有孔尖板、玉類の半製品がその大半を占めるもので、祭祀用具が製作された場所ではあるまいか。なお、半製品については図示しなかった。出土遺物については下記にあげておいた。



第178図 第7調査区第17号竪穴住居址 (SI17) 平面実測図



第179図 第7調査区第17号竪穴住居址(S17)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13.0cm ②5.0cm ③0.4cm	丸底で口縁部の立ち上がりは徐々に内傾する。 ロクロ、横ヘラナデ。	良好 淡褐色	1/5残
2	高環脚 部 (土師)	①不明 ②7.0cm ③0.4cm	脚部はふくらみを有せず、底部は広がり大きい。 ヘラ整形。	良好 褐色	残片
3	土錘	①4.0cm 孔1.0cm	磨減なし	褐色	完
4	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
5	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
6	石製模 造剣		第179図参照		
7	石製模 造剣		第179図参照		
8	曲玉片		第179図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	有孔円板		第179図参照		
10	磨石		第179図参照		
11	磨石		第179図参照		
12	砥石		第179図参照		

第18号竪穴住居址 (SI18)・第21号竪穴住居址 (SI21) (第180図)

SI18

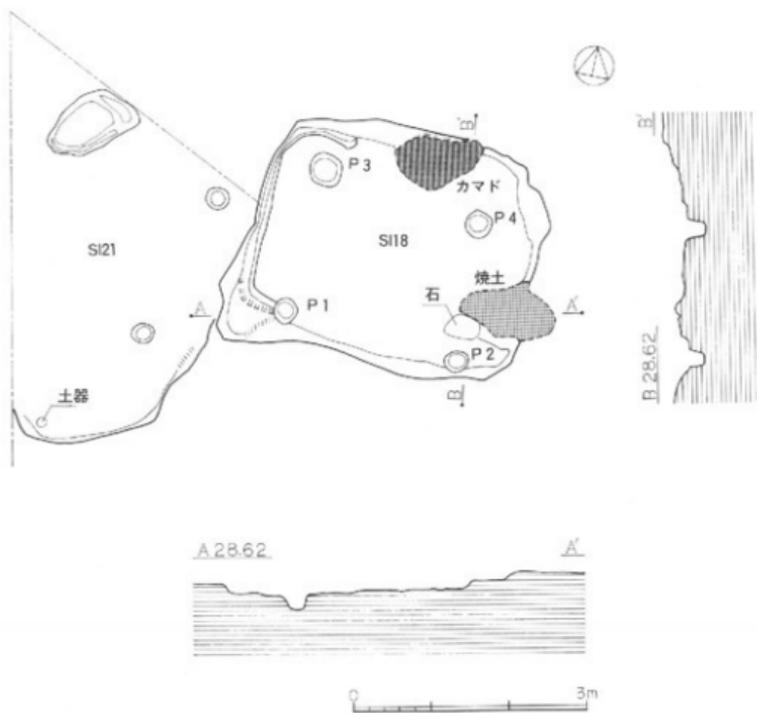
本住はSI21の南隣で軸線をほぼ2度東に向けている。その平面形状は1辺が2.40mの正方形プランである。

壁高は西15cm, 東20cm, 北18cm, 南20cmとなっており, 支柱はP1(30cm×35cm), P2(36cm×25cm), P3(40cm×45cm), P4(35cm×37cm)となっている。北壁にカマド100cm×80cm, 高20cmであった。床面は平坦で軟い。

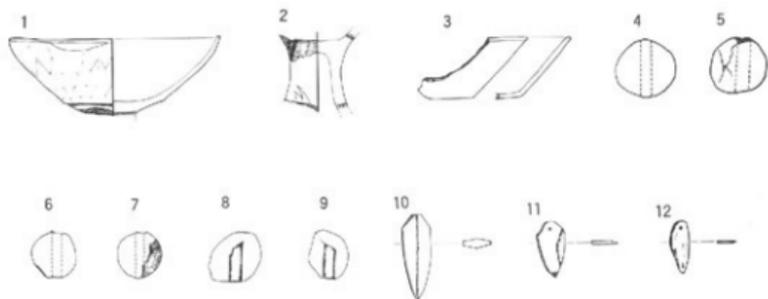
SI21

本住はSI18, に切りこまれ軸線をほぼ60度東方にかたむけているのではないと思われる。平面形状も縦長で3.10m(現), 横2.21m(現)であるが, 不正形形状をなしている。

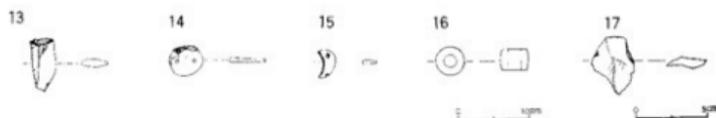
壁高は南壁16cmが, 判明するだけで, 後は不明である。支柱はP1(27cm×16cm), P2(27cm×25cm)と2あるだけで後は不明。床面は固いが凹凸がはげしい。



第180図 第7調査区18号・21号竪穴住居址(SI18・21)平面実測図



第181図 第7調査区第21号竪穴住居址(SI21)出土遺物



第181図 第7調査区第21号竪穴住居址(S21)出土遺物

遺物

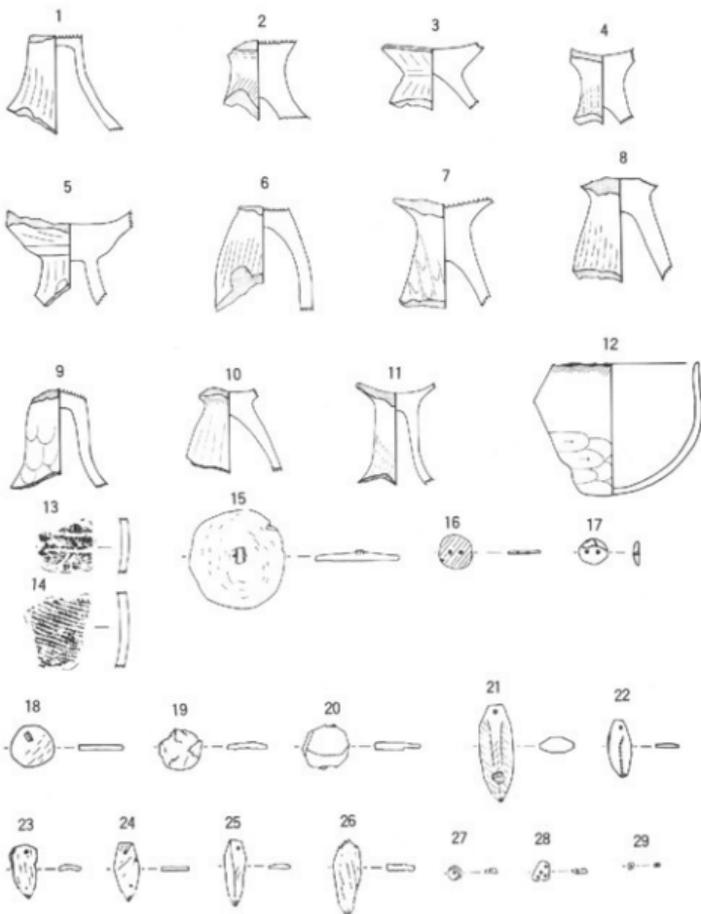
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高環 (土師)	①15.0cm ②5.0cm ③0.4cm	脚部からの立ち上がりはゆるやかで、口唇部は少々内傾する。 内外ともにタテヘラ整形。	良好 淡黄色 破粒含有	完
2	高環脚部 (土師)	②5.0cm ③0.7cm	脚部は短い、底部は広がる。 タテヘラ削り。	良好 黒褐色 破粒含有	残片
3	杯 (須恵)	②4.5cm ③0.3cm ④6.0cm	輪積整形、底部からの立ち上がりは稍々急でふくらみが少ない。	良好 灰青色	1/5残
4	土鍾	①4.0cm 孔0.7cm	磨滅なし		完
5	土鍾	①4.0cm 孔0.7cm	磨滅あり		完
6	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり		完
7	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり		完
8	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり		1/5残
9	土鍾	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり		1/5残
10	石製模造刺		第181図参照		
11	石製模造刺		第181図参照		
12	石製模造刺		第181図参照		
13	石製模造刺		第181図参照		
14	有孔円板		第181図参照		
15	曲玉		第181図参照		

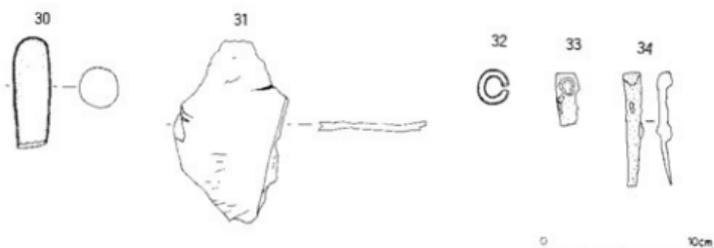
遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
16	白玉		第181図参照		
17	石核		第181図参照		



第182図 第7調査区第18号竪穴住居址(S118)出土遺物



第182図 第7調査区第18号竪穴住居址(SI18)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏脚部 (土師)	②8.0cm ③0.4cm	脚部が短く、すぐ広がる。 タテヘラ削り。	良好 淡褐色	1/4残
2	高坏脚部 (土師)	②6.0cm ③0.5cm	脚部が短く、底部が大きく広がる。 タテヘラ削り。	良好 褐色	1/4残
3	高坏脚部 (土師)	②5.0cm ③0.5cm	脚部が短く、底部が大きく広がる。 タテヘラ削り。	良好 褐色	1/4残
4	高坏脚部 (土師)	②5.0cm ③0.4cm	脚部が短く、底部が広がる。 タテヘラナデ。	良好 淡褐色	
5	高坏脚部 (土師)	②6.0cm ③0.5cm	脚部が短く、底部が広がる又胴の下部に稜を有する。	良好 褐色	
6	高坏脚部 (土師)	②7.0cm ③0.5cm	脚部は短く底部にしたがい大きく広がる。 タテヘラナデ。	良好 褐色	
7	高坏脚部 (土師)	②7.0cm ③0.5cm	脚部短く、底部の広がりは大きい。	良好 褐色	
8	高坏脚部 (土師)	②6.0cm ③0.6cm	脚部は下にしたがい大きくふくらむ、底部は広がりを見せる。 タテヘラナデ。	良好 淡褐色	
9	高坏脚部 (土師)	②6.0cm ③0.5cm	脚部短く、底部は広がる。 タテヘラナデ。	良好 褐色	
10	高坏脚部 (土師)	②6.0cm ③0.5cm	脚部から底部に大きく広がる。 タテヘラナデ。	良好 褐色	

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
11	高坏脚部 (土師)	②6.0cm ③0.5cm	脚部から底部に大きく広がる。 タテヘラナデ。	良好 褐色	
12	碗 (土師)	①12.0cm ②9.0cm ③0.4cm	丸底で胴部はまるく大きくふくらみ、口縁部は垂直に立ち上がり、稍々外反する。	良好 褐色	
13	鉢片 (縄文)	4.0×3.8 cm	比較的丸味をおびた胴部片で、外器面の紋様は横位に周回する沈線と弧状を呈する沈線を基調としその他の部分を櫛状の工具によるヘラみがきを行う。	良好 暗褐色	
14	鉢片 (縄文)	5.2×4.3 cm	稍々球状を呈する胴部で、外器面には縄文を施す。	普通 褐色	
15	石製鏡		比較的丸味をおびた胴部片で、外器面の紋様は横位に周回する沈線と弧状を呈する沈線を基調としその他の部分を櫛状の工具によるヘラみがきを行う。		
16	有孔円板		比較的丸味をおびた胴部片で、外器面の紋様は横位に周回する沈線と弧状を呈する沈線を基調としその他の部分を櫛状の工具によるヘラみがきを行う。		
17	有孔円板		比較的丸味をおびた胴部片で、外器面の紋様は横位に周回する沈線と弧状を呈する沈線を基調としその他の部分を櫛状の工具によるヘラみがきを行う。		
18	円板		比較的丸味をおびた胴部片で、外器面の紋様は横位に周回する沈線と弧状を呈する沈線を基調としその他の部分を櫛状の工具によるヘラみがきを行う。		
19	円板		第182図参照		
20	円板		第182図参照		
21	石製模造剣		第182図参照		
22	石製模造剣		第182図参照		
23	石製模造剣		第182図参照		
24	石製模造剣		第182図参照		
25	石製模造剣		第182図参照		
26	石製模造剣		第182図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

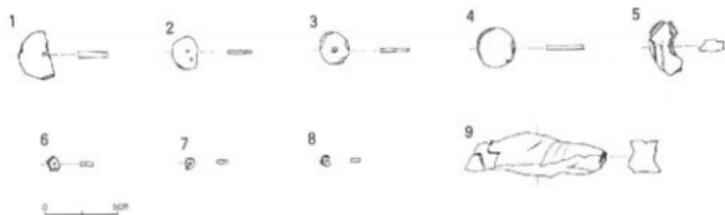
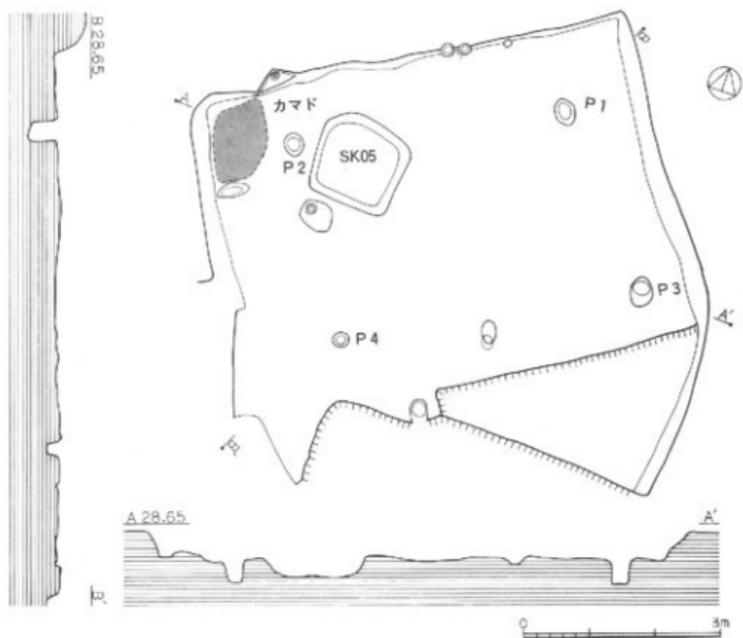
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
27	白玉		第182図参照		
28	不明石		第182図参照		
29	白玉		第182図参照		
30	磨石		第182図参照		
31	石核		第182図参照		
32	耳環		第182図参照		
33	不明鉄片		第182図参照		
34	不明鉄片		第182図参照		

第19号竪穴住居址 (SI19) (第183図)

SI19

本住はSI25の東隣に当る。軸線をほぼ20度東方にかたむけている。平面形状は縦の長さ7m、横で5mの方形プランである。

壁高は北側で20cm、東で18cm、南の1部で28cmとなっており、主柱はP1(30cm×43cm)、P2(28cm×34cm)、P3(40cm×36cm)、P4(330cm×20cm)となっていた。床面にはSK05が掘られ、更には焼土が散乱し凹凸がはげしかった。



第183図 第7調査区第19号竪穴住居址(SI19)第5号土壘状遺構(SK05)平面実測図・出土遺物

遺物

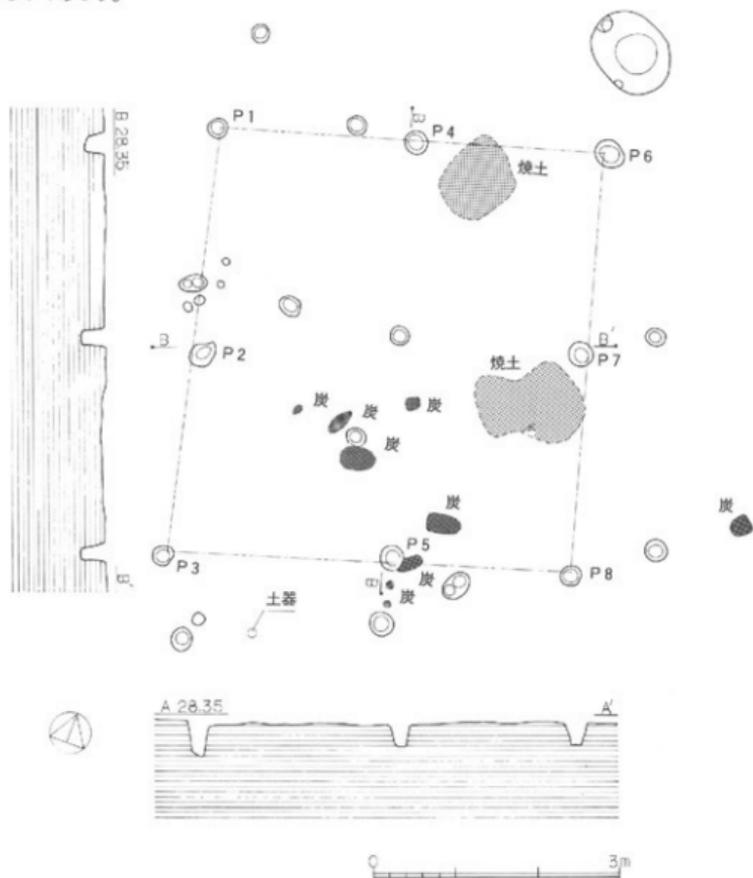
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	有孔円板		第183図参照		
2	有孔円板		第183図参照		
3	有孔円板		第183図参照		
4	有孔円板		第183図参照		
5	曲玉		第183図参照		未完成品
6	白玉		第183図参照		
7	白玉		第183図参照		
8	白玉		第183図参照		
9	石核		第183図参照		

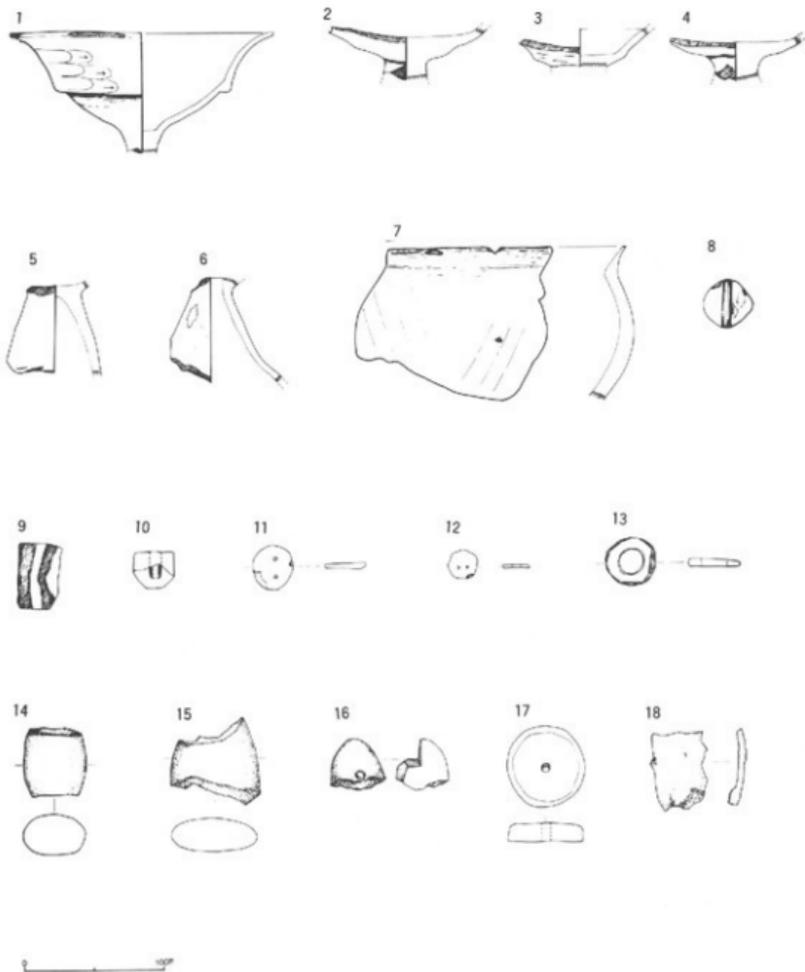
第20号掘立柱建物遺構 (SB20) (第184図)

本住は SI09 の西隣に当り、南側は SI24 造成のため切りこまれている。軸線はほぼ 10 度西方に向けて建てられている。その平面形状は縦長 5.50 m、横で 4.50 m の方形プランをなす。

主柱は P1 (22 cm×30 cm)、P2 (25 cm×36 cm)、P3 (30 cm×25 cm)、P4 (26 cm×23 cm)、P5 (30 cm×30 cm)、P6 (30 cm×45 cm)、と推定してみた。焼土と炭化物の散乱することから火災にかかったものであろう。



第184図 第7調査区第20号掘立柱建物遺構 (SB20) 平面実測図



第185图 第7调查区第20号掘立柱建物遺構(SB20)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	①19.0cm ②8.5cm ③0.4cm	底部からの立ち上がりは稍々ゆるやかで稜を有し、口縁部の巾は広く外反し口唇部にいたってさらに外反する。横ヘラ。	良好 淡褐色	1/4残
2	高坏 (土師)	①10.0cm ③0.5cm	脚部からの立ち上がりは極めてゆるやか。横ヘラ整形。	良好 褐色	1/4残
3	高坏 (土師)	①10.0cm ③0.4cm	脚部からの立ち上がりは極めてゆるやか。横ヘラ整形。	良好 褐色	1/4残
4	高坏 (土師)	①9.0cm ③0.4cm	脚部から坏部への広がり大きい。横ヘラナデ。	良好 褐色	1/4残
5	高坏 (土師)	②6.0cm ③0.4cm	脚部のふくらみが大きい。タテヘラナデ。	良好 褐色	残
6	高坏脚部 (土師)	②8.0cm ③0.6cm ④8.0cm	脚部から底部への広がり大きい。タテヘラナデ。	良好 褐色	残
7	甕 (土師)	①20.0cm ②12.0cm ③1.0cm	胴部は大きくふくらみ、口縁部は稍々外反する。胴部に稜の圧痕2ヶ所。タテヘラ・ヨコヘラ共に使用。	良好 褐色	1/4残
8	土鍾	①3.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/4残
9	土鍾	①3.0cm 孔0.6cm 長4.0cm	磨減あり		1/4残
10	土鍾	①3.0cm 孔0.7cm 長2.5cm	磨減あり		1/4残
11	有孔円板		第185図参照		
12	有孔円板		第185図参照		
13	環状円板		第185図参照		
14	磨石		第185図参照		
15	磨石		第185図参照		
16	磨石		第185図参照		
17	紡錘車		第185図参照		
18	鉄器 1. 不明の鉄片		第185図参照		

第 22 号竪穴住居址 (SI22)・第 32 号竪穴住居址 (SI32)・第 28 号竪穴住居址 (SI28)・第 29 号竪穴住居址 (SI29) (第 186 図)

本住は本調査区の最南端で、SI32 を切りこんでいる。軸線はほぼ 15 度東方にかたむけている。平面形状は縦長 3.00 m、横長 3.70 m、そして東側 3.90 m、南 4.20 m の不整形方形プランをなしていた。

SI22

壁高は西 26 cm、北 18 cm、東 17 cm となっており、主柱は P1 (38 cm×21 cm)、P2 (40 cm×22 cm)、P3 (40 cm×22 cm)、P4 (43 cm×23 cm)、東壁にカマド 85 cm×53 cm、高さ 14 cm があつた。床面は平坦で囲い。

SI32

本住は SI29 を切りこんでおり、軸線はほぼ 60 度西方にかたむいている。平面形状は南・西の壁線が不明、しかも東で 3 m、北で 5.00 m の方形プランと思われた。

壁高は南東 23 cm、西 10 cm となっており、主柱は P1' (33 cm×27 cm)、P2' (38 cm×22 cm)、P3' (22 cm×14 cm) とみられた。カマドは 80 cm×55 cm、高さ 15 cm となり、その中に支脚が残されていた。床面は平坦で囲い。

SI28

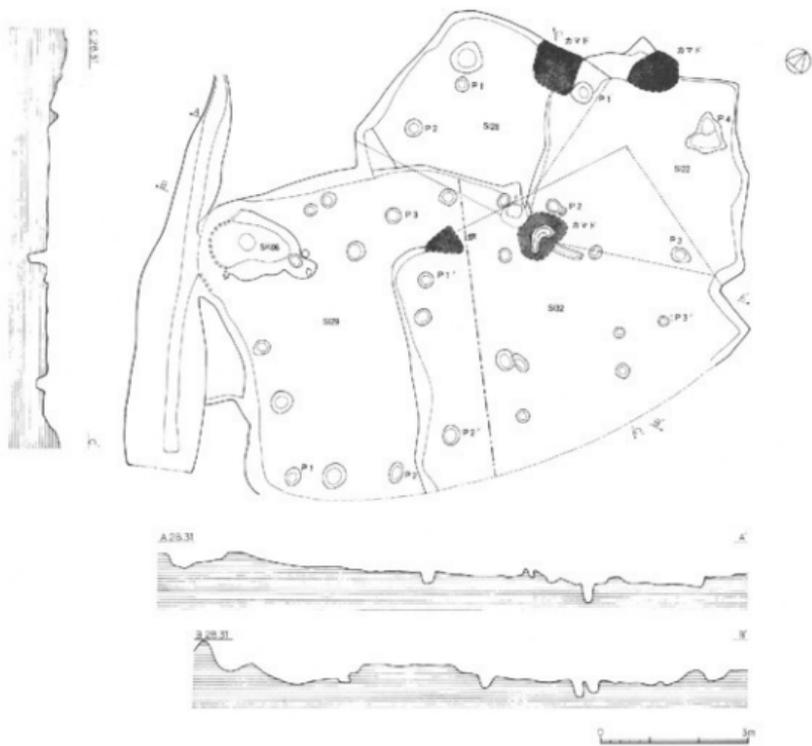
SI22 と、SI32 に切りこまれて変形している。軸線はほぼ 20 度東方に向けられている。平面形状は北壁現長 3.00 m、東の現長 2.00 m、不整形の方形プランをなす。

壁高西で 20 cm、北側で 13 cm となり、東・南にはない。主柱は P1 (25 cm×24 cm)、P2 (27 cm×32 cm) がこれに当たる。

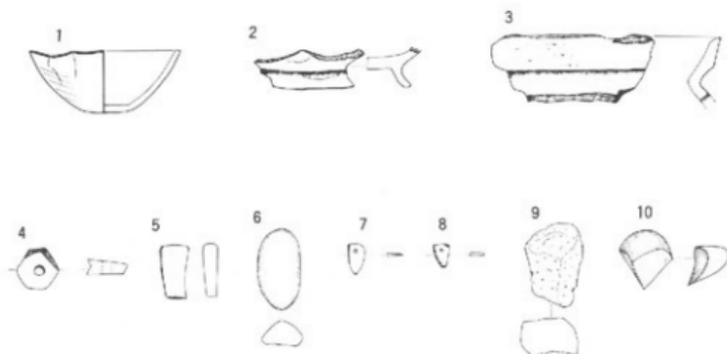
SI29

本住は SI32 と、SI28 に切りこまれ変形している。軸線はほぼ 30 度西方に向けている。平面形状は西側 3.8 m、東で 3.40 m、北側で 5.00 m となっており、方形プランと思われる。

壁高は北で 30 cm、西で 40 cm、で南側は不明である。主柱は P1 (36 cm×22 cm)、P2 (30 cm×19 cm)、P3 (29 cm×25 cm) で P4 は SK06 のため不明となっている。床面は平坦で囲い。



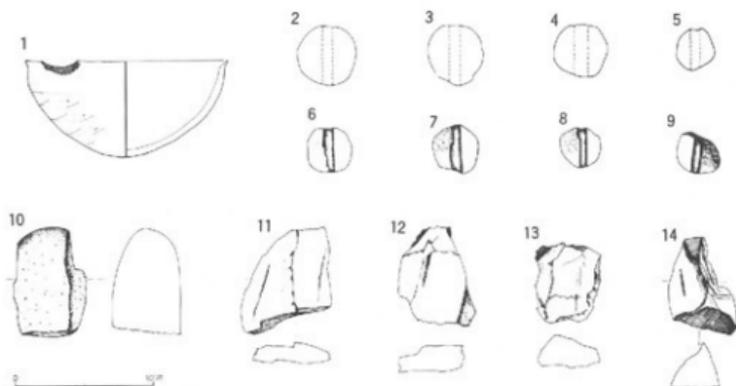
第186图 第7調査区第22号・28号・29号・32号竪穴住居址(SI22・28・29・32)第6号土壘状遺構(SK06)平面実測図



第187図 第7調査区第22号竪穴住居址(SI22)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①11.0cm ②4.5cm ③0.3cm	丸底・立ち上がりはまるみをもちゆるやか。 内外ヨコヘラナデ	良好 褐色	完
2	高台付 坏 (土師)	③0.4cm ④7.0cm ⑤1.0cm	台部は底部にむかって稍々広がる ロクロ整形	良好 灰白色	底部のみ
3	壺 (土師)	①不明 ②5.0cm ③1.0cm	頸部に稜をもち、口縁部にむかって内傾し、口 唇部は外反する内外ヨコナデヘラ。	良好 褐色	口縁部
4	白玉		第187図参照		
5	磁石		第187図参照		
6	磨石		第187図参照		
7	石製模 造剣		第187図参照		
8	石製模 造剣		第187図参照		
9	軽石		第187図参照		
10	磨石		第187図参照		



第188図 第7調査区第28号竪穴住居址(S128)出土遺物

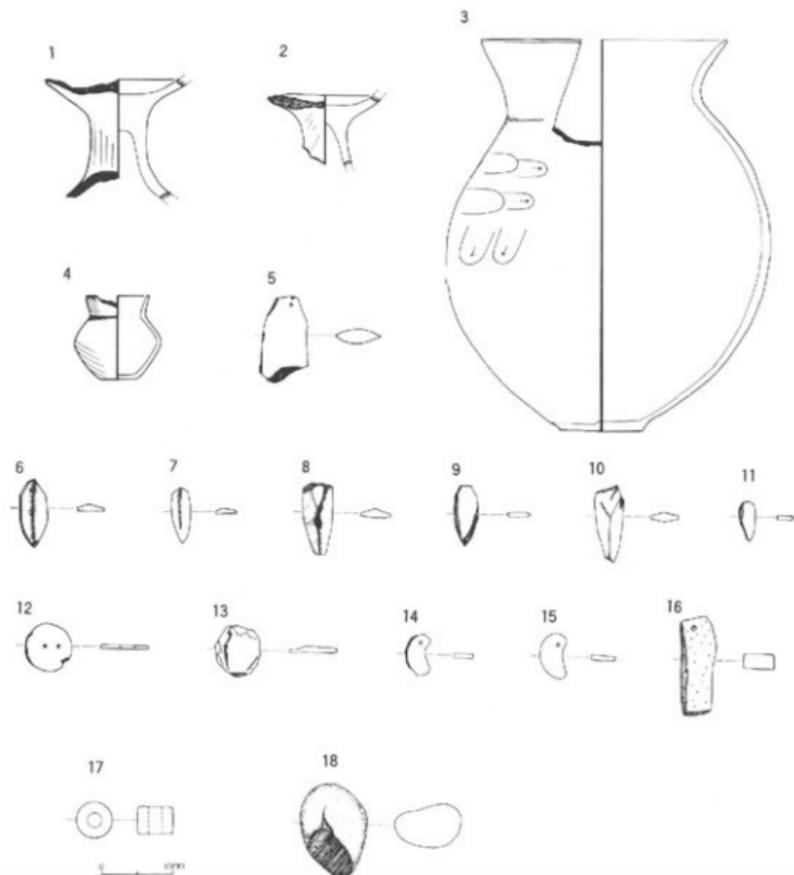
遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①15.0cm ②7.0cm ③0.5cm	丸底でまるみをもって立ち上がり、口縁部は外反する 横へら整形	良好 黒褐色 砂粒含有	完
2	土錘	①4.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
3	土錘	①4.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
4	土錘	①4.0cm 孔1.0cm	磨滅あり	褐色	完
5	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
6	土錘	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	1/2残
7	土錘	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色1/2残	
8	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/2残
9	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/2残
10	敲石		第188図参照		
11	石核		第188図参照		

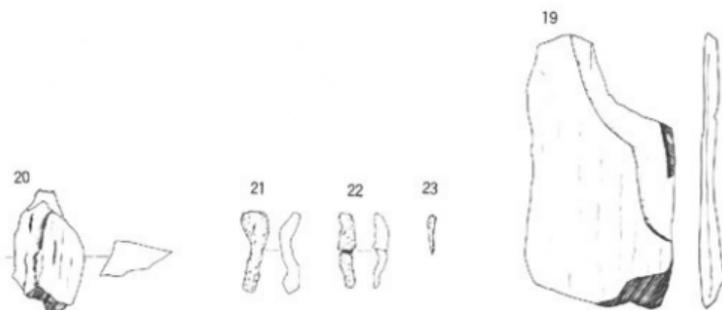
遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
12	石核		第188図参照		
13	石核		第188図参照		
14	石核		第188図参照		



第189図 第7調査区第29号壑穴住居址(S129)出土遺物



第189図 第7調査区第29号竪穴住居址(S129)出土遺物

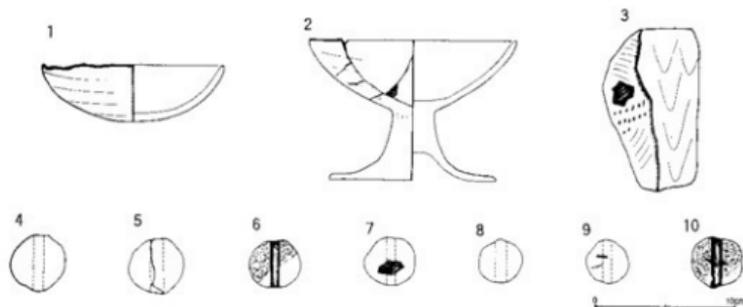
遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	①不明 ③0.4cm 脚高6.0cm	胴部は細く短く、底部にいたり広がる。坏部はゆるやかに立ち上がる。ヘラ削り	良好 褐色	1/3残
2	高坏脚部 (土師)	③0.4cm ④6.0cm	脚部は短く、底部は広がりが大きい。タテヘラ削り。	良好 褐色	1/3残
3	壺 (土師)	①18.0cm ②28.0cm ③0.5cm ④6.0cm	胴部は大きくふくらみ、口縁部は稍々外反する。ロク口整形。	良好 灰黒色	
4	ミニチャ土器 (土師)	①4.5cm ②6.0cm ③0.2cm ④2.5cm	胴部はふくらみ、口縁部は外反する。ヘラナデ。	良好 灰褐色	
5	石製模造剣		第189図参照		
6	石製模造剣		第189図参照		
7	石製模造剣		第189図参照		
8	石製模造剣		第189図参照		
9	石製模造剣		第189図参照		
10	石製模造剣		第189図参照		

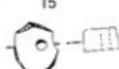
遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
11	石製模造剣		第189図参照		
12	有孔円板		第189図参照		
13	円板		第189図参照		
14	曲玉		第189図参照		
15	曲玉		第189図参照		
16	砥石		第189図参照		
17	白玉		第189図参照		
18	磨石		第189図参照		
19	不明の石片		第189図参照		
20	石核		第189図参照		
21	不明鉄片		第189図参照		
22	不明鉄片		第189図参照		
23	不明鉄片		第189図参照		



第190図 第7調査区第32号竪穴住居址(SI32)出土遺物



第190図 第7調査区第32号竪穴住居址(Si32)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

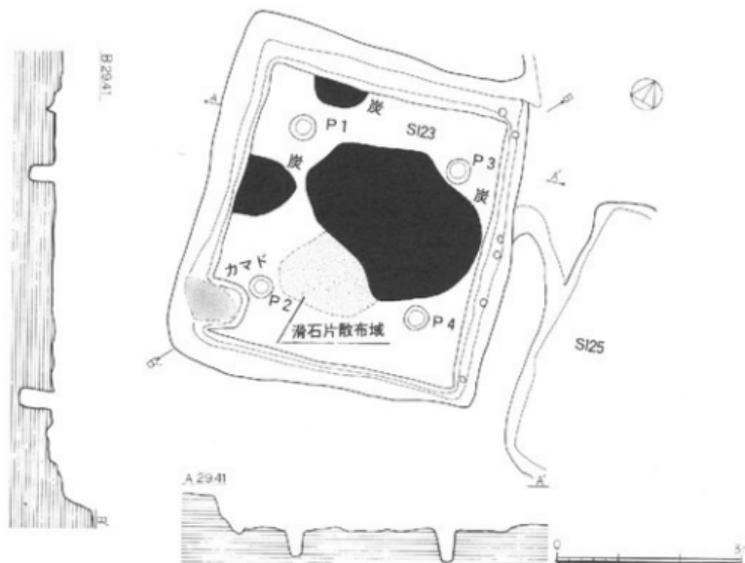
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①13.0cm ②4.0cm ③0.4cm	底部はまるみを有し、ゆるやかに立ち上がる。 口縁部は稍々垂直 ヘラ整形	良好 褐色 砂粒含有	完
2	高坏 (土師)	①15.0cm ②10.0cm ③0.4cm ④12.0cm 脚高5.0cm	脚部は短く、底部は広がる	良好 黄褐色	
3	支脚	②11.0cm ③4.0cm		良好 淡褐色	1/2残
4	土錘	①4.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
5	土錘	①4.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
6	土錘	①3.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/2残
7	土錘	①3.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	完
8	土錘	①3.0cm 孔0.8cm	磨滅あり	褐色	完
9	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
10	土錘	①3.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	1/2残
11	土錘	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	1/2残
12	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	1/2残
13	土錘	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	1/2残
14	有孔円板		第190図参照		
15	白玉		第190図参照		

第23号竪穴住居址 (SI23) (第191図)

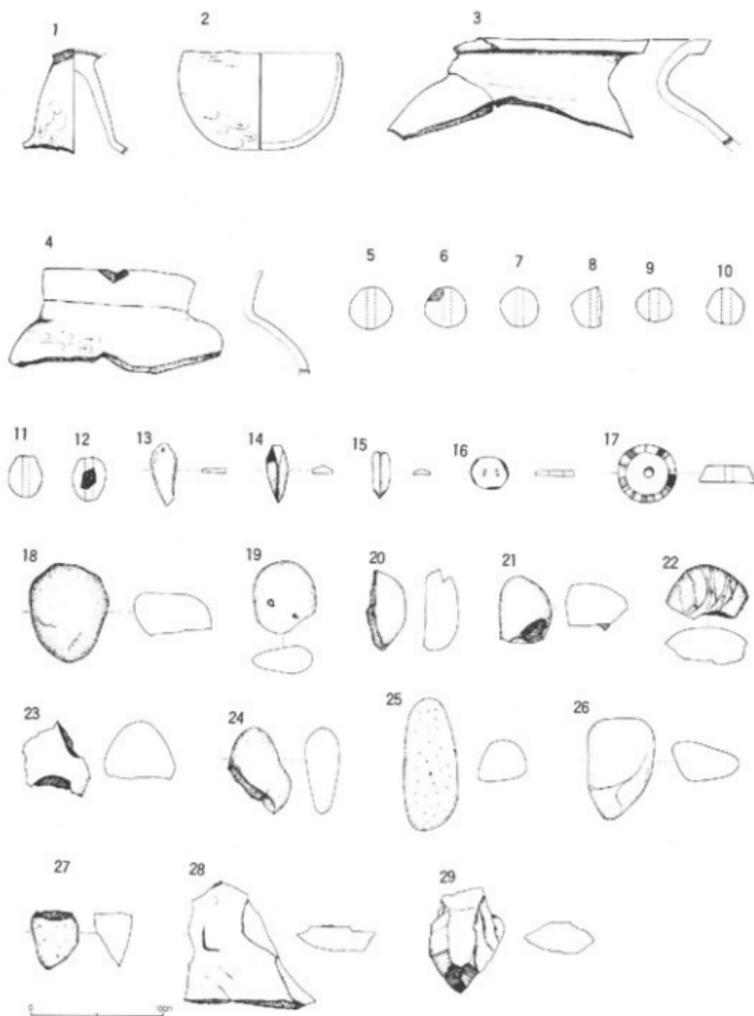
本住は本調査区の西方、そしてSI25の北隣に当る。軸線はほぼ20度東方にむけられている。平面形状は縦線5.20m、横4.70mの方形プランである。

壁高は西壁65cm、北70cm、東52cm(1部欠)、南48cmとなっており、周溝は南側で10cm×5cm、北15cm×6cm、西14cm×6cm、東16cm×6cm、主柱はP1(32cm×47cm)、P2(30cm×49cm)、P3(34cm×45cm)、P4(33cm×39cm)となっていた。本住は火災にかかったらしく焼土や炭化物が散乱していた。北側壁面にはカマドがあったらしく1部残されていたが、計測は不可能であった。

床面は平坦で固い。なお、床面の中央部南側から滑石製品と原石とが多量出土した。これもやはりそれらの製造工場であったものか。



第191図 第7調査区第23号竪穴住居址(SI23)平面実測図



第192図 第7調査区第23号壑穴住居址(Si23)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏脚部 (土師)	②9.0cm ③0.4cm ④10.0cm	脚部は太く短く、広がり大きい。 タテヘラ整形。	良好 黒褐色	残片
2	壺 (土師)	①11.0cm ②8.0cm ③0.3cm	底部はまるみをおび、胴部はふくらみをもって 立ち上がる。 口唇部稍々内傾。 外部横ヘラナデ。	良好 褐色	完
3	壺 (須恵)	①18.0cm ②10.0cm ③0.4cm	胴部はまるみをおびてふくらみ、口唇部は大き く外反し、ふちを有する。横ヘラ整形。	良好 灰青色	口縁部 のみ
4	壺 (土師)	①14.0cm ②8.0cm ③0.4cm	胴部はまるく立ち上がり、口縁部は外反する。 ヘラ整形	良好 赤褐色	口縁部 のみ
5	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
6	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
7	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
8	土鍾	①3.0cm 孔0.5cm	磨滅あり	褐色	完
9	土鍾	①2.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
10	土鍾	①2.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	完
11	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm 長3.0cm	磨滅あり	褐色	完
12	土鍾	①2.5cm 孔0.5cm 長3.0cm	磨滅あり	褐色	完
13	石製模 造剣		第192図参照		
14	石製模 造剣		第192図参照		
15	石製模 造剣		第192図参照		
16	有孔円 板		第192図参照		
17	紡錘車		第192図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
18	磨石		第192図参照		
19	磨石		第192図参照		
21	磨石		第192図参照		
22	磨石		第192図参照		
23	磨石		第192図参照		
24	磨石		第192図参照		
25	磨石		第192図参照		
26	磨石		第192図参照		
27	磨石		第192図参照		
28	石核		第192図参照		
29	磨石		第192図参照		

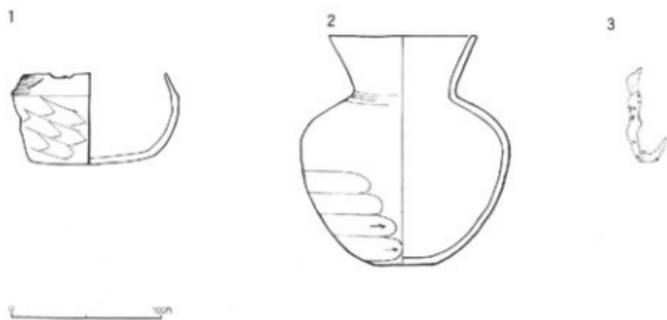
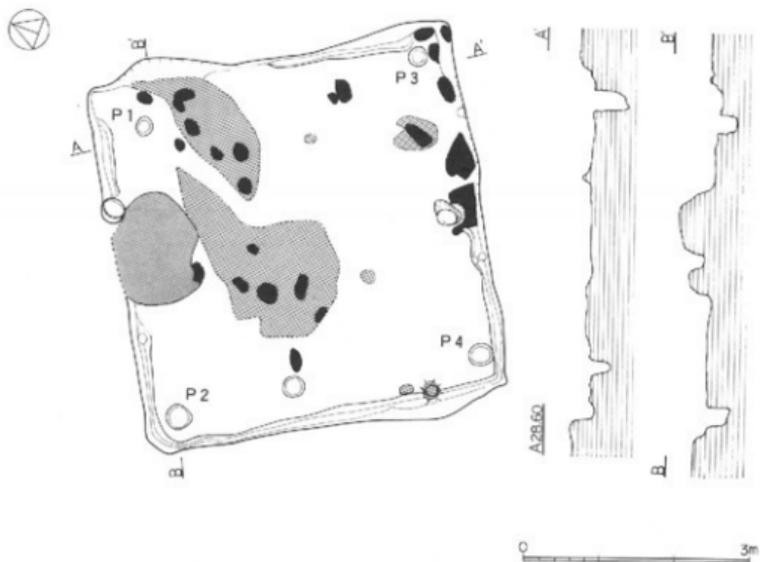
第24号竪穴住居址 (SI24) (第193図)

SI24

SI24はSD20を切りこんで造ってあるが、本調査区の西端に当る。軸線はほぼ10度西方に向けて建てられている。その平面形状は縦の長さ4.80m、横で4.90mの方形プランである。

壁高は北壁で18cm、西17cm、南27cm、東15cmとなっており、主柱はP1(30cm×27cm)、P2(20×33cm)、P3(30cm×50cm)、P4(25cm×30cm)であろう。北方壁にあるのはカマドではないかと思われるが、それは80cm×60cm、高さ30cmとなっていた。床面は平坦で固いが床面に焼土が散乱しているところから、火災にかかったものではなかろうか。

出土遺物については下記のとおりである。



第193図 第7調査区第24号契穴住居址(SI24)平面実測図・出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

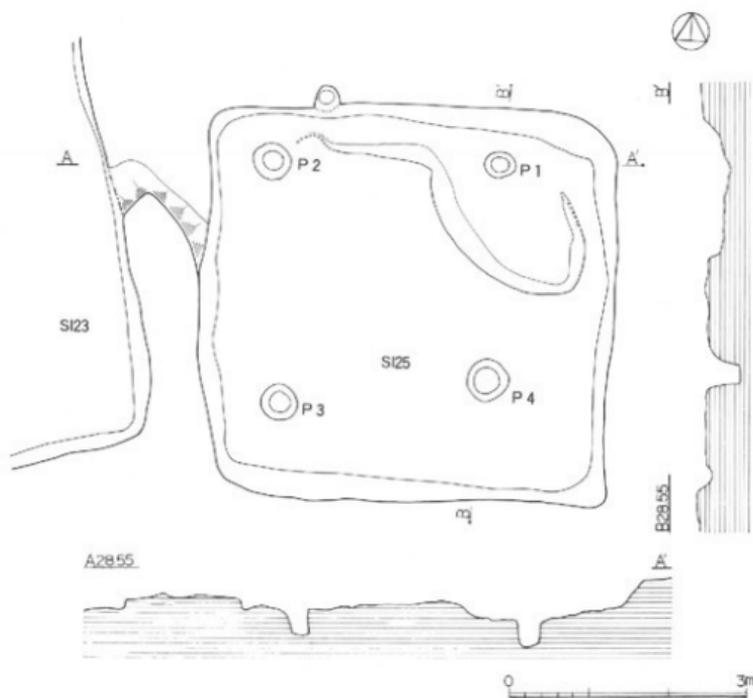
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①14.0cm ②4.0cm ③0.4cm	丸底で稜を有し、口縁部は内反する。 横ヘラ整形。	良好 褐色	1/2残
2	壺 (土師)	①10.0cm ②15.0cm ③0.4cm ④4.0cm	胴部はまるみをおび、口縁部は長く、稍々外反 ぎみ。 ロクロ整形。	良好 灰黑色	完
3	鉄器 釣針?		第193図参照		

第25号竪穴住居址 (SI25) (第194図)

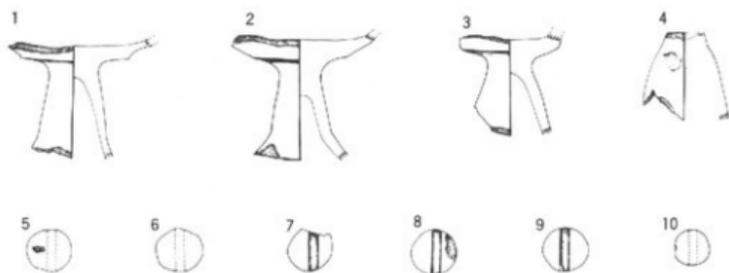
本住は本調査区の西端に当り、軸線は30度東へかたむいている。平面形状は縦4.40 m、横で4.97 mの長方形プランである。

壁高は南壁20 cm、西壁30 cm、北で16 cm、東で13 cmであり、周溝は南18 cm×10 cm、西14 cm×5 cm、北13 cm×6 cm、東で15 cm×5 cmとなっている。主柱はP1 (33 cm×34 cm)、P2 (36 cm×35 cm)、P3 (30 cm×36 cm) となっていた。東北隅の床面は、以前から攪乱されていたが、そこに炉があったようである。

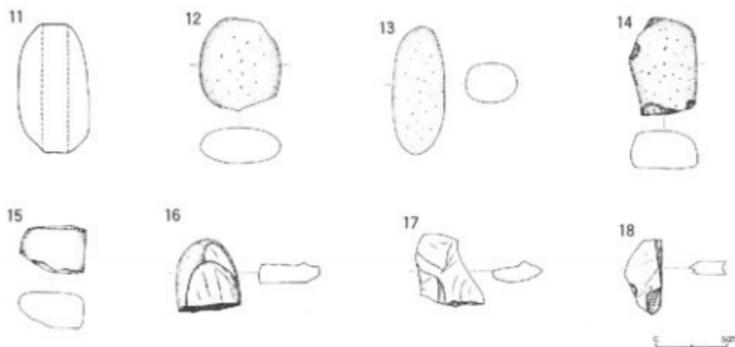
出土遺物の主なるものを下記にあげておいた。



第194回 第7調査区第25号竪穴住居址(SI25)平面実測図



第195回 第7調査区第25号竪穴住居址(SI25)出土遺物



第195図 第7調査区第25号竪穴住居(S25)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	②7.0cm ③0.4cm 脚高5.0 cm	胴部は太く短く、底部の広がり大きい	良好 褐色	坏部欠
2	高坏 (土師)	②7.0cm ③0.4cm 脚高5.0 cm	胴部は太く短く、底部の広がり大きい	良好 褐色 砂粒含有	坏部欠
3	高坏 (土師)	②7.0cm ③0.4cm 脚高5.0 cm	胴部は太く短く、底部の広がり大きい	良好 褐色	
4	高坏 (土師)	②7.0cm ③0.4cm	胴部は太く短く、底部の広がり大きい	良好 褐色	
5	土鏝	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
6	土鏝	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
7	土鏝	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/4残
8	土鏝	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/4残
9	土鏝	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/4残

遺物

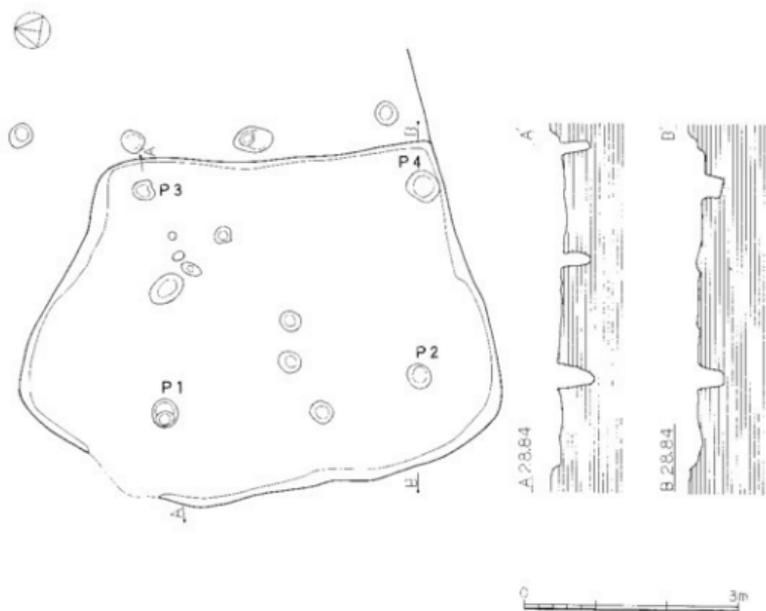
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
10	土錘	①2.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
11	土錘	①3.0cm 孔2.0cm 長9.0cm	磨減あり	褐色	1/2残
12	磨石		第195図参照		
13	磨石		第195図参照		
14	磨石		第195図参照		
15	磨石		第195図参照		
16	磨石		第195図参照		
17	石核		第195図参照		
18	石核		第195図参照		

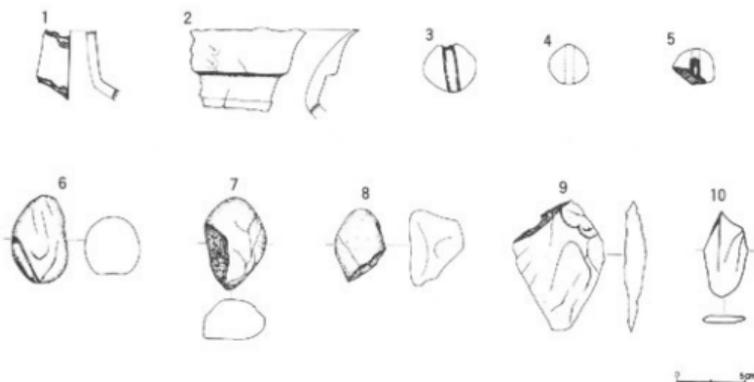
第 26 号竪穴住居址 (SI26) (第 196 図)

本住は本調査区の北端、SB08 の東側に当る。軸線をほぼ 20 度東方に向けて造成する。平面形状は縦長 4.00 m、南壁 3.80 m、北壁で 3.70 m の不整形方式プランである。

壁高は南 25 cm、西で 17 cm、北で 14 cm。そして支柱は P1 (36 cm×48 cm)、P2 (28 cm×37 cm)、P3 (46 cm×39 cm)、P4 (37 cm×28 cm) となっており、床面は凹凸があつて固い。



第196図 第7調査区第26号竪穴住居址(SI26)平面実測図



第197図 第7調査区第26号壁穴住居址(SI26)出土遺物

遺物

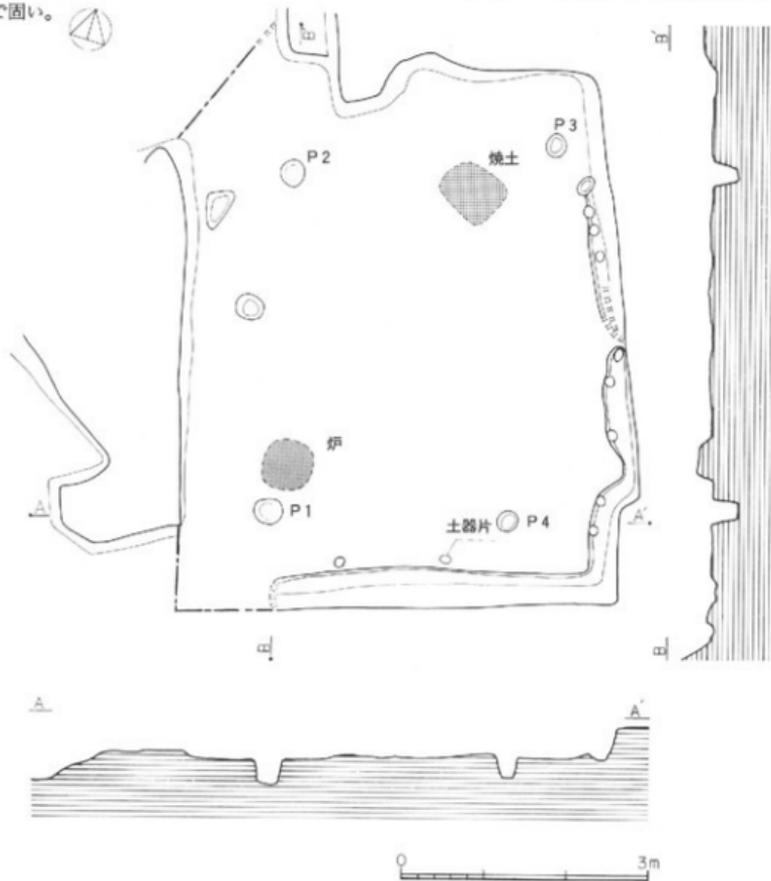
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	②4.0cm ③0.4cm	脚部は太く短い。 タテヘラナデ。	良好 灰褐色	脚部片
2	壺 (土師)	①17.0cm ②7.0cm ③0.4cm	頸部に稜をもち、口縁部は稍々外反し、はりつけ整形。	良好 赤褐色 砂粒含有	口縁部のみ
3	土錘	①33.5cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	1/2残
4	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨滅あり	褐色	完
5	土錘	①3.0cm 孔0.7cm	磨滅あり	褐色	1/2残
6	磨石		第197図参照		
7	磨石		第197図参照		
8	磨石		第197図参照		
9	石核		第197図参照		
10	石核		第197図参照		

第30号竪穴住居址 (SI30) (第198図)

本住はSI33の南隣、SI17の西隣に位置し、軸線はほぼ10度東方にむけている。平面形状は西北壁の1部でSI17に切りこまれ明確にはとらえられないが、西側現長4.80m、南側現長5.00m、北側現長5.10m、東側は3.00mで、不整形方形プランである。

壁高は西側で14cm、北36cm、東38cm、南42cmとなり、周溝は東面で8cm×5cmが残り(南は10cm×5cmであった)。主柱はP1(28cm×30)、P2(26cm×25cm)、P3(20cm×14cm)、P4(21cm×23cm)となっており、更に床面北側に炉50cm×44cm、高さ5cmを残している。床面は平坦で固い。



第198図 第7調査区第30号竪穴住居址(SI30)平面実測図



第199图 第7调查区第30号壁穴住居址(SI30)出土遗物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏 (土師)	②7.0cm ③0.4cm	脚の胴部は稍々ふくらみ、底部は広がる。 タテヘラ削り。	良好 褐色 砂粒含有	脚部片
2	甕 (土師)	②6.0cm ③0.4cm	口縁部はりつけ整形。	良好 灰褐色 砂粒含有	口縁部 1/4残
3	甕 (土師)	②7.7cm ③0.3cm ④4.0cm	胴部はふくらみ。 ヘラ整形。	良好 灰褐色 砂粒含有	1/4残
4	土錘	①3.5cm 孔0.6cm		褐色	完
5	土錘	①3.0cm 孔0.6cm		褐色	完
6	土錘	①2.5cm 孔0.6cm		褐色	1/2
7	土錘	①3.0cm 孔0.6cm		褐色	完
8	土錘	①2.5cm 孔0.6cm		褐色	完
9	土錘	①3.5cm 孔0.5cm		褐色	完
10	有孔円板		第199図参照		
11	有孔円板		第199図参照		
12	白玉		第199図参照		
13	磨石		第199図参照		
14	磨石		第199図参照		
15	磨石		第199図参照		
16	磨石		第199図参照		
17	磨石		第199図参照		
18	磨石		第199図参照		
19	磨石		第199図参照		
20	磨石		第199図参照		
21	磨石		第199図参照		
22	磨石		第199図参照		

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
23	磨石		第199図参照		
24	磨石		第199図参照		
25	石核		第199図参照		
26	石核		第199図参照		
27	砥石		第199図参照		

第31号竪穴住居址(SI31)・第34号竪穴住居址8 SI34)・第35号竪穴住居址(SI35)(第200図)

SI31

本住はSI34に約2分の1切りこまれる。軸線はほぼ30度東方に向っている。その平面形状は北側現長2.30m, 南側現長2.10m, 東側6.10mの方形プランをなす。

壁高は東40cm, 南40cm, 北30cmとなっており, 支柱は2柱だけ残されP1(63cm×51cm×52cm), P2(60cm×33cm)となっていた。床面は平坦で軟い。

SI34

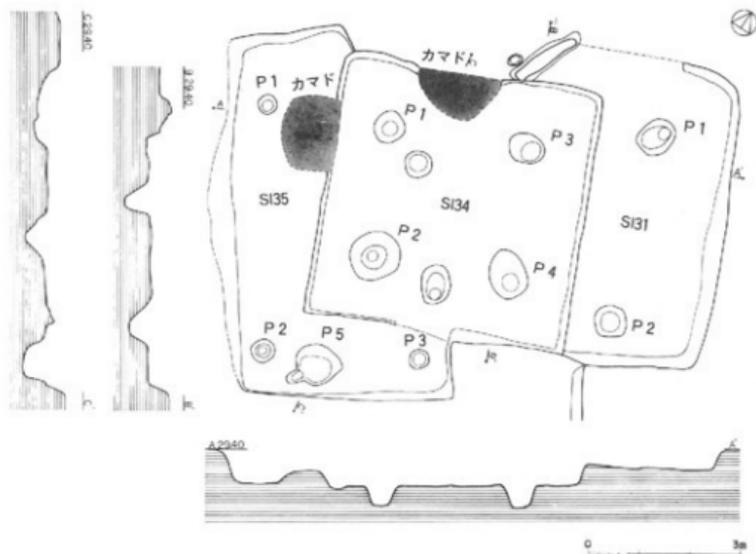
本住は本調査区の南西隅で, SI31, SI35を切りこんで造られている。軸線はほぼ10度東方に切りこまれていた。なお, 平面形状が縦線5.20m, 横5.10mの方形プランとみられた。

壁高は東壁35cm, 西6cm, 南1部44cm, 北30cmとなり, 周溝は南で10cm×7cm, 西9cm×4cm, 北10cm×6cmとなっていた。支柱はP1(60cm×47cm), P2(90cm×42cm), P3(60cm×47cm), P4(64cm×50cm)。カマドが西壁中央部に(86cm×90cm, 高さ21cm)あった。床面は固くて平坦である。

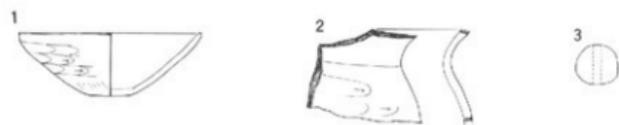
SI35

本住は本調査区の北西端で, SI34に切りこまれ, 西方は境界のため調査不能となっている。平面形状は縦壁7.00mとなっているが, 西は現長2.10m, 方形プランをなしていた。

壁高は西と東は不明, 南30cm, 北の1部40cmとなっており, 支柱はP1(34cm×50cm), P2(38cm×37cm)で, P3(30cm×16cm), P5は貯蔵穴ではないかとみられたが, それは85cm×90cm×39cmであった。床面は平坦であって固い。



第200図 第7調査区第31号・34号・35号竪穴住居址(SI31・34・35)平面実測図

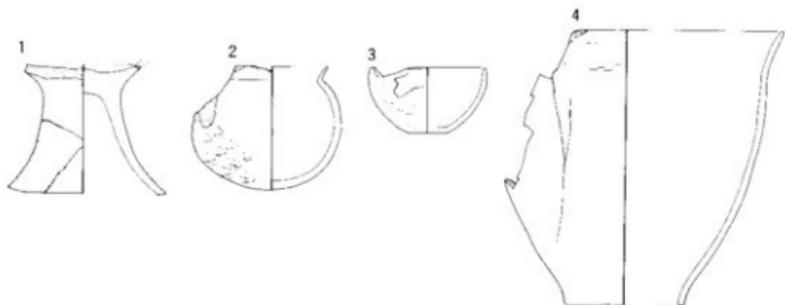


第201図 第7調査区第31号竪穴住居址(SI31)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①14.0cm ②4.7cm ③0.4cm ④3.0cm	胴部の丸味は少なく、口唇部にいたって稍々内反する。 内外横ヘラナデ。	良好 褐色	完
2	甕 (土師)	②5.0cm ③0.5cm	口縁部は大きく外反する。ヘラ整形	良好 褐色	口縁部のみ
3	土師	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完

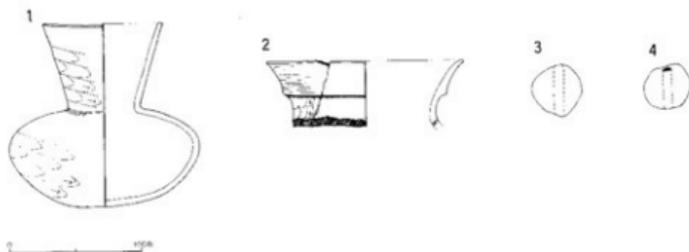


第202図 第7調査区第34号竪穴住居址(SI34)出土遺物

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種 (土師)	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏脚部 (土師)	③0.4cm ④12.0cm 脚高9.0cm	脚部は太く短い。底部は広がる。 ロクロ整形。	良好 灰褐色 砂粒含有	脚部
2	壺 (土師)	①10.0cm ②9.0cm ③0.4cm	底は丸味を有し、胴部はふくらむ。口縁部は短く外反する。 ロクロ使用ヘラナデ。	良好 灰褐色 砂粒含有	1/5残
3	碗 (土師)	①9.0cm ②5.0cm ③0.4cm ④3.0cm	底部からの立ち上がりは稍々急であるが丸味を有する。 内部タテヘラ、外部ヨコヘラ。	良好 灰黒色	1/5残
4	甔 (土師)	①24.0cm ②21.0cm ③0.4cm ④9.0cm	胴部の丸味は少なく、立ち上がりは稍々急である。口縁部は外反する。 ロクロ、タテヘラナデ。	良好 淡褐色	1/5残



第203図 第7調査区第35号竪穴住居址(SI35)出土遺物

遺物 (法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

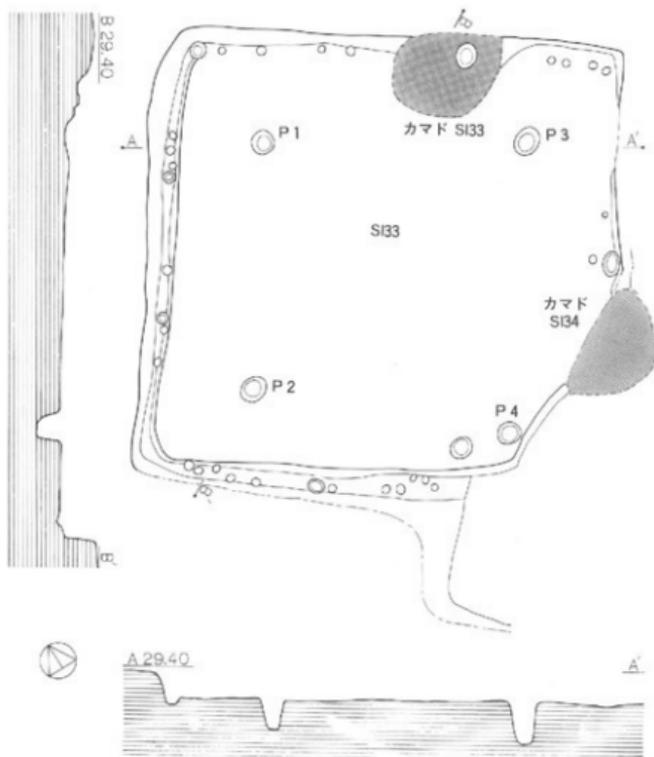
番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 (土師)	①9.0cm ②15.0cm ③0.4cm	丸底胴部の中央に大きなふくらみを有する。口縁部は外反する。へら整形。	良好 茶褐色	完
2	甕 (土師)	①15.0cm ②5.0cm ③0.5cm	頸部から口縁部の立ち上がりはふくらみもち外反もする。横へらナデ。	良好 褐色	口縁部のみ ¼残
3	土錘	①3.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐灰色	完
4	土錘	①3.5cm 孔0.5cm	磨減あり	褐色	完

第33号竪穴住居址(SI33) (第204図)

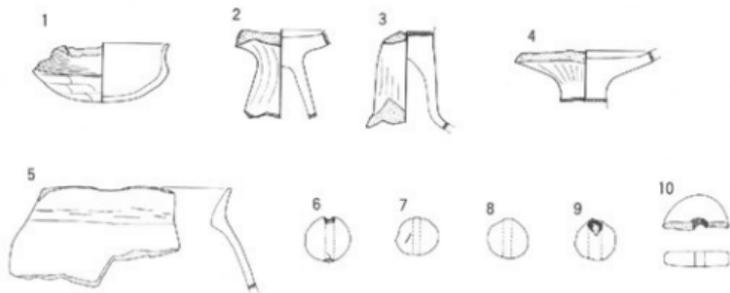
本住の位置は本調査区の北西部で、SI 34の東北側に当る。西側はSI 34を造るのに切りこまれる。西側の隅はSI 35に切りこまれる。軸線はほぼ10度西方にむけられている。平面形状は長軸5.10 m、短軸5.00 mの方形プランである。

壁高は西南側40 cm、西北49 cm、東北47 cm、東南(1部)19 cmとなる。周溝は西南30 cm×10 cm、西北10 cm×4 cm、東北6 cm×5 cmとなり、1部には壁柱列も残る。主柱はP1(35 cm×33 cm)、P2(25 cm×26 cm)、P3(30 cm×39 cm)、P4(33 cm×56 cm)となっており、南方壁中央部にカマド115 cm×100 cm、高さ20 cmを有する。

床面は平坦で固い。床面には焼土が散乱していることから、火災にかかったものと思われる。



第204図 第7調査区第33号竪穴住居址(SI33)平面実測図



第205図 第7調査区第33号竪穴住居址(SI33)出土遺物

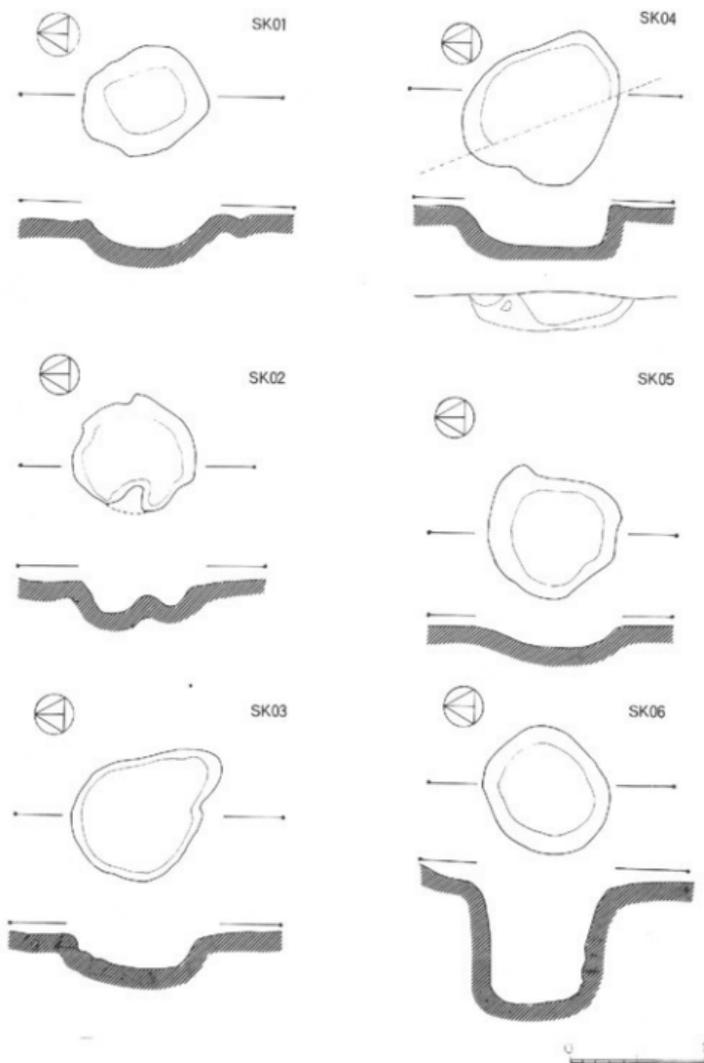


第205図 第7調査区第33号髷穴住居址(SI33)出土遺物

遺物

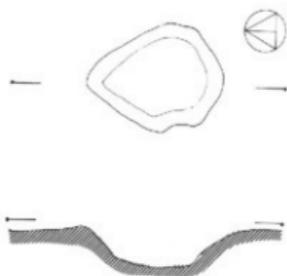
(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	①10.0cm ②4.5cm ③0.3cm	丸底で稜を有し、口縁部立ち上がりは垂直である。 ヘラ整形。	良好 褐色	1/3残
2	高坏脚部 (土師)	②7.0cm ③0.4cm ④6.0cm	脚部は太く短い。底部は平坦に広がる。 ヘラナデ。	良好 灰褐色	脚部
3	高坏脚部 (土師)	②7.0cm ③0.4cm 脚高6.0cm	脚部は太く、底部は広がる。 ヘラ整形。	良好 灰褐色	脚部
4	高坏 (土師)	脚部不明 ③0.4cm	坏部ゆるやかに広がる。 ヘラ整形。	良好 砂粒含む 褐色	杯部
5	甕 (土師)	①不明 ②6.0cm ③0.4cm	口縁部は外反する。ヘラナデ。	良好 砂粒含有 褐色	1/3残
6	土錘	①3.5cm 孔0.7cm	磨減あり	褐色	完
7	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
8	土錘	①3.0cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	完
9	土錘	①2.5cm 孔0.7cm	磨減あり	褐色	完
10	土錘	①3.5cm 孔0.6cm	磨減あり	褐色	1/3残
11	敲石		第205図参照		
12	磨石		第205図参照		
13	磨石		第205図参照		
14	磨石		第205図参照		
15	磨石		第205図参照		
16	石核		第205図参照		

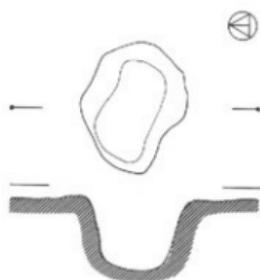


第206図 第1調査区土坑状遺構(SK01・02・03・04・05・06)実測図

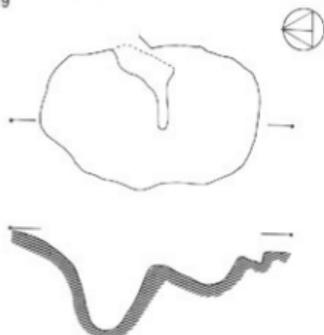
SK07



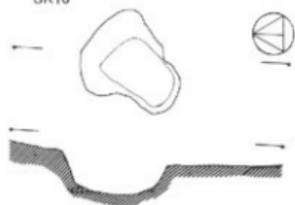
SK15



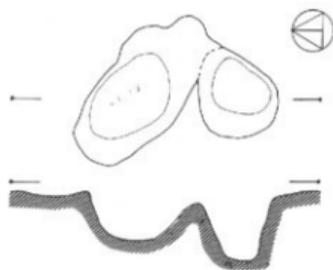
SK09



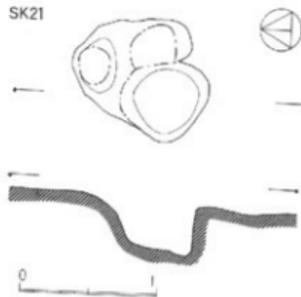
SK16



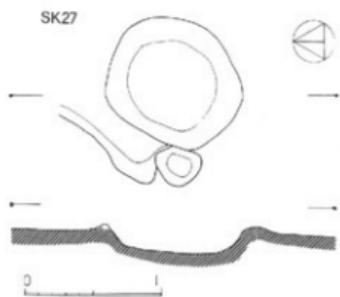
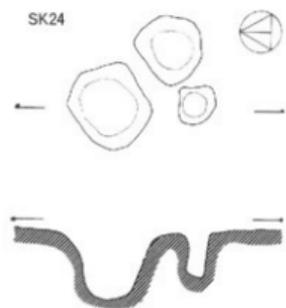
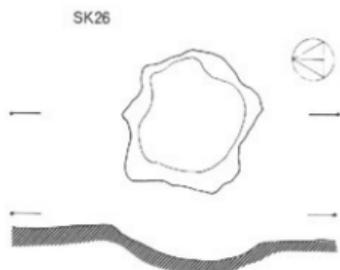
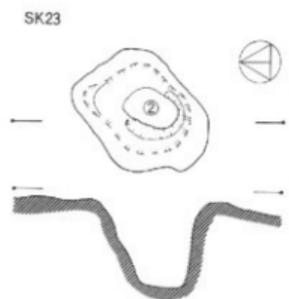
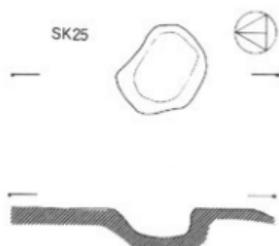
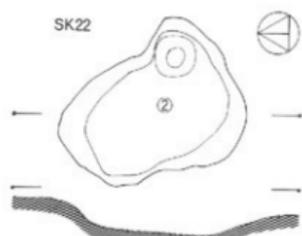
SK14



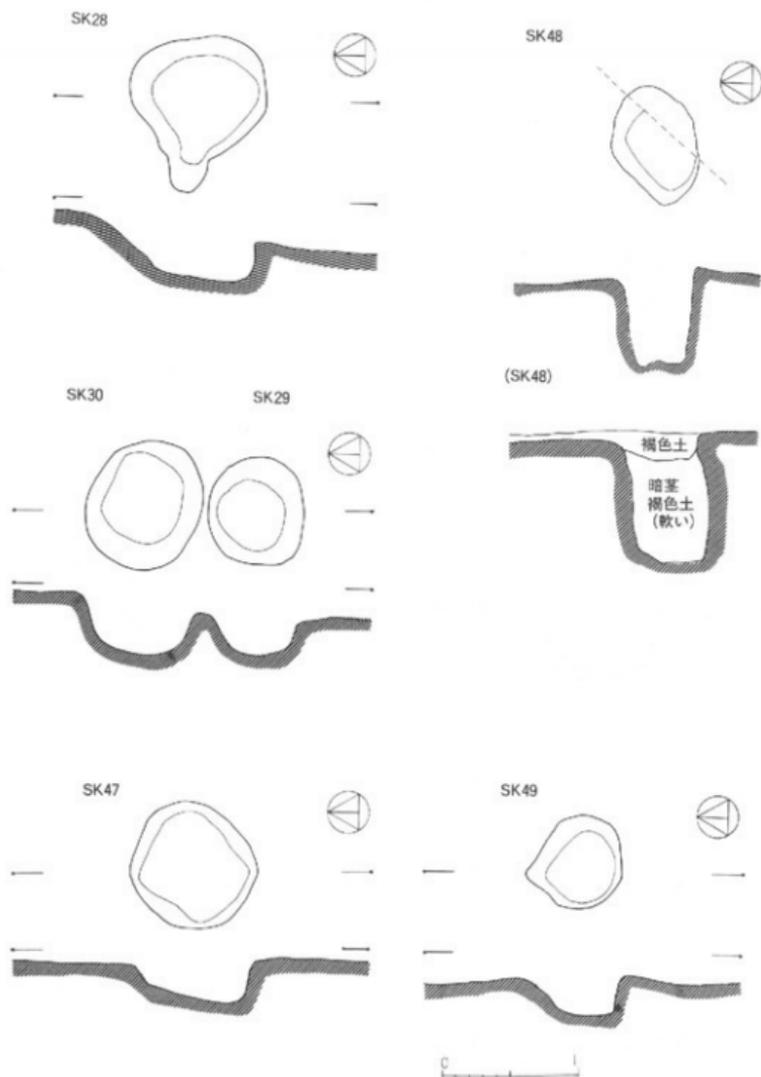
SK21



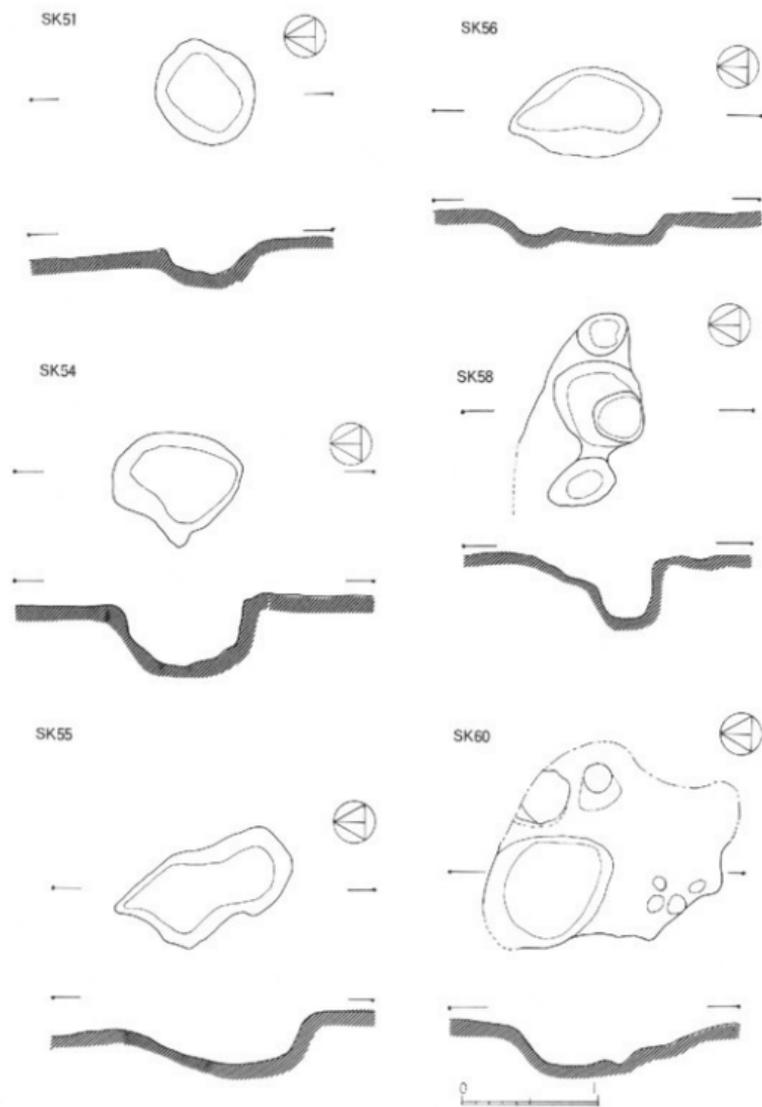
第207図 第1調査区土壇状遺構(SK07・09・14・15・16・21)実測図



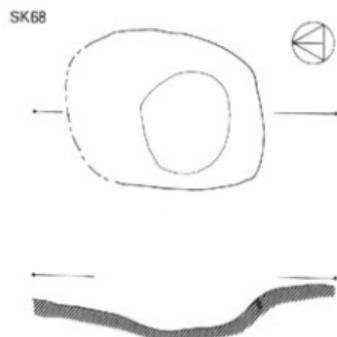
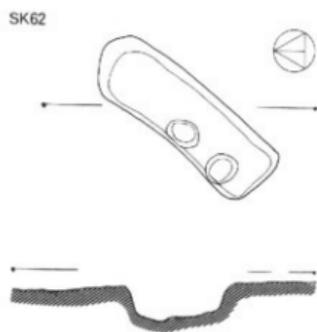
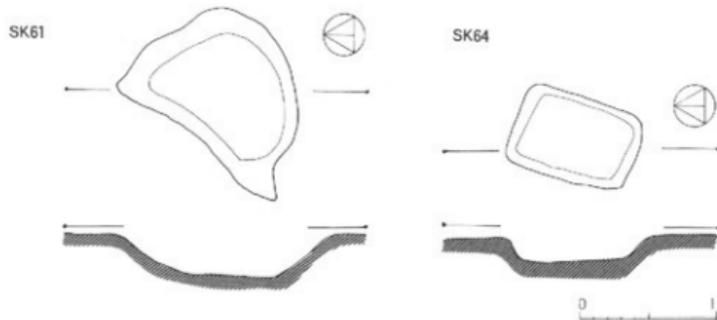
第208図 第1調査区土塚状遺構(SK22・23・24・25・26・27)実測図



第209図 第1調査区土坑状遺構(SK28・29・30・47・48・49)実測図



第210図 第1調査区土坑状遺構(SK51・54・55・56・58・60・)実測図



第211図 第1調査区土壇状遺構(SK61・62・64・68)実測図

(8) 第8調査区



第213図 第6調査区(古堀古墳)発掘遺構全体図

(8) 第8調査区(うなぎ塚古墳)

本古墳は本遺跡西南端の標高27mの丘陵上に築造されている。本古墳の西南部は高さ約20mの急斜面の断崖に当り、その下方は広さ約10haに及ぶ立切の池となり、往時満々たる水をたたえ種々の伝説等も残されている。最近になってその池周辺の山を崩して埋立てられ、現在は一面の草原と化しているが、本古墳の後方部とみられる西方の一部は池の埋立工事のために削平されている。なお、本古墳の後方部とみられる西側、及び北側も墳丘掘部の4~5mの位置から約40度位いの稍々急斜面となって谷津に落込んでいる。したがって本古墳を築造した丘陵部後方部は稍々高いが大体において標高約27mの比高を保ち東西12m~15mの巾を保ちながら南北に35mの長さをもって西側に急斜面となってその谷津に落ち込んでいる。なお、付記したいことは、西南側の断崖は池埋立工事の際に土砂採取のため当時の姿とは大きく変貌したことであり、とにかく本古墳はその丘陵上にその丘陵を利用して東西の方向に構築されたものと考えられるのである。

本古墳は土地の人々が「うなぎ塚」と呼称しているが、それは古墳下方の池でとれた大うなぎを供養するために造られた塚だということからその名が出たものらしい。中世になると本調査区に城館が構築されたようであるが、その時の物見台として使用されたものと言う人もある。

とにかく、長年の風雪に堪えてその塚は残存したが、それにしても封土は削平され凹凸がはげしく、その上に草木が茂り、そのままでは塚の全貌をとらえることは困難であった。

草木を全て除去してみるとその外観はおぼろげながらとらえることが出来た。それは前方部と後方部とを有する古墳の様相をなしていることが確認されたものである。比高は後方部の方が高く前方部に行くに従って低くなっているが、前方部の先端をとらえることは、外観上は困難であった。

先ず本古墳の長径と短径を調査し、盛土の集積状況等を見るために本古墳の中央を縦貫する(第214図)東西に巾2mのトレンチを入れ、また横位にも同じく第2・3・4・5・6・7・8・9号のトレンチを入れることにした。

そこで、中央部縦位のトレンチ1号の後方部の地上からの高さについて第215図によって調べてみると、④点は周溝部と思われる落込みがみられたが地山より1mとなり、⑤点は丘陵部地山から0.9m、⑥点は1m、⑦点は周溝部とみられる落込みがあつて1.1mとなった。前方部と思われる⑧点で0.4m、⑨点で0.5mとなっていた。なお、⑩は0.4mであつたが、それを境いとして、

いくらかの落込みがみられたので前方部の尖端は㊦点のところなのか。その点は明確さを欠いていた。更に㊦点で0.5mとなっていくらか高く盛土がみられ、そのところから壘の出土をみた。㊦点になると盛土は余りみられなかったが、そこから急角度に約2mの落込みがあり前方の谷津につながっていた。

そこで本古墳のトレンチによる縦位の径は後方で13m、㊦点の周溝部で2m、前方部で㊦点までとすると9mで全長径20mということになる。それが㊦点までとすればその全長は更に延長されるわけである。

比高は後方でほぼ1m、前方部でほぼ0.5mとなるから後方に当る方が約0.5m高いことになる。

なお、横位の径については第218図が示すように、後方において15m、前方部で10mが計測された。

「本古墳の周溝部の確認とその形状」。トレンチの結果後方と思われる前後より周溝部の一部が確認されたので掘削したところ、第218図のように方形に四周に確認された。それは前方部径2m、深さ0.5m(海拔26.80m)、前方右側周溝部径2m、深さ地山から墳丘の立上りまで0.5m(海拔26.96m)、前方部左側径2m、深さ0.4m(海拔18.55m)、後方部周溝径2m、深さ0.5mとなり、方形の周溝部が検出されたわけである。この周溝部はコの字型に整然と掘られていた。

なお、周溝部内側の盛土の立ちあがりを計測したところ、前方長さ11m、後方長さ11m、向って右側長さ11.5m、その左側長さ11.5mとなり、それは正確な方形が確認された。したがってその平面形状は方形周溝墓としての様相を呈していたものである。その盛土は周溝部の土が当てられ、それは前述の当時その比高(現高)後方部1m、前方部0.5mが計測されたが、築造当時はそれより1m程度は高かったものと推定される。ここで考えられることは、後方部は方形周溝墓の形状をなしてはいるが、その墳丘は盛土を高く積み上げた、所謂後方部としての様相をなしているということである。

前方部は後方部とのつながりはなくその間、周溝部を隔てて築造されている。形状は不整形方形をなしているが前方尖端部については明確さを欠く。横巾については8mが計測されるが、縦の長さについては㊦点までを計測するとすれば9mとなる。なお、先端部向って左側の長さは6.5m、その右側で8.5mが計測されるから不整形方形をなすことは明らかである。前方部の周溝部は確認されなかったが、その周辺の土をもって盛土されたものと思われる。その盛土の比高は縦位に入れたトレンチによってみると前述のとおり平均しての現高0.4m。したがって後方部に比べて現高においては0.4m～0.6m低いことになる。なお、先端部については明確さを欠くが、その両サイドに掘込みを認めたので一応㊦点をもって方の尖端部とした。しかしながら中央トレン

チ印点にもいくらかの盛土が認められたし、そこに埋納壔も出土したことなどから①点の落込みまでを一応前方部として、外見を長く見せかけたものなのであろうか。また、前方部と後方部との間に周溝が認められるが、周溝部の土のかき上についてはその大部分は後方部になされているが、前方部への土のかき上げも認められる。更に付言したいのは前方部は方形周溝墓としての様式をとらないで、周囲の土をかき上げて不整形形状の形をととのえたものである。遺物等の出土状況や古墳のバランス等から判断して、本古墳は同一丘陵上に同一の古墳として築造されたように思われる。これについては異った見方もある。それは方形周溝墓が先ず築造されていて、その後、前方部を補足したもので、これによって前方後方墳としての墳形を整えたものではなからうか、と言うのである。更にまた、本古墳の前方部と後方部は全く異質のものであるとする見解もある。何れにしてもこの問題については本古墳の調査の結果をつぶさに検討していただいて先学によって御判断願えれば幸甚である。本調査はその材料を提供したに過ぎないのである。

主体部について。主体部は残されていなかったが、後方部中央部の第218図①点が主体部に当たる場所ではなからうかと推定された。往時樞の木が植えられていたが、それを掘って他所へ移されたと言うが、そこが図の①地点に当る。長径2.5m、短径2.2m、深さ0.8mの不整形円形となっており、その木を掘るとき土器類も出土したと言う。付近から石棺片も見当たらないし、粘土片も散乱していないから、もしあるとしたら木棺であったものか。なお、前方部右端②部に長径2.7m、短径1m、深さ0.3mの土壇状遺構が検出されたが、何に使用されたものか用途不明であった。また前方部表土は極めて凹凸が多く、ピットも数ヶ所検出されている。

遺物。後方部周溝部の向って右側底部(218図)の内部①点を横に掘りぬいて壔が検出された。埋納壔であろうが土器片2枚の蓋がのせられていた。胴部には亀裂が廻っていたが、これは人為的なものではなく自然に割れたものであろう。内部にたまった土質を検査して貰ったところ、それは周囲の土がたまったものだということが判明した。壔は五領式土器に比定された。

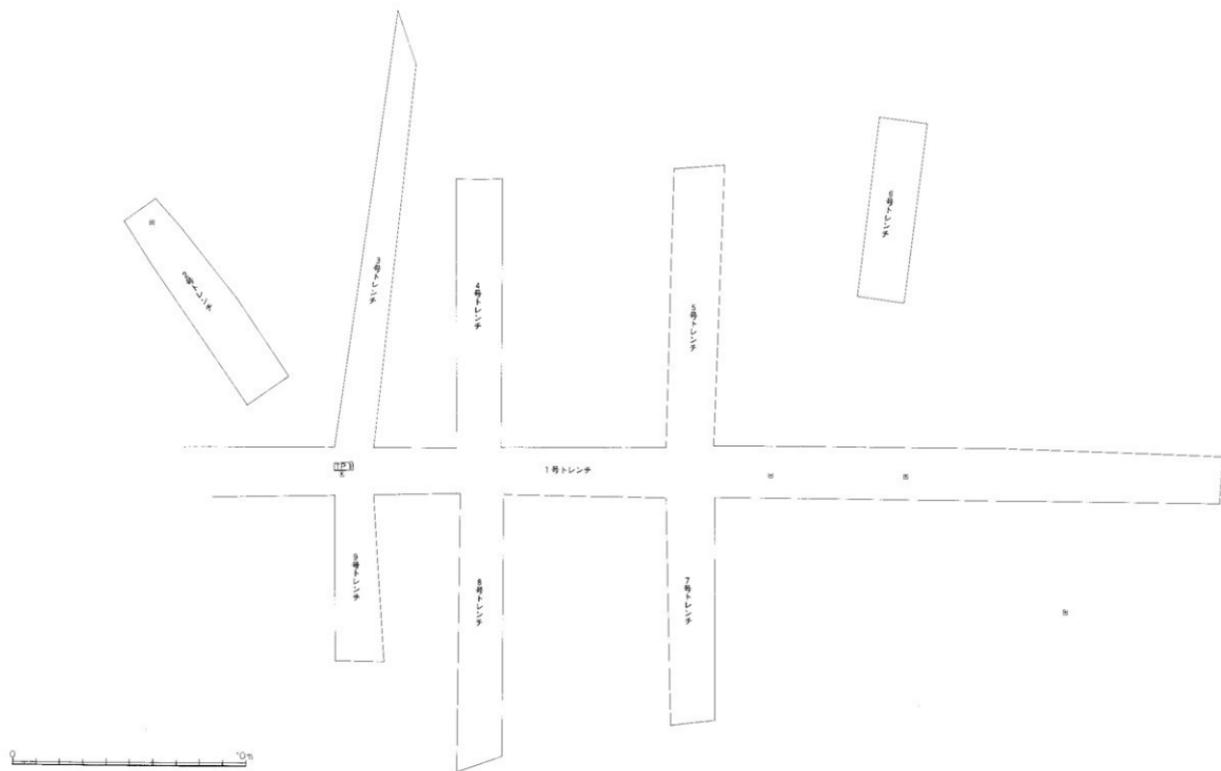
なお、周溝部底部③点と④点より五領式の壺形土器が検出されたが、これは何れも古墳に関係あるものと考えられる。

更に、前方部トレンチ⑤地点から五領式壔の出土をみたが、これも埋納壔ではなからうか。

また、後方部覆土から多量の弥生後期の土器の小片の出土をみたが、これらは全て盛土の際に持ちこまれたものと判断した。

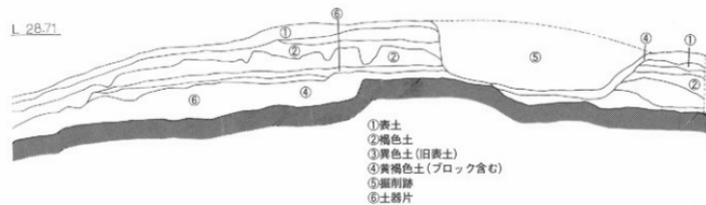
本古墳の築造様式や出土遺物等によって、本古墳の築造は覆々浦周辺の丘陵部を利用して造られた古式古墳に該当し、その築造年代は四世紀後半期と推定されるのである。

(註) 土質検査会社 パリノサーヴェイ KK



第214図 第8調査区(うなぎ塚古墳)トレンチ平面図

L 28.71

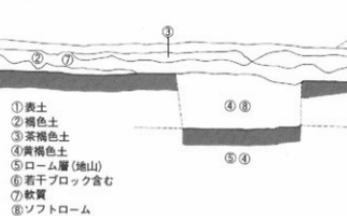


第12調査区うなぎ塚第1号トレンチセクション図(南面)

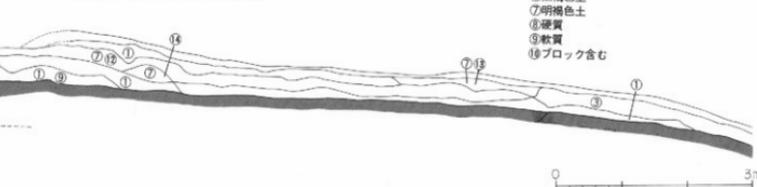
L 28.74



1号トレンチ北壁(前方面)



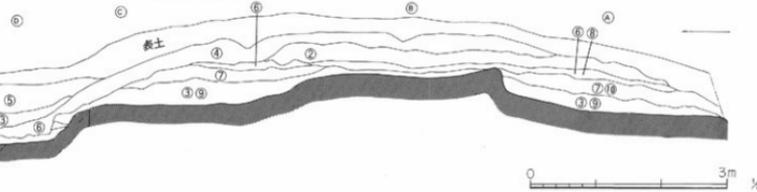
1号トレンチ前庭部北側セクション図



0 3m

1号トレンチ前方面

1号トレンチ後方面



0 3m

第215図 第8調査区(うなぎ塚古墳)トレンチ第1号セクション図

第4号トレンチセクション図(西側)



- ①黄土
- ②褐色土
- ③赤褐色土
- ④赤褐色土
- ⑤赤褐色土
- ⑥赤褐色土
- ⑦ブロック
- ⑧ブロック裏石
- ⑨赤褐色土(砂状)
- ⑩盛り上げ土

第5号トレンチセクション図(西側)



- ①褐色土
- ②赤褐色土
- ③明赤褐色土
- ④赤褐色土
- ⑤赤褐色土
- ⑥明赤褐色土
- ⑦赤褐色土
- ⑧黄土
- ⑨ブロック裏石
- ⑩粘土ブロック若干含む
- ⑪赤褐色土混入
- ⑫褐色土若干含む
- ⑬褐色土ブロック裏石
- ⑭軟膏

第7号トレンチ西側セクション図

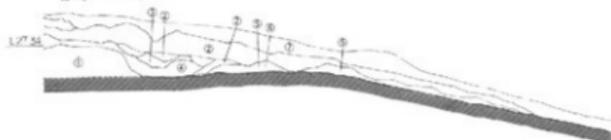


- ①土師戸基中区域
- ②紫色土
- ③褐色土
- ④赤褐色土
- ⑤赤褐色土
- ⑥赤褐色土
- ⑦ブロック裏石
- ⑧黄土

第3号トレンチ東側セクション図



第6号トレンチ東側



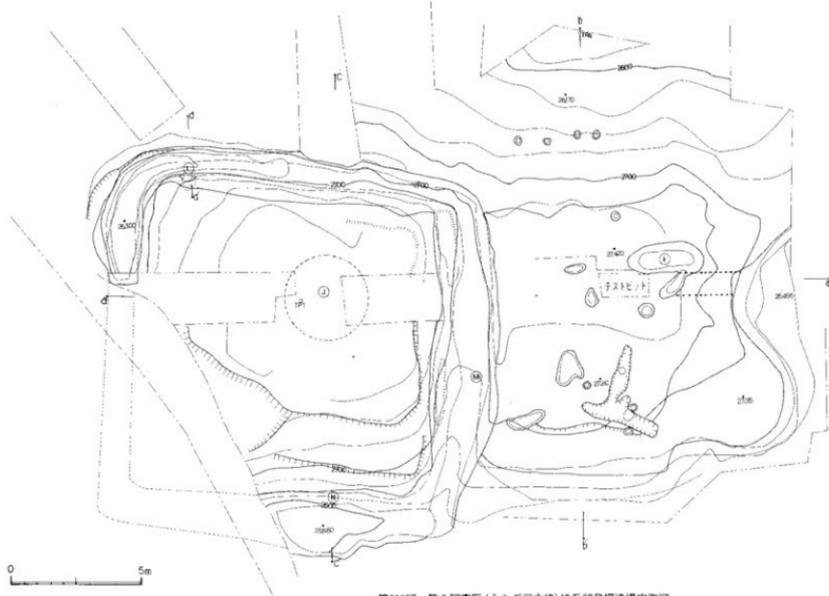
第9号トレンチ西側セクション図



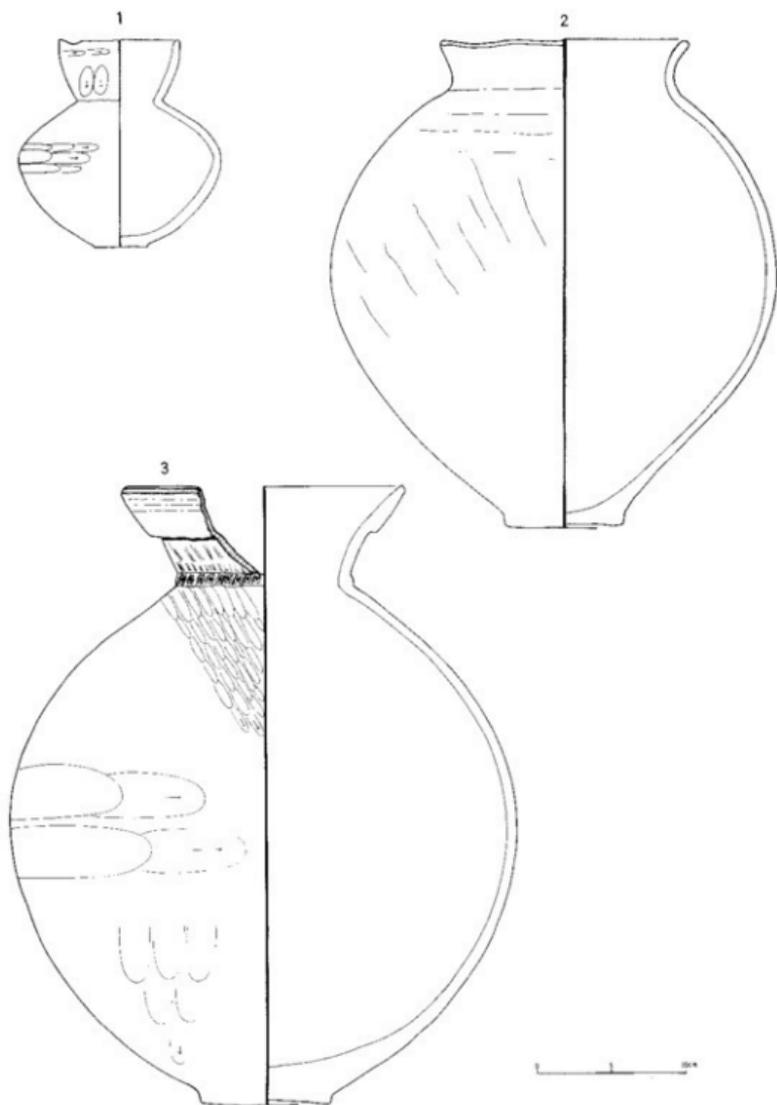
第216図 第8調査区(うなぎ塚古墳)トレンチ・第3・4・5・7・8・9号セクション図



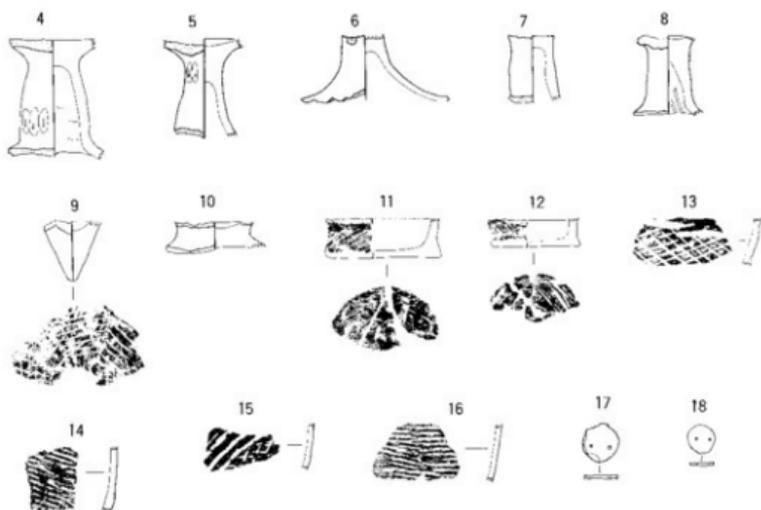
第217図 第8調査区(うなぎ塚古墳)断面図



第218図 第8調査区(うなぎ塚古墳)墳丘部発掘遺構実測図



第219図 第6調査区(うなぎ塚古墳)出土遺物(1)



第220図 第8調査区(うなぎ塚古墳)出土遺物(2)

遺物

(法量 1. 口縁部径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	埴(土師)	①8.0cm ②14.0cm ③0.6cm ④3.5cm	胴下半部より大きく外反して開く胴部で頸部より口縁部まではゆるやかにひらいて立ち上がる。外器面にはヘラナデ痕が認められる。	良好 砂粒 黒褐色	完
2	壺(土師)	①16.4cm ②32.7cm ③8.0cm ④0.7cm	胴下半部は大きく外反してほぼ球状の胴部である。口縁部はゆるく外反している。外器面にはヘラ削り痕が認められる。	良好 砂粒 暗褐色	完
3	壺(土師)	①18.5cm ②41.8cm ③8.7cm ④0.7cm	胴部は球状を呈しており頸部外面には粘土紐をはりつけ爪形状の押圧を加えている。口縁部はほぼ直線的にひらいて立上り、口辺部には折返し口辺を呈している。又その下位の部分に櫛状工具の歯形を施している。	良好 砂粒 淡褐色	完 胴中央部にて切断されている
4	高坏脚部(土師)	①8.0cm ②12.0cm ③0.5cm		良好 砂粒 赤褐色	脚部
5	高坏脚部(土師)	①9.0cm ②10.0cm ③0.5cm		良好 砂粒 赤褐色	脚部

遺物

(法量 1. 口縁径 2. 高さ 3. 厚さ 4. 底部径 5. 高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	高坏脚部 (土師)	①5.0cm ②11.0cm ③0.5cm		良好 砂粒 赤褐色	脚部
7	高坏脚部 (土師)	①5.0cm ②8.0cm ③0.4cm		良好 砂粒 赤褐色	脚部
8	高坏脚部 (土師)	①6.0cm ②8.0cm ③0.5cm		良好 砂粒 赤褐色	脚部
9	縄文地器 (尖底部)	4.5×4.2 cm	外器面に沈線状の刻線を横位に施している。	普通 砂粒 暗褐色	残片
10	弥生土器 (底部)	2.0×5.7 cm		良好 砂粒 明褐色	残片
11	弥生土器 (底部)	2.9×8.8 cm	外器面に細縄文を残す。底部外面には葉状庄痕を残す。	良好 砂粒 明褐色	十王台系 後期
12	弥生土器 (底部)	2.0×6.8 cm	外器面に細絞縄文を残す。底部外面には葉状庄痕を残す。	良好 砂粒 明褐色	十王台系 後期
13	弥生土器 (口辺部)	7.6×3.6 cm	外器面の紋様は沈線を左右両側から斜位に施している。	普通 砂粒 暗褐色	十王台系 後期
14	弥生土器 (口辺部)	3.9×5.1 cm	外器面には細縄文を施して。	良好 砂粒 明褐色	十王台系 後期
15	弥生土器 (口辺部)	5.6×3.6 cm	番号13と一ケ体	十王台系	十王台系 後期
16	弥生土器 (口辺部)	6.7×4.4 cm	番号14と一ケ体	十王台系	十王台系 後期
17	双孔円板 (滑石)	2.7× 2.9×0.3 cm	第220図参照		
18	双孔円板 (滑石)	2.1× 2.0×0.2 cm	第220図参照		

(9) 土壙状遺構(SK)一覽表

(9) 土壇状遺構(SK)一覧表

第1調査区

遺構の名称⑨	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-01	西側	不整形方形	90×70×25		
SK-02	西側	不整形円形	90×600×25		
SK-03	SI-13内	楕円形	120×90×30		
SK-04	西側	不整形円形	130×125×30		厚さ20cmの焼土を含む
SK-05	SI-17内	不整形方形	85×70×15		
SK-06	西側	円形	95×95×100		明治・大正期の墓？ 人骨多数出土
SK-07	西側	不整形円形	80×70×35		
SK-08	SI-03用	不整形方形	140×20×100		柱穴4つあり
SK-04	SI-24内	方形	160×105×70		高台付つばの底部2序
SK-10	SI-05内	不整形円形	190×170×50		
SK-11	SI-10	円形	110×110×25		
SK-12	SI-10内	楕円形	60×50×25		
SK-13	SI-10内	楕円形	80×70×75		
SK-14	SI-13内	楕円形	130×60×30		
SK-65	西側	不整形方形	90×65×55		
SK-16	SI-13	整形方形	75×45×35		
SK-17	SI-14内	方形	75×55×60		
SK-18	西側				
SK-19	SI-13内	不整形楕円形	90×80×30		柱穴2つあり
SK-20	SI-40	方形	120×50×45		

遺構の名称	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-21	SI-09 南側	円形	60×60×50		
SK-22	SI-09	不整形方形	140×90×30		
SK-23	SI-09 内	不整形方形	130×85×85		柱穴 2 つあり
SK-24	SI-07'	円形	85×85×65		
SK-25	SI-07'	円形	90×90×30		
SK-26	SI - 07' 内	円形	125×125×20		
SK-27	SI - 07' 内	円形	120×120×35		
SK-28	SI - 07' 内	不整形円形	155×80×60		柱穴あり
SK-29	SI - 07' 東側	円形	85×85×35		
SK-30	南側	円形	90×90×45		柱穴あり
SK-31	SI-37 内	円形	95×95(3)40		
SK-31'	SI-37 内	不整形方形	125×1055×30		柱穴 2 つあり
SK-32	SB - 46 西側	不整形円形	120×110×30		
SK-34	SI-19 南東	不整形楕円形	125×50×30		柱穴あり
SK-35	SI-33	不整形楕円形	125×80×115		
SK-36	SB - 46 内	楕円形	2155×120×80		土壌 2 つ接する
SK-37	SB - 46 北西	方形	100×80×35		
SK-38	SB - 46 北側	不整形方形	140×95×50		土壌 2 つ接する。すり石片、はじき片、すえき片、多数出土
SK-39	SI-50 西側	不整形円形	140×130×40		すり石片、はじき片、龜文片、出土

遺構の名称⑩	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-40	SB-45内	円形	80×80×35		
SK-41	SB-46内	円形	105×105×20		
SK-42	SI-47南側	円形	120×120×20		
SK-43	SI-29内	楕円形	130×85×90		柱穴2つあり
SK-44	SI-07内	不整形楕円形	160×80×60		墓塚?
SK-45	SI-07内	楕円形	185×130×90		墓塚?
SK-46	SI-42内	不整形方形	145×130×30	柱穴2つあり	
SK-47	東側	不整形方形	110×70×30		墓塚?
SK-48	NI-30内	不整形方形	150×60×115		柱穴あり
SK-49	SI-30西側	円形	75×75×40		
SK-50	SI-47北側	楕円形	130×85×45		
SK-51	南側	円形	65×65×30		
SK-52	SI-40	楕円形	110×60×45		
SK-53	SB-68内	不整形円形	110×100×45		柱穴2つあり
SK-54	SI-07北東	不整形円形	110×80×60		
SK-55	北側	不整形楕円形	150×70×40		
SK-56	北側	不整形楕円形	100×60×20		
SK-57	SI-53南西	不整形方形	145×115×40		
SK-58	SB-45内	不整形方形	95×50×15		柱穴2つ接する
SK-59SI-41内	不整形円形	100×75=55			
SK-60	南側	円形	95×95×30		

遺構の名称㉔	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-61	東側	不整形 楕円形	140×110×30		すえきので 口縁部出土 駒部片
SK-62	SI-31 内	不整形 方形	225×30×65		
SK-63	東側	不整形 円形	150×130×40		
SK-64	北側	楕円形	100×70×20		
SK-65	SI-28 北 側	不整形 円形	80×70×20		

第2調査区

遺構の名称㉔	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-01	南側	不整形 円形	140×130×15		
SK-02	西側	円形	120×120		
SK-03	西側	円形	125×125×15		
SK-04	西側	円形	120×120×20		
SK-05	西側	不整形 円形	150×140×20		
SK-06	南側	円形	140×140×20		
SK-07	南側	円形	140×140×20	鬼高式土器出土。 かめ片、つぼ片	
SK-08	中央	円形	170×170×20		
SK-09	中央	不整形 方形	200×190×30		
SK-10	中央	不整形 円形	160×130×20		
SK-11	北側	不整形 楕円形	110×80×30		柱穴あり 土壇墓?
SK-12	北側	不整形 円形	135×100×30		

第3調査区

遺構の名称②	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-01	SB-03 内	不整形 円形	100×80×60		柱穴
SK-02	SB-02 内	不整形 円形	80×70×70		柱穴2つあり
SK-03	SB-02 内	円形	90×90×50		柱穴
SK-04	SB-01 北側	楕円形	100×80×40		柱穴
SK-05	東側	楕円形	190×80×70		墓壇?
SK-06	東側	不整形 円形	150×130×80		墓壇?
SK-07	東側	楕円形	120×80×80		墓壇?
SK-08	SB-02 内	楕円形	140×85×40		柱穴2つあり
SK-09	SB-02 内	不整形 楕円形	100×70×30		柱穴3つあり
SK-10	SB-02 北側	不整形 円形	90×80×20		柱穴
SK-11	SB-02 北側	不整形 円形	90×70×30		柱穴あり
SK-12	SB-02 東側	不整形 円形	90×60×50		
SK-13	東側	楕円形	80×60×40		柱穴あり

第6調査区

遺構の名称②	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-01	SI-07 東側	方形	110×70×40		
SK-02	SI-07 西側	円形	120×120×20		
SK-03	SI-01 西側	楕円形	120×60×40		
SK-04	SI-01 東側	円形	110×110×65		

第7調査区

遺構の名称⑤	位置	平面形状	規格 (cm)	出土遺物	備考
SK-01	SI-06 東側	不整形 方形	170×105×70		
SK-02	SI-06 内	不整形 方形	160×105×40		貯蔵穴?
SK-03	SB-15 内	不整形 円形	155×130×35		
SK-04	SB-12 内	不整形 円形	135×130×40		柱穴あり
SK-05	SI-19 内	方形	155×140×30		
SK-06	SI-29 内	不整形 楕円形	220×130×45		柱穴あり

(10) 石製品、鉄製品一覽表

(10) 石製品、鉄製品一覽表

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
3	磨石	第1号竪穴住居址	半円形	4.5×3.5×2.0	片麻岩	
4	磨石	第1号竪穴住居址	楕円形	6.8×5.0×3.4	頁岩	
5	不明鉄片	第1号竪穴住居址	釘状	3.5×0.6		
6	不明鉄片	第1号竪穴住居址	釘状	5.5×0.3		
7	不明鉄片	第1号竪穴住居址	釘状	6.0×0.3		
8	不明鉄片	第1号竪穴住居址	釘状	3.2×0.4		
17	磨石	第2号竪穴住居址	楕円形	5.9×4.8×3.5	硬砂岩	
18	紡錘車	第2号竪穴住居址	円板	上縁径4.5 孔径1.0 下縁径5.0	頁岩	
10	鉄器					
	1.鉄滓	第3号竪穴住居址				
23		第4号竪穴住居址		6.0×5.4×1.5	ロ一セキ	
24	不明石斧	第4号竪穴住居址		5.8×4.5×1.2	珪岩	
25	石片	第4号竪穴住居址		3.8×2.3×0.5	チャート	
26	石片	第4号竪穴住居址		5.0×1.8×0.5	滑石	
27	磨石	第4号竪穴住居址	不整形楕円形	9.0-5.5×5.0		
28	磨石	第4号竪穴住居址	楕円形	5.5×4.0×3.1	硬質砂岩	1/2
9	磨石	第4号竪穴住居址	不整形方形	11.5×7.5×4.0	粘板岩	
10	砥石片	第4号竪穴住居址		4.0×4.5×3.0	泥岩	
11	石片	第4号竪穴住居址		5.8×1.5×0.4	滑石	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (直径×厚度×厚さ)	石質	備考
24	石斧片	第5号竪穴住居址		9.5×4.5×1.8	粘板岩	
25	磨石	第5号竪穴住居址	楕円形	7.5×5.7×4.5	石灰岩	
26	磨石片	第5号竪穴住居址		4.8×3.8×3.5	頁岩	
27	磨石	第5号竪穴住居址	楕円形	4.5×4.0×30	頁岩	
28	磨石	第5号竪穴住居址	楕円形	2.5×3.2×2.0		
29	磨石	第5号竪穴住居址	楕円形	2.4×4.5×1.3	粘板岩	
30	磨石片	第5号竪穴住居址		10.5×6.0×2.5	粘板岩	
31	磨石	第5号竪穴住居址	不整形方形	4.0×4.0×3.0	砂岩	
32	磨石片	第5号竪穴住居址		3.8×5.6×3.4	花崗岩	
8	敲石	第6号竪穴住居址	不整形楕円形	9.7×6.7×4.5	粘板岩	
9	磨石	第6号竪穴住居址	半円形	5.0×4.5×4.0	石灰岩	
10	磨石片	第6号竪穴住居址		4.5×4.8×2.5	粘板岩	
11	磨石片	第6号竪穴住居址		5.0×3.5×2.5	砂岩	
19	管玉	第7号竪穴住居址	円筒状	0.5×2.0 孔径0.2	緑泥片岩	
20	紡錘車	第6号竪穴住居址	円板状	4.1×3.8×1.2	粘板岩	
21	敲石片	第6号竪穴住居址		8.5×5.1×4.5	砂岩	
22	磨石片	第7号竪穴住居址		7.5×3.5×5.5	頁岩	
23	磨石	第7号竪穴住居址	不整形円形	5.9×5.5×3.0	集塊岩	
24	磨石	第7号竪穴住居址	楕円形	4.5×4.2×2.5	玄武岩	
25	磨石片	第7号竪穴住居址		4.5×4.5×3.0	粘板岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
26	磨石	第7号竪穴住居址	不整形円形	4.6×3.0×2.4	頁岩	
27	磨石片	第7号竪穴住居址		3.0×2.5×2.0	石灰岩	
28	磨石片	第7号竪穴住居址		2.5×3.8×2.0	集塊岩	
29	磨石片	第7号竪穴住居址		6.5(3)4.0×1.8	砂岩	
30	磨石	第7号竪穴住居址	楕円形	10.8×6.5×4.5	緑色凝灰岩	
31	磨石片	第7号竪穴住居址		15.5×4.0×1.0	粘板岩	
32	磨石	第7号竪穴住居址		8.5×3.5×3.0	石灰岩	
33	磨石	第7号竪穴住居址	円形	3.5×2.8×2.0	メノウ	
34	磨石	第7号竪穴住居址	楕円形	2.8×2.8×2.0	赤石	
35	磨石	第7号竪穴住居址	楕円形	4.3×3.4×2.2	砂岩	
36	メノウ石片	第7号竪穴住居址		3.3×2.5×1.5	メノウ	
37	軽石	第7号竪穴住居址		6.0×5.0×3.2	軽石	
12	紡錘車	第9号竪穴住居址	円板状	4.0×4.0×1.2 径孔7.0	滑石	
13	有孔円板	第9号竪穴住居址		2.0×2.0×0.2	滑石	
14	白玉	第9号竪穴住居址		1.0×1.0×0.3	滑石	
15	白玉	第9号竪穴住居址		1.0×0.8×0.3	滑石	
16	石片	第9号竪穴住居址				
17	鉄器					
	1.刀子	第9号竪穴住居址	棒状	17.0×1.7×1.2		
4	石製模造刺	第10号竪穴住居址		5.3×2.3×0.5	滑石	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	规格(cm) (直径×短径×厚さ)	石質	備考
5	石製模造剣	第10号壑穴住居址		4.0×1.2×0.5	滑石	
6	石製模造剣	第10号壑穴住居址		3.5×1.2×0.3	滑石	
7	石斧	第10号壑穴住居址	楕円形	9.0×2.9×1.8	頁岩	
8	磨石	第10号壑穴住居址	楕円形	9.5×5.5×2.6	石灰岩	
9	鉄器					
	1.刀子片	第10号壑穴住居址		9.0×2.5×0.4		
13	曲玉	第11号壑穴住居址		3.5×1.2×1.0 孔径0.25	緑泥片岩	
14	石製模造剣	第11号壑穴住居址		5.7×3.2×0.4 孔径0.2	滑石	
15	石製模造剣	第11号壑穴住居址		4.0×2.2×0.6	滑石	
16	石製模造剣	第11号壑穴住居址		3.4×2.0×0.4 孔径0.2	滑石	
17	有孔円板	第11号壑穴住居址		1.5×1.8×0.3 孔径0.2	滑石	
18	白玉	第11号壑穴住居址		0.8×0.8×0.3 孔径0.3	滑石	
19	白玉	第11号壑穴住居址		0.8×0.8×0.3 孔径0.4	滑石	
20	磨石	第11号壑穴住居址	楕円形	8.4×6.5×3*5	粘板岩	
21	石斧	第11号壑穴住居址	不整形方形	20.5×7.0×3.8	頁岩	
22	磨石	第11号壑穴住居址	楕円形	8.5×7.6×3.7	砂岩	
23	磨石	第11号壑穴住居址		8.0×4.0×3.5	硬砂岩	
24	磨石	第11号壑穴住居址		6.1×3.4×2.4	砂岩	
25	磨石	第11号壑穴住居址	楕円形	8.2×5.0×2.5	砂岩	
26	磨石片	第11号壑穴住居址		5.0×4.0×4.0	砂岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
27	磨石	第11号竪穴住居址	楕円形	5.4×5.7×3.0	砂岩	
28	磨石片	第11号竪穴住居址		4.0×3.5×2.5	砂岩	
29	磨石	第11号竪穴住居址	円形	4.2×2.6×2.2	粘板石	
30	磨石片	第11号竪穴住居址		3.2×2.4×1.6	硬砂岩	
31	敲石片	第11号竪穴住居址		6.0×6.5×3.5	砂岩	
32	敲石片	第11号竪穴住居址		7.5×4.5×2.5	砂岩	
33	軽石	第11号竪穴住居址	半円形	5.0×5.0×2.8	軽石	
34	メノウ原石	第11号竪穴住居址		7.2×5.5×3.5	メノウ	
35	敲石片	第11号竪穴住居址		9.5×8.0×4.5	砂岩	
36	石核	第11号竪穴住居址		9.5×4.5×2.0	滑石	
37	滑石碎片16ヶ					
6	磨石	第12号竪穴住居址	楕円形	7.0×5.9×3.5	泥岩	
7	磨石片	第12号竪穴住居址		4.9×3.8×3.0	集塊岩	
8	磨石	第12号竪穴住居址	楕円形	5.6×3.4×3.5	粘板岩	
9	磨石片	第12号竪穴住居址		4.3×1.5×2.0	石灰岩	
10	磨石	第12号竪穴住居址		4.8×3.0×3.0	粘板岩	
11	石片	第12号竪穴住居址		5.5×2.8×2.0	滑石	
12	磨石片	第12号竪穴住居址	4.0×2.4×1.3	メノウ		
5	敲石	第13号竪穴住居址	楕円形 1/2	8.8×5.1×2.5	砂岩	
6	磨石	第13号竪穴住居址		6.7×4.0×3.0	粘板岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長径×短径×厚さ)	石質	備考
7	磨石	第13号竪穴住居址		4.5×3.5×3.1	斑れい岩	
8	磨石片	第13号竪穴住居址		4.3×4.5×1.3	石灰岩	
6	磨石	第15号竪穴住居址	不正形方形	6.5×4.5×30	砂岩	
7	磨石片	第15号竪穴住居址		4.0×4.0×2.3	砂岩	
8	磨石	第15号竪穴住居址	半円形	4.0×3.0×2.5	粘板岩	
9	鉄器	第15号竪穴住居址				
	1.不明の鉄片	第15号竪穴住居址		5.6×1.5×0.4		
	2.不明の鉄片	第15号竪穴住居址		7.1×1.0×0.9		
7	磨石	第16号竪穴住居址	不整形円形	6.3×5.5×1.1	砂岩	
8	磨石片	第16号竪穴住居址		5.3×1.7×1.3		
9	石核	第16号竪穴住居址		8.5×5.3×2.3	滑石	
8	磨石片	第17号竪穴住居址		4.2×3.0×2.9	粘板岩	
4	敲石	第18号竪穴住居址	不整形長方形	11.8×9.1×2.5	砂岩	
8	磨石	第19号竪穴住居址	不整形長方形	7.5×6.0×3.4	硬砂岩	
11	石斧	第20号竪穴住居址		6.0×3.5×1.0	粘板岩	
12	磨石	第20号竪穴住居址	槽円形	8.2×4.1×2.5	メノウ	
13	磨石	第20号竪穴住居址		5.1×5.3×3.5	石灰岩	
6	磨石	第22号竪穴住居址		4.2×3.5×3.8	砂岩	
7	磨石	第22号竪穴住居址	不整形円形	5.2×3.5×3.4	石灰岩	
8	磨石	第22号竪穴住居址	半円形	6.3×2.8×1.8		

番号	遺物名称(図)	位置	平面状	規格(cm) (長径×短径×厚さ)	石質	備考
9	磨石	第22号竪穴住居址	半円形	3.0×3.0×1.4	石灰岩	
10	鉄器					
	1.不明の鉄器	第22号竪穴住居址	棒状	7.2×1.1×0.6		
4	不明石片	第23号竪穴住居址		11.0×6.3×2.2	滑石	
5	磨石	第23号竪穴住居址		3.2×3.0×3.5	石灰岩	
10	砥石	第25号竪穴住居址	方形	4.3×2.6×2.9	砂岩	
11	磨石	第25号竪穴住居址		8.1×4.5×3.2	粘板岩	
12	磨石	第25号竪穴住居址	不整形三角形	6.5×5.0×2.3	砂岩	
13	磨石	第25号竪穴住居址	不整形円形	4.1×3.5×2.2	不明	
14	磨石片	第25号竪穴住居址		6.6×4.0×2.2	粘板岩	
15	磨石片	第25号竪穴住居址		4.4×3.3×2.1	砂岩	
16	石核	第25号竪穴住居址		7.0×7.5×2.5	滑石	
12	磨石片	第27号竪穴住居址		3.8×3.0×3.0	頁岩	
13	磨石片	第27号竪穴住居址		5.2×5.2×4.5	花崗岩	
14	磨石片	第27号竪穴住居址		5.5×2.8×1.5	粘板岩	
7	敲石	第28号竪穴住居址	楕円形	8.2×6.5×3.0	砂岩	
9	紡錘車	第29号竪穴住居址	円板状	4.2×4.2×2.0 孔径0.6	頁岩	
10	磨石	第29号竪穴住居址		4.8×3.8×2.0	頁岩	
4	磨石	第31号竪穴住居址	楕円形	5.0×3.5×2.0	砂岩	
4	磨石	第33号竪穴住居址	楕円形	6.3×3.8×2.4	石灰岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
5	磨石片	第33号竪穴住居址		4.5×4.2×2.5	頁岩	
15	磨石	第34号竪穴住居址	楕円形	10.5×5.0×2.5	砂岩	
16	磨石	第34号竪穴住居址	不整形円形	3.6×3.0×2.2	石灰岩	
17	敲石片	第34号竪穴住居址		5.5×3.5×2.0	粘板石	
6	磨石	第36号竪穴住居址	不整形楕円形	4.8×3.2×2.4	砂岩	
7	磨石片	第37号竪穴住居址		5.6×3.0×2.5	石灰岩	
8	磨石	第37号竪穴住居址	楕円形	9.2×5.5×3.1	砂岩	
9	磨石	第37号竪穴住居址	不整形方形	6.0×4.7×2.5	砂岩	
10	敲石	第37号竪穴住居址	不整形方形	11.0×7.5×6.0	砂岩	
11	鉄器					
	1.刀子	第37号竪穴住居址		10.9×1.9×0.5		
	2.不明の鉄器	第37号竪穴住居址		7.2×1.9×0.5		
6	曲玉	第38号竪穴住居址		3.0×1.1×0.9 孔径0.2~0.3	蛇紋石	
5	磨石	第40号竪穴住居址	楕円形	6.5×9.0×3.9	れき岩	
6	磨石	第40号竪穴住居址		6.5×3.5×3.3	れき岩	
6	砥石片	第46号竪穴住居址		3.0×3.5×2.7	泥岩	
7	軽石	第46号竪穴住居址		4.1×5.3×2.8	軽石	
19	紡錘車	第47号竪穴住居址	円板状	4.4×4.4×1.2	滑石	
20	磨石	第47号竪穴住居址		8.0×6.0×3.6	火成岩質	
6	不明石片	第50号竪穴住居址		7.5×2.0×2.8	泥岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
7	磨石	第50号竪穴住居址	不整形楕円形	6.0×5.0×2.5	砂岩	
8	磨石	第50号竪穴住居址	不整形楕円形	5.5×4.5×3.3	砂岩	
9	磨石片	第50号竪穴住居址		5.2×4.0×3.8	石灰岩	
11	磨石	第51号竪穴住居址	不整形楕円形	5.2×5.5×3.7	緑泥片岩	
12	石核	第51号竪穴住居址		10.5×6.5×2.7	滑石	

第2調査区

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
4	石斧	第1号掘立住居址		6.2×5.0×2.0	緑泥片岩	
5	磨石	第1号掘立住居址	不整形楕円形	9.0×7.0×3.2	集塊岩	
6	磨石	第1号掘立住居址	不整形楕円形	8.1×5.5×3.0	砂岩	
7	磨石片	第1号掘立住居址		6.0×4.0×3.1	砂岩	
8	不明石片	第1号掘立住居址		11.3×6.0×2.0	雲母片岩	
9	不明石片	第1号掘立住居址		9.5×7.5×2.1	雲母片岩	
10	不明石片	第1号掘立住居址		10.5×6.0×1.2	雲母片岩	
11	磨石	第4号掘立住居址	不整形円形	8.0×5.1×4.1	粘板岩	
12	磨石	第4号掘立住居址	不整形楕円形	9.5×5.5×2.5	粘板岩	
13	不明石片	第4号掘立住居址		4.8×2.2×2.2	滑石	
14	不明石片	第4号掘立住居址		10.0×6.2×1.5	雲母片岩	
15	不明石片	第4号掘立住居址		12.0×8.0×2.0	雲母片岩	
16	石核	第4号掘立住居址		10.2×4.0×1.5	口一七キ	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
17	鉄器					
	1.鉄滓	第4号掘立住居址		4.9×4.3×1.7		
6	砥石	第3号土壌	不整形長方形	6.0×2.5×2.3	凝灰岩	
7	鉄器					
	1.鉄滓	第3号土壌		5.3×2.6×1.8		

第3調査区

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
8	磨石	第2号竪穴住居址	不整形楕円形	8.0×5.0×2.0	砂岩	
9	石核	第2号竪穴住居址		9.5×4.5×1.6	滑石	
7	磨石	第4号竪穴住居址	不整形楕円形	8.6×5.3×2.4	メノウ	
8	石臼片	第4号竪穴住居址		5.6×6.2×3.2	安山岩	
9	磨石	第4号竪穴住居址		5.5×4.4×5.2	安山岩	
10	磨石	第4号竪穴住居址		7.8×4.0×2.0	安山岩	
6	磨石片	第1号掘立住居址		8.5×5.1×1.5	集塊岩	
7	石核	第1号掘立住居址		12.0×5.6×3.7	滑石	
4	不明石片	第2号掘立住居址		13.0×7.5×1.2	雲母片岩	
5	不明石片	第2号掘立住居址		11.5×8.5×1.8	雲母片岩	

第4調査区

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
10	磨石	南造成面		6.8×4.5×2.3	砂岩	

第5調査区

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×短径×厚さ)	石質	備考
8	磨石片	第1号竪穴住居址		4.5×3.5×2.5	凝灰岩	
9	鉄滓	第1号竪穴住居址		5.0×2.9×3.0		
4	磨石	第2号竪穴住居址		8.8×6.2×5.0	砂岩	
5	磨石	第2号竪穴住居址		4.5×6.0×3.8	砂岩	
6	敲石	第2号竪穴住居址		8.1×6.5×1.8	頁岩	
3	磨石	第5号竪穴住居址		3.5×3.6×2.5	石灰岩	
4	不明石	第5号竪穴住居址		9.5×4.5×2.0	滑石	

第6調査区

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×短径×厚さ)	石質	備考
11	紡錘車片	第1号竪穴住居址		5.0×4.0×1.2	滑石	
12	磨石	第1号竪穴住居址	不整形円形	6.2×3.6×3.0	砂岩	
13	磨石	第1号竪穴住居址	楕円形	4.9×3.7×2.0	粘板岩	
14	磨石片	第1号竪穴住居址		8.6×6.0×2.5	砂岩	
15	磨石片	第1号竪穴住居址		5.0×5.0×2.9	花崗岩	
16	不明石片	第1号竪穴住居址		6.8×5.0×1.5	雲母片岩	
17	不明石片	第1号竪穴住居址		7.5×7.2×1.0	砂岩	
18	石核	第1号竪穴住居址		10.2×4.0×3.2	滑石	
8	磨石	第2号竪穴住居址	不整形楕円形	8.0×5.2×3.2	メノウ	
9	磨石	第2号竪穴住居址	楕円形	3.8×5.0×3.2	砂岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長径×短径×厚さ)	石質	備考
10	白玉	第2号竪穴住居址		1.2×1.2×0.6	滑石	
8	石製模造剣	第3号竪穴住居址		5.0×3.2×1.2	滑石	
9	有孔円板	第3号竪穴住居址		4.5×4.0×0.4 孔径0.25	滑石	
10	有孔円板	第3号竪穴住居址		3.0×3.0×0.3 孔径0.25	滑石	
11	有孔円板	第3号竪穴住居址		2.3×2.3×0.2 孔径0.3	滑石	
12	磨石	第3号竪穴住居址		5.0×6.0×4.6	砂岩	
13	磨石	第3号竪穴住居址	楕円形	8.0×6.0×3.6	砂岩	
14	磨石	第3号竪穴住居址		6.5×6.3×2.0	砂岩	
15	磨石	第3号竪穴住居址		9.0×4.0×4.0	砂岩	
16	磨石	第3号竪穴住居址	楕円形 $\frac{1}{2}$	5.0×3.0×2.0	れき岩	
8	磨石	第4号竪穴住居址	不整形楕円形	5.6×4.8×3.0	砂岩	
5	磨石	第5号竪穴住居址	楕円形	6.5×5.0×2.0	ヒン岩	
8	磨石	第6号竪穴住居址		7.5×4.8×3.2	砂岩	
12	石製模造剣	第7号竪穴住居址		5.5×2.3×0.6 孔径0.2	滑石	
13	石製模造剣	第7号竪穴住居址		4.5×1.5×0.5 孔径0.2	滑石	
14	石製模造剣	第7号竪穴住居址		3.3×1.3×0.2	滑石	
15	石製模造剣	第7号竪穴住居址		4.0×1.5×0.3 孔径0.2	滑石	
16	石製模造剣	第7号竪穴住居址		4.5×2.5×0.8	滑石	
17	石製模造剣	第7号竪穴住居址		3.8×2.0×0.4	滑石	
18	石製模造剣	第7号竪穴住居址		3.3×2.0×0.3	滑石	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長径×短径×厚さ)	石質	備考
19	石製模造剣	第7号竪穴住居址		4.8×2.4×0.3	滑石	
20	石製鏡	第7号竪穴住居址		5.8×5.5×1.8	滑石	
21	有孔円板	第7号竪穴住居址		1.8×1.8×0.2 孔径0.2	滑石	
22	有孔円板	第7号竪穴住居址		3.2×3.0×0.4 孔径0.3	滑石	
23	有孔円板	第7号竪穴住居址		2.8×3.0×0.3 孔径0.2	滑石	
24	有孔円板	第7号竪穴住居址		1.7×0.8×0.2 孔径0.2	滑石	
25	有孔円板	第7号竪穴住居址		2.8×3.0×0.3 孔径0.2	滑石	
26	磨石	第7号竪穴住居址	楕円形	7.0×3.5×3.0	花崗岩	
27	敲石	第7号竪穴住居址	不整形円形	8.2×6.5×5.0	泥岩	
28	磨石	第7号竪穴住居址		6.8×3.2×2.7	メノウ	
20	磨石	第7号竪穴住居址		11.5×2.5×3.8	れき岩	
9	石製模造剣	第8号竪穴住居址		8.0×2.4×0.4	滑石	
10	石製模造剣	第8号竪穴住居址		3.6×1.4×0.3	滑石	
11	有孔円板	第8号竪穴住居址		3.4×3.2×0.5 孔径0.2	滑石	
12	有孔円板	第8号竪穴住居址		2.4×2.2×0.3 孔径0.2	滑石	
13	有孔円板	第8号竪穴住居址		2.5×2.3×0.3	滑石	
14	有孔円板	第8号竪穴住居址		2.3×2.0×0.2 孔径0.25	滑石	
15	有孔円板	第8号竪穴住居址		2.2×1.6×0.3 孔径0.3	滑石	
16	磨石	第8号竪穴住居址	不整形楕円形	8.5×7.0×4.5	砂岩	
17	敲石	第8号竪穴住居址		6.5×8.0×3.8	山岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面 形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
18	效石	第8号竪穴 住居址		9.5×5.0×5.0	砂岩	
19	效石	第8号竪穴 住居址		9.0×5.8×4.5	花崗岩	
20	磨石	第8号竪穴 住居址		7.5×5.3×3.5	砂岩	
21	磨石	第8号竪穴 住居址		5.5×5.5×4.1	頁岩	
22	磨石	第8号竪穴 住居址		5.0×7.0×3.8	れき岩	
23	磨石	第8号竪穴 住居址		7.1×4.5×3.5	火成岩	
24	磨石	第8号竪穴 住居址		6.5×4.2×2.8	砂岩	
25	磨石	第8号竪穴 住居址		6.5×3.0×3.5	れき岩	
26	磨石	第8号竪穴 住居址		5.2×5.0×2.5	硬砂岩	
27	磨石	第8号竪穴 住居址		4.8×5.0×2.0	砂岩	
28	磨石	第8号竪穴 住居址		8.0×5.0×2.1	粘板岩	
29	磨石	第8号竪穴 住居址		6.0×4.5×2.5	粘板岩	
30	砥石	第8号竪穴 住居址	不整形長方 形	6.2×3.0×1.4	粘岩板	
31	石核	第8号竪穴 住居址		9.5×5.5×3.3	滑石	
32	鉄器	第8号竪穴 住居址				
	1査滓	第8号竪穴 住居址		6.9×4.6×2.7		
4	磨石	第10号掘立 住居址		4.5×66.0×4.5	片麻岩	
7	磨石	第11号掘立 住居址		6.0×6.0×1.5	滑石	
4	紡錘車	溝状遺構		4.0×4.0×1.5	滑石	
5	敲石	溝状遺構		4.5×4.8×4.3	集塊岩	
6	磨石	溝状遺構		4.3×4.7×3.0	凝灰岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (直径×短径×厚さ)	石質	備考
7	磨石	溝状遺構		11.0×6.0×1.8	粘板岩	
8	磨石	溝状遺構		10.3×5.×2.0	砂岩	
9	鉄器					
	1古銭	溝状遺構				寛永通宝

第7調査区

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (直径×短径×厚さ)	石質	備考
2	不明の石製品	第1号竪穴住居址		2.4×2.4×0.6	火成岩	
6	石製模造剣	第3号竪穴住居址		5.5×1.8×0.7	滑石	
7	石製模造剣	第3号竪穴住居址		5.0×1.5×0.9	滑石	
8	石製模造剣	第3号竪穴住居址		5.3×1.5×0.7	滑石	
9	石製模造剣	第3号竪穴住居址		4.7×2.3×0.6	滑石	
10	石製模造剣	第3号竪穴住居址		3.6×2.9×0.5	滑石	
16	石製模造剣	第4号竪穴住居址		5.3×2.2×1.2 孔径1.5	滑石	
17	石製模造剣	第4号竪穴住居址		3.4×1.8×0.6	滑石	1/5残
18	有孔円板	第4号竪穴住居址		3.8×3.8×0.4 孔径0.2	滑石	
19	有孔円板	第4号竪穴住居址		2.2×1.9×0.2 孔径0.15	滑石	
20	白玉	第4号竪穴住居址		0.6×0.6×0.4 孔径0.2	滑石	
21	磨石	第4号竪穴住居址		5.9×3.1×3.4	花崗岩	
22	磨石	第4号竪穴住居址	楕円形	11.0×4.6×3.1	砂岩	
23	磨石	第4号竪穴住居址		10.5×6.7×4.5	安山岩	
24	磨石	第4号竪穴住居址		8.5×6.3×5.1	砂岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
25	磨石	第4号竪穴住居址	楕円形	6.0×6.2×3.2	集塊岩	
26	磨石	第4号竪穴住居址		6.5×5.1×6.5	集塊岩	
27	磨石	第4号竪穴住居址		6.2×3.8×2.5	砂岩	
28	石核	第4号竪穴住居址		10.2×5.5×1.2	滑石	
29	鉄器					
1	鋸	第4号竪穴住居址	剣先状	9.5×1.6×0.8		
2	馬具	第4号竪穴住居址		4.5×5.3×1.3		
3	明の鉄片	第4号竪穴住居址		4.0×3.7×1.2		
4	不明の鉄片	第4号竪穴住居址		8.5×1.7×0.2		
5	不明の鉄片	第4号竪穴住居址		3.4×1.7×1.1		
6	不明の鉄片	第4号竪穴住居址		5.8×0.5×0.5		
8	石斧片	第5号竪穴住居址		9.0×4.5×1.1	緑泥片岩	
9	敲石	第5号竪穴住居址	不整形楕円形	8.7×5.5×4.0	粘板岩	
10	磨石	第5号竪穴住居址		7.5×4.5×4.0	粘板岩	
11	磨石	第5号竪穴住居址		7.5×3.5(3)3.2	集塊岩	
12	敲石片	第5号竪穴住居址	不整形方形	9.0×5.5×4.2	粘板岩	
13	磨石	第5号竪穴住居址		2.6×4.6×1.8	粘板岩	
14	石核	第5号竪穴住居址		13.0×10.5×4.9	滑石	
13	磨石	第6号竪穴住居址	楕円形	8.0×5.0×3.2	砂岩	
14	磨石	第6号竪穴住居址		8.5×4.2×5.7	花崗岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×高さ)	石質	備考
15	磨石	第6号竪穴住居趾		6.0×4.5×4.5	流紋岩	
16	磨石	第6号竪穴住居趾	円形	2.5×3.1×3.2	砂岩	
7	磨石	第7号竪穴住居趾		6.6×3.1×4.0	砂岩	
8	磨石	第7号竪穴住居趾		4.2×3.2×3.3	メノウ	
9	石核	第7号竪穴住居趾		8.0×4.3×1.3	滑石	
10	石核	第7号竪穴住居趾		5.5×9.0×4.5	雲母片岩	
7	石製模造剣	第8号竪穴住居趾		5.2×1.6×0.5	滑石	
8	有孔円板	第8号竪穴住居趾		2.8×2.8×0.3	滑石	
9	不明の石片	第8号竪穴住居趾		5.7×2.3×0.9	滑石	
10	磨石	第8号竪穴住居趾	不整形円形	8.1×3.7×3.7	花崗岩	
11	磨石	第8号竪穴住居趾		7.7×5.0×1.8	メノウ	
12	磨石	第8号竪穴住居趾	円形	4.1×3.0×3.0	砂岩	
13	磨石片	第8号竪穴住居趾		4.0×2.2×3.5	砂岩	
14	磨石	第8号竪穴住居趾		4.3×1.3×2.4	粘板岩	
15	敲石片	第8号竪穴住居趾		11.0×6.9×3.8	粘板岩	
16	磨石片	第8号竪穴住居趾		10.8×5.0×2.0	粘板岩	
17	磨石石	第8号竪穴住居趾		4.1×3.2×2.6	石灰岩	
18	石核	第8号竪穴住居趾		16.0×11.5×6.0	雲母片岩	
19	石核	第8号竪穴住居趾		10.0×6.8×3.2	雲母片岩	
20	石片	第8号竪穴住居趾		17、700g	滑石	

番号	遺物名称(図)	位置	平 面 状	規 格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
22	石製模造剣	第9号壑穴住居趾		7.7×3.0×1.0	滑石	
23	石製模造剣	第9号壑穴住居趾		5.9×2.9×0.8	滑石	
24	石製模造剣	第9号壑穴住居趾		5.6×2.0×0.8	滑石	
25	石製模造剣	第9号壑穴住居趾		4.1×1.5×0.5	滑石	
26	石製模造剣	第9号壑穴住居趾		3.2×1.6×0.2	滑石	
27	有孔円板	第9号壑穴住居趾		2.5×2.5×0.2 孔径0.15	滑石	
28	有孔円板	第9号壑穴住居趾		2.2×2.2×0.2 孔径0.15	滑石	
29	有孔円板	第9号壑穴住居趾		2.0×2.0×0.2 孔径0.15	滑石	
30	有孔円板	第9号壑穴住居趾		2.2×2.2×0.2 孔径0.15	滑石	
31	有孔円板	第9号壑穴住居趾		2.1×1.5×0.2 孔径0.15	滑石	
32	円板	第9号壑穴住居趾		2.6×2.6×0.2	滑石	半製品
33	円板	第9号壑穴住居趾		2.3×2.0×0.3	滑石	半製品
34	円板	第9号壑穴住居趾		2.3×2.2×0.3	滑石	半製品
35	有孔円板	第9号壑穴住居趾		3.1×3.1×0.3 孔径0.1	滑石	半製品
36	紡錘車	第9号壑穴住居趾		4.1×3.6×1.1 孔径0.7	滑石	半製品
37	曲玉	第9号壑穴住居趾		33.7×1.9×0.8	口ウ石	半製品
38	磨石	第9号壑穴住居趾		15.3×6.5×10	雲母片岩	
39	砥石	第9号壑穴住居趾		11.0×6.5×2.2	粘板岩	
40	軽石	第9号壑穴住居趾		8.0×6.0×4.1	軽石	
41	軽石	第9号壑穴住居趾		8.9×6.5×4.5	軽石	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	规格(cm) (長×幅×厚)	石質	備考
42	磨石	第9号竪穴住居址		4.2×5.0×3.9	粘板岩	
43	磨石	第9号竪穴住居址		6.9×4.5×4.1	硬砂岩	
44	磨石	第9号竪穴住居址		4.8×2.5×3.1	砂岩	
45	磨石	第9号竪穴住居址		5.4×1.5×2.5	砂岩	
46	鉄器					
	1.刀子	第9号竪穴住居址		13.2×1.5×0.5		
	2.不明鉄片	第9号竪穴住居址		4.7×2.0×0.5		
15	石製模造剣	第16号竪穴住居址		5.0×2.1×0.4 孔径0.1	滑石	
16	磨石	第16号竪穴住居址	楕円形	9.0×5.6×3.0	花崗岩	
17	磨石	第16号竪穴住居址	楕円形	7.2×5.6×1.5	硬砂岩	
18	磨石	第16号竪穴住居址	不整形楕円形	7.「4.2」2.1	集塊岩	
19	磨石	第16号竪穴住居址		6.2×3.2×2.9		
20	砥石	第16号竪穴住居址		5.2×3.2×2.4	泥岩	
21	砥石	第16号竪穴住居址		8.2×2.9×2.4	泥岩	
22	石核	第16号竪穴住居址		8.0×5.0×2.6	滑石	
23	石核	第16号竪穴住居址		7.9×5.2×2.5	滑石	
24	石核	第16号竪穴住居址		5.8×4.5×1.5	滑石	
6	石製模造剣	第17号竪穴住居址		6.5×1.4×0.5 孔径0.15	滑石	
7	石製模造剣	第17号竪穴住居址		3.4×1.8×0.5 孔径0.15	滑石	
8	曲玉片	第17号竪穴住居址		2.6×1.2×0.2	滑石	1/2残

番号	遺物名称(図)	位置	平面状	規格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
9	有孔円板	第17号竪穴住居址		2.5×2.7×0.4 孔径0.2	滑石	
10	磨石	第17号竪穴住居址		5.4×4.6×2.5	流紋岩	
11	磨石	第17号竪穴住居址	不整形楕円形	7.4×4.3×2.4	メノウ	
12	砥石	第17号竪穴住居址				
14	石製鏡	第18号竪穴住居址	紐あり・鏡面平坦	6.6×6.5×0.7	滑石	
15	有孔円板	第18号竪穴住居址		2.2×2.2×0.2 孔径0.15	滑石	
16	有孔円板	第18号竪穴住居址		1.8×2.1×0.3 孔径0.15	滑石	
17	円板	第18号竪穴住居址		2.9×2.7(3)0.35	滑石	両面磨きがかかる
18	円板	第18号竪穴住居址		2.9×2.8×0.7	滑石	半製品
19	円板	第18号竪穴住居址		3.1×3.0×0.5	滑石	半製品
20	石製模造剣	第18号竪穴住居址		11.5×2.2×1.0 孔径0.2	滑石	半製品
21	石製模造剣	第18号竪穴住居址		3.8×1.6×0.3 孔径0.15	滑石	
22	石製模造剣	第18号竪穴住居址		3.7×1.5×0.2 孔径0.15	滑石	
23	石製模造剣	第18号竪穴住居址		3.0×1.7×0.2 孔径0.15	滑石	
24	石製模造剣	第18号竪穴住居址		4.5×1.3×0.3 孔径0.15	滑石	
25	石製模造剣	第18号竪穴住居址		5.0×1.9×0.5	千枚岩	
26	白玉	第18号竪穴住居址		0.9×0.9×0.4 孔径0.15	滑石	
27	不明石	第18号竪穴住居址		1.3×1.1×0.3 孔径0.15	滑石	
28	白玉	第18号竪穴住居址		0.4×0.4×0.2 孔径0.15	滑石	
29	磨石	第18号竪穴住居址	円形	7.6×2.4(3)2.4	砂岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	规格(cm) (長さ×宽度×高さ)	石質	備考
31	金属器					
1	耳環	第18号竪穴住居址		2.3×2.1×0.65		銅製
2	不明鉄片	第18号竪穴住居址		3.6×1.7×0.4		
3	不明鉄片	第18号竪穴住居址		7.7×1.0×1.9		
1	有孔円板	第19号竪穴住居址		3.1×2.1×0.4 孔径0.12	滑石	
2	有孔円板	第19号竪穴住居址		2.3×1.8×0.2 孔径0.13	滑石	
3	有孔円板	第19号竪穴住居址		2.2×2.1×0.2 孔径0.15	滑石	
4	有孔円板	第19号竪穴住居址		2.7×2.7×0.3	滑石	
5	曲玉	第19号竪穴住居址		3.7×1.5×0.9	滑石	
6	白玉	第19号竪穴住居址		0.9×0.8×0.3 孔径0.1	滑石	
7	白玉	第19号竪穴住居址		0.6×0.5×0.3 孔径0.11	滑石	
8	白玉	第19号竪穴住居址		0.7×0.7×0.25 孔径0.1	滑石	
9	石核	第19号竪穴住居址		9.5×2.2×1.9	滑石	
11	有孔円板	第20号竪穴住居址		3.2×2.9×0.4 孔径0.15	滑石	
12	有孔円板	第20号竪穴住居址		2.0×2.0×0.3 孔径0.12	滑石	
13	環状円板	第20号竪穴住居址		3.5×3.7×0.5 孔径1.8	滑石	
14	磨石	第20号竪穴住居址		5.0×4.5×3.0	砂岩	
15	磨石	第20号竪穴住居址		6.2×6.5×2.5	砂岩	
16	磨石	第20号竪穴住居址		3.5×3.0×3.5	砂岩	
17	紡錘車	第20号竪穴住居址		5.9×5.5×1.3	泥岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
18	不明の鉄片	第20号竪穴住居址		5.6×3.6×0.5		
10	石製模造剣	第21号竪穴住居址		5.0×1.9×0.6	滑石	
11	石製模造剣	第21号竪穴住居址		3.9×1.9×0.2 孔径0.12	滑石	
12	石製模造剣	第21号竪穴住居址		3.5×1.2×0.2 孔径0.12	滑石	
13	石製模造剣	第21号竪穴住居址		3.5×1.7×0.5	滑石	
14	有孔円板	第21号竪穴住居址		2.0×2.3×0.3 孔径0.1	滑石	
15	曲玉	第21号竪穴住居址		1.9×0.9×0.2 孔径0.2	滑石	
16	白玉	第21号竪穴住居址		0.4×0.4×0.3 孔径0.18	滑石	
17	石核	第21号竪穴住居址		3.9×2.8×0.6	滑石	
4	白玉	第22号竪穴住居址		0.6×0.6×0.3 孔径0.1	滑石	
5	砥石	第22号竪穴住居址		3.9×2.0×1.1	白色凝灰岩	
6	磨石	第22号竪穴住居址		5.8×3.2×1.8	れき岩	
7	石製模造剣	第22号竪穴住居址		2.3×1.2×0.1 孔径0.2	滑石	
8	石製模造剣	第22号竪穴住居址		1.7×1.1×0.2 孔径0.11	滑石	
9	軽石	第22号竪穴住居址		6.2×3.3×2.5	軽石	
10	磨石	第22号竪穴住居址		4.1×3.6×2.2	砂岩	
13	石製模造剣	第23号竪穴住居址		4.6×1.9×0.3 孔径0.1	滑石	
14	石製模造剣	第23号竪穴住居址		4.4×1.6×0.5	滑石	
15	石製模造剣	第23号竪穴住居址		3.6×1.3×0.5 孔径0.1	滑石	
16	有孔円板	第23号竪穴住居址		2.4×2.9×0.4 孔径0.1	滑石	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
17	紡錘車	第23号竪穴住居址		4.5×4.5×1.2 孔徑0.6	頁岩	
18	磨石	第23号竪穴住居址		7.5×5.8×3.2	れき岩	
19	磨石	第23号竪穴住居址		5.5×4.8×2.0	砂岩	
20	磨石	第23号竪穴住居址		6.3×3.1×2.2	れき岩	
21	磨石	第23号竪穴住居址		5.0×3.9×3.1	泥岩	
22	磨石	第23号竪穴住居址		4.1×6.2×2.8	石灰岩	
23	磨石	第23号竪穴住居址		5.6×4.7×4.2	砂岩	
24	磨石	第23号竪穴住居址		6.6×4.7×2.6	硬砂岩	
25	磨石	第23号竪穴住居址		10.2×4.0×3.2	集塊岩	
26	磨石	第23号竪穴住居址		7.7×4.8×3.0	砂岩	
27	磨石	第23号竪穴住居址		3.6×3.5×2.5	れき岩	
28	石核	第23号竪穴住居址		8.6×9.9×2.0	滑石	
29	石核	第23号竪穴住居址		8.0×5.5×2.5	滑石	
12	磨石	第25号竪穴住居址		6.5×5.5×2.5	れき岩	
13	磨石	第25号竪穴住居址		9.0×3.6×2.9	れき岩	
14	磨石	第25号竪穴住居址		6.9×4.7×2.5	集塊岩	
15	磨石	第25号竪穴住居址				
16	磨石	第25号竪穴住居址		4.9×4.0×1.4	粘板岩	
17	石核	第25号竪穴住居址		5.0×4.4×1.5	滑石	
18	石核	第25号竪穴住居址		4.9×2.6×1.0	緑泥岩	

番号	遺物名称(図)	位置	平 面 状	規 格(cm) (長さ×幅×厚さ)	石質	備考
6	磨石	第26号竪穴住居址		6.3×4.0×3.2	石灰岩	
7	磨石	第26号竪穴住居址		6.8×4.3×2.8	砂岩	
8	磨石	第26号竪穴住居址		5.6×3.7×3.5	れき岩	
9	石核	第26号竪穴住居址		9.6×6.6×1.5	滑石	
10	石核	第26号竪穴住居址		6.4×3.2×0.4	石灰石	
10	敲石	第28号竪穴住居址		8.0×4.8×5.0	砂岩	
11	石核	第28号竪穴住居址		8.0×6.5×1.6	滑石	
12	石核	第28号竪穴住居址		7.5×5.5×1.9	滑石	
13	石核	第28号竪穴住居址		6.0×4.8×2.5	滑石	
14	石核	第28号竪穴住居址		7.0×4.8×3.4	滑石	
4	石製模造剣	第29号竪穴住居址		6.1×2.1×1.0 孔径0.1	滑石	
5	石製模造剣	第29号竪穴住居址		6.1×2.1×1.0 孔径0.1	滑石	
5	石製模造剣	第29号竪穴住居址		4.8×1.8×1.5 孔径0.11	滑石	
6	石製模造剣	第29号竪穴住居址		4.0×1.3×0.2 孔径0.11	滑石	
7	石製模造剣	第29号竪穴住居址		5.0×2.0×0.5	滑石	
8	石製模造剣	第29号竪穴住居址		4.2×1.7×0.2	滑石	
9	石製模造剣	第29号竪穴住居址		5.4×2.0×0.5	滑石	
10	石製模造剣	第29号竪穴住居址		2.7×1.1×0.2	滑石	
11	石製模造剣	第29号竪穴住居址				
12	有孔円板	第29号竪穴住居址		3.3×3.3×0.2 孔径0.1	滑石	

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (長径×短径×厚さ)	石質	備考
13	円板	第29号竪穴住居址		3.5×3.0×0.3	滑石	
14	曲玉	第29号竪穴住居址		2.9×1.4×0.3 孔径0.1	滑石	
15	曲玉	第29号竪穴住居址		3.4×1.8×0.3	滑石	
16	砥石	第29号竪穴住居址		6.5×1.3×1.0 孔径3.0	凝灰炭	
17	白玉	第29号竪穴住居址		0.5×0.5×0.35	凝灰炭	
18	磨石	第29号竪穴住居址		6.5×4.6×3.1	石灰炭	
19	不明石片	第29号竪穴住居址		19.5×10.0×1.5	雲母片岩	
20	石核	第29号竪穴住居址		8.7×5.0×2.5	滑石	
21	不明鉄片	第29号竪穴住居址		5.5×1.8×1.1		
22	不明鉄片	第29号竪穴住居址		5.3×1.3×0.9		
23	不明鉄片	第29号竪穴住居址		2.8×0.5×0.5		
10	有孔円板	第30号竪穴住居址		1.8×2.3×0.2 孔径0.1	滑石	
11	有孔円板	第30号竪穴住居址		2.4×1.4×0.2 孔径0.1	滑石	
12	白玉	第30号竪穴住居址		0.5×0.5×0.35	滑石	
13	磨石	第30号竪穴住居址		5.2×5.5×3.2	砂岩	
14	磨石片	第30号竪穴住居址		3.7×4.5×2.0	れき岩	
15	磨石	第30号竪穴住居址		9.0×6.7×5.0	砂岩	
16	磨石	第30号竪穴住居址		5.6×3.8×5.2	れき岩	
17	磨石	第30号竪穴住居址		3.9×3.8×3.2	れき岩	
18	磨石	第30号竪穴住居址	5.2×3.5× 2.3	集塊岩		

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (品径×直径×厚さ)	石質	備考
19	磨石	第30号竪穴住居址		4.9×3.5×2.4	泥岩	
20	磨石	第30号竪穴住居址		5.0×2.1×1.5	粘板岩	
21	磨石	第30号竪穴住居址		4.5×2.4×2.5	れき岩	
22	磨石	第30号竪穴住居址		4.0×1.4×1.2	れき岩	
23	磨石	第30号竪穴住居址		7.9×4.2×3.8	れき岩	
24	磨石	第30号竪穴住居址		7.0×4.8×2.4	れき岩	
25	石核	第30号竪穴住居址		10.0×5.3×1.5	滑石	
26	石核	第30号竪穴住居址		13.2×9.0×5.9	滑石	
27	砥石	第30号竪穴住居址		6.5×3.8×1.4	砂岩	
14	有孔円板	第32号竪穴住居址		1.7×1.6×0.2 孔径0.1	滑石	
18	白玉	第32号竪穴住居址		0.7×0.5×0.3 孔径0.14	滑石	
11	敲石	第33号竪穴住居址		8.5×6.0×4.0	砂岩	
12	磨石	第33号竪穴住居址		7.6×4.8×2.0	集塊岩	
13	磨石	第33号竪穴住居址		6.0×4.0×1.7	砂岩	
14	磨石	第33号竪穴住居址		3.1×4.2×2.8	砂岩	
15	磨石	第33号竪穴住居址		7.3×4.5×2.1	集塊岩	
16	石核	第33号竪穴住居址		9.5×5.2×2.0	滑石	
6	磨石	第10号掘立柱建物遺構		7.8×4.5×2.0	集塊岩	

第1～3号トレンチ

番号	遺物名称(図)	位置	平面形状	規格(cm) (直径×外径×厚さ)	石質	備考
1	砥石			9.8×4.6×3.9	灰色凝灰岩	
2	砥石			7.5×2.7×2.5	凝灰岩	
3	磨石			10.2×5.5×3.7	石灰岩	
4	磨石			8.7×5.7×3.5	砂岩	
5	磨石			6.5×4.4×3.0	粘板岩	
6	磨石			6.4×3.2×2.0	珪岩	

(11) 須惠器・白瓷・磁器一覽表

(11) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覽表

第1調査区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	灰白色	—	—	9G (G)	10世紀
2	常滑	壺	II層	暗褐色	暗灰色	—	—	9G (G)	14世紀
3	不明陶器	—	II層	黒灰色	黒灰色	—	—	9G (G)	
4	不明陶器	—	II層	暗褐色	暗灰色	—	—	3L (G)	
5	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	暗灰色	—	—	3L (G)	10世紀
6	瀬戸・美濃	碗	I層	淡灰色	淡黄色	—	—	14F15 (G)	18世紀
7	瀬戸・美濃	天目茶碗	I層	黒褐色	淡黄色	—	—	14F15 (G)	17世紀 (他3点)
8	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	灰白色	—	—	3L (G)	10世紀
9	瀬戸・美濃	—	I層	淡黄色	淡黄色	—	—	3 L (G)	17世紀
10	瀬戸・美濃	—	I層	明褐色	淡黄色	—	—	3L (G)	16世紀
11	常滑	—	I層	明灰色	暗灰色	—	—	2J (G)	14世紀
12	瀬戸系	—	II層	黄灰色	灰白色	—	—	2J (G)	
13	須恵	壺片	II層	黒褐色	暗灰色	—	内面に 叩き目 痕あり	2J (G)	
14	須恵	壺片	II層	暗灰色	暗灰色	—	外面自 熟灰	2J (G)	
15	瀬戸・美濃	天目茶碗	II層	黒褐色	淡黄色	—	—	2J (G)	17世紀
16	瀬戸・美濃	天目茶碗	II層	黒褐色	淡黄色	—	—	2J (G)	17世紀
17	瀬戸・美濃	茶碗	II層	緑灰色(内) 黒褐色(外)	淡黄色	—	—	3-4-A	18世紀
18	常滑	—	I層	明褐色	明灰色	—	—	3-4-A (G)	14~15 世紀
19	瀬戸・美濃	碗	I層	緑灰色	淡黄色	—	—	3-4-A (G)	6~17 世紀
20	瀬戸・美濃	—	I層	緑黄色	淡黄色	—	—	3-4-A (B)	17世紀
21	瀬戸・美濃	碗	I層	緑灰色	淡黄色	—	—	3-4-A (G)	17世紀
22	瀬戸・美濃	—	—	暗緑色	黒灰色	—	—	15E (G)	
23	伊万里	碗	I層	乳白色	黄白色	呉須の 草文か	—	15E (G)	染付

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
24	瀬戸・美濃	碗	I 層	灰白色	灰白色	—	—	15E(G)	18世紀
25	不明陶器	—	I 層	緑色	灰色	—	—	15E(G)	17世紀
26	猿投	長頸瓶	II 層	緑灰色	灰白色	—	—	SI-25 覆土中	
27	常滑	皿	II 層	緑色(内) 黄色(外)	暗灰色	—	—	SI-25 覆土中	13世紀 中期
28	猿投	長頸瓶	II 層	緑灰色	暗灰色	—	—	SI-25 覆土中	10世紀
29	猿投	長頸瓶	II 層	明褐色	暗灰色	—	—	SI-25 覆土中	
30	瀬戸・美濃	碗	II 層	明緑色	淡黄色	—	—	2C(G)	17世紀 後期 ～18世紀 前期
31	瀬戸・美濃	碗	II 層	明黄色	淡黄色	—	—	2C	17世紀 後期 ～18世紀 前期
32	瀬戸・美濃	碗	II 層	明黄色	淡黄色	—	—	SI-09 覆土中	17世紀
33	須恵	—	II 層	暗灰色	黒灰色	—	—	SI-09 覆土中	
34	伊万里	碗	I 層	乳白色	暗灰色	表面に 牡丹花	—	6M(G)	17世紀 後期 ～18世紀 前期
35	伊万里	碗	I 層	乳白色	暗灰色	—	—	6M(G)	18世紀 後期 ～19世紀
36	伊万里	碗	堆積土 中	乳白色	灰白色	草葉文 様	—	6M(G)	18世紀
37	伊万里	碗	堆積土 中	乳白色	灰白色	樹花文 様	—	6M(G)	17世紀
38	瀬戸・美濃	—	I 層	淡青灰色	淡黄色	—	—	6M(G)	
39	かわらけ	皿	堆積土 中		赤褐色	—	切り痕	5H(G)	
40	かわらけ	皿	堆積土 中		明褐色	—	—	5H(G)	
41	不明	瓷片	I 層		明褐色	—	—	4B(G)	
42	瀬戸系	碗	II 層	暗緑灰色	暗灰色	—	—	9E(G)	

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
43	瀬戸系	—	II層		淡黄白色	—	—	9E(G)	
44	猿投	長頸瓶	堆積土中	暗緑色	灰白色	—	—	SI-47覆土中	9世紀末期
45	猿投	長頸瓶	塊積土中	暗緑色	灰白色	—	—	SI-47覆土中	9世紀末期
46	猿投	長頸瓶	床直	明緑色	灰白色	—	—	SI-23覆土中	10世紀準完形

(表2) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覽表

第2調査区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	常滑	壺	II層	黒褐色	暗灰色	—	肩部片	5A(G)	14世紀
2	常滑	壺	II層	暗茶褐色	暗灰色	—	—	5A(G)	14世紀
3	瀬戸系	皿	II層	暗緑色	灰白色	—	—	5A(G)	15世紀末期 ~16世紀前期
4	猿投	—	II層	暗緑黄色	灰白色	—	—	5A(G)	
5	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	暗灰色	—	—	5A(G)	10世紀
6	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	暗灰色	—	—	5A(G)	10世紀
7	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	暗灰色	—	—	5A(G)	10世紀
8	常滑	壺	II層	明褐色	暗灰色	—	—	4A(G)	14世紀
9	常滑	壺	II層	明褐色	暗灰色	—	—	4A(G)	14世紀
10	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	暗灰色	—	—	4A(G)	10世紀
11	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	暗灰色	—	—	4A(G)	10世紀
12	猿投	長頸瓶	II層	緑灰色	暗灰色	—	—	4A(G)	10世紀
13	瀬戸	皿	II層	明緑色	淡黄褐色	—	—	SB-01覆土中	15世紀
14	瀬戸・美濃	天目茶碗	I層	黒褐色	淡黄白色	—	—	5A(G)	16~17世紀
15	瀬戸・美濃	天目茶碗	I層	黒褐色	淡黄白色	—	—	5A(G)	16~17世紀
16	瀬戸・美濃	天目茶碗	I層	黒褐色	淡黄白色	—	—	5A(G)	16~17世紀

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
17	中国	碗片か	II層	乳白色	淡黄白色	呉須・染付	—	5A (G)	
18	瀬戸・美濃	皿	II層	明緑色	淡黄色	—	—	SB-01覆土中	
19	瀬戸・美濃	天目茶碗	II層	黒褐色	淡黄白色	—	—	5A (G)	17~18世紀
20	瀬戸・美濃	天目茶碗	II層	黒褐色	淡黄白色	—	—	5A (G)	17~18世紀
21	瀬戸・美濃	天目茶碗	II層	黒褐色	淡黄白色	—	—	5A (G)	17~18世紀
22	中国	皿	I層	乳白色	暗黄灰色	—	呉須染付	5A (G)	

(表3) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覧表

第3調査区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	常滑	甕(鉢)	II層	明褐色	暗灰色	—	表面に若干光沢あり	西斜面部	14世紀
2	常滑	甕	II層	明褐色	暗灰色	—	—	西斜面部	14世紀
3	不明	甕	II層	黒灰色	黒灰色	—	—	西斜面部	常滑系か
4	常滑	甕(鉢)	II層	淡明褐色	明褐色	—	表面へラ削り	SB-02覆土中	14世紀
5	常滑	甕	II層	明褐色	灰褐色	—	—	SB-02覆土中	14世紀
6	須恵	壺	II層	淡黄色	暗灰色	—	自然灰付着	SB-02覆土中	
7	平滑	甕	II層	明褐色	暗色	—	—	南削平部	
8	常滑	甕	II層	緑色	暗灰色	—	灰釉付着	南削平部	
9	常滑	甕	II層	明褐色	暗灰色	—	—	SB-03覆土中	14世紀
10	瀬戸・美濃	おろし皿	II層	淡緑色	灰白色	—	—	SB-03覆土中	
11	渥美か	甕	堆積土中	淡黄色	明灰色	—	表面にへラ書き付号あり	土器状部	12世紀後期

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
12	瀬戸・美濃	天目茶碗	I層	黒色	淡黄色	—	—	SK-01	17世紀
13	常滑	甕	I層	緑色	明灰色	—	—	SK-01	16世紀

7号トレンチ

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	瀬戸・美濃	皿	堆積土 中	暗黄色	淡黄色	—	—	7T	
2	伊万里	碗	堆積土 中	乳白色	明灰色	草文様	—	7T	18世紀
3	伊万里	碗	堆積土 中	乳白色	明灰色	—	—	7T	18世紀

9号トレンチ

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	常滑系	甕	II層	淡黄色	灰白色	—	張付痕 (頸部)	1P	自然釉 がかかる

10号トレンチ

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	瀬戸	碗	堆積土	明黄色	淡黄色	—	—	10 T II層	18世紀
2	須恵	平瓶	II層	灰色(一部 緑色)	暗灰色	—	—	10 T II層	一個体
3	須恵	平瓶	II層	灰色	暗灰色	—	—		一個体
4	須恵	平瓶	II層	灰色	暗灰色	—	—		一個体
5	土師(硬物)	甕	II層		褐色 (内) 黒灰色 (外)	—	叩に痕 あり		

14号トレンチ

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	不明	壺	堆積土 中	黒灰色	暗灰色	—	—	14T B 地点	
2	瀬戸系		堆積土 中	暗緑色	暗灰色	—	—	14T B 地点	

(表8) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覧表

南有段区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	瀬戸(灰釉)	皿	堆積土 中	淡黄色	淡明褐色	—	—	上段部	
2	瀬戸・美濃	天目茶碗	堆積土 中	黒褐色	淡黄色	—	—	上段部	
3	青磁	碗	堆積土 中	明緑色	灰白色	—	—	上段部	
4	瀬戸系	皿	堆積土 中	明緑白色	淡黄色	—	水色灰 がかかる	上段部	
5	猿投		堆積土 中	暗緑色	灰白色	—	—	上段部	10世紀
6	瀬戸	皿	堆積土 中	明緑色	淡黄色	—	—	上段部	12世紀
7	瀬戸系	碗	堆積土 中	淡黄白色	淡黄色	—	—	上段部	上段部
8	碗	堆積土中	乳白色	暗白色	具須 染付	—	上段郎 部		
9	瀬戸・美濃	天目茶碗	堆積土 中	黒褐色	淡黄色	—	—	上段部	19世紀
10	瀬戸	皿	堆積土 中	暗緑色	暗灰色	—	—	上段部	12世紀
11	瀬戸・美濃	天目茶碗	堆積土 中	明褐色	淡黄色	—	—	上段部	17世紀

第7調査区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	常滑	壺	I層	明褐色	暗灰色	—	ヘラ削 り痕	SB-12	13世紀 後期
2	須恵	壺	II層	暗灰色	暗黒色	—	番書 き文	SI-05	
3	須恵		II層	明黄色	暗灰色	—	—	SI-16	
4	須恵	壺	II層	青灰色	暗灰色	—	—	SI-09	
5	猿投		II層	緑色	淡黄色	—	—	3B(G)	10世紀
6	猿投		II層	緑色	淡黄色	—	—	3B(G)10 世紀	

番号	産地	器種	層位	結調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
7	須 恵		II 層	明黄色	明灰色	—	—	SI-05	
8	伊 万 里	皿	I 層	乳白色	灰白色	—	—	SI-05	19世紀
9	瀬戸・美濃	碗	I 層	乳白色	灰白色	—	—	SI-05	19世紀
10	伊 万 里	碗	I 層	乳白色	明灰色	周回した 具須線	—	SI-05	19世紀
11	伊 万 里	碗	I 層	乳白色		—	—	SI-05	19世紀
12	猿 投	長頸瓶	II 層	淡緑色	淡黄色	—	—	3B(G)	10世紀
13	須 恵	長頸瓶	II 層	黄灰色	淡黄色	—	—	3B(G)	
14	猿 投	長頸瓶	II 層	暗緑色	灰白色	—	—	SB-12	9世紀 末期準 完形
15	猿 投	長頸瓶	II 層	緑色	灰白色	—	—	SB-12	10世紀 準完形
16	須 恵	甕	II 層	暗灰色	黒灰色	—	—	SI-20	

(表5) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覽表

西斜面区

番号	産地	器種	層位	結調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	2T 中央 部	17世紀
2	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	2T 中央 部	17世紀
3	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	2T 中央 部	17世紀
4	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	2T 中央 部	17世紀
5	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	2T 中央 部	17世紀
6	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	2T 中央 部	17世紀
7	瀬戸・美濃	皿	堆積土 中	暗褐色	淡黄白 色	—	—	SD-02	18世紀
8	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	SD02	17世紀
9	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	SD02	17世紀

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
10	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	淡黄色	—	—	SD02	17世紀
11	伊万里	茶碗	I 層	乳白色	灰白色	呉須	—	SD-02	
12	伊万里	茶碗	I 層	乳白色	灰白色	呉須	—	SD-02	
13	常滑	壺	堆積土 中	明褐色	暗緑色	—	—	1T 東端	14世紀
14	猿投	長頸瓶	堆積土 中	暗緑色	灰色	—	—	1T 東端	10世紀
15	瀬戸・美濃		I 層	淡黄色	淡黄色	—	—	4T	
16	猿投	長頸瓶	I 層	緑色	灰白色	—	—	4T	10世紀
17	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	—	—	4T	18世紀	
18	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	—	—	4T	17世紀	
19	瀬戸・美濃	天目茶碗	I 層	黒褐色	—	—	4T	18世紀	
20	伊万里	碗	I 層	乳白色	白色	—	—	2T	18世紀
21	美濃	太白茶碗	I 層	乳白色	乳白色	—	—	2T	19世紀
22	瀬戸・美濃		堆積土 中	暗黄色	淡黄色	—	—	2T	

(表4) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覽表

第4調査区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	常滑	壺	II 層	明褐色	灰白色	—	ヘラ削り痕	SB-02付 近表探	13世紀 末期 ~14世紀
2	常滑	壺	表探	暗緑色	灰白色	—	自然灰付着	表探	14世紀 中期
3	瀬戸・美濃	皿	I 層	黄緑色	灰白色	—	削り出し高台	5 C (G)	
4	瀬戸・美濃	碗	I 層	淡黄色	淡黄色	—	—	SB-01東 (中央)	17世紀
5	瀬戸・美濃	碗	I 層	淡黄色	灰黄色	—	—	SB-01東 (中央)	17世紀
6	伊万里	碗	I 層	青白色	灰白色	—	—	SB-01東 (中央)	17世紀

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
7	伊万里	碗	I層	青白色	灰白色	—	—	SB-01東 (中央)	17世紀
8	伊万里	碗	I層	青白色	灰白色	—	—	SB-01東 (中央)	17世紀
8	伊万里	碗	I層	青白色	灰白色	—	—	SB-01東 (中央)	17世紀

(表6) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覧表

第6調査区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	瀬戸・美濃	天目茶碗	I層	黒褐色	淡黄色土	—	—	9 D (G)	17世紀

(表7) 須恵器・白瓷・陶器・磁器一覧表

第7調査区

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	常滑系	甕片	堆積土 下層	黒灰色	暗褐色	—	—	SH-01	
2	常滑	甕片	堆積土 下層	黒灰色	灰黒色	—	器内面に自然 灰がかかる	SH-01	
3	瀬戸系	鉢	堆積土 下層	明黄緑色	黄白色	—	内面に重ね焼 の痕あり	SH-02	11世紀 中期 ～後期
4	猿投系	長頸瓶	II層		明灰色	—	—	上段部中 央	

須恵器・白瓷・陶器・磁器一覧表

6号トレンチ

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
1	美濃	太白茶碗	堆積土 中	乳白色	明灰色	菊花文	—	6 T	19世紀

番号	産地	器種	層位	釉調・色調	胎土	文様	特徴	出土区 (遺構)	備考
2	瀬戸・美濃		堆積土 中	淡黄色	淡黄色	—	—	6 T	
3	伊万里		堆積土 中	乳白色	明灰色	—	松岩文 様	6 T	19世紀

4 おわりに

おわりに

(一)

縄文海進期の頃の阿波丘陵には海水が寄せ、現在の浮島と、はるか西南に展開する千葉の丘陵台地を残して、この付近一帯は一面の大海原であった。(図面1)。この頃には鹿島半島はまだ形成されていなかったから、太平洋の波は直接この阿波丘陵に打寄せていたものと想像される。

海はその当時本遺跡の麓、数メートルの地点を上昇していたものと思われるが、縄文前期になると人々の生活がなされたことが、その表彰、覆土より尖底土器片2点が見られ、その後、中期、後期の土器片が多数出土することから理解されるのである。ただしその遺構は検出されなかったが、それはその後、約数1000年に亘る遺構等の造営によって消失してしまったものと判断したいのである。

本遺跡が繁栄したことは特に前述したように台地の東・西・に海が寄せ、しかも各所に集落等に適する台地が形成されていたことによるものと思われる。なお、ここに付着しておきたいのは本遺跡のうなぎ塚古墳の封土及びその周辺からおびただしい弥生土器片が出土したことである。当時その時代の生活もすでに営まれていたことであろうが、その遺構は検出されなかった。

(二)

昨年7月本遺跡の試掘が実施された結果によると、ここでは全般的に鬼高式(1.2.3式)が採集され、それに次いで五領、和泉式土器の出土も見られたが、いよいよ発掘調査が進むにつれ平安中後期の土器も多く出土し、更には鎌倉、南北朝期の陶器やその後の室町戦国期の磁器片の出土も多く見られたので、本遺跡の下限は戦国期以降まで約1000年に及ぶ生活が営まれていたことが窺えるのである。なお、本遺跡から城館施設と認められる有段状遺構土塁、更には掘立柱遺構とそれに伴う遺物等も検出されたので本遺跡は城館に利用されたことも判明した。

(三)

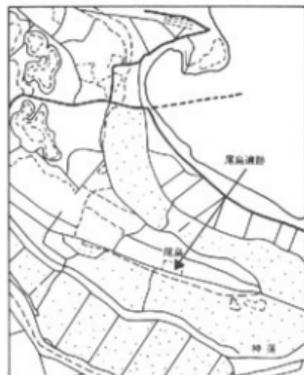
設定された8調査区のうち第1調査区は、すでに第1調査区の章において要述したように、検出された竪穴住居址59軒はその8割が鬼高期のものと判定したが、泉期もいくらか存在しているものと思われた。検出された遺構は、その床面や壁は削り取られ掘られたピット等によって凹凸が甚だしく、カマド等完全な形で検出されたのは極めて少なかった。そのことについてもすでに詳述したとおり後世の手工によるもの、即ち掘立柱建物遺構または櫓等の造立のためと認めざるを得なかった。

なお、竪穴住居址の規格については4m～5mの方形のものが多かったが、中には1辺が2mの小住居址もあった。カマドはその多くが破壊されたことについては前述したとおりであるが、その規格は一般に規模が小さかった。カマドには支脚が置かれたままのものが多かった。殆んど全般的に住居址には周溝が認められたが、その壁にそって壁柱(径5～10cm)が配列されているのが特徴であった。それらのことは他の調査地区の竪穴住居にも共通することであった。

本調査区より竪穴遺構(土壌)60基が検出されたが、一般に遺物を伴わない遺構が多く、その性格が判明しなかった。中にはその遺物等から判断して墓状遺構と認められるものもあり、明治、大正期のものも含まれていた。

(四)

本調査区の第6・第7調査区より祭祀用遺物の出土を見た。それは滑石製模造品が大部分で、有孔用板(石製模造鏡)、有孔尖板(石製模造剣)、玉類(曲玉、切子玉、管玉)坏形土器等であって、それらを製造するおびただしい滑石の原石が残されていたことは、第7調査区の部において述べたとおりである。殆んど全ての住居址よりそれらの遺物が出土するところから見ると、本調査区は祭祀遺物の製作所になっていた集落であったものか。これと同じ性格の遺跡が今回浮島の尾島遺跡から検出されたのである。これは昭和61年4月より、同12月まで木県教育財団において発掘調査が実施されたが、その報告書に明記されている。本遺跡の第7調査区も尾島遺跡とほぼ時を同じうし、明確に示せば和泉期より鬼高II式期にかけての祭祀遺跡である。それ以後は次第に祭祀具の製造は下火になっていったようであるが、それより四百数十年後に完成を見た官撰の報告書、常陸国風土記の信太郎浮島の条を見ると「九つの社あり、言葉も行いも忌み謹めり」と記してある。この社が祭祀遺跡に相当の場所で、それが浮島の尾島遺跡であり本遺跡の第7調査区にあたる所ではなからうか。それより数百年を経過した後も当地方の人々は神を敬い祖先を尊び言行のつましやかな人々であったものであろう。



浮島の尾島遺跡

(五)

第4調査区の下の方に長者久保(窪)という所があって、そこには長者がいたという伝承が現在部落の人々によって残されている。そのことについては第4調査区の解説のところで述べたので省略するが、結論的に言いたいことは、この久保(窪)に城館遺構が残されていることは間違いないであろう。しかしながら長者の住んでいたという遺構は全然検出されなかった。

釜井の集落に昔から歌が残されている。その歌は「朝日さす、夕日かがやく長者久保、うつ木のもとに小金ねむれる」という歌でこの部落の人々が周辺久保(窪)一帯を掘ってみたが、黄金は見られなかった。今回の発掘調査において徹底的に遺構を精査したが、そこは一面の湿地帯で手工が施された形跡はなかった。

そこで、この歌の「朝日さす夕日かがやく」と言う場所はその久保(窪)ではなく、その久保の直上の第4調査区に当たる場所がそれに該当しているのではないかと判断した。その600m²の場所は約1mの盛土がなされ、それを築き固めて8軒の掘立柱建物遺構が検出された。床面から鬼高期の土師器片と平安末期の土師器、須恵器片が出土したが、鬼高期の土師器は盛土のとき運搬されたものと判明された。したがってこの掘立柱建物遺構は平安中末期に相当するものではなかろうか。そこははるか東方に霞ヶ浦を見おろし朝日のたださすところ、西方は下総平野を一望のもとに見おろす夕日の日照る場所である。なお、盛土の土層は切断して土質のはぎ取りを実施したのである。

(六)

本遺跡より城館遺構及びそれに関する遺物が検出された。それは有段状遺構、掘状遺構、柱穴列遺構、掘立柱遺構、側溝を有する通路状遺構、竪位に走る掘状遺構、陶器、磁器等があげられるが、そのことについてはすでに詳述したとおりである。

ただここで第1に問題になることは、掘立柱建物遺構が城館遺構として関連づけられるかどうかということであった。城館遺構として先ず注目されたのは第1調査区、第2調査区の約4600m²に亘る台地で、この地区が城館の本郭または2の郭に当たる場所ではないかと推定されたのである。先ず表土下20~30cmの黒土層に地盤の割合いに固い層があったので、その地点まで掘削して精査したところ、柱穴列に遭遇した。その地層の柱穴列では規格が合わず建物としてはどうしても結びつきが悪いので、更に20cm掘り下げて精査した結果、竪穴住居址と共に柱穴群が検出されたが、それらの事情についてはすでに前述しているのでここでは省略したい。

とにかくこの掘立柱建物遺構は平安後期の土師器、須恵器、鎌倉期の陶器、南北朝期の陶器、常滑片数点、その他の遺物の出土を伴うことから、その建物の上限は平安末期、そして南北朝期にも建てられたことが理解されたのである。その後戦国期になっても磁器等の出土などから見て断続的な生活がなされていたものと思われるが、常住の生活とはなれなかったものと想像される。そのことは出土遺物の極めて僅少なことから言えることである。

城館についての第2の問題点として小柱穴列があげられる。これが柵状遺構かどうかということについては多くの先学の論議的になったことであった。このこともその配列状況については図面等もまじえて詳述したところであるが、とにかく配列状況が不整然としていて明確な捉えどころがないことである。それは城壁をめぐるして配列された場所も見られたが、調査区の各所にも雑然と存在していた。しかしながら、長い年月の上に数回の建直しが行なわれたことであろうから、仲々にその実体が把握しにくいのである。とにかくこれは柵状遺構として捉えてもよいのではなかろうか。

第3に有段状遺構の問題であるが、この有段状様式が古い城館構築の様式であるかどうかということである。とにかくわが国の城館構築様式の研究は始まってから日な浅い感があるから、この問題に関しては明確な決論は得られないものと思わざるを得ない。したがってこれが戦国期に造られたものか、南北朝期に築造されたかという明確な判断はつけにくい。とにかくこのことはその地形の自然条件にもよることであろうし、急を要する城館構築等においては簡単に造れる防塁として、新旧併用して造られたものではなかろうか。私はこの有段状遺構は少なくとも本調査区においては案外古く築造されたものと判断したい。

また、本調査区外（造成地区外）に、本遺跡の東方部に土塁、堀の残存するのがあるがこれは戦国様式であることは一般に言われている。更に第3調査区の東北部に土塁が残されており、調査区外に塹状の土塁があったがこれらも戦国様式と見られた。

(七)

第8調査区のうなぎ塚古墳については、第8調査区のところ述べたとおりである。この古墳は種々の問題点をわれわれに残してくれたが、第1にあげられるのは、墳丘を利用した古式古墳であると言うことである。霞ヶ浦周辺には墳丘を利用して築造された古墳が存在するが、それらの多くは古式古墳の部類に属する。

古墳に関する出土遺物としては、後方部の周溝部から出土した五領期の壘形土器（2）それに後方部東側周溝部の内側のサイドを削り抜いて入れた五領期の埋納大甕、これは五領期のものと判断された。なお、前方部のはずれ（これは周溝部が明確でないので前方部の規格内に入れるかどうかは不明）から五領期の大甕が出土した。また、封土から数十点にのぼる弥生後期の土器片が出土したが、これは古墳築造の際にその周辺から運搬されてきたものであろう。出土遺物から判定すると本古墳は五領期に築造された古式古墳で、その時期は四世紀後半と推定されよう。

第二として本古墳の築造様式であるが、これについては相異った見解のあることは第8調査区の解説において挙げておいたとおりである。後方部は方形周溝部としての様式をとるが封土を高く積み上げ後方部としての墳形を造り上げたことは調査の結果が証明していることである。また、本古墳は後方部と前方部とのくびれ部に周溝があるから、前方部は全く異った方形周溝墓であるという見解があるが、前方部は方形周溝墓の様式はとっていない。周溝部は全くなくて、ただ周

辺の土をかき上げて不整形形状に形態を整えた築造方式である。かく考察すると前方部の築造は前方後方墳としての形状を整えるために築造したものと理解したいのである。それは原一号墳のように極めて整った前方後方墳の形体は認められないが、不完全ながら本古墳も前方後方墳の部類に入れられるべきものではなかろうか。

第三として、主体部は後方に置かれたものと思われる。それは後方のやや中心部分に抜根の大穴があったが、その部分が主体部に当たるところと判断され、それは木棺直葬であったのではないと言われている。抜根当時土器片が散在していたと言いが、今は何ひとつ残されていなかった。

(八)

とにかく本遺跡は縄文時代より近代に亘る極めて長期間に及ぶ遺跡であったが、ここに極めておおざっぱであるがおおよその様相を知ることができた。本遺跡の中心に古代から鎮座していた香取神社も立派な社殿が本遺跡の脇に遷され、また、観音堂や石像等もやはりその側に再建された。先祖の遺産としてそれが立派に蘇生したことは大変に喜ばしいことであった。

なお、本遺跡発掘調査に当り本県文化課、歴史館、教育財団、更には国学院大学乙益重隆教授、県開発公社等の寄せられた御指導と御好意に心から感謝の意を表すると共に、地元民のご協力にも深くお礼を申し上げる次第である。

5 図 版

1. 遺跡景観



(1) 遺跡遠景(南側から)



(2) 遺跡遠景(北側から)



(3) 第1.2調査区(北側から写す)

図版 2



(4) 第1.第2調査区全景(南東から)



(5) 第4調査区(B)(長者窪) (北斜面)



(6) 第4調査区(B)(長者窪) (西側から)



(7) 第6調査区全景(南側より)



(8) 第8調査区(うなぎ塚古墳)全景(西側から)



(9) 第8調査区(うなぎ塚古墳)全景(南側から)

2. トレンチ、グリット等



(1) 第3号トレンチ(北斜面区)



(2) 第5号トレンチ(北斜面区有段状低地)



(3) 第4調査区(A)南面断面土層

図版 4



(4) 第1調査区 グリッド設定状況



(5) 第1調査区グリッド設定状況



(6) 各グリッド発掘状況



(7) 各グリッド発掘状況



(8) 各グリッド発掘状況



(9) 各グリッド発掘状況

3. 住居址遺構

図版 5



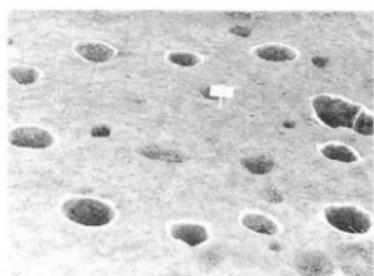
(1) 第1調査区 SI-02



(2) 第1調査区 SI-09



(3) 第1調査区 SI-53



(4) 第1調査区 SB-60



(5) 第1調査区
SI-26, SB-66, SI-31, SI-27, SI-32複合状況



(6) 第1調査区
SI-27, SI-32複合状況

图版 6



(7) 第1調査区 SB-68(白線部分)



(8) 第2調査区 SB-02(白線部分)



(9) 第3調査区 SB-02、SB-03 複合状況



(10) 第3調査区 SB-01



(11) 第4調査区(A)SB-02

図版 7



(12) 第4調査区(A)SB-04



(13) 第4調査区(A)SB-03



(14) 第4調査区(A)SB-01



(15) 第5調査区 SI-01



(16) 第5調査区 SI-02, SI-03 複合状況

図版 8



(17) 第6調査区 SI-01



(18) 第6調査区 SI-03



(19) 第6調査区
SI-05、SI-06 複合状況



(20) 第6調査区 SI-06



(21) 第6調査区 SI-08



(22) 第6調査区 SB-10、SB-11の複合状況

図版 9



(23) 第7調査区 SI-05



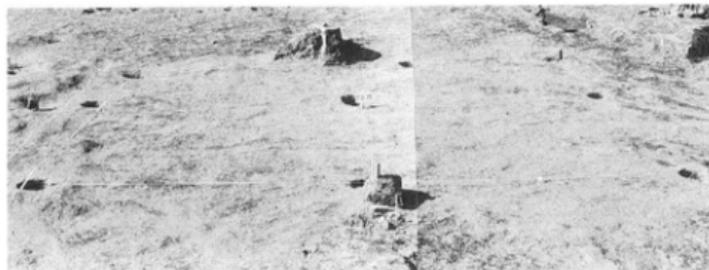
(24) 第7調査区 SI-07



(25) 第7調査区 SI-09、SI-20複合状況



(26) 第7調査区
(手前から) SB-15、SB-12、SI-11複合状況



(27) 第7調査区 SB-10

図版10



(28) 第7調査区 SI-16, SD-01複合状況



(29) 第7調査区 SI-18



(30) 第7調査区 SI-23



(31) 第7調査区 SI-24, SI-20複合状況



(32) 第7調査区 SI-23, SI-19(上左)、
SI-25(上右)複合状況



(33) 第7調査区
(左から) SI-33, SI-34, SI-35複合状況

4. 土境
第1調査区

図版11



(1) SK-06



(2) SK-08



(3) SK-13



(4) SK-15



(5) SK-18



(6) SK-19



(7) SK-20



(8) SK-23

図版12

第1調査区



(9) SK-35



(10) SK-36



(11) SK-48, SK-49

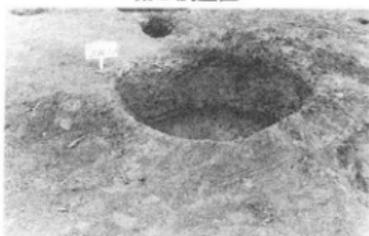


(12) SK-62

第2調査区



(13) SK-13



(14) SK-12

第3調査区



(15) SK-04



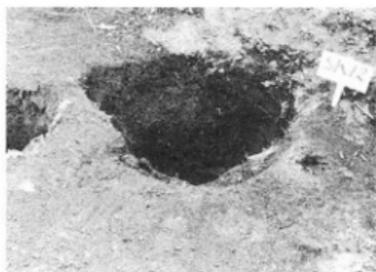
(16) SK-05



(17) SK-06



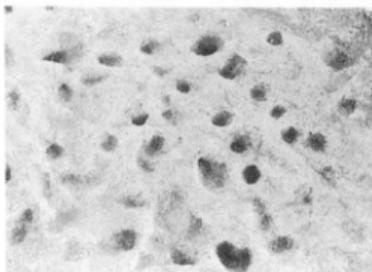
(18) SK-08



(19) SK-12



(20) SK-13



(21) 第1調査区特殊柱穴

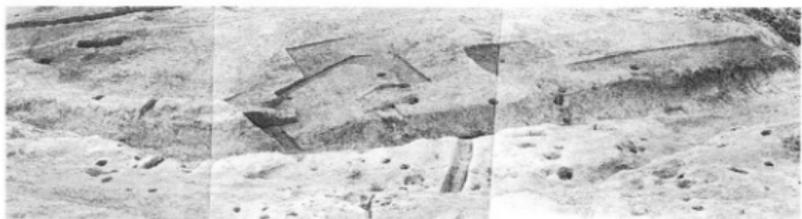
第1調査区 小柱穴群の
特徴として、同心円による
柵穴が多かった。

図版14

5. 柵状遺構



(1) 第1調査区 柵状遺構



(2) 第1調査区 北斜面溝状遺構と周辺遺構



(3) 第1調査区 北斜面遺構及び柵穴群

図版15



(4) 第1調査区
SD-09～SD-12までの溝状遺構



(5) 第2調査区 溝状遺構



(6) 第4調査区(A)溝状遺構



(7) 第5調査区 SD-01



(8) 第6調査区 SI-03、貫通するSD-01



(9) 第7調査区 SI-16と複合するSD-01

図版16

6. 第8調査区(うなぎ塚古墳)



(1) 墳頂部セクション



(2) 墳頂部状況



(3) 墳頂部及び周溝



(4) 墳頂部及び周溝

図版17



(5) 後方部周溝と壺出土状況(北から写す)



(6) 墳頂から前方部及び周溝を写す。

図版18

7. 遺物出土状況～①



(1) 第1調査区 SI-26



(2) 第1調査区 SI-34



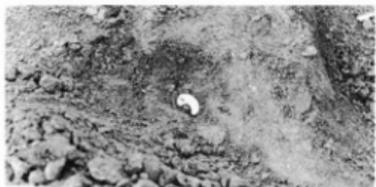
(3) 第1調査区 SI-29



(4) 第1調査区 SI-47



(6) 第1調査区 SI-09



(5) 第1調査区 SI-20



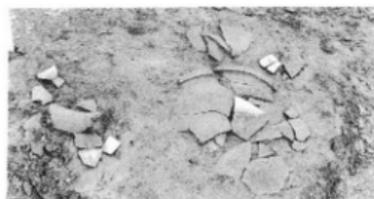
(7) 第1調査区 SI-11



(8) 第1調査区 SI-23



(9) 第1調査区 SI-09



(10) 第1調査区 SI-36



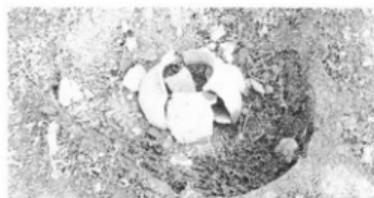
(11) 第1調査区 SI-47



(12) 第1調査区 SI-45



(13) 第2調査区 SI-01



(14) 第2調査区 7C (G)



(15) 第2調査区 北側



(16) 第2調査区 SK-01



(17) 第3調査区 SI-05

図版20

遺物出土状況③



(18) 第3調査区 SI-04



(19) 第5調査区 SI-01



(20) 第5調査区 SI-01



(21) 第6調査区 SI-03



(22) 第6調査区 SI-03



(23) 第6調査区 SI-07



(24) 第6調査区 SI-07



(25) 第6調査区 SI-08



(26) 第7調査区 SI-34



(27) 第7調査区 SI-04



(28) 第7調査区 SI-07



(29) 第7調査区 SI-32



(30) 第7調査区 SI-32



(31) 第7調査区 SI-32



(32) 第7調査区 5B(G)



(33) 第7調査区 SI-29

図版22

遺物出土状況～⑤



(34) 第8調査区(うなぎ塚古墳) 南側トレンチ



(35) 第8調査区(うなぎ塚古墳) 墳頂部



(36) 第8調査区(うなぎ塚古墳) 後方周溝部



(37) 第8調査区(うなぎ塚古墳) 後方周溝部



(38) 第8調査区(うなぎ塚古墳) 南側トレンチ



(1) SI-04 須恵器高台杯



(2) SI-09 須恵器蓮華皿



(横から)



(3) SI-36 須恵器高台杯



表



裏

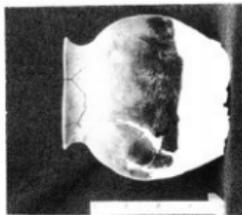
(4) SI-31 須恵器蓋

図版24

第1調査区出土遺物(2)



(5) SI-17 土師壺



(6) SI-28 土師壺



(7) SI-44 土師壺片



(7) SI-34 土師壺片



(8) SI-34 甌



(9) SI-29 甌



(10) SI-47 土師壺



(11) SI-07 手ツクネ土器

图版24



(12) SI-07 土師窯口緣部



(13) 各遺構出土窯口緣部



(14) SI-05 蓋



(15) SI-08 土師椀形



(16) SI-47 蓋他4点



(17) SI-47 椀形2点

図版25

第1調査区出土遺物(3)



(18) SI-47 土師杯 9点



(20) SI-04 土師杯 6点 須恵 1点



(21) SI-04 出土土師器杯16点



(19) 第1調査区
各遺構出土土師杯 11点



(22) 各遺構出土須恵杯 7点



(23) SI-11 土師杯 4点

(24) SI-16 土師 2点

(25) SI-10 土師 2点



(26) SI-07 底土器片



(27) SI-23 白瓷壺



(28) SI-05 注口土器



(29) SI-02 土師壺底部木ノ葉圧痕



(30) 黒書土器

図版27

第1調査区出土遺物 (5)



(31) 各遺構出土支脚



(33) 土錘



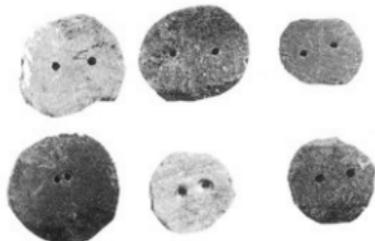
(34) 石製横造剣



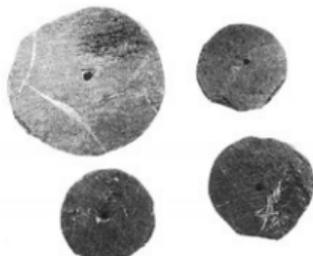
(36) 曲玉



(32) 脚部



(35) 有孔円板



(37) 有孔円板

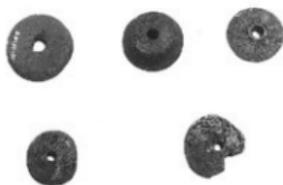
第1 調査区出土遺物 (6)



(38) 各遺構出土石斧



(39) 石製品



(40) 紡錘車



(41) SI-26 石環



(42) 不明石片



(44) 陶器、磁器片



(43) 磨石

図版29

第2調査区出土遺物



(45) SI-01 高台杯



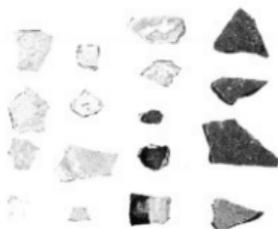
(46) SB-04 土師片



(47) SB-01
土師壺口縁部片



(48) SB-04
須恵壺口縁部



(49) 陶器、磁器片



(50) 土鍾



(52) 雲母片岩石片



(51) 磨石

第3調査区出土遺物



(53) SB-03 土師甕



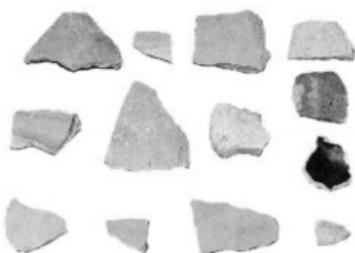
(54) 土錘



(55) SI-05 土師甕



(56) 土師杯



(57) 陶器、磁器片

第5調査区出土遺物



(58) SI-05, SI-01 杯



(59) 土師杯



(60) 土錘



(61) 土師甕口縁部



(62) 磨石

図版31

第6調査区出土遺物(1)



(63) SI-04 杯



(64) SI-04 杯



(65) SI-07 杯



(66) SI-07 杯



(67) SI-03 土師高台



(68) SI-08 杯



(69) SI-07 梯形

図版31

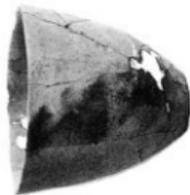
第6調査区出土遺物



(70) SI-02 土師壺



(71) SI-14 土師壺



(72) SI-01 甑



(73) SI-01 土師口縁部



(74) SI-04 土師壺口縁部



(75) 土師底部

図版32

第6調査区出土遺物(2)



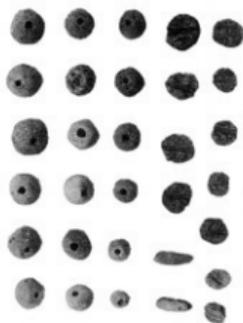
(76) SI-03 高杯



(77) SI-08, SI-05 高杯



(78) 高杯脚部



(79) 土塊



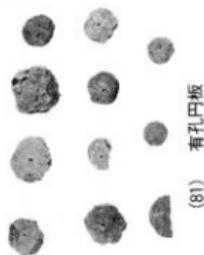
(80) SI-08 塵石

図版32

第6調査区出土遺物



(82) 磨石



(81) 有孔円板



(83) 石製標識刺



(84) 古銭

図版33

第7調査区出土遺物(1)



(85) SB-12 白瓷壺



(86) SB-08 須恵器



(87) SB-12 白瓷壺



(87') SI-07, SI-29 土師甕・埴



(88) SI-07 土師・甕



(89) SI-34 甕



(90) SI-24 埴



(91) SI-35 埴



(92) SI-09 小形壺



(93) SI-23 椀形



(94) 各遺精出土須惠器口緣部



(95) 各遺精土師器口緣部



(96) S134 土師器



(97) SD01 土師器・杯



(98) S104 土師高台杯



(99) 各遺精出土土器底部

图版34

第7調査区出土遺物



(100) SI-28 碗形土器



(101) 各遺構出土陶器・磁器片

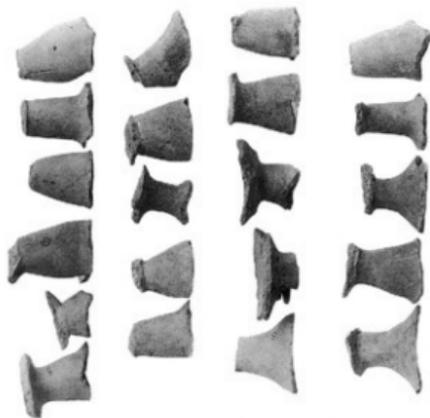


(102) SI-23, SI-34, SI-31, SI-22 土師器



(103) SI-04 土師杯 4点

第7調査区出土遺物(3)



(104) 各遺構出土高杯脚部



(105) 各遺構高杯脚部



(106) SI-06 高杯脚部

图版35

第7調査区出土遺物



(107) S1-29 高杯口部片



(109) S1-21、S1-09 高杯



(108) S1-32 高杯



(110) S1-09 高杯胴部



(111) 土鏝

图版36

第7調査区出土遺物



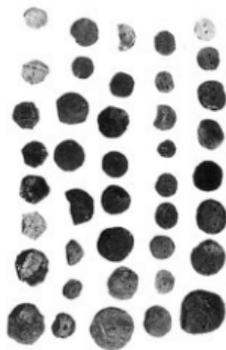
(112) 各遺構出土石製模造剣



(113) 各遺構出土有孔円板



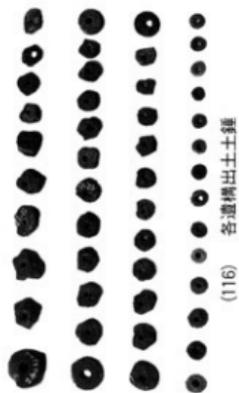
(114) 各遺構出土石製模造剣



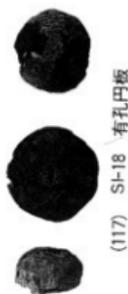
(115) 各遺構出土有孔円板

図版36

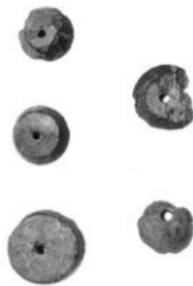
第7調査区出土遺物



(116) 各遺構出土土錘



(117) SI-18 有孔円板



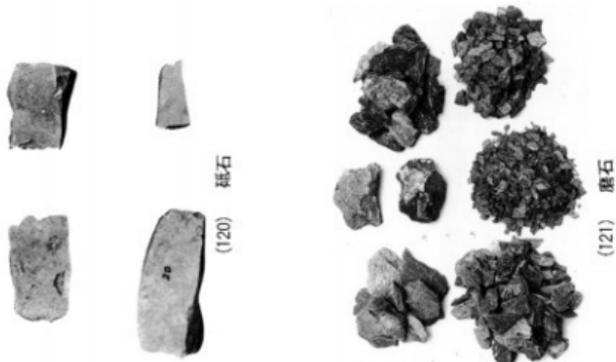
(118) 紡錘車



(119) 曲玉

图版37

第7調査区出土遺物(5)



図版37

第7調査区出土遺物



(123) SI-24 針



(124) SI-04 鋏



(125) SI-04 馬具附錠



(126) 鉄製品



(127) 鉄滓



(128) 土師器底部



(129) 高杯脚部



(130) 土師器罎



(131) 壺



(132) 壺



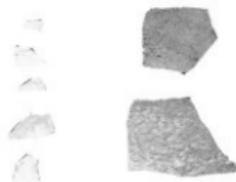
(133) 尖底土器底部



(134) 縄文土器片

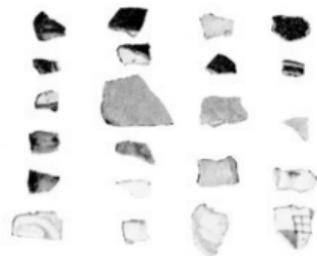
図版39

第4調査区(A)出土遺物



(135) 第4調査区(A)遺構出土

西斜面区出土遺物



(136) 西斜面区遺構出土

陶器、磁器、白瓷片

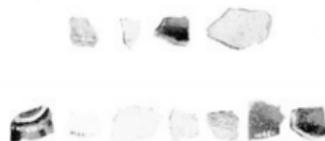
第4調査区(B)長者窪出土遺物



(137) 第4調査区(B)長者窪遺構出土

陶器、磁器片

南有段区出土遺物



(138) 南有段区遺構出土

陶器、磁器、白瓷片

第4調査区(B)長者窪出土遺物



(139) 第4調査区(B)長者窪中段遺構出土 磨石

図版40



(140) 第4調査区(B)長者窪遺構出土
陶器、磁器片



(141) 第4調査区(B)長者窪遺構出土
陶器、磁器片



(142) 第4調査区(B)長者窪遺構出土
陶器、磁器、鉄器片



(143) 第4調査区(B)長者窪遺構出土
陶器片



(144) 第4調査区(B)長者窪遺構出土
陶器片



(145) 第4調査区(B)長者窪遺構出土 陶器、磁器片

図版41

常滑焼(表・裏)



(146) 各遺構出土 常滑片(表)



(147) 各遺構出土 常滑片(裏)



(148) 第1調査区各遺構出土 陶器、磁器、白瓷片

9. その他



(1) 遺跡に建立されていた観音堂



(2) 観音堂境内の石仏群



(4) 観音堂後の地像尊



(3) 観音堂境内の馬頭観音



(5) 長者窟頂上の権現様

図版43



(6) 香取神社



(7) 遺跡より筑波山眺望



(8) 作業風景



(9) 本遺跡から霞ヶ浦遠望



(10) 作業風景(63.3.10)
古渡小学校児童の見学



(11) 作業従事者全員

6 付 録

付 録

本報告書の末尾に付録の部を設定することにした。というのは本遺跡及びその周辺には数多くの伝承、伝説等が残され、その中には一応注目に値するものも認められたので、その一部をあえてとりあげてみた。これらの伝承を今回発掘調査された実体と故意に結びつける意志はないが、これらの相関関係が何等かの接点となって本遺跡解明の糸口でもつかむことが出来たとしたら極めて幸いなことである。考古学上の解明と伝承学とを結びつけようとするのは、極めて危険な業であると充分承知しながらもあえてとりあげてみた次第であって、先学のご指導を仰ぐや切なるものがある。

ここにとりあげられる論題は下記のとおりである。

- (1) 「阿波」の地名と、うなぎ塚古墳（祭祀遺跡も含めて）
- (2) 「立切」の地名伝承と香取神社

(1) 「阿波」の地名とうなぎ塚古墳（祭祀遺跡を含めて）

(一)

「阿波」の地名の問題については、第二の本遺跡の地理、歴史的環境の項で一応の解説を試みたので、ここではなるべく重複をさけながら本論題にうつりたいと思うのである。

字名については、常陸国風土記の編纂された奈良中期の頃には「安婆島」の名が本風土記にてくる。また、本遺跡の麓にある集落を現在は「甘田」と言っているが、桜川村郷土史資料によるとこの地は鎌倉時代漸くして新田が開発されたようで、その頃は安婆にある田雨という意味から「安婆田」と呼んでいたと記してある。甘田と記述するようになったのは何時の頃からかわからないが、それにしても基だしい字名の違いである。それ以後再三字名は変わり、室町、江戸期になると「阿波」「安波」「安場」等の字が使用されるようになったが、現在は大杉神社の周辺集落に「上阿波」「下阿波」、そして「阿波」の神宮寺、「安婆田」が「甘田」となって残り、阿波崎城は昔の「阿波」の字が使われている。また、奈良時代の安婆島は浮島と字名が全く変化して当時の字は用いていない。なお、釜井、立切の地は古い昔、阿波の地内に入っていたと古老は言う。このようにして字名は変化したが、阿波なる地名は現在の桜村全域と東村の一部の地域を指した極めて広汎な地域であったものようである。

更にまた、「あんば」「あんば様」という言葉が現在も使用されているが、それは大杉神社を指した言葉で阿波に鎮座する神社ということから「あんば様」と呼ぶようになったものであろう。

あんば信仰、あんば^{ばやし}囃子等という言葉も大杉神社即ち「あんば様」にまつわる言葉であろう。あんば信仰は特に室町から江戸期にかけては絶大なものがあったが、土地の人々は「あ」と「ば」の間に「ん」を入れて言葉のあやをつけ調子をとったもので、あば囃子と言うよりもあんば囃子と呼んだ方が言葉にリズムがあって面白い。そのようなことから内容的にはそう深い意味はなかったものではなからうか。

(二)

さて、この「阿波」、「安婆」などと言う言葉は一体何処から発生し、また、どのような事情によって持ちこまれたものなのか。これを知ることは極めて重要な意義があるように思われる。

このことについて、先ず当地方信仰の中心をなす大杉神社の由緒書を拝見した。これによれば「安婆」と言う地名は「あんば」と発音されたらしく海部（あや）、海の泡、海を望む崖端（あずは）、浮子（あば）など漁業関係、海河関係地名から発生した言葉であろうと記されている。もつともこの周辺一帯は太平洋の海が寄せていたことは前述したとおりで、この地名が海に関する地名として自然発生的に付けられたことについては当然考えられることである。阿波の岩壁にそびえ立つ杉の大木は海上航海の羅針盤の役目を果し、その御神体は必然的に大杉神社となって航海の神として、その崇敬を一手に集めたものであろう。

しかしながら、ここにいささかの疑問点もある。先ず第一に、「阿波」なる地名が自然発生的に生れた言葉だとしたら、桜川全域と東地区一部を含む広汎なる地域にこの地名はひろがらなかったものと考えられる。第二に大杉神社即ちあんば様の鎮座が気になる。この神社が単なる航海や厄除けの神だとしたら、わざわざ出雲系の神々を祀る必要もなからう。阿波なる地名と大杉神社とは何等かの深い結びつきがあったものと考えざるを得ない。

ここは黒潮暖流の寄せる北限の地、原始から古代にかけてはまだ湾口は広く打寄せる波もはげしかった。黒潮にのってあらゆる文化がこの海路の果てに到着したことは、前述のくり舟の数多い出土によっても理解されよう。また、西北文化も集る館ヶ浦文化圏を形成し、清野謙次氏の「江津崎を制するものは、まさに関東を征する」と言った言葉は極めて名言である。

(三)

わが国の原始、古代にかけての数千年間、世界は勿論のことであるが、わが国周辺においても人々の移動ははげしかった。寒冷期なるが故に温暖地を求めて北から移動してくる人々、黒潮に乗って渡来してくる人々、その数は実に万に達したものであろう。

わが国も弥生期を終え古墳時代を迎える頃になると、漸くにして國家の形成期を迎えるのであるが、その領域圏拡張等のため人々の交流は次第にはげしくなっていった。関東地方も四世紀になると古墳が出現し始めた。それは大和朝廷の軍事進出によってもたらされた古墳であるとか、出雲氏族の移動に伴う前方後墳の築造であるとか、それらをめぐっての論議ははげしく展開さ

れている(注1)。

わが茨城の地方にも四世紀後半には古墳が出現し、それと共に多くの氏族の移動も実施されたようである。このことについては八世紀前半に編纂された常陸国風土記によってその様相を窺うことができる。本書の解明については筆者の所論によって判断いただくほかはない(注2)。これについては本書が茨城の古墳築造400年後に編纂されたものであるが故に、その当時の実相を理解するのは極めて至難な業であると言わざるを得ない。しかしながら本書は時代の要請にしたがって編述された地理・歴史書で、常陸国長官藤原宇合が自から編纂責任者になり、高橋虫麻呂や多くの調査員を置いて古老の言を聞きながら実地調査をして編述された、割合に信憑性の強い書物である。中には記・紀や自家に伝承された中臣伝承等を参考にした所謂作為的な部分も挿入されているが、史実と思われるところも多い。

この中で歴史的課題として、大和朝廷が国造として大系中臣氏族、物部氏族、出雲系氏族を派遣する部門が出てくる。大和朝廷国造派遣という点は事実性が極めてうすく疑問点も多いが、それらの氏族が常陸の地に移動したことは歴史事実として認めてもよいと思われる。ここではそれらを解説することは出来ないが、本論題に關係する出雲氏族の移動についてその概要を述べてみたい。

(四)

出雲氏族の移動を説明するとしたならば、大系氏族及び物部氏族の移動について解説しないと双方に深い関連性があるから、読者にとっては理解に苦しまれることと思われるが、ここではその説明をするいとまがないので、いきなり出雲の問題について検討するほかはないのである。

常陸国風土記(以下本書と言う)の新治郡の条によると「崇神天皇の世、出雲の系統の比奈珠良命を国造として派遣し新治の國を興させた」と述べてある。ここで崇神天皇も、また、国造についても検討する必要があるが、出雲族の比奈良珠命の新治移住は事実と解せられる。岩瀬町にある前方後方墳の孤塚古墳が命の被葬者に比定されているが、その築造年代からみて、四世紀末か五世紀初を新治国の開拓と考えても差支つかえなからう。場所は岩瀬か、協和か、大和村の大国玉神社の鎮座する付近か。移動の時に出雲の神を奉持して来たが、それは延喜式内社大国玉神社として残されている。

出雲の族は岩瀬町にも拠点を造つたらしく、それは、鴨大神御子神主玉神社として大国主命を祀る延喜式内社としてその足跡を残しているのである。鴨氏族は大国主命の同属であり、この氏族は現在の新治郡出島村加茂の地に発展し、前方後方墳勸使塚古墳を残している。なお、新治国は更に拡張され現在の空間の稲田の地に延喜式内社稲田神社を残している。この神社は素戔鳴命の妻奇稲田姫命を祀る神社である。

さて、次の神と地名が本論題の今回発掘調査を実施した周辺の「阿波」なる地名に關係する所である。出雲族の発展は更に進み、新治と接した茨城の北西部にも及び、那珂川上流地方にも出

雲の神社を創建し、延喜式内社青山神社を残している。そして本論題と関係する東茨郡桂村阿波の阿波山上神社も、また出雲の神を祀った延喜式内社として鎮座する。祭神は少彦名命で、命の足跡のあるところ、必ずといってよほどに粟島とか阿波とかいう粟に関する地名が出てくる。ここに阿波山上神社の縁起旧記をみると、

「土俗伝えて言うには、昔この地に神があった。竜子の形にしてめ手に粟の穂を持ち、杉の木の
上に降りられた。その故に降木明神とも言う。またこの地に粟を持って植えられたのでこの地
方の人は粟を大切にし茎といえども粗末にしない」(注3)。

と記してある。現在、境内に降木の杉の巨木がそびえているが、これは御神木としてこの神社の御神体である。とにかく少彦名命を信仰した出雲氏族が粟を持参しこの地を開拓して、祖神を祀ったものであろう。

粟はいつのまにか阿波という字に変わったが、この少彦名命信仰が、本論題の阿波の地にも伝わったものと考えられるのである。というのは、その後5世紀初めの茨城国がやはり同系統の出雲族によって建置された。その領域を新編常陸国誌等を参考にして検討してみると、出雲系の茨城国の領域は現在の桜川村全域、東村阿波崎のあたりまでひろがっていることが判明した。したがってこの地一帯に出雲系の文化が侵透しており、安婆島には前方後墳の原一号墳も築造されている(注4)。なお出雲系の勢力は多珂地方まで伸展し、多珂国の建置となったことが本書に明記されているのである。

出雲の勢力はすくなくとも茨城の諸地域に侵透したことはこれらの事情によって明確に判明されるのである。関東一円にかけて出雲系の式内社や神社は多いが、今回はこの問題については省略したい。しからば何故に出雲系の勢力圏が茨城の地まで波及したものなのか、この命題は当然追求しなければならない問題となろう。

(五)

出雲圈、出雲文化圏、等と言う言葉は戦前から叫ばれており、世の注目を浴びていたが、最近特にその問題が浮上したのは、荒神谷における358本の銅剣の出土からのことであった(注5)。これによって今までの銅剣出土の全国のバランスがすっかりこわれてしまった。余りにも破格な銅剣の出土に人々は度肝をぬかされた。森浩一、近藤喬一の諸氏は松江で開かれたシンポジウムにこれを発表し(注6)、原島礼二、門脇禎三等の諸氏もこれを強調した。弥生中期以降における出雲王権の存在、そしてそれをささえるものは宗教王国としての出雲であるということである。わが国一番の大陸との近距離、それによるシャーマニズムの流入、更には弥生時代稲作と共に豊作祈願の呪術が華南から天の鳥船によってもたらされ(注7)、剣、矛の呪力によって稲作の成長を粗害する悪霊、邪神の類を切り払う、門脇禎三氏は宗教王国としての出雲を強調し(注8)、乙益重隆氏は、出雲は祭祀の本山、神の古里と言って出雲の宗教王国を称讃した。また、高橋敬氏は、大和のように巨大な古墳はないが、特異な宗教、信仰、特異な祭祀文化のあることを強調し

た(注9)。当時をもっと巨大な神殿であったという出雲大社の存在は、宗教民族としての出雲を物語る例であろう。そのことは出雲の熊野信仰についても言えることである。

その宗教王国出雲は各地に巫覡を派遣しその宗教の布教に乗り出した。その巫覡とはシャーマンとして出雲独特の呪力を身につけた所謂原始出雲神道の宣教師である。これらは先ず日本海沿岸から「越」地方にもたらされた。越文化については継体天皇出自の問題で一躍世に浮上したところである。能登半島一帯に出雲系の神々を祭った神社が多いのは巫覡の布教によってもたらされたものであろう(注10)。

巫覡の一団はやがて越地方より毛野地方に入り、更に関東に進出し、そして茨城の地にも入って来た。そのことについては、前の部においてすでに解説をなしたとおりである。

なお、出族系の宗教布教については更に多くの問題点がある。その第一は、この移動は宗教布教のほかにその背景に政治的配慮があったものか。第二に移動の時代は何時なのか、そして出雲の勢力はどのようにして消えていったのか。第三に前方後方墳とわが茨城における出雲族との関係はどうなのか、という問題である。

(六)

上記の第一の問題点である出雲族は巫覡等による宗教布教を始めたが、その背景に政治的配慮があったものかどうか、という問題である。先ず本書の新治郡の条を見ると、「崇神天皇の時、東国の荒々しい蝦夷を平定しようとして、新治の国造の初祖比奈良珠命を派遣した」と述べてある。もっとも出雲族の移動の始まったのは、すくなくとも茨城の地においては四世紀後半から五世紀の始めの頃と考えられるが、本書が記述されたのは八世紀中葉で、実に四百数十年の時代的開きがあることであり、また、本書はその頃大和朝廷中央集権的色彩の強い頃の編述としてとらえられる(注11)。現今の学説においては崇神天皇の実在性そのものもあやぶまれており、また、大和朝廷も漸くにして王権の組織を整えようとする頃で、国造制度未だに確立しない時期であったと見るのが妥当ではなかろうか。その頃、出雲民族はこと茨城の地に関するかぎりにおいては大和朝廷茨城進出に僅かに先んじてこの地に移住したが、それは本書の記述を全面的に認めるわけにもいかないが、それにしても出雲民族の進出は政治的背景を伴った進出と見るのが妥当な考え方ではあるまいか。とにかく本書の記述に関する限りでは、新治国、茨城国、多珂国の三国を建置したと述べてあり、特に多珂国の建置については「こは出雲の屬なり」と明記してあるのである。

次に第二の問題の出雲人の移動の時期については、すでに第一の問題のところでもふれたとおり、四世紀後半から五初としてとらえられよう。しかしながら僅か数十年にして出雲の勢力圏は消え去ったものと考えられるが、それは新たに進出をなした大(多)系の中臣氏族の力に屈したもののようである。それは本書行方郡の条にある大系建借間命的那賀国派遣として記述されているが、これも大和朝廷国土進出のため派遣されたものかどうかという問題は残る。しかしなが

らこの頃から漸くにして大和朝廷東国進出は開始されたことは前方後円墳の築造によっても理解されよう。出雲系と大系の勢力権の交替については本書の至るところに記述されている。例えば初めは出雲園の中に織りこまれていた粟河は大系の進出によって那賀川と改名された。また、出雲人の拠点たる茨城里は大系の進出によって、現在の石岡の地に移動したがその茨城国も大系黒坂命によって政権交替を余儀なくされたものようである（注12）。

ここに第三の問題について検討を加えねばならない。それは、前方後方墳は出雲族と何等かの関係があるかどうかという問題である。これについては戦後から出雲地方で発生した古墳築造様式ではないかという議論がなされ、それは定説であるかのように考えられた。しかしながら最近今井堯氏等の諸学者はそれに反論をし在地の方形周溝墓が発達したもので、出雲地方だけで発生したものではないと主張した（注12）。確かに方形周溝墓の様式は在地発生と認められるものも多い。そしてこの築造様式の発達したものが、前方後方墳の築造様式と見ることは極めて自然の見方であろう。茨城の地方からもすでに13か所に亘る方形周溝墓が検出され、そして現在発掘を完了した牛久市源臺遺跡からも5基にわたる方形周溝墓が検出され、更にはそれと時を同じくして同市奥原遺跡からも三基が検出されたのである。しかし茨城地方の多くの方形周溝墓は五領期の四世紀後半のもので、在地型と言うよりもむしろ関東の方面から持込まれたものと考えて差し支えあるまい。茨城においては他の国々の方形周溝墓が古墳に移行する頃、漸くにして盛期を迎えることになる。それと前後してわが茨城では前方後方墳が発生するのである。

しかしながら、すくなくともこの茨城における前方後方墳の殆んどものが、出雲氏族の移動した所に発生し存在するという事実である。例えば常陸国風土記新治郡の条にある新治園を興した比奈良珠命（山雲系）の墳墓に比定される孤塚古墳、茨城国造の祖（出雲系）天津日子根命に比定される丸山古墳、また、茨城国領域内の同族の加茂氏族が進出した地域に築造された勅使塚古墳、更にはかつて茨城国の領内にあったとされる浮島の原一号墳、そして同じく今回の立切遺跡において検出されたうなぎ塚古墳も前方後方墳の部に入れられるものであろう。

かくみると茨城に存在する前方後方墳は全て出須系氏族と何等かの関係があるものと考えざるを得ない。この墳系（形）は出雲地方で多く築造され、同氏族移動と共に持参されたとする見方の裏付けをなすものである。前述のとおり茨城においては出雲氏族移動の4世紀後半頃を前方後方墳の築造期とみたが、これも数十年経過せずして大系氏族・物部系氏族の進出によって消滅したようである。

今回、その発掘調査を完了したうなぎ塚古墳は、その付近に昔あった池からとれたうなぎ供養のための塚という伝承として現在まで残されていたが、発掘の結果は五領式土器を多量に伴う前方後方墳であることが判明した。そしてそれは阿波地域内にあり、大杉神社の領域と隣接する。そうすると、やはり本古墳も原一号墳と共に出雲族の進出に伴って築造された古墳であり、大杉神社を奉斎したその族長を埋葬した古墳かも知れない。

このついでに、大杉神社について見るならば、この神社の創建は神護景雲元年と神社記に記帳

されているが、実際の創建は極めて古いものではなからうか。およそこと茨城地方に関する限りその神社の創建の内容や時代、更にはその祭神に至るまで誤りも多い。例えば近くの延喜式内社阿称神社はその祭神が武甕槌命になっているが、本書には経津主命と記述されている。この神社は物部氏が奉斎した神社であるから、大系の武甕槌命を祀る害がない。それはその地域での政權の変化に伴って祭神も変わり、同時にそれは延喜式内社にも昇格する。阿波の大杉神社はその祭神を変えなかったがため繁栄をも見なければ、式内社にも列せられなかった。阿波の地域は茨城県の領有権を大系氏族に移譲すると同時に出雲系に関する信仰や風習も何時の間にか次第に変化していった。それと同時に前方後方墳の築造様式も前方後円墳へと変化していったのである。阿波の大杉神社はやがてその信仰をもちかえし、繁栄をもちかえす方策として航海の安全を守るための神や、天句に関する厄病よけの神として大いに宣伝これ勉めたもので平安以降、室町から江戸期にかけてはその信仰圏はひろがり大いに繁栄を極めて現在に至ったものである（注14）。

(七)

なお、本遺跡と阿波の周辺をめぐって二、三の問題がある。その一つは本遺跡のうなぎ塚古墳に隣接した第6、第7調査区から膨大な祭祀遺跡の出土を見たことである。鏡、剣、玉の石製模造品はその半製品を入れると実に数百こ、それに伴う滑石の原石は各住居址から検出されたので、こゝは全体が祭祀遺物の製作所と判定された。こゝで造られた祭祀道具は付近の集落にくぼられたものであろう。これと同じ祭祀遺跡が安婆島（浮島）の尾島遺跡からも多量に出土したが、これらは同じ阿波の場所として何等かの関連があるものと思われる（注15）。本遺跡出土の祭祀遺物は和泉期から鬼高1、2式に当る時期で尾島遺跡のも殆んど同時代と言うことになっている。それ以降になると祭祀遺物の製作は次第に下火になって来たようである。その下火になった理由は時代の変化による流行的な面もあろうが、出雲勢力の交代ということも大きな原因の一つとして考えられるのではあるまいか。それから時代は下るが、本書信太郎の条に、「安婆島に住んいる人々は神社を中心として生活しており、言葉も行いも謹んだ。」と言う記述によって理解されるように、宗教民としての風習はその頃にはまだ残されていたのであろう。

第二の問題として、四、五世紀の頃あれほど繁栄を極めた阿波の地方が、大化改新の行政区画、更には本書の詔命による「里名には好字二字を付けよう。」ということから、安婆、安波の里という地名が当然付けられるべきところ、それは使われないうで、「能里波麻の里」とか「高田の里」を称するようになった。このことは大系中臣氏勢力の残存による何等かの処置と考えたとしたら、それは大きな飛躍であろうか。

第三として最後に言い残したい問題がある。この出雲系氏族の移動によって残された四国の阿波、千葉県房総の安房等と本遺跡周辺の阿波なる言葉は何等かの共通性がある、それら一連の移動と関連づける見方もある。もっとも出雲族は日本海沿岸から南下した宗教布教を試みたものだけではなく、それは瀬戸内海に出、四国の地にその足跡を残し、紀伊半島南部に渡り熊野信仰

を伝え、更に黒潮に乗って房総から黒潮暖流北限の地に漸次たどりついたものと見る先学も多い。しかしながら千葉県の安房地方は出雲ではなくて忌部の民の移動によるもので出雲には何等関係はないと主張する人もいる(注16)。しかし忌部民は粟ではなくて麻の種を持参したもので忌部の移動より出雲人の巫覡の布教がはるかに早かったものと解する方が妥当かと思われる。古語拾遺の記述も大和朝廷中心に編述された傾向もないではない。大平洋からの布教、移動も単なる俗説としてそう簡単に捨て去るわけにも行くまい。

なお、先ほど紀伊半島の南部の熊野信仰について述べたが、熊野と名の付けられた本源は出雲の二大主流社熊野神社信仰を指すもので、当時は熊野社の方が出雲社よりも社格が高かったと言われている。その熊野信仰が紀伊半島の南端に遷され熊野信仰となって繁栄をし、それはやがて全国にひろまって現在熊野信仰は全国に極めて根強いものがある(注17)。(河野辰男記)

参考資料

- (注1) 古代東国と大和政権
(新人物往来社)
- (注2) 常陸国風土記の史的概観
常陸国風土記の探究上, 中, 下
(拙著)
- (注3) 阿波山上神社旧記録起
(阿波山神社蔵)
- (注4) 原一号墳報告書 (桜川教委)
- (注5) 荒神谷遺跡報告書 (島根県教委)
- (注6) 昭和59年松江出雲文化シンポジウム
森浩一
近藤喬一
- (注7) 古代日本海文化と出雲 門脇慎三
- (注8) 出雲文化 門脇慎三
- (注9) 謎の古代出雲王朝 高橋徹
- (注10) 出雲神話の民俗学的考察 新野直吉
- (注11) 常陸国風土記の史的概観 拙著
- (注12) 諏訪古墳報告書 (友部教委)
- (注13) 古代東国と大和政権
(新人物往来社)
- (注13) 諏訪古墳報告書 (友部教委)
- (注14) 大杉神社記録書 大杉神社蔵
- (注15) 尾島遺跡報告書 茨城県教育財団

(注16) 古語拾遺

(注17) 改訂熊野三山経済史 児玉洋一

(2) 「立切」の地名伝承と香取神社

(一)

本遺跡は「立切」の地に存在する。前記したようにこの地もその元は「阿波」の地内にはいったと古老は言う。それがどのような事情で何時の頃からこの「立切」の名が付けられたものであろうか。

それについて、現在伝承として残されているのは大体下記のようなものである。「昔、立切の香取の社を中心として集落が繁栄していた。やがて香取の神は海を渡って現在の香取の地に遷された。そしてしばらくはお礼として対岸の香取の地からこの地に奉幣使として毎年使節が来駕した。(その奉幣使上陸の地として立切の先端に現在祠が建てられている)。ところが数年を経過して現在の対岸の香取の神社が繁栄すると、奉幣使はぶつぷり来なくなった。本遺跡のある香取の社の方では大変に怒り、今後対岸の香取の社とは一際縁を切る」と宣言した。そのようなわけで「立切」と名が付けられるようにた」と言っている。立切の地名については「付近の池から霧が立ちのぼる、それによって立霧と言う意味から「立切」となった」と言う伝承も語られているが、前者の方が意味があるような気がする。

(二)

上記の伝承について、本遺跡の香取神社と何等かの関連性もあるように思われたので、しいて取上げてみた。以下このことについて述べてみると。

その当時釜井の地区に当たる場所の、香取の社の鎮座している部分の集落だけに「立切」という地名が付けられ、これにまつわる一連の伝承が現在も根強く残されていることは、やはりそれなりの理由があつたものと考えざるを得ない。

元来、香取社は全て経津主命を祭神とする神社である。経津主命は物部氏族の祭神として同氏が奉斎するもので、このことについてはすでに解説したのでこれらの事情については省略をした(注1)。ただここで再三に亘って述べたいのは、経津主命は武甕槌命と共に記・紀に登場する神である。古事記では両神は同属神となっているが、書紀では別々の神として登場する。そしてこの二神は出雲平定に功績を残されたが、特に天孫降臨の前座をうけて鹿島、香取の地に降臨された神として記してある。武甕槌命は大系中臣氏族が祭神として奉斎する神として、大氏が那賀国弘張のため鹿島に発展したとき葦笥(おとおと読む)の大井神社の下の地から鹿島の地に遷した神で、その後、鹿島の社と称された(注2)。記・紀にある二神の鹿島、香取への降臨記事は、その当時政府の主導権を握っていて記・紀編述をまなしとげた大系中臣氏の述作によつたもので、大氏は自家祖先の偉業を顕賞するために、那賀国から鹿島の地への発展をわざわざ天孫降臨の前

座に仕立てて組立てたものと考えられるのである。このついでにその兄弟神であった経津主命の降臨記事をも香取の地になしたわけである。

(三)

筆者が解説をなすこれら一連の記事は、全て常陸国風土記を参考にしたものである。勿論この記述も多分に記・紀記載の様式をとり入れられているから、これを全面的に歴史事実と認めるわけにはいかない。

この常陸国風土記の先ず第一の記載事項は、わが常陸の地は大和朝廷の命によって派遣された国造によって開拓されたということである。ここに派遣された国造は古墳の築造等からおおよそ4世紀末から5世紀初め頃にかけてのものという推定はつけられる(注3)。しかしながらこの頃は大和朝廷の王権の組織もまだ完全な確立をみなかかったものと考えられるから、国造制などと言うものは成立していなかったものと推定したい。ここに先ず考えられることは、常陸の地に開拓の第一歩をきずいたのは出雲系の人々で、これらは宗教布教を第一の目的として移住した宗教集団ではなかろうか。勿論、政治的配慮をも伴ったものであったが、大和朝廷国造派遣などとはおよそ性格を異にするものであったと思われる。それは4世紀後半に常陸の地に発生をした前方後方墳と期を一つにするものと考えられるのである。

それから数十年を経過した5世紀の初頭頃より大系氏族、それに続いて物部系氏族の常陸開拓が開始されたが、物部系氏族の方は大系に稍々遅れたもののようである。それはその頃から俄かに築造され始めた前方後円墳によってもその様相が判明するのである。

大系氏族は現在の那珂川の上流緒川(当時は大の川)の地からその中流飯蓋の地に移動し那賀国を建置したが、それは大和政権の先遣的任務は持つてはいたものの国造任命と言うことではなかったものと考えたい。

大系の進出によって出雲の領有権は次第に圧迫され、出雲人の付けた粟河は那賀川と改名され、出雲の国衛次城の里は消え去った。それと同時に前方後方墳の築造様式は前方後円墳へと変えられてしまったのである。やがて大系は出雲系の茨城国を占領し、浮島から鹿島の地へと進出を試み、祭神武甕槌神はその地に遷され、神郡の計画は次第に進められていったのである。記・紀記述の鹿島降臨は実にこのことを指すもので、このことはあくまでも大系氏族(記・紀の編纂者)によって仕組みられたものと考えたい。

(四)

ここに主題である物部氏の問題について述べたい。常陸国風土記筑波郡の条に「崇神天皇の治世に采女臣筑軍命を国造に派遣した」と述べている。崇神天皇の治世とあるのは、記・紀を参考にしての記述と思われるが、崇神は実在の天皇とは考えられない。采女臣は物部系譜にあるから物部氏族と考えてよからう(注4)。この氏族がその領治内で活躍したことは万葉集等にも登場す

新後の信太郎（現在の稲敷郡）の中に筑波国と茨城国の領域が存在する。そこで大化改新の国、郡、里、設置制によって両国の700戸を分割して新たに信太郡を造ることになった。分割した700戸を一里50戸の割合で検討してみるとほぼ14里（郷）となる。これを平安時代に編纂された和名抄に記録してある郷里にあてはめてみると十三郷一里と言うことになるから前者と大体一致する。そこでこれを、「新編常陸国誌」の「上古常陸六国図」及び「大化改新始置常陸国図」によって両者の境界線を一応書いたのが第2図ということになる。

これによってみると、本遺跡のある場所は高田郷になっているから、開拓当時は茨城国で出雲の領域、その後は物部氏の領有となっている。

そこで上記の資料をもとにしてひかれた境界線というのは極めて不確実なもので、そのことは高田郷についても言えることである。上記の境界線によれば高田郷は茨城国の領域になっている。そしてそれは何時の頃からかわからないが、この地は物部氏族による筑波国の領域になったのではないかと思われる。と言うのは高田郷領域の立切の地に物部氏族の祭神を祀る経津主命の社が香取社として存在することである。それが「立切」の伝承として現在においても語り継がれているのである。

(五)

ここで語り継がれている香取社伝承がどの程度真实性を持っているものかどうか、歴史事実と合致しているかどうかという問題である。

第一に考えられることは、この地の人々が語る香取社はこの地の対岸にある千葉県香取の地の香取社の名称を使用している。もし立切の地から香取の方に社が遷座したとしたら、立切の地にある社を香取社とは呼ばないで、何等かの別な社の名で呼ばれていたものと考えられるが、この点についての問題はどうか。しかしながらこれについては立切に鎮座する経津主命を祀る社は初めは何等かの名称で呼ばれていたものであろうが、その後、香取社が逆に有名になり世に浮上して来ると、自然に香取社の名称を使用するようになったものではあるまいか。

第二として、上記の問題を考える前に、この祭神を奉斎した物部氏の歩いた経路を再度確認する必要がある。前述したように物部氏族の移動は東山道路線から関東南部に入りそして筑波の地へと進出したものと考えられ、その氏族の開いた筑波国は茨城の南部に亘っており、当時の榎の浦と一線を画したものと推定される。そして物部氏の筑波国拡張については進出して来た路線上にそれに関する地名と足跡を明確に残していることから容易に理解されることである。例えば館野（筑波の館野）、稲岡（筑波の飯名の岡）、井の岡、谷田部に筑波国の支所を設置、谷田川を降って牛久沼から飯名社の分霊を遷した当時稲敷郷と呼ばれた現在の竜ヶ崎市八代（社）の地、その後大化改新による郡の設置によってもたらされた阿弥の社と郡衛、信太の楯縫社、郡衛移転の江戸崎の君山の地等は全て物部氏族発展の足跡を残すものである。

やがて物部の勢力は榎の浦を超えて香取の地へと進出、という順序を踏めば立切の地から香取

の地に移動した経路が一応把握出来るのである。

第三として、この物部の香取進出は単に神社の遷座のみではなく、その領有権占有のための軍事進出であり、物部氏はそこに海上国を建置している。その勢力は安曇湖を超えて鹿島半島の寒田沼あたりまで進出していたことが常陸国風土記香島郡の条に記載をみるのである。

この物部氏の香取進出は大系氏族の鹿島進出と時期を同じくしたものと思われるが、物部の領地が鹿島半島にあることなどから考えると、むしろ大系氏族よりもいくらか早かったものか。なお、大系の鹿島進出については常陸国風土記行方郡の条に記載してある。それは大系の領有地茨城国浮島を拠点として、対岸の潮来の大生の地を占領して大系の拠点としたが、それは大生古墳群の存在からみて六世紀中葉にかけての頃であろうか。しばらくして大氏は鹿島の地にその拠点を移動し祭神武甕槌命の御霊を大生社から鹿島社に遷したがその時期は宮中野古墳群の存在からみて六世紀終り頃から七世紀末にかけての頃と推定される。大化改新後における政治の主導権は中臣を改姓した藤原氏によって占められ、わが国の史書である記・紀の編集も藤原氏系の人々の手になったのであるが、前述の記・紀に天孫降臨の前座をうけて鹿島の地に武甕槌命を、香取の地に経津主命を降臨させたその記事の背景は実にこのような事情によるものである。

(六)

立切の地に経津主命の降臨を仰いだ氏族は勿論物部系の人々であろう。そしてその時期もやはり6世紀の頃とみた。立切遺跡の第1調査区及び第2、第3調査区は広さ7000㎡に亘る広大な平地で、発掘調査の結果、竪穴住居址約70軒掘立柱住居址20、その他溝状遺構、土抗等が検出されたが、それらの八割は鬼高期の集落址であることは報告書の部において述べたとおりである。鬼高期の集落としては極めて規模の大きな集落で、その南側斜面に香取神社奉幣使の上陸地と伝承された場所があり、そこには小石碑が建てられ、その中に香取神宮のお札が入れられていた。以前に立切に住んでいた人々が毎年それを香取社まで受取りに行くならわしになっているという。立切の香取神社はその集落内に祀られ(そして現在も残されているが)、その祭礼は毎年盛大に挙行されたらしく、最近まで奉幣使餅もつかれていたと言う。



(点線は東海道經由、下総国庁を過って香取から常陸国府に入る路線)

なお、対岸の香取の地が繁栄したことについては、立地条件が大変によかったことであろう。この地は六世紀頃になると東海路線が発達するようになると、東京湾を渡り、房総に上陸し、後の上総・下総国府から半島北部の鳥取・荒海を通過し香取に行く通路が開けた外房から銚子に入り安是湖を渡って鹿島に通ずる路線も急に脚光を浴びて来るようになった。とにかく香島、鹿島から常陸に入る路線が国道一号線となってからは香取、鹿島は表玄関としての役目を果たすようになったものである。かくして立切の経津主命はその主導権を新しく対岸香取の地に遷された香取の神に譲らざるを得なくなったものではあるまいか。

(河野辰男記)

参考文献

- (注1) 常陸国風土記の探求(中) (拙著)
- (注2) 常陸国風土記の史的概観 (拙著)
- (注3) 茨城県史
- (注4) 常陸国風土記の探究(中) (拙著)
- (注5) 牛久天王峯発掘報告書^上_中 (牛久教委)

昭和63年12月10日発行

茨城県東村・桜川村文化財調査報告書
立切遺跡発掘調査報告書

発行 茨城県東村・桜川村
編集 立切遺跡発掘調査会
印刷 株式会社エリート印刷
茨城県牛久市柏田町3269
TEL 0298(73) 2 2 3 1代
